
good vibration

不足茶野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

good vibration

【Nコード】

N3142D

【作者名】

不足茶野

【あらすじ】

眠ったままの彼女が目覚めることを信じて人殺しをする少年。そして両親の死によって家出を繰り返すようになった少女。彼女が気づいた真実とは？そんな「人殺し少年」と「家出少女」が出会って起こる夏の出来事。

第1話 「帰る場所ってありますか？」

眠い……眠くてしょうがない……この授業が悪いんだ。

真田の声は私をわざと眠らせようとしている。

今、私は学校で授業中である。

私立創野高校。略して創高。私が通う高校だ。

これといって特徴の無い高校である。進学率がとっても良い訳じゃないし、スポーツもインターハイや甲子園、国立に行ったという話は聞かない。

大学行くヤツはクラスの8割がたいるけど、その殆どが浪人になる。生徒数も年々減少していて使われなくなった教室もある。

私立なのに学校経営大丈夫なのか？と他人事なのに心配してしまう、10年後存続しているのか怪しい高校である。

授業だって当然、真面目に受けている生徒は少なく、騒がしい。

今日だって、現国の真田（先生）の授業で私はずっと寝てた。

真田は特に生徒への関心が無く、黙々と独り言のように授業を進めるタイプの先生なので自由そのもの。机をくっ付けてウノやってみるヤツラだっている。

はぁ……学校の心配なんてしてらんない。

私は今現在、シビアな現実には直面しているのだから……

あつという間に放課後。

夕日に染められた教室はオレンジに染まって全てを包んでいた。私達は教室に残ってお喋りをしていた。

初めはそこでの他愛のない会話からだった。

「ねえ、澄川ってなんか良くない？」

私と美世は有希を見る。

「澄川ってあの澄川？」

驚いたような表情を見せ美世が言う。

「それ以外誰が居るの？」

「うーん」

思わず私達二人は同時に唸った。

「具体的にどの辺が？」

とりあえず聞いてみる。

「全体的に物静かでミスティアスな感じがして良いじゃない」

わからない。

有希には悪いけど、澄川の雰囲気は暗いの一言で終る。

澄川とは澄川正宗といってクラスメイトなんだけど、クラス内でも居るのか居ないのか良く分からない存在の子だ。

ミスティアスと言えば聞こえは良いけど、要するに誰も澄川の事を知りたくないだけである。

だいたい、有希は天邪鬼な性格で、音楽にしたってメジャーなものにはことごとく中指を立てて、マイナーなモノ（私には雑音にか聞こえない）ばかり聴いてるような子だ。

しかも、それを私達にも押し付けてくる。

そういうことを加味すれば、澄川に行き着いても不思議じゃない。確かにクラスの中じゃあアイツはマイナーだ。

なんだか嫌気が差した私は思い切って言う事にした。

「澄川ってあんまり好きじゃないな。だって、暗いし、なんか動物実験とかやってそー」

有希は信じられないという目で私を見る。

「エーッ、何で？ あの良さが亜衣には分からないの？ …… まあ、

亜衣には本当の価値ってというのが分かんないのかもね」

有希はこうやってすぐ人より優位に立とうとする……何か腹が立ってきた。

「別に分かりたくも無いし、分かる気も無い。だいたい、有希は澄川が良いんじゃないかって、クラスで一人孤立する澄川が良いだけじゃん。私は嫌い」

これは本音だった。

澄川みたいに暗くて、一人になって浸っている人間が大ッ嫌いだ。二人の会話に美世がおろおろする。

「まあ、二人とも落ち着いて。人の好みはそれぞれだし……」

「もういい！！あんた達に言ってもしょうがないし、時間も無駄」

そう言って有希は帰っていった。美世と私は二人教室に残された。

「ゴメン……私、またやつちゃった」

私は悪戯っぽく舌を出す。

「しょうがないね、二人とも……」

美世は眼鏡を上げながら、ため息をついた。

私達三人が話を始めると大抵、こういう展開になる。

でも、何日かすると何となく集まってしまう。

きつとそれぞれ何か足りないからだと思う。

有希はあんな性格だから中々受け入れてもらえないし、美世にしても病弱で学校を休みがちなので、上手くクラスに馴染めず、さらには自分の意見をハッキリ言わないから流されてばかりだし、私は……

「ねえ、美世。今晚も頼めない？」

途端に美世の顔が曇る。

「亜衣ちゃん、ごめんなさい。私、今から病院へ行かなくちゃいけ

ないから……」

「……そうだよな。何日も私が泊まりに行ったら美世の体がもたないよね」

私はここ一ヶ月ぐらい家には帰ってない。というか、半年で家に帰った回数は数えるぐらいしかない。

「もう遅いから美世も帰りな」

「で、でも……」

「心配しないで、学校に泊まるから。ゴメンネ、美世も病気で大変なのに」

「ごめんなさい……」

一言言つと美世も帰って行つた。

結局、私は一人になった。

椅子に座り机にうつ伏せになる。

“あー、だから澄川のこと嫌いなのかも”

私も一人だから。

「も」っていうのは正確には違うか。

だって、有希にも美世にも、それにいつもはクラスで一人の澄川にしたって帰る場所があるんだから……。

時間は経ちとうとう夜になってしまった。

教室の電気など付ける訳にも行かず、時々、見回りに来る宿直の先生にばれないように隠れたりする。

何かちよつと惨め？

それでも、私は夜の学校が好きだ……というより好きにならざるを得なかった。

家に帰るのは嫌だし、夜の街中をぶらつくにしても金が無いし、かといって男におごってもらうのもキライ。

結局ここへ辿りつく。

ここは私にとってシエルターだ。人もいない代わりに人も来ない（見回りの先生は別）でも、安心できる場所。

冷たい床に寝そべってみる。その冷たさから私にも体温がある事を知る。

私は今、息をして生きている。

やっぱり明日って来るんだよね。

こうやって世界は続いていくんだ。

嫌だなあ……

その時、廊下を誰かが通過するのが見えた。
変だ。

見回りの時間にはまだまだある。

しかも、二人連れだ。話し声からして男と女。

私は寝そべっていたせいで見つからなかったようだ。

私以外にも物好きがいたのか。

などと考え、無理に関わりあう事もないのでほっておくことにした。

どうせやる事やるんだろうし。

二人連れが去った後、とても静かな時間が帰ってきた。

肌で空気の微妙な流れが感じられる。すぐく落ち着いてる証拠だ。
普段、学校の教室では味わえない満ち足りた感覚。

その感覚に私は酔っていた。

しかし、その時間は簡単に消し去った。

それは女性の悲鳴が聞こえてきたから。

第2話 「開かずの教室にて」

無視するか、関わりあうか。それは大した問題ではなかった。

それは「無視する」に決まってるから。今出て行っても宿直の先生が来るに違いない。

この階は右端と中央に階段があり、教室は7つある。私がいたのは4つ目の中央の階段前の教室。だから、私の教室を通らなければ奥には行けなかった。

確か今日の宿直は真田だ。

30過ぎの若い先生だが、どこか覇気がなく陰気な感じがする、私の嫌いなタイプの人間だった。

私は暫く寝そべったままジツとしていた。

だが、何時までたっても真田は廊下の前を通過しなかった。

私に悲鳴が聞こえるぐらいだから、この階にいるには違いない。

私はとりあえず立ち上がる。服のほこりを払う。

「確かめるだけ、確かめるだけ。そういうアレかもしれないし……」
単純な好奇心からだった。夜の学校でこういう事はそう簡単にはないし。

夜の廊下は暗く、ひんやりしていた。教室とはまた違う雰囲気だった。

教室を出て、さっきの二人が向かった方向の2つの教室の前を通り過ぎる。

人の気配は無い。私は立ち止まった。

「まさか、あの教室なわけないよね……」

この先教室は後、1つしかない。

だから、普通に考えればあの教室にいるはずだった。

しかし、その教室が大問題だった。

そこは、少子化によって閉鎖された教室——というのは建前の「開かずの教室」。

話によれば3年ぐらい前にそこで生徒が惨殺された……らしい。だから、3年間、閉めたままの教室のはずだった。ハッキリ言って行くのヤダ。

私が躊躇していると教室内から物音が聞こえた。

——確実にこの中にいる。

さらに教室の扉が少し開いてるのに“不覚”にも気付いてしまった。

「何で開いてるの……これじゃあ見たくなるじゃない」
怖いのと好奇心、秤にかけてみた。

……でも、どちらかに傾く事はなかった。

それは、声が聞こえてきたから。

さらに飛び込んできた言葉。

「まだ壊れるなよ。ジワジワと殺してやるから……」

私は動けなくなった。

「んぐっ……んんっ！」

何か呻いている声が聞こえる。口が塞がれているのか、その声は私の耳には届かない。

続いて、何か鈍い打突音。

その度に大きなうめき声が聞こえた。

暴行！？——殺されてる！？

扉の先で行われている事を想像したくはなかった。

でも、自然に頭に浮かんでくる。

……帰ろう。

私の足は後ずさりを始めた。

一歩……

二歩……三――

「ひいつ!？」

何かが私の背中にぶつかった。

どっ、どうしよう……

でも、なんとかしないと。

私は意を決して恐る恐る振り向く。

ゆっくり見えてくる人影。

「さ……真田……先生？」

そこには今日、宿直の真田が立っていた。

見知った顔に私は安堵する。

「誰だ？お前は？　ここの生徒か？」

「え？　……はっ、はい。2年4組の上杉亜衣ですっ!！」

と慌てて答えたものの重要な事に気付く。

「それよりも、先生!!　た、たいへ――」

すると、真田は私の口を手でふさいできた。

突然のことに私は驚く。

「んぐっ!」

「今は黙ってろ。折角のショータイムが終ってしまう」

「っ!？」

私は口を塞がれたまま押されるように、「開かずの教室」へと進んだ。

これがあの冴えない真田？

私は必死に足を止めようとするが、男の力には叶わず、前に進んでしまう。

そして、扉の隙間の前で止まる。

「!！」

私は息を呑んだ。

隙間から見えたもの。

それは女性に馬乗りになった男が、何度も何度も刃物で体を刺している場面。

振り上げるナイフは血に染まっていたが、振り上がることに月夜で光った。

さらにその男は私に見間違えが無ければ……

「いつ見ても澄川の殺しは美しい」

私の頭上で真田は呟いた。

それは夕方、有希の話に出た澄川正宗だった。

「……純粹だ。アイツの殺しには混じりっ気が無い。感想はどうだ？」

「えっ……」

「お前は人が見たくても見られないような場面に出くわしているんだぞ」

女性は傍目から見てもすでに絶命していて、刺されることに衝撃で体が動くのみだった。

人がこんなにも無機質に見えたのは初めてだった。信じられない。しかも、月夜に光る血まみれのナイフが見せる怪しい光を見て不覚にも綺麗だと思ってしまった……

私は良く分からない感情のまま涙があふれ、その場で膝から崩れるようにしてしゃがみ込んだ。

聞き間違いないじゃなければ、真田は「いつ見ても」と言った。

快樂殺人、サイコパス。そんな言葉が自然に出てくる。人を平気で殺す人。

これはもう私たちとは種類が違う人間だ。

そんなことを考えてる私を無視して、真田は扉を開けた。

「澄川、その辺りにしておけ。そいつはもう死んでる」
しかし、澄川はそれを聞かず、まだ刺し続けていた。
彼の姿はその行為の善悪を除けば、一生懸命そのものだった。
それ以外何も見えていない。

真田はそんな澄川に歩み寄り、蹴りを入れる。
そのまま彼は後ろに吹き飛んだ。

「いい加減に目を覚ませ、澄川」

すると澄川は暫く動かなかったけど、少しして起き上がった。
殺人者にこんな事するなんて！ 真田は何を考えてるの！？
私はまた殺人が行われるのではという危険を感じた。

相手は殺人鬼だ。何をするかわからない。

澄川は立ち上がり、真田を睨んだ。

「誰かと思えばアンタか。邪魔しないでくれないかなあ」

「こつちも早く処理を済ませたいんでな。遺体が傷むのをアイツ等は嫌がるんだ。特に臓器は大切にしないと」

「それなら大丈夫、心臓しか刺してないから。今回は要らないんだろ？ 心臓」

私の心配をよそに二人は普通の（内容は普通じゃないけど）会話をしていた。

そういう私も涙を流しながらへたり込んでいるものの、この状況を普通に見ている。

子供の頃、泣きながらも冷静に相手の反応を伺っていたあの感じに似ていた。

そんな私の存在を澄川はようやく判ったらしく、こつちを見てきた。

「……誰？」

「はあ？」

色々な意味でショックだった。

私は知っているのに、澄川は私のことを知らない。
それを見ていた真田はやや呆れ顔で私達を交互に見る。

「なんだ、知らないのか？ 確か2年4組らしいぞ。お前と同じクラスじゃないか」

「……それはオレの領域じゃない」

「言い訳か？ クラスで目立たない澄川君」

「で？ どうするんだ？ コイツも殺るのか？」

「っ！！！！？」

「そうだな……」

真田は私を一瞥すると、すぐに澄川の方へ振り向いた。

「お前が殺ればいい」

「なるほどね」

「！！」

私は改めて自分の立場を理解した。（したくなかったけど）

第3話 「怖さ半分、自棄（やけ）半分」

私、殺されるのかなあ。

視界の隅に倒れて動かない人体が横たわっていた。

あんなふうに刺されるのかなあ。

そう思うと、息苦しくなってきた。

痛いんだろうか？ 刺されたこと無いから判らないけど。

……嫌だ、死ぬのは嫌だ！！

こんな事なら気兼ねすることなく、あの人に言えばよかった

——好きだと。

そんな私の事はお構い無しに二人の会話が続いていた。

「悪いけどオレは殺せないぜ。真田先生、それはアンタも良く知ってるじゃないか」

「そんなこと言ってもなあ。オレも、もう人は殺せないし……」

すると、澄川はため息をついた。

「アンタ、元殺し屋なんだろう？ だったら、女子高校生の一人や二人どうって事無いだろ」

「ふんっ。そういうことが出来るんだったら、お前に殺しの仕事を任せたりはしない」

「はあゝっ、じゃあどうするんだよコイツを」

「だから、お前が殺せばいい」

「……話が元に戻ったぞ」

私って一体何なの？

それ以前にこの会話は何なの？

人殺しの押し付け合い……私の命ってそんなもんなの？

いや、この二人にとっては人の命なんてそんなものなんだろう……

……何か腹が立つてきた。

「ちょっと、二人とも！！」

すると、真田と澄川は面倒くさそうにこっちを向く。

「なんだ？」

二人声を合わせて言った。それが余計に腹立たしい。

私は立ち上がり二人を睨みつける。

どうせ殺されるなら、思いっきり言ってやるっ！！

「私の命を何だと思ってるのっ！！ やるならさっさとやりなさいよ！！」

「は？」

そして私は澄川を指差した。

指を指された澄川は少し驚いたような表情を見せる。

「だいたいアンタ、さっきは楽しそうにこの人を殺そうとしたじゃない！！ 殺人鬼なんでしょ？ だったら選り好みしないでよ！！」

「ごもつとも」

そういつて笑ったのは真田だった。

「笑い事じゃない！！ 真田！！ アンタも何なのよ！！ 元殺し屋ですって？ 笑わせないでよ！ 私一人殺すのも躊躇してるくせに偉っそうにしないでよ！！」

「その気持ちよく分かるぞ」

何度もうなずいてるのは、澄川だ。

「分かってないっ！！ ……私の気持ちなんて何にも分かってないっ！！」

ホントはこんなこと言うつもりじゃなかったけど勢いで口をついた。

「家にも帰れずに苦しんでる私の気持ちなんて誰も分からないっ！

！」

「微妙に問題がすり替わってないか？」

「真田さん、微妙じゃない。思いっきり替わってる」

「二人とも喋らないで！！ 私の話は終ってない！！」
すると、真田は頭をかきながら私に言った。

「何に興奮してるのか分からんが、落ち着け。要するにだ、オレ達はお前を殺せない。それだけだ。分かったらもう帰れ」

「……え？ 殺せない？ 帰れ？」

私は今の状況が飲み込めなかった。

「えっ？ えっ？ どうして？ 私見たのよ、澄川が人殺しするところを。警察に言うかもしれないのに逃がしていいの？」

「それはお前が心配することじゃないだろ。心配するな。所詮、警察も1つの組織に過ぎない。その手のコネクションなら持っている。たかが高校生一人が警察に行った所でどうにもならん。それともお前、殺して欲しいのか？」

「そつ、そんなわけ無いでしょ！！」

私たちがそんな会話をしていると、この教室に数人の人物が入ってきた。

その人たちは私たちに話しかける事は一切無く、死体だけを抱えて持ち去った。

私たちもそれをただ黙って見送った。

「よし、仕事は終了。じゃあ、俺は帰る」

「ちゃんと着替えて帰れよ。返り血が付いてるから」

「わかってる。でも、この方が正宗にオレの気持ちがよく伝わって気持ち良いんだ」

「最悪の趣味だな」

そう言って澄川は振り返らずに手を上げるとホントに帰っていった。

「さてと、オレも宿直室に帰るか」

真田までも私を置いて教室から出ようとした。

「待ってよ！！ ホントにいいの？」

「何が？」

「何で殺さないの？」

すると真田は顎に手をあて、少し考えた。そして口を開いた。

「さっきも行った通りオレ達にはお前を殺せない理由がある」

「理由？何なの？」

一瞬、真田の眉間にシワが入ったのが見えた。きっと言いにくい事に違いない。

「オレの理由は簡単だ。ココの学生は殺さない、そういう主義だ。澄川理由は……明日にでもアイツに直接聞けばいい。明日のアイツなら答えてくれると思うぞ」

「明日のアイツ？」

「お前、さっきから聞いてばかりだな。自分で何とかするということ事を知らんのか？」

「じゃあ、明日本人に直接聞きます。それで……私はこれからどうすればいいの？」

「さあな。どうするかはお前が決める。でも、この教室は閉めるからとりあえず出てくれないか？」

「……はい」

なぜか最後は教師と生徒の会話になっていた気がする。とりあえず、私は教室を出ることにした。

第4話 「コイツは人殺しよ!!」

結局、私は学校に泊まる事にした。
人が殺されたこの学校で……

——とか考えてたら朝になってしまった。

「亜希ちゃん、おはよう」

美世が私を心配してか、一番にこの教室に来た。時間はまだ7時20分。

私は昨日のこともあって、自分の席に座り、上半身をうつ伏せになっていた。

でも、ちつとも眠れた気がしない。

「……おはよ……」

「昨日大丈夫だった？」

「大丈夫と言えば大丈夫だったような……そうじゃないと言えばそうじゃない気が……」

美世が来たことで安心したのだろうか？

それっきり私はまた寝てしまった。

「亜希ちゃん？ 亜希ちゃん!？」

気が付いたときは、既に4時間目は終わりごろに差し掛かっていた。
た。

私は上半身を起こすと、辺りを見回した。

今までまったく気にならなかった存在を探す。みんな授業を受けていた。

そして美世と目が合う。すかさず彼女は私に笑みを向けた。私も微笑み返す。

次に有希が目に入る。しばらくすると私の視線に気付いたのかこ
つちを向いた。

しかし、すぐさまそっぽを向く。まだ昨日の事怒ってるのかなあ。
まあ、いいけど。

そして……とうとう見つけた。私の席とは遠く離れた窓側の前か
ら2番目の席でそいつは何食わぬ顔して授業を受けていた。

澄川正宗。クラスでもまったく目立たない存在。

言い換えれば空気のような存在。必要不可欠という意味ではなく、
そこにいるのにいない存在という意味での空気。

“コイツは人殺しよ!!!”

そう叫びたい。

でも、それができない。

昨日、真田に私が言ったところで無駄だと言われたせいもあるけ
ど……

実は、本当の事を言えば……

昨日、一瞬でも澄川の殺人現場に“見惚れた自分”がいたから。
そう考えている間に授業は終わってしまった。後で美世にノート写
させてもらおう。

以心伝心ではないと思うが、しばらくして美代が私のところへ来
た。

「亜衣ちゃん、一緒にお昼しよう。有希ちゃんも一緒に」

ああ、4時間目が終わったからお昼休みか。

パン買ってこなくちゃ。

でも……

「美世、ゴメン。チョット用事があるから先食べて」

やっぱりハッキリさせなくちゃ。

私は席を立つと教室から出ようとした澄川の後を追った。
そして廊下に出たところで呼び止める。

「澄川」

私の声に澄川は立ち止まり、ゆっくりとした動作で振り向いた。

「……」

こつちを向いたもののコイツは何も言わない。

しかし、それに構わず私は話を続けた。

「アナタに話があるの。屋上について来て。昨日の事って言えば判るでしょ？」

すると、澄川は少し驚いた表情をしたあと、頷いて私についてきた。

屋上に出ると、気持ちの良い風が私を包んだ。

でも、素直に気持ちいいとは思えない。

さらに屋上の奥の方まで来ると私と澄川は向かい合った。

そのまま澄川を睨んだが、全く効果が無く、無表情なまま俯き加減で私を上目遣いで見ている。

……うつつ、キモつ。

「とりあえず、警察に言うのは止めてあげる」

「……」

澄川は私を見たりきり何も言わない。

「昨日の元気はどうしたの？ 何か言ったらどう？ 人殺し！！」
「っ……」

違う！！ なんなの？ この齒ごたえのなさはい？

でも、私が言いたいのはこんな事じゃない！！

落ち着こう。心の中で深呼吸をして自分の気持ちを落ち着かせた。

「なんで昨日、私を殺さなかったの？」
「……」

さつきから澄川はずっと黙ったままだ。

ずっと黙って時間切れを決め込むつもりだな。

私はイライラしてきた。

「答えなさい！！」

すると、澄川はポツリと言った。

「……から……」

「え？良く聞こえない。もっと大きな声で言って」

すると澄川は俯き加減だった顔を真っ直ぐ私に向け、ハッキリとした口調で言った。

「君の事を好きじゃないからだと思う」

は？ 『好きじゃない』？

しかも、『からだと思う』？

頭の中は混乱の極みに達していた。

「ちよつと、どういうことなのか説明しなさい」

「『刹那』は……僕が好きになった人しか……殺さないから」

「はあ？」

何言つてんのコイツ。

しばらく、私と澄川は睨み合った。

そして私の視線に耐えられなくなったのか澄川は俯いた。

と思った矢先、再び澄川は私のほうを向いた。

「要領悪いなあ」

その顔は何だかいつもの澄川という感じではなかった。

ニヤついているのだ……というよりニコニコしてる感じ？

「もう！！　ここまで言っても判らないのかよぉ。説明するの面倒くせつ！　面倒くせつ！！」

「な、なんなの？　急に性格が変わっ——」

「僕達……じゃなかった。澄川正宗は多重人格者なんだよねえ」

「っ！？」

突然のことに私はそのまま動けなくなってしまった。

第5話 「twist」

「僕達……じゃなかった。澄川正宗は多重人格者なんだよねえ」
「っ!？」

あまりの口調の変化と言葉に私の思考は完全に停止。

「ちなみにここからは光彦がお送りします!! ねえ、驚いた?
驚いた？」

「えっと……」

私が答えられずにいると、澄川は私の顔を覗き込んできた。

「チューしていい？」

「!!!」

その言葉に私は我に返る。

気が付くと澄川の顔が近づいてきてるじゃない!!

「嫌ああああっ!!」

私は思いつきり澄川の頬をひっぱたいた。澄川はきれいに真横に吹っ飛んでいく。

あれ? そんなに力入れたっけ?

「何すんだよぉ」

「そ、それはこっちのセリフでしょうが!!」

すると特に悪びれる様子もなく頬をさすりながら言う。

「だって隙があっただんだもん」

「そういう問題じゃない!! ふざけるのもいい加減にして!!」
「ふざける？」

「多重人格なんてそんな簡単にあるわけないでしょ!! 聞きたいのは、なんで私を殺さなかったかって事!!」

と、ココまで言っただけだと思う。

私、なんでこんな事聞きたいんだろう? 心の奥を探ってみる。
すると、何かドロドロとしたモノに突き当たった様な気持ちにな

る。

『死んじやった方が何も考えなくて良いじゃない』

——殺されたほうが案外、楽だったかもしれない。

「そこのお姉ちゃん、だからさっき言っただじゃないか!」

「ん!？」

「『正宗君』がその人のことを好きにならないと『刹那^{せつな}君』は出てこないんだよ」

その言葉で私は我に返る。

「んなの理由にならない!!」

混乱ぎみな自分に言い聞かせるように言った。

光彦と名乗っている澄川正宗は口を尖らせながら、いかにも不満げな口調で答える。

「理由になるよ」

「それに「刹那」って誰？」

「ん、殺し担当の人格」

「殺し!？」

「ねえ、驚いた!？」

「楽しそうに言うな」

私は少し冷静になって考えた。

そういえば昨日……

『それはオレの領域じゃない』とか言ってた。口調だって昨日とさつきと今では大違いだ。

ということは本当に……

「じゃあ、今のアンタは誰なの？」

「だから光彦だって言ってるじゃないかあ」

「じゃあ、やっぱり!」

「コイツは多重人啊……」

「……もついい」

アホか。そんなドラマみたいな事あるわけない。
私は教室へもどることにした。

頭の中はゴチャゴチャしてよく分からない。

澄川は本当に多重人格者なのだろうか？

「そんな事どうでもいいじゃない」

何度も呟くように独り言を言った。

もう関わりあうのは止めよう。何だかんだ言ってアイツは人殺しだ。

昨日、アイツから目が離せなかったのは、人殺しという現場を見てしまったからに違いない。

うんうん、そうだ、そうだ。

瞬間的に頭をよぎる想い。

——私は歓迎されない存在。

だから殺されてもよかった……

ああ、また今日も家には帰れそうにはない。

そんな事を考えながら教室に帰ると、さらに厄介な出来事が待っていた。

「私、今日、澄川に告るから」
もちろん言ったのは有希だ。

第6話 「張り込みと妄想」

屋上から戻ると、有希と美世が私の机を囲んで昼食を取っていた。しかし何だか様子が変だ。二人とも黙々と食べてる。

「ゴメン、ゴメン。ちよつ用があつてさあ……」

などと取り繕つて席に座ると、二人の動きが止まり、視線が一斉に集まった。

「何？ どうした？」

その言葉を待っていたかのように有希が口を開く。

「亜衣、アンタさつきまで誰と会ってた？」

昨日、あれだけ澄川の事を言つた手前、まともに答えるのは避けた。

「あつ……ちよつと先生に呼ばれて……」

「へー、最近の先生は屋上に生徒を呼ぶんだ」

「っ……！」

私の表情が変わつたのを見計らつてか、美世が口を挟む。

「あの、悪気はなかったんだけど……有希ちゃんがたまたま亜衣ちゃんと澄川君と一緒に居る所を廊下で見ちゃつて……」

「どういうことが説明してくれる？ 昨日あんなに澄川の悪口を言つた上杉亜衣ちゃん」

有希の敵意むき出しの視線に私は思わず目をそらす。

これじゃあ私が何か大罪を犯したみたいじゃない！！

でも、ホントの事を言つても信じてもらえそうにもないし……

と言うか普通に言つても信じてもらえるわけがない。

人殺しの高校生の話なんて。

「まさか、アンタまで澄川を狙つてたとはね」

「ちよつと待つて！ あんな人殺し、私が好きな訳ないじゃない！！」

「はあ！？ 人殺し？」

有希はその言葉を見逃さなかった。私は思わず口元を抑える。
「どういう事が教えてくれない？」

言葉上は緩やかな依頼だったけど、明らかに脅迫だった。
だって、私の胸倉を掴みながら言ったから。

「はあ……」

私は観念して話す事にした。

「……というわけ」

全てを聞き終わった後、美世を有希の顔は対照的だった。

「まさか、そんな。澄川君が人殺しなんて……」

そう言った美世の表情は硬かった。美世には信じてもらえたらしい。

一方、有希の方は……

「バカじゃないの？ そんな作り話まで作って私から澄川を引き離したいわけ？」

ホントの事言った私がバカだった。

「でも、殺し屋なんてカッコいいよね」

何考えてるんだかこの子は。

私が顔を引きつらせながら有希を見てみると、対照的に彼女は嬉々として話を続けた。

「でも、亜衣がそこまで言うんだったら今日の放課後、澄川の後をつけてみるってのはどう？ 本物の殺人鬼かどうか」

「えっ？ それって私も入ってるの？」

「当たり前じゃない！！ アンタが言い出したことですよ！！」

「あの、私は……」

「美世は無理しなくていいよ。体の事もあるし」

「ごめんね」

今更言ってしまったことを後悔しても仕方ないらしい。

ということでは私たちは澄川の後を付けることになった。

今日、後をつけたところで殺しをするかどうかなんて分からない。でも、澄川をつけることで有希の気持ちも少しでも変わってくればそれでよかった。

さっそく私と有希は澄川を下校時から追う事にした。

「今から何処行くんだろ？」

「家でしょ多分」

澄川は歩くのが速く、私たちは肩で息を切らせながらついて行った。

「何処まで歩くんだろう？」

「そんなの分かるわけ無いでしょうが」

「えー、なんだかダルいんですけど」

後頭部に突っ込みいれたい衝動をなんとか押さえた。

さらに有希の妄言は続く。

「でも二人で歩くときはゆっくり歩いてもらう事にしようっと」

「有希。もう付き合ってから的事考えてるの？」

「そうでもしなきゃあ、やってらんないよ、こんな事……あっ
前を歩いてた有希が突然止まった。

「どうしたの？」

「待つて。どこかへ入るみたい」

有希が指差したアパートらしきものに澄川は入っていった。

「どうする？」

「もちろん玄関まで行く！！ ココが本当の自宅かどうか調べないと、遊びにいけないじゃない」

「何処まで妄想広がってんのよ……」

そして私たちは慎重に後をつけて行き、3階のある一室に入るのを確かめると、ドアに近づいた。

「たしかに表札には澄川正宗って書いてある。ってことは……」

「澄川は一人暮らしって事？」

「マジで?! どうしよう、どうしよう!!」

何だか有希は澄川が一人暮らしだと聞いて嬉しそうだ。

「付き合い始めたらココに入り浸りになったりしてね」

「有希……妄想はその辺にしておいて」

「妄想? 何言ってるの? これはもうすぐ起きる現実よ」

「はいはい……」

「付き合う＋一人暮らしの彼」押しかけ女房with同棲よ!!」

ああ、もう何も喋りたくない。

まあ、有希は放置しておくとして、澄川が一人暮らしだと知って正直私は羨ましかった。

コイツはどんな理由かは知らないけど、一人で暮らせる術すべを持っている。

それに比べて私は一人暮らしする勇氣も無く、ただ友達の家を転々とした挙句、学校で寝泊りしたりしている。

考えてもしようがないけど……

「で? 将来彼女の有希さん、これからどうする?」

「決まってる!! 張り込みよ!! 何か刑事みたいでカッコイイ!

!」

「はぁ……」

この時点でやめておけばよかったんだ。

私は張り込みのせいで、更なる事件に巻き込まれることとなる。

第7話 「入らないの？」

そして一時間が過ぎた。

澄川は家から出る気配は無く、私たちは出入り口近くでしゃがみ込んでいた。

「亜衣、それじゃあ私、見たいテレビがあるから帰る」

「はあ？ 何言ってるの？ さっきはあんなに『刑事みたいでカッコイイ！』とかいってはしゃいでたでしょ？」

すると面倒くさそうに有希は肩に掛かった自分の髪をいじりながら答える。

「あー、それはそれ。澄川くんが住んでる所が分かったからもういいや。もともと彼が殺人鬼かどうかなんて興味ないし」

言いたい事だけ言い終わると有希はそくさと立ち去ろうとした。

「待つて！！ 私の言ってる事は本当なんだって！！」

「だったら、証拠でも何でも握ればいいでしょ？ とりあえず私は近々澄川に告るから」

そしてため息をつきながら有希は本当に帰ってしまった。

「やってやる。こうなったら絶対に証拠を握ってやるんだからっ！！」

私は意地とプライドだけで張り込みを続ける事にした。

今が7月でホントに良かったと思う。もし今が冬で外に二時間も張り込みをしてたら風邪を引いていたかもしれない。

澄川のバカっ！！ アンタのせいでこんな目に遭ってるんだからっ！！

……なんて事を考えてたら澄川が自室から出てくるのが見えた。

「あつ、出てきた。まさか、今日も人殺し？ そんなはずないよね」
遠目から澄川を観察する。服装はジーンズにTシャツと普通と言
うか地味な服装。

しかも、手にはクリアケースを持っていて、中身は筆記用具と本数冊。

「これってもしかして……」

澄川の向かった場所は駅前の予備校だった。

「まあ、澄川も高校生なんだし、予備校行っても不思議じゃないよね」

さすがにここで授業が終るまで待つほどバカじゃないので、とりあえず授業の時間を確認しようと予備校へ入った。

私は澄川に会わないよう、慎重に予備校に入った。

しかし、勝手がわからず、予備校の入り口付近でウロウロしていた。

明らかに怪しい人だな……

とか思っていたら後ろから声が聞こえた。

「何だい？ 入らないの？」

もしかして見つかった？

私は振り向く事が出来なかった。

「いや、その……」

私は澄川に見つかったのかと思い、恐る恐る振り返った。

しかし、そこには澄川とは似ても似つかぬ、男性が立っていた。

「す、すいません。あの、友達がココで授業を受けてて、それで、いつ終わるのかなあ」と思ったもので……」

「へー、澄川君の友達なんだ。だから後なんか付けていたと」

男性はニコニコしながら私に言った。

「えっ？ えっ？」

戸惑う私をみて、男性は話を続けた。

「澄川君っていい子だよねえ。素直で、人懐っこくて」

「あの、失礼ですがアナタは……」

「僕はココの講師だよ。そうだ！ 授業は21時までであって、結構時間掛かるから君も授業受ける？」

「いえいえ、私ここの生徒じゃないし」

すると男性は悪戯っぽく笑った。

「いいじゃん一回ぐらい。バレない、バレない♪」

「失礼かもしれませんがココの講師ですよ？　講師がそんな事言ったら不味いんじゃない……」

「なーに堅苦しい事言ってるんだよ、そんな堅苦しい考え方じゃあこの世の中渡っていけないぞ!!」

相変わらずニコニコしている。人のよさそうな先生だ。きっと生徒にも人気があるに違いない。

「それに澄川の近くにいられるぞ♪」

「い、いえ、私は結構です。それじゃあ失礼します」

「あつ。ちよつと」

私は振り切るように予備校をあとにした。

なんなの？　あの変な講師は。

第8話 「おやすみ」

今のうちに食事でもしようと思い、私は近くのファーストフード店へ入った。

適当な商品を頼み、適当な席に座る。

「今日こそ帰ろうかなあ……」

なぜ、これほど帰宅することに悩んでいるのか。

両親とケンカしてるから？

そんなわけがない。だって両親は死んでもう居ないから。

じゃあ、両親がいない貧乏な家を助けるために家出している？

……残念でした。

遺産は結構あって六つ離れた姉と私で半分に割った。

ちなみに私は未成年なのでお金は姉が管理している事に建前はなっている。

しかし、実際は私専用の姉の口座からいつでも好きなだけお金が引き出せるようになってる。だからお金には困ってない。

……って私は誰と話しているんだか。

そして現在、姉夫婦と暮らしている。一ヶ月ぐらい帰ってないけど。

帰れば姉夫婦が温かく迎えてくれるだろうけど。

でも……

「やっぱり今日も学校に泊まるか」

私は適当に時間を潰し、予備校の授業が終る頃合を確認したので店を出る事にした。

予備校に着くと出入り口から次々と生徒が出てきた。その一人一人を確認する。

しかし、澄川は出てこなかった。

三十分程すると、皆帰っていったのか誰も出てこなくなった。もしかして、見逃したのかなあ……と言う不安が過ぎったのもつかの間、見覚えのある二人組が出入り口から出てきた。

澄川とさっきの男性講師だった。

男性講師は外へ出るなり左右をキョロキョロと探り出した。

そして私の居る方向をむくと手を振り出した。

「いいっ！ 何なの？ あの講師」

私は仕方なく物陰からしぶしぶ二人の前に出た。

「さあ、今からメシ食いに行こう！！ メシ！！」

元気よく男性講師が叫ぶ。

「はあ……」

私は返事する元気も無かった。せつかくの尾行がアッサリ見つかったのだから。

澄川は澄川で私のほうを凝視して動かない。

というか睨まれてる……私は彼のほうを見る事が出来なかった。それを見て男性講師は私たちを交互に見てニヤニヤしている。

「澄川！！ そんなに見つめたら彼女が照れるだろ？」

「私は別に照れてませんっ！！」

先生の言葉を聞いた澄川はすぐに柔らかい表情に変わった。

「そうだねっ！！ ボク、物珍しいもの見ちゃうと凝視しちゃうんですよ」

「分かるっ！！ 分かるぞぉー！！ 先生も昔はそうだった。若い時ってついついかわいい子を目で追っちゃうんだよなあー」

「先生ー、腹減ったよぉ」

「よしきたっ！！ ファミレスへ直行だ！！」

「ふう……」

何も言わなくても私は数に入っているらしい。

ということで私たちは近くのファミレスへ行った。

「そついや言い忘れてたけど、僕の名前は黒木っていうんだ、ヨロシク」

「はあ。よろしく願います」

私はそれなりの挨拶はしたつもりだった。

しかし、黒木さんと言う男性講師には不満だったようで

「なんか硬いなあ。緊張するのは無理ないけど、ここファミレスだし気楽に行こうよ」

「はい、ドリンクバーから皆の飲み物もって来たよ!!」

「おつ、澄川は気が利くなあ」

私の前にも飲み物が置かれる。

とりあえず落ち着く為に一口飲む。甘いジュースだった。

ただ、甘いものは頭の働きを良くしたようだ。

気持ちが落ち着いた私はこの二人の関係が気になった。

「あの、失礼ですが澄川君とはいつから仲がいいんですか？」

「えっ？ いったら？ 多分3ヶ月前ぐらいだよ。澄川がウチの予備校に入ってきて」

「うん!!」

「『うん』じゃなくて『はい』だろ、ホント子供だなあ。コイツこんな感じで人懐っこいだろう？ 僕もそういう人間は嫌いじゃないから、すぐ仲良くなったよなあ」

「うん!! ボク、先生のこと大好きだよ!!」

「はつきりいうなよ。照れるだろ」

黒木さんは澄川の頭の頭をクシャクシャとなでる。ほんとに照れているようだった。

それにしても、ここまで澄川が垢抜けてる訳も無い。

おそらく澄川の言う所の「光彦」という人格が担当しているのだろつ。

あいつの話を間に受ければの話だけど。

ただ、傍目から見ている分には仲のいい講師と生徒といった関係にしか見えない。

「なんだかい関係ですね」

「おいおい、君までそんな事言うなよ。なんかホントに恥ずかしくなってきたよ……トイレ行ってくる」

黒木さんは席から立ち上がり、去り際に私へ振り向く。

「後は若い二人のお楽しみ。なーんちゃって」

「なっ……」

この人完全に誤解してる。

先生が居なくなつて、二人つきりになると途端に沈黙が二人を包んだ。

しかし、いつまでもこんな状態では間が持たないので私が話す事にした。

「怒ってる？ 尾行したこと」

しかし、澄川は何も答えない。再び、沈黙。

沈黙〓怒ってるってことね、OK。

そしてしばらくこの状態が続くと、ようやく澄川が口を開いた。

「お前には感謝してる」

「は？」

「こんなに早く俺にチャンスが巡ってくるとはな……」

「っ!？」

その口調はさっきまでモノとは明らかに違っていた。

一人称が僕じゃなくて俺になっている。

まさか……

「アンタは昨日の……」

「だったらどうなんだ？」

答えは1つだった。

昨日の澄川と言えば……殺しの人格「刹那」。

そしてこの後の展開を考えると……

私は慎重に尋ねた。

「あの人を殺すの？」

「ああ、俺という人格が出てきた以上、もう止められない」

「何故？ あんなにいい先生じゃない。殺す理由がない」

「理由は簡単。正宗が好きになったからだ」

「それとどう関係があるの！！」

私は興奮してテーブルをたたきつけた。

「うるさいぞ。ここは公共の場だ」

「コイツ……」

「ふん。俺は正宗が好きになった相手を殺すためだけに出てくる」

私は一瞬言葉を失った。

その反応を見て、刹那は嗜虐性を帯びたような笑みを浮かべる。

「俺は今、外へ出てこれた。それが理由にならないか？」

やっぱり昼休みに聞いたことは本当だったんだ。

『好きになった人を殺す』——なんだって言うの！？

——そんなことさせない！！

「殺すのは無理よ……」

「なぜ？」

「私に殺す事を喋ったから！！」

「ふん、俺がただ無駄に喋ったとでも？ お前に喋ったのは『絶対

に殺す』という自信からくる俺の自己顕示欲からだ」

その瞬間、私の体が少しだけ平衡感覚を失う。

どうしたっていうの？

「その証拠に……」

「くっ」

さらに意識が朦朧としてきた。

頭の中に霧のようなものが取り巻く感覚。体が重い。

これってまさか……

「朝までぐっすりおやすみ……」

「あっ……」

私の意識は無くなった。

第9話 「虚空を掴む」

確か三年前、両親のお葬式の時だった。

「ねえ。お姉ちゃん……お父さんとお母さんは本当に死んじゃったの？」

「ええ。悲しいかもしれないけど、これからは私たち二人で頑張りますよね」

優しく私を見つめながら頭をなでてくれた。

私は少し安心しながら、ふと思い出したことを呟く。

「ところでお姉ちゃん。あの朝何してたの？」

「あの朝？」

「うん、お父さんの車に何してたの？」

「……さあ？」

「……ま、……さま」

何処からか声が聞こえる。私は夢を見ていたみたいだ。

まどろみながらも何とか意識を現実に戻す……

「お客さま、お客さま」

「——っ?!」

目を覚ますと前には、ファミレスの店員がいた。

「あ、私……」

「お客様、申し訳ございません。当店での睡眠はご遠慮願えますか？」

確かさっきまで澄川と……そうだ!!

黒木先生が危ない！！

「すいません！！ 一緒にいた二人は何処へ行きました？」

「えっ？ お連れ様ですか？ 確か、少し前に出て行かれましたよ。もう一人のお連れ様も寝てしまわれて、とりあえずその方を家まで送るといつて、男の方が連れて行きましたが……」

「ありがとうございます！」

私は会計を済ませると急いでファミレスを出た。

何処へ向かったのか見当はついてる。

恐らく…… 学校だ！

とれだけの睡眠薬が混ぜられていたのかは知らないけど、あんまり意識がハッキリしないまま私はフラフラしながら走っている。

もつれる足に苛立ちながら懸命に走った。今までだってこんなに本気出した事がない。あの時、お姉ちゃんを止められなかった。自分が情けない。

……でも、今は違う！！

今度は止めなきゃ。このままじゃいつまで経っても私…… 逃げたままだ。

やがて学校が見えてきた。頼むから間に合って！

店員の話じゃあ、出て行ってそんなに時間はたってない。アイツは黒木さんを運びながらココまで来ているはず。

だったら間に合ってもいいじゃない！！

幸いにも正面玄関ドアが開いていた。きっと澄川が開けたに違いない。

私は急いで階段を駆け上がる。教室は3階だ。

階段を駆け上がり、廊下に出る。

奥の教室までさらに走る。

教室のドアが見えた。

少し開いてる！！

私は勢いよくドアを開けた。

そこにはナイフを持って立っている澄川と床に横たわる黒木さんの姿があった。

私は構わず、澄川に体当たりした。

澄川は不意を突かれたようで、窓側まで吹き飛んだ。

私はすぐたちあがり、黒木さんに近づき、傷がないか調べる。

「よかった……」

幸いまだ傷らしい傷はなかった。澄川が運ぶときにつけた引つき傷程度だ。

私は安堵した。

「良くない。そこをどけ」

振り向くと澄川は既に立ち上がっていて、ナイフを持ち近づいてきた。

「来ないでっ！！ 黒木さんには指一本触れさせない！！」

何気にナイフが視界に入る。ぶっちゃけ怖い。

でも、退く訳には行かない！

しばらく、二人のにらみ合いが続いた。

「何故、俺の邪魔をする」

「それはこっちのセリフ。なんで殺しなんかすんの？ バカじゃない？ この人がアナタに何したって言うの？」

「何もしないさ。強いて言えば正宗に優しく接してくれた……かな」

「だから殺すの？」

「それがオレの仕事だ」

「……それでも人間？」

すると澄川——いや、刹那は高笑いをした。

「人間だとかそういうモノはくだらん理想主義者が語ればいい。俺は正宗のためなら何だってなってやるさ」

「正宗のため？ 澄川とどう関係が？」

「好きな人間は一人で良いということだ。黒木という人間はその領域に入ってきた」

「何言ってんのアンタ。友達感覚の好きと、恋愛感情の好きの区別も使えないの？」

「……お前に話す事などもない。そこをどけ！！」
「だったら力ずくで何とかしたら？」

「言わせておけば。いいだろう、望みどおり殺してやる！！」

刹那はナイフを振り上げた。

私はとっさに身構える。

——きつと痛みが次にやって来る。
来る……はず。

……あれ？

しかし、刹那はナイフを振り上げたきり動きを止めていた。
その上、小刻みに震えている。

「なに？」

「邪魔をするな、正宗。……こいつ一人ぐらい殺ったって良いだろう」

「どうしたっていうの？」

どうやら刹那は今、自分の意思では動けないようだ。

「『刹那』は僕が好きになった人しか殺さないから……」

ふと、昼休みのあのセリフを思い出す。

「……もしかして、ホントにアンタは好きな人しか殺せないの？」
「ちっ！！」

刹那はナイフを床にたたきつけた。

「何故だ？！ コイツは仕事の邪魔をしているんだぞ！！ 金が入らないと臯月は……」

「は？ 臯月？ 誰？」

私に構わず、刹那は独り言を言い続ける。

「お前は皐月だけ愛していればいいんだ！！ それはお前も分かっているだろう？」

“愛してる” まったく普段では聞きなれない言葉が私の耳に入っ
た。

いくらなんでも大袈裟だ。

好きな人を殺す、刹那。逆に言えば好きな人しか殺せない。

その刹那が愛しているという言葉を使う……理由は今の私では分
からない。

でも言える事が1つある。私は止めたのだ。逃げなかった。

私は喜びを隠せなかった。自然に笑みがこぼれてくる。

両親は確かに救えなかったけど、今殺されかけた人は救う事が出
来た。

振り返って黒木さんの無事な姿を確認しよう。

その姿が私の充実感に繋がる事は確実だった。

そう思っ
て振り向こうをしたその時、ふと刹那が視界に入る。

顔は頂垂れていたが、口元がニヤついているのが見えた。

何なの？

「っ！？ つうつっ！？」

その瞬間、私に物凄い物理的衝撃が襲った。

「な……何……？」

視界が徐々に狭くなっていく。

私……

意識がなくなる寸前、目に入っ
たものは……

私を見下ろす真田の姿だった。

「うつ……うつん……」

再び目を覚ますと、目の前には血の海が広がっていた。

それをただ見つめるだけの私がいる。

自然に涙が出てきた。

また駄目だったよ……なんで私はこんなに無力なんだろう……

「まったく。後始末するのも大変なんだ。澄川から今日殺れると電話があつて来てみれば」

真田はしゃがみ、私と目線を合わせた。

「オレもなめられたものだ。一度殺すのを見逃してやったと思えば、今日も邪魔をしてくれるとな」

言い終わると同時に私は平手打ちを食らった。

真田は床に刺さったままの血に染まったナイフを取ると私の顔に近づけた。

授業中の真田とは大違いの殺気立った雰囲気、体が恐怖でこわばって動かない。

真田は私の胸倉を掴みナイフを振り上げた。

『殺される!!』私は目をつむり、顔をそむけた。

「くっ……」

しかし、いつまで経っても私に激痛が走る事はなかった。

恐る恐る目を開けてみる。

すると、ナイフは私の目の前で止まっていた。

「あ、あれ？」

「運が良いなお前は。その制服を着ている以上オレはお前を殺せない」

よく見ると真田の手が震えていた。

でも真田が殺すのが怖くて震えているのではない事が分かるにはさっきの言葉は十分な怒りのこもったものだった。

真田は立ち上がり、後ろで膝を抱えて座っている澄川に向かって話した。

「澄川、上司命令だ。上杉亜衣をお前の家で監視しろ」

第10話 「communicate」

「澄川、上司命令だ。上杉亜衣をお前の家で監視しろ」

真田の言葉を受け、膝を抱えていた澄川は顔を上げる。

「拒否は……」

「これは上司命令だ。次も仕事欲しければ従え」

「……分かりました」

澄川は立ち上がり、私の前まで歩いてきた。

「行こう」

あまり状況がよく飲み込めなかったけど、これだけは言えた。

「嫌。誰があんた達の世話なんかなるか！」

私は殺されるかもしれないこの状況で意地になっていた。

澄川も私を無理に連れて行くような事はしなかった。ただ黙って私の前に立ってる。

この状況を見かねて真田が口を挟んだ。

「今すぐ家の人に連絡してもいいんだぞ……」

「くっ……」

「この前の事で気になって調べたが、確か姉夫婦と暮らしているんだよな」

「っ……!」

「今ココに呼んで皆殺しも面白いな」

「あの人たちは関係ない!!」

私は感情に任せて真田に飛び掛り、胸倉を掴んだ。

「あの人に、あの人に指一本でも触れたら私が許さないっ!!」

「だったら、従う事だ。お前の選択肢はそう多くはない」

私を見る真田の視線は限りなく冷たく、ただ頷くしかなかった。

そして今、私は澄川と夜道を歩いている。
いろいろな事が起きすぎていた。分からない事が多すぎる。
澄川と真田の関係だとか、私は何故殺されないのかだとか……。
それ以前に私は今、澄川の家に来て行かれようとしている。
これからどうなるんだろう？

しばらくすると澄川は急に立ち止まった。

「どうしたの？」

「……」

しばらく澄川は黙った後、

「僕、今から……行く所があるから……」

そう言ってズボンのポケットから鍵を取り出し私に差し出す。

「ずっとつけて来たんだから分かるでしょ……家……」

「アンタねえ……」

よく考えると澄川の口調が変わっている。刹那とも光彦とも違う
感じ。

しぶしぶ鍵を受け取ると、ようやく1つの質問が言えた。

「あなたは誰？」

澄川はほんの少し沈黙した後、ポツリと言った。

「……澄川正宗」

私はココに来てやっと、まともに本人と話が出来た。

「これでいいの？ ホントに私が訳の分からない男の家に行くのも？」

「分からない。でも、行くとしたら……鍵渡しておかないと入れないから……」

覇氣がない。言葉も途切れ途切れだし、これが本来の澄川なの？
「まあ、私も家の人を殺されたくないから行くけど。勘違いしない

でね」

「2時間ぐらいしたら、帰る。部屋の物は好きなように使っているよ……」

「アンタの話し全然聞いてないでしょ」

光彦かアンタは。

何だか他の二つの人格と違って本人は拍子抜けするぐらいシヨボい人間だった。

色々考えてた私がバカみたいじゃない。

そんなこんなでその場で私たちは別れ、それぞれの目的地（澄川が何処に行くかは知らないけど）に行く事になった。

初めて入った澄川の家の中はシンプルそのものだった。

入ってすぐにキッチンがあり、その奥には一つ部屋があるだけの所謂1Kというものだった。

部屋に置いてあるものも必要なもの以外は何もない感じ。

男の一人暮らしなのでかなり汚い部屋を想像してた私は少し驚いた。

部屋を見渡す、特に目に留まるものはない……

「ん？」

テレビの上に置かれている写真立てが目に入る。

近づいてよく見てみると、プリクラ写真が飾ってあった。

そこには中学生ぐらいの今より少し幼い感じの澄川とセーラー服を着た女の子（多分、高校生）が並んでうつっていた。

女の子の方は凄く表情豊かで何パターンかの表情を見せ、明るい印象を受ける。

反対に澄川は無表情。

とりあえず、一通り部屋を見ると私はため息が出た。

「何でこんな所来たんだろ？」

とりあえず澄川は2時間は帰らないといっていたので、お風呂に入る事にした。

昨日は入ってないので、さすがに我慢の限界だ。
湯船に浸かると少し落ち着いた。

私は結局、また人殺しを見逃してしまった。

しかも、殺しをした人間の家に厄介になっている。自己嫌悪……

「そう、私はお風呂に入りたくてここに来ただけ」
って、言い訳を試みる。

お風呂から出ると私は寢床の確保に取りかかった。なにせ部屋は1つしかない。

とりあえず、その辺にあった座布団を枕にしてタオルケットを掛け布団代わりに寝る事にした。

……って何んで私寝てるのさ？　なんだか馬鹿馬鹿しくなった。

結局、私は澄川の家を出る事にした。

いくら泊まる所がないとはいえ、ココへ泊まるのは危険だ。色んな意味で。

それに真田は居ない。従う意味なんてないじゃん。

私は起き上がり、靴を履いて玄関を開けた。

すると、タイミング悪く澄川が帰ってくるのが見えた。

澄川も私を見つけ、近づいてきた。

「何処行くの？」

「学校へ帰る」

それを聞いて澄川は俯き加減でこっちを見ると、すぐに横を向いた。

「止めた方がいい。あの人、まだ学校に居るはずだから……」

「はあ……」

「それに見つかったら、困る。僕の仕事が無くなる」

「アンタ、もう少しハッキリしゃべれないの？」

私はため息混じりに部屋に戻る事にした。
今日だけだと言い聞かせて。

「ベッド使っていいから。僕は床で寝る……」

それから澄川はバスルームへ行った。

部屋で一人になった私はバスルームから聞こえる水音を聞きながら床で寝る事にした。

横になったは良いけど、昨日といい今日といい色々な事がありすぎて、ついつい考え事をしてしまつて眠れない。

しばらくすると水音も消え澄川はバスルームから出てきた。

私はちよつと身を固くした。

変なことをしようとしたら大声出してやる。

あの教室を出る時、真田は『心配するなコイツは何もしない』と言った。

本当だろうか？

という心配をよそに澄川は部屋の入り口で少し立ち止まり、その後ベッドに横たわった。

よく分からない緊張感が私を襲った。

こんな事ならとつと寝てしまえばよかった……。

次第にその緊張にも耐えられなくなり、私は話しかけた。

「澄川、起きてる？」

すぐ反応はなかったが、しばらくして

「うん……」と返事が返ってきた。

「一応言っておくけど何もしないでよ」

「うん……」

「澄川、あの後どこへ行ったの？」

「うん……」

いつまでも答えない。どうやら答えたくないらしい。

「何？ いえないような所へ行つたの？ いやらしい」

「……病院」

どうやら、薄っぺらいプライドはあるみたい。

こんな感じで私と澄川の会話は続いていた。

第11話 「忘れない」

時間は既に午前2時過ぎ、でも私は眠くなかった。

ふと気になった事を話してみる。

「澄川、テレビの上においてあるプリクラの子って彼女？」

「……」

沈黙かよ。

静かになった部屋は外からの車の通過音だけが聞こえる。

「黙っている所を見ると元彼女？　もしかして未練たっぷり？」

やはり答えない。

「凶星かあ」

私は何だか、からかいたくなった。

「いつまで昔の恋引きずってんの？　そんなの忘れたら？」

などと少し冗談めいて言ってみた。

私は学校での事を忘れるために言っただけだった。

しかし……

「忘れない、絶対に」

「な、なにその言い方……」

今までの自信なげな口調とは違う、ハッキリとしたものだった。

屋上で言っただけ「好きじゃないから」と同じ感じを受けた。

「僕が忘れたら…… 全ての人が彼女を忘れる……」

ようやく私は澄川の“触れられない部分”に触れていることに気付いた。

「ごめん、悪い事聞いちゃったみたい。あのね、私……」

「悪いけど、もう寝る」

そう言っただけ澄川は会話を断ち切った。私は寝るしかなかった。

朝、私は目覚まし時計の音で起きた。

どうやら他人の家で眠りが浅くなると言う事はないらしい。

ゆっくり起きて、目覚ましを消して辺りを見渡す。澄川の姿はもうなかった。

机には鍵と置手紙があった。

『朝食は冷蔵庫にあります。出かけるときは鍵を閉めてください』

「アンタは母親か？」

結局朝食をとって学校へ行く事にした。

学校に着くと美世が真つ先に私のところへ来た。

「亜衣ちゃん、どうしたの？　もしかして家に帰ったの？」

どうやら美世は私を心配して今日も学校へ早く来てくれたみたいだ。

「まあ、そんな感じ……」

すると美世は私を見据えるようにジッと見てきた。

「な、何？」

「何でも無いよ。亜衣ちゃん、後で話があるんだけどいいかな？」

「今じゃ駄目なの？」

「なるべくなら誰もいないところで話したいから」

こんな事を美世が言うなんて珍しかった。

だから真剣に聞かなくちゃいけない。

「わかった。じゃあ、お昼休みじゃあ時間が少ないから、放課後でいい？」

すると美世は頷いた。

そして、いつものように授業が始まる。

今日の1時間目は運悪く、真田の授業だった。

「真田の授業なら楽で良いよね、何も言われないし」

そんな声が周囲から聞こえる。私も2日前はそうだった。でも今は違う。アイツも人殺しなのだ。

斜め前を見ると澄川が真面目にノートをとっている。

後で鍵を返さなきゃ、今日も泊まるわけにはいかないし。

昨日の事は正直シヨックだった。無力、この一言に尽きる

私は誰も助けられないのかもしれない（誰かを助けられるなんて考える自体おこがましいけど）。

はあ、もう考えるのはやめよう。

てな事を考えていると、携帯にメールが来た。差出人は有希だった。

『今日の放課後、告るから澄川を呼び出してくれる？』

なんで私が！？

っていうか行動早っ！！

昨日の澄川との会話を思い出す。プリクラの女の子。

あの口ぶりだと澄川が好きな人だと言う事は間違いない。

それを考慮して『まだ早いんじゃない？もう少し様子を見てから……』と返信してみた。

すると、『ダメ。そんなんじゃない先越される』と返って来た。

『誰に先越されるんだよ』と言うツツコミは後にして……

『大丈夫だよ。もう少し彼の事知ってからでも遅くないって』とやり取り返信。

『そう言ってアンタが告ろうとしてるんでしょ！！』

『おい……』

まだ誤解してる……

私は仕方なく折れる事にした。ため息つきながら返信する。

『わかった。じゃあ、澄川を呼んできてあげる。場所と時間は？』

昼休み、私は澄川に鍵を返しに行った。

アイツはお昼、いつも屋上にいるので、すぐ見つかった。

『はい、鍵』

澄川は私をチラツと見ると途端に表情が変わる。

「えゝっ、持っていていいよゝ」

どうやら光彦に変わったらしい。便利なもんだ。

「はぁ？ 何で？」

「今日も泊まる所ないんでしょ？ だったらあゝ、ウチにいればイイじゃん！」

「そういう訳にもいかないの。そんな事よりアンタ放課後、時間ある？」

それを聞いた光彦は大げさに驚いた。

「なんで！？ まさか、チューしてくれるの！？」

「するか！！」

「しょんぼり……」

どうやら本気でしょんぼりしてるらしい。

「しょんぼりを口で言うなっ！！ 雰囲気で分かりなさい。平たく言えばアンタに告りたい子がいるってこと」

「あゝあ」

大げさに手でポンと相槌を打つ。

その後、光彦にしては難しそうなそんな顔をした。

「でも、残念賞！！ 正宗君には付き合ってる人がいまゝす！！」

恐らく、あのプリクラ写真での彼女の事を言っているのだろう。

「分かってる。だから、なるべく傷つけないように、優しく断って欲しいの」

「うーん、光彦そんなのニガテ」

「光彦じゃない！！ 正宗に言ってるの！！ 光彦で有希に会ったらブツ飛ばすからね！！」

「しょんぼり……」

「とにかく頼んだから。4時に開かずの教室で」

それだけ伝えると鍵を返し、屋上を後にした。

そして、放課後になった。

「お願いついて来て」

有希は拝むように私へ頼む。

「ええーっ、そういう事は自分でやりなよ」

「手前まででいいからさあゝお願い」

有希は普段、口では結構強気な事を言うけど、いざとなればこんな感じ。微妙に私のツボをついてくる。だから何となく憎めない。

「もー、しょうがないなあ」

「サンキューー！！付き合う事になったら幸せのお裾分けしてあげる
！！」

「ははは……あ、ありがと……」

ということで私と有希が開かずの教室へ行こうすると、後ろから声がした。

「亜衣ちゃん」

振り返ると、美世がいた。

「あの朝の約束……」

美世は有希をチラチラ見ながら言う。

すると有希が私と美世の間に割って入った。

「ゴメンネ、美世。今からどうしても外せない大事な用があるんだ。後で亜衣をちゃんと美世の所へ行かせるから。少しの間、亜衣を貸してね」

有希の勢いに負けた美世は俯き上目遣いで私たちを見た。

「ごめん、美世」

「うん……じゃあ、後で」

「じゃあ、行くよー！！」

私の手を引っ張って有希は開かずの教室へ向かった。

第12話 「好きだから／ヨロシク」

「開かずの教室」のドアはすんなり開いた。

「私が開けておいたの」と有希は言う。

教室に2人で入る。昨日の血痕は綺麗サッパリなくなっていた。匂いも無い。

少し昨日の事を思い出して気が滅入りそうになったので、違う事を考えることにした

何で有希はこの教室の鍵を持っていたのだろう？

この教室って誰にでも開けられるんだ。などに関心をしている私をよそに有希は話を続けた。

「実はね、ここ良くないウワサの教室だけど、ホントは違うらしいの」

「え？ じゃあ何なの？」

「この学校の女の子が伝統的に男の子への告白場所として使っているらしいよ。実際ここの教室の鍵は決まった場所にあつて、女の子しか知らない場所においてあるの」

「ってというか私、女だけど知らない」

「私は部活の先輩に聞いたから、帰宅部の亜衣は知らないのかもね」
ふと思う。この事を澄川が知ったらどう思うだろう……

「澄川君、来るかなあ……」

いつの間にか有希は「澄川」の事を「澄川君」と君付けをしていた。

「来るでしょ？ アイツはああ見えても……」

と私は話を続けようとすると教室のドアが開いた。
入ってきたのはもちろん澄川だった。

「……」

澄川は無言で教室に入ってきて、私たちと一定の距離を取ると立ち止まった。

成り行き上、私が居たままの告白になってしまった。

「えっと、あの……」

「……」

沈黙が続く。有希はモジモジしてなかなか言わない。

しかもチラチラとこっちを伺ってきた。

私は握りこぶしを作ってガンバレと口を動かす。

少しして意を決した有希が口を開く。

「あの、澄川君。わざわざここへ呼んだのは、その……」

「ごめん」

澄川は有希の話もそこそこに断った。

「え？」

「僕、付き合っている人がいるから……」

私は心の中で何度も『澄川のバカっ!!』と叫んでいた。

あんなに優しく断れて言ったのに!!

澄川の返事を聞いた有希は「そう……」と言ったきり黙りこむ。

しばらく沈黙状態が続いた後、有希は私を一瞥すると再び澄川へ顔を向け言葉を発した。

「あの、これだけは教えてください。これ聞いたら納得しますから……付き合ってる人って誰ですか？」

私と一緒に連れてきた理由が分かったような気がする。

どうやらまだ私を疑っているようだった。

私は私で昨日のプリクラ写真の人だと分かっているの、ため息が出た。

澄川は私たちを交互に見た後、ポツリと言った。

「浅野美世さん……」

「え?!」

「はあ?!」

それは私達にとってまさかの人物だった。

そして……

「何で黙ってたんだよ!!」

有希は美世を見るなり、掴みかからん勢いで近づいた。

澄川の返事を聞いた後、有希は真っ先に美世の元へ向かったのだ。

「有希ちゃんがこんなに早く告白するなんて思ってたから」

「ふざけんな!!」

堪らず私は2人の間に入った。

「有希、落ち着いて!! 美世、話があるってそういうことだったんだ。ゴメン、私が美世の話を聞いていたらこんな事にならなかったかも」

「亜衣ちゃん……」

しかし、有希の勢いは止まらなかった。

「亜衣、それは違う!! そんな事どうでもいい!! 問題はなんで美世が澄川と付き合うのかって事なんだよ!!」

それを聞いた美世は俯いた。

「私も彼の事が好きだから……」

その一言に有希は言葉を詰まらせた。

“好きだから付き合う” 答えは簡単だ。

有希も同じ気持ちだったから告げたのだし、それ以上追求できないだろう。

有希は下唇を噛締めて黙っていたが、やがて重い何かを押し出すように口を開いた。

「何で……何でさ! アンタみたいな病人を澄川君は選んだんだよ!!」

「っ!!」

「有希!! 言って良い事と悪い事が――」

私の言葉に有希は自分でも良くないと思ったのか、口を手で押さえ横をむいた。

「いいの……」

「美世？」

美世の表情は俯いてよく分からない。

でも、下を見るとしつかり拳が握られていた。

「私はたしかに病人だよ。毎週、病院に行って薬の投与を受けてる。それに有希に比べたら容姿も良くないよ」

「もういいよ、美世」

それでも彼女は話すのをやめなかった。

「……でも、でもね。この気持ちは負けない……絶対」

私は美世の静かだけど、とても強い意志を確かに感じた。

有希もこの言葉がよほど効いたのか、黙って帰って行った。

それから私と美世は黙ったまま動かない。

有希が澄川に振られることが分かっていたので、いくら付き合うだの何だのといっても気にはならなかった。

しかし、美世は違う。澄川と付き合うことになったのだ。

澄川が何の意図があつて美世と付き合うといったのか分からない。でも、あの澄川だ。“好きになった人間を殺す”あの澄川だ。

止められるのはそれを知ってる私だけ。

昨日はあんな事になってしまった……止められなかった。

救える命を救えなかった。

だからこそ、諦めちゃいけない。

せめて、友達だけは救いたい。

「美世、私も澄川と付き合う事は賛成できない。有希とは違った意味で……」

それを聞いた美世は仰向き私を見た。

「そう……」

一言言つと美世はまた俯く。

「だってアイツは昨日も言つたけど人殺——」

「わかつてる……」

「え？」

“ わかつてる ” ？

“ 知ってる ” じゃなくて？

「美世、それってどういうこと？」

俯いた美世の顔はここからじゃあよく見えないけど、何だか口元が歪んだように感じた。

それは薄笑いというものだろうか？

「私はそれを望んでるから……」

私は美世を初めて怖いと思った。

でも、ココで引く訳にはいけない。

美世をアイツと別れさせる方法ならある。

誰にも言いたくなかったけど、私は最後の手段に出た。

「実は昨日私、家に帰ってないの。何処にいたと思う？」

「さあ？」

「私、澄川君の家で泊まったの」

「っ……」

美世は何も言わず私を睨みつけた。

うう、何か気が引ける。

「ウソだと思ふなら、澄川に聞いてみるといい」

仮に本人に聞いて何も無かったと分かったとしても、心のシコリは残るはず。

かなり汚い手だけでしょうがない。美世をアイツから守るためだ。

しかし、美世は無反応だった。

「何？ ショックで何も言えない？」

「亜衣ちゃん、心配してくれるのは嬉しいけど、そんな事言っても無駄だよ」

「何が？ ホントに私はアイツの家に——」

「でも、何も無かったんでしょ？」

「どうしてそれが分かるの？ もしかしたら——」

その時確かに美世は悲しそうな顔をした。

「澄川君は皐月さんのことが好きだから……」

皐月？

確か昨日、刹那も同じ事言ってたっけ？

「それに亜衣ちゃんは家に帰れないんだから澄川君の家に居るとい
いよ……」

意味がわからない。

確かに澄川が他の子の事が好きだとしても、私が一緒に一つ屋根
の下にいていい理由にはならない。

「何で！？ 何でそんな事が言えるわけ？ 澄川が好きなんじゃないの？」

「……好きだよ。でも……」

煮え切らない美世にいつしか私は自分を重ねていた

私だっけ好きだといえたらどんなに楽か……

そう思ったら、なんだか腹が立ってきた。

「だったらそんな言っちゃあダメ——」

「え？！」

「その皐月って人がどんな人か知らないけど、戦わなきゃ、何も変
わらないよ——」

これは自分に対して言っている……完全に私は自分を見失っていた。

「ええ?! 亜衣ちゃん、さつきは別れろって……」

「ええ? そんなの知らない。澄川を絶対振り向かせるの!」

いつしか私は美世の両肩を掴み、力説していた。

すると美世は私へ真剣な眼差しを向ける。

「だったら亜衣ちゃん、お願いがあるの」

「何? 言って」

「私の代わりに澄川君の家に住んで」

「はあ? 何で私が!」

美世の意図がよく分からなかった。

しかし、美世は真剣な面持ちで話を続けた。

「澄川君、独りになるとすぐ皐月さんのこと考えるから。その時間を少しでもなくしたい」

「美世……」

「私、こんな体だから……できないし……」

一分、一秒でも好きな人に自分の事を考えてほしい。

その気持ち私が私に伝わった。

もうこうなったらやるしかない!

「美世、わかった。嫌だつていつでもアイツの家に乗り込んでやる!」

「ありがとう、亜衣ちゃん!」

考えてみれば変な話だ。

でも、そんな事を考える余裕もなく、ただ、その場の勢いでOKしちゃった感がある。

そして私は玄関のチャイムを押す。

数秒後、玄関が開き澄川が出てきた。

半開きになったドアを無理やりこじ開け、私は室内に入った。

「今日から私、ここで世話になるから。ヨロシク」

「えつ。……うん、わかった」

この時から齒車は狂っていたのかもしれない。

第13話 「綺麗だと言ってくれたから……」 （浅野美世編）

授業が終わり、皆がそれぞれの場所へ向かいます。
私も私の場所へ向かうはずです。他人事みたいだけど……

「美世ちゃん、少しの間我慢してね」

馴染みの看護婦さんなら私のことを浅野さんじゃなくて美世ちゃんと呼びます。小学生からの付き合いだからです。

その看護婦さんはいつものセリフを言うのと去って行きました。私は一人でこの部屋にいます。診療時間はとくに過ぎているので、人は全然いません。

このまま何時間かは動けないです。左斜め上を見ると幾つかのビニールの容器に入った液体状の薬が3つぶら下がっています。

それは私の命を繋ぎとめているものです。

私の内臓は壊れています。

こうして週1回病院に来て点滴による薬の投与を受けないと、上手く内臓が働いてくれなくて私は死んでしまうかもしれません。

悲しくはないです。そういう時期はもう過ぎました。

ただ、点滴を受けているこの時間は少し寂しいです。

それでも昔は少し荒れていました。

母親に「死にたい」といつてしまった事もあります。

母親は凄く悲しい顔をして「何バカなこと言ってるの!!」とい
って私の頬を叩きました。

頬をさすりながら母親を見ると、涙を流していました。

それを見てもう少し生きてみようという気になりました。

周りの人は私に気を使ってくれます。励ましてくれれます。
私もそれに答えるように頑張ります。

それでも“私はいつでも死ぬるんだ”という意識も同時に持つようになりました。

多分、私が死んでも世界は続いて行くんだろうな……
何か嫌だなあ……

一年生も終わり頃、私はいつものように数時間の点滴を終え、帰ろうと病院の廊下を歩いていました。

学校が終ってからの点滴なので、すでに面会時間も過ぎ、廊下にも人はほとんどいません。私は足早に帰っていました。エレベーターのボタンを押すと暫くしてエレベーターの扉が開きました。

その時、エレベーターを降りてきた人が目に飛び込んできました。

あれは確か……同じクラスの……澄川君？

実は澄川君の事はあまり知りません。もちろん仲良くもありません。

でも、クラスに馴染めず一人でいる澄川君を見て“似てるな”と思っていました。

私は病気の関係であまり皆と遊べませんでした。病弱な私を皆が避けていた事もあり、毎年新学期始まって3ヶ月もすると学校では一人になっています。（もちろん今は有希ちゃんや亜衣ちゃんがいいますが……）

だから何となく澄川君が気になっていたのです。

今私がいるのが7階です。

澄川君をココですれ違うという事は7階に用事でもあるのでしょうか？すれ違った澄川君を見ると彼は階段の方へ歩いて行きました。

私は不思議に思いました。エレベーターで来たのにわざわざ階段でいくなんて……

階を間違えたのかな？

……いや、違う。それならまたエレベーターに乗ればいいはずで
す。

それにこんな遅い時間に病院にいること自体おかしいです。

いつもの私なら別に気にせず帰るところだけど、その時何故か追
ってみようという気になりました。

それに理由がありました。

1つだけ階段を使う意味があるのを思い出したからです。

それは…… 8階へ行くためです。

この病院は8階建てなのですが、案内板に表示されているのは7
階までなのです。

噂では8階は有名人や政治家などの“普通に入院できない人”の
ための階だということです。

澄川君を気付かれないように追っていくと、予想通り「関係者以
外立ち入り禁止」の看板を潜り抜けていきました。私もあとを追
い、

8階へ向かいました。

8階へ上るとそこは他の階と変わらない病棟でした。

この階も既に消灯がなされて薄暗いです。

広い廊下の中、澄川君は一人、病室を前に立っていました。

澄川君が立っている病室だけ変です。壁がガラス張りなのです。

最初は集中治療室かなとも思いましたが、違うみたい。これじゃ
あ病室が丸見えです。

澄川君も澄川君で、両手をガラスにつけて覗き込んでます。

まるで…… おもちゃ屋のショーウィンドーを物欲しそうに見る子
供のようです。

私は思い切つて澄川君に近づこうとしました。
しかし、それは叶いませんでした。

私が一步踏み出した時、澄川君が突然ガラスを叩き出したからです。

何度も何度も激しく、狂つたようにガラスを叩きます。

「臯月！！今すぐオレが殺つてやるっ！！くそっ！！何で開かないんだ！！」

彼のすさまじい勢いに私の足はすくんで動けなくなりました。

そのうち何処からか看護士の人たちが来て彼を取り押さえました。
その後、ぐつたりとなつた彼は奥の方へ運ばれていきました。

こうして8階はまた静かになりました。私も何とか気持ちを整え、前へと進みました。彼は何を見ていたのでしょうか？気になります。

さきほど澄川君がいたところまで来てみると、ガラスを隔てた病室にベッドが1つだけあり、そこには誰かが寝ていました。

よく見ると綺麗な女性でした。

「……人形みたい……綺麗……」

その美しさに私は思わず呟いてしまいました。

怖いぐらいに白い肌、それとは対照的に赤い唇。髪も黒くて長く、月明かりに照らされた艶がなんともいえません。

彼女は穏やかに眠っています。私とは違う種類の人間のように感じました。

それとは対照的にたくさんの管が彼女の体から出ていました。心電図を表示する機械が定期的な波形を作り出しています。

私は思わず時間を忘れて眺めてしまいました。

だから自分にかけられた声も最初は聞こえませんでした。

「君は誰？」

背後から聞こえた声に私はようやく我に帰りました。

とっさに振り返ると、さっき運ばれていったはずの澄川君がいました。

「あっ、あの……私は……」

私は気が動転していて上手く言葉が出ません。

「その制服、ウチの高校……」

焦った私は澄川君の言葉に必死になってしがみつきます。

「そ、そう！！私、浅野美世って言います！ 同じクラスなんだけど……知らないよね？」

「うん。悪いけど知らない」

分かっていた事とはいえ私は落胆しました。

しばらく、沈黙が続きました。私は必死に言葉を探します。

しかし、何の言葉も浮かびません……視線を合わせるのが怖くなつて私は横を向いてしまいました。

その時丁度、病室の女性が目に入りました。

「あの女性は澄川君の知り合い？」

「うん」

「綺麗だね」

「うん……」

「……好きなの？」

私は言葉の勢いとはいえとんでもない事を口走ってしまいました。

「う、ごめんなさい。私、変な事を……」

「好きだよ」

「え？」

「言葉では言い表せないくらい好きだ。世間ではそいつのを愛してるというのかもしれないね」

澄川君の視線は私じゃなくて明らかにガラスの向こう側に向けられています。

私に答えたのじゃなくて、あの女性に向けたた言葉だと分かりました。

何か入り込めない絆のようなものを感じます。

「浅野さん、この事、他の人には内緒にしてもらえないかな」

「うん。わかった。もともと言う人もいないし」

「ありがとう」

「あの、それで……」

私はほんの少し勇気を出した。

「また、ココへ来てもいいですか？」

それを聞いて澄川君は少し考えたあと答えてくれました。

「彼女にだったらいつ会いに来てもいい」

「本当に!？」

「彼女を綺麗だと言ってくれたから……」

「ありがとう!」

私は嬉しくてたまらなかった。

第14話 「ほんの少しの勇氣」 （浅野美世編）

それから私は病院へ来るたびに8階へ行き、彼女を見ます。彼女は別世界の人間のように綺麗で現実を忘れさせてくれる避難場所なんです。

また、8階で澄川君と時々会う事があります。会うときは楽しく話してくれて、学校での態度とは大違いです。

それを不思議に思っていたのですが、光彦君という人格から澄川君は多重人格者だからだと教えてもらいました。

澄川君には人格が三つあるそうです。

まず、本人である普段の人格「正宗君」。

次に今私と話をしている人格「光彦君」。

そして私は一度も会った事が無いのですが「刹那君」という人格がいるそうです。

多重人格だとか、そういう精神に関する事は私にはよく分かりません。

実際、私は澄川君が多重人格者だとは思えません。

誰だつて会う人によって態度が変わったり、凄く鬱になったり、躁になったりすることはあります。

……私だつてそうです。

病気の事を考えると、どうしようもないくらい絶望的な考えしか浮かびません。

だから私は澄川君が光彦だと名乗っても澄川君は澄川君だと思います。

それから、光彦くんは病室で寝ている皐月さんの話を頻繁にしま

す。澄川君が皐月さんの事を好きだという事がよく分かりました。私も最初は楽しく澄川君と皐月さんの話を聞けました。

どこか違った世界の恋物語を聞いているようで良い感じでした。

……でも最近は少し苦痛になってきました。

私というのに光彦君は独り言のように話すのです。

私もここにいるのに……

その世界に私もいれて欲しい……

ここは現実を忘れられる場所、そうでしょ？

だから、ほんの少しずつ勇気を出して私は自分から光彦君に話そうにしました。

すると、これもほんの少しずつではありますが、一方通行だった会話はいつしか双方向に代わって行きました。

学校では出来ない事をここでするんです。学校での私は控えめで口数少ないただの一生徒。

でも、光彦さんと名乗る澄川君と居るときは、私が有希ちゃんにでもなったかのようにはしゃげます。

私はなるべく楽しく過ごしたい。

だから私はココに来ます。

新学期になり、私は高校2年生になりました。そこで私はダメもとで病院での私をほんの少しだけ出してみる事にしました。

その結果は驚くべきものでした。すんなりクラスに馴染めたのです。

もちろん中心人物ではないですが、誰とでも普通に会話し、誰も私を避けることなく、有希ちゃんと亜衣ちゃんという友達と呼べる人達も出来ました。

澄川君との出会いが私を変えてくれました。

そんな6月のある日、私はいつものように病院に行き点滴を受け、その後、8階に行き皐月さんを眺めていました。

その頃は既に皐月さんを見る事が目的ではありませんでした。

「あつ、美世ちゃん来てたんだ！！ 光彦、感激！！」

私は振り向き光彦君に笑いかけます。

今の目的はもちろん光彦君と話すことです。

「うん、今日お薬の投与があったから」

「あつ、そうなんだあ。でね、でね、聞いてよ、聞いてよ！！」

こんな感じで光彦君の話は始まります。

今では私という時、ほとんど皐月さんの話は出ません。

光彦君が気を使っているのかも……これは私の考えすぎでしょうか？

「——ってボクの話聞いてるう？」

「あつ、ごめん。考え事しちゃって」

「しょんぼり……」

光彦君は叱られた子犬のような表情を私に向けました。

「ごめん、許してね」

「ダメっ！！」

「ええー、じゃあ、どうしたらいい？」

「うーんとね…… チューしてっ！！」

今どきの子供でもなかなかしないような屈託の無い笑顔で言います。

「チューして」って言うのは光彦君の口癖なので、いつものようにあしらう事にしようと思いましたが、軽い疑問が私の頭を過ぎりました。

「光彦君、どうしていつも『チューして』って言うの？」

私は光彦君をからかう様な軽い気持ちで言いました。

しかし、光彦君は黙ったまま答えません。

「どうしたの？」

「怒らない？」

「え？」

そんな事を光彦君が聞いてきたのは初めてです。

子供が親の機嫌を取るときのようにでした。だから、私も母親のよう
うに言ってみました。

「……怒らないから言ってみて」

すると光彦君は上目遣いで私を見ながら、

「臯月ちゃんが元気だった頃、『私はキスはしない』って言ってた
から。ホントはして欲しかったけど……」

「だから、他の人に言っているの？」

光彦君は何度も頷きました。

やはり私が臯月さんの話題を嫌がっていたことを敏感に察知して、
光彦君は私に気を遣っていました。

光彦君というのはその喋り方から幼いように見られがちですが、
かなり繊細なところがあるのです。

それだけ私がいづの間にか臯月さんを意識していたという事でし
よう。

少しでも芽生えた想い。

——臯月さんに勝ちたい。

私だって物語の主役になれる……

ノド元まで来ている言葉を飲み込んで、またその言葉がこみ上
げて来きます。

何度も何度も。

そして私は、ほんの、ほんの少しの勇気を出しました。

「……していいよ」

「え？ 何が？」

さっき自分が言った事をもう忘れたかのように私に聞いてきます。

「その……チ……チュー……」

「ええ……」

光彦君は大げさに後ずさりして驚きました。

皐月さんが嫌がってしなかったことを私がして上げられる。

この時点でこれだけが皐月さんに勝利できる唯一の方法だと思いました。

そして私たちは皐月さんの目の前でキスをしました。

私はもちろん初めてです。

緊張で体が震えてきました。

しかし、唇が触れた瞬間それさえも忘れてしまいました。

目をつむったので、触れた部分だけが私を取り巻くすべての感覚でした。

唇が離れて暫く二人とも無言でしたが、やがて光彦君は「やったー！！チューしてもらったよ！！」とか言って飛び跳ねてました。

それ以上の事は当然、起こる訳もなく、その後はいつもの感じでお話をしていました。

帰り道、私は凄く高揚した気分でした。

6月の夜空は既に真夏のそれと変わらず、満天の星空で私を迎えてくれました。

あの瞬間だけは光彦君……いや、澄川君は私で一杯になったはずです。

そんな喜びを噛締めていた時、変化が訪れました。

「ねえ、澄川ってなんか良くない？」

学校で有希ちゃんが澄川君の事を好きだという言葉聞いた時です。

第15話 「失う人生」 （浅野美世編）

高校2年生になって、同じクラスになった有希ちゃんと亜衣ちゃんの2人と特に仲良くなりました。

初めに有希ちゃんと亜衣ちゃんが2人いて、私がその中に入ったという形です。

何から何までベタベタと一緒に行動しなきゃ行けない他の子達と違って、三人の仲はつかず離れずという感じでした。それが病院通いの私には丁度よかった。

どれだけケンカしても後腐れない関係です。

傍目から見たら、サッパリしてて仲も良くないように見られがちですが、決してそうではありません。

病院に行く事で付き合いが悪くなっても、いつも私に対する態度は変わらないし、さりげなく体の事も気にしています。

初めてシツクリくる友達が出来たと思いました。

だから、有希ちゃんから澄川君の事を聞いた時、私は少なからず動揺しました。

澄川君はクラスでも目立たないし、有希ちゃんの眼中には無いと思っていました。

彼女は気の強いところはあるけど芯は女の子らしく、容姿に関しても私より遥かに良いし、セミロングの茶髪はいつもサラサラで瞳も大きく可愛いです。

反対に私は髪はロングだけど黒く重苦しいし、度の強い眼鏡もかけています。容姿に至っては鼻屑目に見たとしても可愛いくないです。

この時はいつものように有希ちゃんと亜衣ちゃんがケンカをしてしまったので、私の動揺がばれる事がありました。

私はどうしたらいいのでしょう。悩みました。

そして、澄川君と私の仲はあの時のキス以来、特に何が進行するわけでもなくただ皐月さんの病室前で会ってお話をする程度です。会ったたびに私は意識するのですが、澄川君はキスの事を忘れたかのような感じです。

確かに私はキスしたけど、好きだと伝えただけではありません。しかも、厳密に言う相手は澄川君ではなく光彦君です。

光彦君のほうはと言えば、立ち居振る舞いは変わらないのですが、あの日以来「チューして」とは言わなくなりました。

私は焦りました。このままじゃあ皐月さんだけじゃなく有希ちゃんにも澄川君をとられてしまうかもしれません。

正直、この頃にはハッキリと澄川君を独り占めしたいという独占欲が私の中で芽生えていました。

——澄川君を失いたくない。

でも、全てが上手く行くはずもなく、停滞していました。考えてみればこのままが一番良かったのかもしれませんが。

有希ちゃんから澄川君の事を聞いたその日、私は病院へ行きまして。

何故だかその日に限って両親も病院へついてきました。

その辺りから変だとは思っていたのです。

病院へ着くと悪い予感的中しました。

点滴をする前、主治医の高田先生が両親と私に病状についてのお話がありました。

「美世さん。来週から週二回、病院へ来て点滴を受けて欲しいんだけど……」

「えっ……」

「それは病状が悪化したと言う事でしょうか？」

私が黙っていると堪らず、お母さんが先生に尋ねます。
すると、先生の口元が少しゆがみました。

「非常に言いにくいのですが……この前の血液検査の結果が思わしくなくて……」

両親は私の後ろにいて表情は読み取れませんが、すごく落胆しているでしょう。

反対に私と言えば、どこか他人事のように聞いていました。

その後、いつものように点滴を受けます。

「美世、お母さん今日は点滴終るまでここに居ようか？」

握ってくれている手に力が籠っています。母親が私を心配してくれているでしょう。

でも、私はそれを断りました。

「お母さん、私は大丈夫だよ。いつかはこうなるって分かってたし、こんな事でくじけてちゃあ、生きていけないよ」

「美世……」

「それにお母さんがいたら、なにか特別な事でもあったみたいじゃない。いつもどおりでいいよ。いつも通り」

お母さんの目は潤んでいました。

私はお母さんを心配させまいと必要以上に元気に振舞いました。
何度か説得し、両親は帰って行きました。

私は誰もいない中央処置室で点滴を受けます。

診療時間も終って人もまばらです。

点滴を受けているときは暇です。

下手に動く事も出来ません。

何時間もこのままです。

最近音楽を聴きながら過ごす事にしています。

今日だってお気に入りの曲を聞いています。
そう、いつもと変わりません……
いつもどおり……

——私はどうなるの？

不意に涙が溢れそうになりました。
声が出そうなのを我慢して下唇を噛締めたけど、涙はこぼれてしまいました。

その後、8階へ行くのは止めました。
失いたくない全てが無くなっていく感覚。
全てが上手く行かないような気がしたからです。
家に帰っても一睡も出来ずに朝が来ました。
今日も意味の無い希望が溢れる太陽が昇ります。
その希望は私にとって無用なものです。

私は両親以外の誰かに会いたくて、朝早く学校へ行きました。
学校へ行けば亜衣ちゃんがいるからです。
亜衣ちゃんを心配する事で自分の事を忘れようとしていました。
でも、亜衣ちゃんは私を見てすぐに寝てしまいました。
何か疲れた表情をしています。きっと亜衣ちゃんも熟睡できなかったのでしょう。

その方が都合がよかったです。
もし、彼女が起きてたら私は何を言ったか分かりません。無用な心配を与えたくないからです。
亜衣ちゃんの寝顔を見た私は日常に戻った気がしました。
このままですつといたいなあ……そんな気にさせる寝顔でした。

お昼休み、そんな気持ちにさせてくれた亜衣ちゃんから、とんでもない事を聞きました。

澄川君が人殺しをしていると言うのです。

一緒に聞いた有希ちゃんは信用しませんでした。私には信用できるものでした。

話の中に澄川君が多重人格だという話が出てきたからです。一人一人の人格の名前まで合っていました。

それだけでなく、私が一度も会ったことが無い人格「刹那君」についても亜衣ちゃんは知っていました。

澄川君が多重人格だと知っているのは私だけだと思っていたので、少しショックでした。

しかし、それではありません。重要なのは澄川君が人を殺す理由でした。

好きになった人を殺すと言うのです。

私の中で初めて病院であったときの澄川君がフラッシュバックしました。

『皐月！！　今すぐオレが殺つてやるっ！！　くそっ！！　何で開かないんだ！！』

じゃあ何故、私は未だにココに居るの？

答えは簡単でした。

澄川君にとって私はまだどうでもいい存在だったのです。そうじゃなければとくに私は殺されています。

私は……一人舞い上がってただけ？

その日の夜、私は病院へ向かいました。
今日は点滴はなかったのですが、澄川君はきつと来るはずです。
皐月さんを眺めながら澄川君を待ちます。
キスをしたあの日、私は皐月さんに勝ったと思いました。
でも、それは単なる思い込みでした。
皐月さんは穏やかな顔をして今日もベッドで寝ています。
ただココにいるだけでこの人は好きになってもらえる。
私はこの人が羨ましい……

私はいくつかのモノを失いつつあります。

1つは命。

もう1つは澄川君。

どちらも大切なモノです。

でも、私の意思とは関係なく、消えていきます。

私には『失う人生』しか待っていないのです。

それでも世界は続いていく。

なにもかも諦めるしかないの？

それからどれくらい待ったか分かりませんが、後ろから足音が聞こえて振り返ると澄川君が居ました。

澄川君は私を見ると表情を変えました。光彦君に変わったのです。

「あつ！！ 美世ちゃん！！ 今日も来てたんだ！！ でも、こんな遅い時間までココに居ていいのぉ」

私はすごく冷めた気持ちで、光彦君を見つめていました。

「あれ？ どうしたの？」

その変化に気づいたのか光彦君は覗き込むように私を見ます。

「ゴメン、光彦君。今日は正宗君に用があるんだ」

「ええーっ！！ やだよぉー！！ お話しようよぉー」

「……お願い」

「しょんぼり……」

私は澄川君に対しても自分の命に関しても諦めたわけではありません。

光彦君は俯き、そして少しすると顔を上げました。

光彦君のような明るさが影を潜め、どこか表情に疲れが伺えます。

「もしかして、正宗君？」

「……」

彼は無言で頷きました。私は呼吸を整え、言葉を吐き出します。
どうせいつか失うのなら……

私の世界が長続きしないものなら――

「澄川君、あなたは好きになった人を殺すのですか？」

「……うん」

澄川君はゆっくりと頷きました。

私はさらに慎重に“私の気持ち”を言いました。

「私と付き合ってください」

少し間を置いて澄川君がハッキリとした声で答えます。

「それは無理」

でも、そう答えるのは分かっていました。

私はもう失うものなんか無いんです。

「アナタは殺しを商売にしているのでしょうか？」

「……」

澄川君は否定も肯定もしません。

その態度が十分な答えになってしまっているのに気づいているのでしょうか。

少しずつ静かだけれど、熱いものが私にこみ上げてきます。

私は息を一気に吸い込んで吐き出しました。

「だったら、これは澄川君への依頼です」

「どういうこと?」

「私を好きになってください」

もう、私に『失うだけの人生』しか待っていないのならそれでいい。

だったら、やれる事をやるだけ……

「好きになって、澄川君の手で……私を殺してください」

私に出来る事。

それは……

自分の意思で終わりに向けて力強く進む事。

第16話 「株式会社Thread winter」 （浅野美世編）

昨日あつた事を亜衣ちゃんだけには話そうと思い、朝早く学校へ行きました。

でも、亜衣ちゃんの姿はなく、その後も話すタイミングを逃し、結局、有希ちゃんには澄川君に告白してしまいました。

有希ちゃんには悪い事をしたと思っています。

しかし、後悔はしていません。

私は失う事の第一歩としてまずは友情を失いました。

そんな友達の間で抜け駆けした私を亜衣ちゃんは応援してくれると言ってくれました。

『澄川君を皐月さんから少しでも引き離したい』という私の我が儘を彼女は汲んでくれ、病弱な私の代わりに澄川君と一緒に暮らしてくれると言ってくれました。

亜衣ちゃんなら大丈夫。

彼女が他に好きな人がいることを私は知っているからです。

そして私は今、ある人との待ち合わせのため喫茶店にいます。

待ち人は殺しの手続きをしてくれるエージェントです。

依頼をしたあの日、澄川君に言われたのです。

「確かに僕は殺しをしている……でも、それは仕事としてやっている事。その辺の変質者とは違う。だから君にも正式な手続きを踏んでもらうから」

確実に何かが動き出していました。

それは私が自ら動かしたものです。

注文したウーロン茶を待っていると、私の前に一人のスーツ姿の男性が近づいて来ました。

「アナタが今回の依頼人ですか？」

「はい、私——」

「つて、その制服は……」

「あつ！！……真田先生？！」

目の前に現れたエージェントとは真田先生のことでした。

先生は私の言葉を聞いた途端、顔を曇らせ、頭に手を置きました。
「またウチの生徒か。最近是人殺しを邪魔したり、依頼するのが流行っているのか？」

その姿は学校での無気力な感じとは大違いでした。

いつもはヨレヨレのワイシャツを着て学校にくるのに、今はサラリーマンのようにきちんとしたスーツ姿です。

「あの、私……」

「帰る」

「え？」

「オレはガキの使いで来てる訳じゃないんだ。まったく、アイツが仕事を自ら取ってくるなんておかしいと思っていたが……」

そう言つと真田先生は踵を返すと本当に帰ろうとしました。

私は慌ててスーツの袖を掴みます。

「お願いします！ 私の話を聞いてください！！」

「離してくれ」

「私は本気です！！ お金だつてあります！！」

「離せ」

「嫌です！！」

しばらく私と先生のにらみ合いが続きました。

私はここで引くことは出来ません、だから絶対にこの手は離しません。

睨んでいた真田先生はため息をつきました。

「とりあえず離せ。この状況ではオレが何か如何わしい事してるみたいだろ」

喫茶店。すがりつく女子高生とスーツ姿の男性。

私はようやく気付き、手を離しました。

「ここじゃあ、詳しい話はし難い。とりあえずオレについてきてもらおうか」

「……はい」

ということで私は真田先生についていく事になりました。

真田先生は歩くのが早く、どんどん先に歩いて行きます。

私は息を切らせながらついて行くのが精一杯です。

一体、どこへ連れて行かれるのでしょうか？少し不安です。

そして10分ぐらい歩いた先にある貸しビルに真田先生は入って行きました。

エレベータで3階まで行くと『株式会社Threadwint
er』と書かれたドアを開け、中に入りました。

「いらつしゃいませ」

受付の女性が私に声をかけます。

私は学生なので会社がどのようなものかは分かりませんが、テレビなどでよく見る会社となんら変わりません。

各人に当てられた机。その上に山積する書類や私物。奥のホワイトボードには『外出中』などの現在の社員の状況が書かれています。私は受付にいた女性に案内され、奥の『応接室』と書かれた部屋へ通されました。

そして、やたらふかふかした皮製の椅子に促され、暫く待つことになりました。

正直、拍子抜けしています。

本当にこんな所で人殺しの契約をするのでしょうか？

そんな思いに駆られていると、ノックの音がして誰かが入ってきました。

入ってきたのは真田先生でした。

先生は入ってくると机を挟んだ向かい側に座りました。

「お待たせしました。それではご契約内容についての説明に入らせていただきます」

真田先生はありがちな営業スマイルを私に向け、何枚かの紙を渡してくれました。

その紙には甲がどうたら乙がどうたらとか、いろいろな事が細かい文字で書いてあります。

続いて先生は説明を始めました。

でも、私には意味がよく分かりません。堪らず、ストップをかけました。

「あの、先生」

「何でしょうか？」

「その営業口調を止めてもらえますか？」

真田先生は相変わらず形式的な笑顔のままで答えます。

「と、仰られると？」

「私に色々説明してもよく分からないし、何だかセールストークを聞いているみたいで違和感があります」

「しかし、これは当会社での決まりでございますし、お前はお客様でございますから」

「先生、お客様に対して『お前』って言ってます」

「ふう……わかった。この口調は止める」

「出来れば説明も噛み砕いてお願いします。いつも授業で教えるみたいに」

「ふん、嫌味のつもりか？」

すると真田先生はネクタイを緩め、楽そうな姿勢をとりました。

「よし、じゃあ簡単に言うぞ。この会社は表向き輸入家具を扱う。だから、人殺しを依頼するときは本当に何かを買ってもらう事になる。その隠れオプションとして人殺しがついてくるという訳だ。人殺しは大金が動く。故に会社としてはこういうカモフラージュが必要となる」

「じゃあ、やっぱりこの会社は――」

真田先生の口元がかすかに釣りあがりました。

「大物の殺しから、ご近所さんの殺しまで承る殺しの総合商社といった所だな。こういう事は、この場でハッキリ言ってはならない決まりなのだが、まあ、いいだろ」

「はあ……」

「で？ 誰を殺して欲しいんだ？ 別れた彼氏か？ 気に食わない友達？」

「ち、違います！ なぜ友達を殺さなきゃいけないんですか！」

「まさか、両親とか言わないだろうな。それだとかかなりのリスクと伴うから、値は張るぞ」

「違います」

「じゃあ誰だよ」

「殺して欲しいのは……私自身です……」

「は？」

私の言葉を聞いた先生は固まってしまいました。

「本気です」

「自殺すれば？」

「っゝ！？」

私は全力で首を振ります。

すると、真田先生はポケットからタバコを取り出して吸い始めました。

「自分で死ぬ根性も無いと」

「違います、それに自殺は根性とかそんな問題でもないでしょう。私は澄川君に……殺されたいんです」

「澄川か……」

真田先生はそう言うと、ぷかりと煙を吐き出します。

そして急に身を乗り出して、私の目の前まで顔を突き出しました。

「澄川に惚れたか？」

「えっと……」

「正解か」

「……はい」

すると真田先生は大袈裟にため息をつきます。

「はあぁっ。おそらく、お前で二人目だ」

「2人目？」

「アイツに殺して欲しいと言ったのは」

直感的にその一人目は皐月さんだと思いました。

「私……その人に勝ちたいんです」

「ふーん」

私の言葉を聞いた真田先生は再び自分の椅子へもたれかかります。

「真剣なんです!!」

「……お前、本末転倒って言葉知ってるか？」

「え？　こんなところで現国の授業ですか？」

「いや、もういいや。意味がわからない子供に言ってもしょうがない。別にお前が殺されたいと言うなら何の問題は無い。ただ、アイツはオレが個人的に雇っているアルバイトみたいな立場でな。契約上ではオレが殺しの担当となるがそれで構わないか？」

「分かりました」

「それともう1つ。お前は未成年だ。こういう契約をする際には親の承諾印が必要となるのだが……」

「はい。本棚を言うと言う事にして印鑑をもらいます」

その後、私は真田先生から契約書を渡されました。
最後に先生は真剣な面持ちで私に言いました。

「もう一度聞く。本気なんだな？」

それが最後通告だと分かりました。

これで契約をしたら私は本当に……

でも、もう私から引く事はありません。

「はい」

「……わかった」

そして数日後、私の家には真新しい本棚が来ました。

第17話 「好きと努力」 （浅野美世編）

「え？ でも……」

「いって、やっちゃえ、やっちゃえ！！」

実は今、私は澄川君の家へ来ています。

昨日、亜衣ちゃんが私に学校に来る前に朝早く来るように言ったからです。

「でも、寝込みを襲うなんて……」

「襲うって、大袈裟だなあ。キスするだけじゃない」

そうです、私は寝ている澄川君に目覚めのキスを“ある意味”強要させられているのです。

「美世がしないのなら、私がするよ」

「え？！ それ困る！！」

「シッ！！ 澄川が起きるでしょ？」

「ゴメン。って何で私が謝らなくちゃ——」

「まあ、まあ。で？ するの？ しないの？」

「……するよ」

私は覚悟を決めて顔を近づけます。

澄川君は穏やかな寝息を立てています。

一度したことがあるとはいえ、緊張します。

そして、あと数センチでキスできる距離まで来たとき、澄川君は目を覚ましました。

目を開けた澄川君と私は息が掛かるほどの近さで見つめ合う格好になりました。

「っ！！」

「……」

驚いたのは……私です。

磁石が反発しあうみたいに私は飛び下がりました。

澄川君は無言のまま半身を起こすと私たちを見ました。

「チツ、惜しい!!」

亜衣ちゃんは指を鳴らして悔しがっています。

私は恥ずかしくて俯いていました。

「……」

澄川君は相変わらず無言のままベッドから出ると、そのまま洗面所の方へ歩いて行きました。

「アイツ、恥ずかしがってるよ」

「亜衣ちゃん、さっきのはどちらかと言えば怒っているんだと思うけど……」

「え？ そうなの？ アイツ、まだ昨日の事怒ってんのかなあ。ねー、まだ怒ってんの!？」

亜衣ちゃんは洗面所にいる澄川君に話しかけます。

もちろん返事は返ってきません。

「亜衣ちゃん、何したの？」

「え？ あれだけど」

「……あつ!!」

指差した方向には写真立てが置いてありました。

確かそれは澄川君と皐月さんが一緒に写っている写真があるはず……でした。

でも、今は皐月さんの顔の上に無理やり私の顔が貼つてあるので

「亜衣ちゃんっ!!」

「大丈夫だって。超強力接着剤で貼つてあるからそう簡単には――」

「そういう問題じゃなくて!」

「……美世」

亜衣ちゃんは真剣な面持ちで私の肩を掴みました。

「今の彼女はアンタなんだからしっかりとしなさい!!」

「……は、はい」

ここ10日ばかりこんな感じで、私は澄川君の家へ行きます。朝は私が玄関まで来て一緒に登校、学校が終ると、ココへ来て三人でお喋りしたり（澄川君は光彦君になっっていますが……）。

亜衣ちゃんは私をどんどん引つ張ってくれます。

本当に亜衣ちゃんには感謝しても感謝し切れません。

用意を済ませ、私たち3人は外へ出ました。

「今日は一学期最後の登校日なので、澄川と美世は2人で登校しなさい」

「亜衣ちゃん言ってる意味が……」

「じゃあ、私は有希と一緒に行く約束してるから行くね」

「あつ、ちよつと……」

亜衣ちゃんは私の言う事を最後まで聞かずに行ってしまいました。

『有希ちゃんと一緒に行く』か……。

あれから有希ちゃんとは口をきいていません。

正確に言えば私が無視されているのですが……。

このまま私が死ぬまで仲直りは出来ないのでしょうか？

ということでは澄川君と一緒に歩いています。

いつもなら澄川君一人で早足で歩くので亜衣ちゃんが怒るのですが、今日は亜衣ちゃんがいらないこともあって私に合わせてくれます。

まさか澄川君と病院以外の場所で2人で歩くとは思いませんでした。

今は完全に2人きりです。目の前に皐月さんもいません。

「あの、澄川君……」

私の言葉を聞くと、彼は途端に表情が明るくなってきました。

「まって！！ 光彦君じゃなくて正宗君に聞きたい事があるの！！」
すると、表情が一気に曇りました。

「何？」

「なんだか「ちょっと便利な表情だな」とか思っていました。
それはさておき……」

実は言つと聞きたい事があるというのはウソです。

ただ、本当の澄川君でいて欲しいと思っただけなんです。

だから、私はどう喋っていいか困りました。

光彦君ならどうでも良いような話しても出来ますが、考えてみれば正宗君との接し方がわからないのです。

考えた末、私が言つた言葉は……

「今まで本当に好きになった人を殺してきたの？」

「……」

澄川君は黙ってしまいました。私は私で何でこんな事言つたのか分かりません。

「まだハッキリと信じられなくて。そんな簡単に人を好きになる事
つて出来るのかなって……」

「それを聞いてどうするの？」

「ごめんなさい。変なこと聞いてりして……」

「努力する……」

「えっ？」

「好きになる努力をするんだ。その人の良い所だけ集めて自分の中
で善人にする。そうすれば後は刹那が勝手に殺してくれるから……」

澄川君は私の顔は見ずに前を向いたまま独り言のように言いました。

そんな澄川君を見て、思わず言わなくていい事を言ってしまう

した。

「皐月さんもそうだったの？」

「……」

また黙ってしまいました。多分、皐月さんの事を思い出したのです。私は自分の言った事を後悔しました。

すると澄川君の口がわずかに開きます。

「違う。アレは僕らの届かない所で起きたこと」

僕らの届かない所？

よく分かりません。

でも、これだけは言えます。

「だったら、私もそうして欲しい。勝手に殺されたくは無いです」
「……」

何で答えてくれないの？

この沈黙が私と皐月さんの差なんだろうな。

この差を埋める事が出来るのかなあ……

その時、不意に亜衣ちゃんの言葉を思い出しました。

『今の彼女はアンタなんだからしっかりとしなさい！！』

そうだよな。仕事だとしても確かに澄川君は私を好きになる努力をしているんだ。

今は偽りでも、いつかは……よしっ！！

「あの、澄川君。明日から夏休みだけど何か予定はある？」

「……特には無いけど」

「だったら、どこかへ遊びに行かない？私と澄川君と亜衣ちゃんの三人で」

そうだ、思い出を作ろう。

皐月さんとの思い出は消す事はできないけど、あの人が病院で寝ている限り、これ以上思い出は増えるも事はない。

だったら……だったら、私との思い出を増やせばいい。

——負けない。

私もこの命がなくなるまで好きになってもらう努力は怠らないことにしよう。

でも、どこかへ行くのに亜衣ちゃんを入れてしまう所がまだまだ改善の余地ありだけど……

第18話 「変わって代わらず」 （浅野美世編）

鏡に映った自分に少し違和感がありました。

「うん、良い感じじゃない」

「そうかな。なんか慣れなくて……」

「絶対コンタクトの方が良いよ。うん、可愛い」

「本当かな？」

私は眼鏡からコンタクトに変えました。

亜衣ちゃんの勧めもあつたけど、自分なりに変わりたかったので、そうしました。

今までずっとメガネをかけていたので変な感じです。

「これで少しは皐月さんに近づいたかな」

「近づくも何にも追い抜いたよ！！　って、私はその人を見たことないけど」

「ありがとう」

まず私が出来る事は容姿を少しでも皐月さんに近づく事だと思いました。

「ねえ、美世。次、遊びに行く服を買いに行こうか？」

「うん！！」

「メチャメチャ露出度の高いやつを選んであげるから」

「お、お手柔らかに……」

私たちは夏休みになった事もあって山へキャンプに行く事になったのです。

もちろん澄川君も行きます。これも思い出作りの一環です。

私の体の事もあり、一泊二日が限界ですが、それでも構わないです。

「これなんかどう？」

亜衣ちゃんが持ってきたのは、着てみると肩とかおへそかが出そうな服でした。

「それは困る。普通の服で良いと思うけど……」

「普通って……美世が選んだのって登山に行くみたいなのシヨボイヤツじゃない。そんなのじゃあ男は喜ばないって」

「えっ！？ でも、山はアブとか飛んでて刺されたら危ないし」

「アンタはオバサンかよ。皐月さんに勝たなくて良いの？」

「……じゃあ、亜衣ちゃんの方で」

両親はこのキャンプに最初反対でしたが、亜衣ちゃんの説得もあって、何とか許してもらえました。

もちろん澄川君も亜衣ちゃんが無理やり説得しました。

そして、あっという間に当日になってしまいました。

電車に乗って、その後バスでキャンプ場まで3時間弱で到着の道のりです。

今は電車に乗って、向かい合わせの席に皆で座っています。

「やっぱ、夏はこうでなくちゃねえ、美世」

「う、うん。そうだね」

「あんたも来て良かったでしょう？ 澄川」

「……うん」

さつきから亜衣ちゃんばかり喋っています。

実はそれには理由があるのです。

「人数多いほうが盛り上がるってねえ、有希」

「そう？ さつきからアンタしか喋ってないけど」

「あははは……」

これも亜衣ちゃんの計らい（？）で有希ちゃんもキャンプに来る事になりました。

しかし、有希ちゃんは相変わらず私と話してくれないし、澄川君と話をするわけありません。

この先少し不安です。

キャンプ場に到着した私たちはログハウスに行き荷物を置いた後、近くの川へ行く事になりました。

澄川君は早速、光彦モードに入り、楽しげです。

亜衣ちゃんも光彦君へムキになって張り合っています。私は座って岸からそれを眺めていました。

ふと気付くといつの間にか隣には有希ちゃんが座っていました。

私は何も言えず黙ったままです。有希ちゃんももちろん黙っています。

この沈黙が非常に長い時間に感じられました。

しかし、とうとうその均衡が破られました。

有希ちゃんが話しかけてきたからです。

「ホントに亜衣には参るよ。振られた相手と抜け駆けされた友達とキャンプしろって言うんだから」

「……」

私からは何もいえません黙って聞くだけです。

「そんな事出来ると思う？出来る訳無いよね？」

「それは——」

「なのにさ、アイツ言うんだ。『今しかない』って。このままだともう、二度とアンタと話せないかもしれないって」

私は耐え切れなくなつて、思い切つて謝ろうとしました。

「有希ちゃん、私——」

「許さないよ。謝ったって」

「っ……」

「だからアンタも謝らなくていい」

「え……」

「あれは失恋じゃないから。所謂、恋に恋してた感じ？ 澄川を好きな自分が好きだっただけ。だってその証拠に振られても……全然涙なんか……でなかった」

「有希ちゃん……」

私は有希ちゃんの顔を見ようとしたけど止めました。
今見るのは彼女に失礼な気がしたからです。

だから、有希ちゃんが気持ちを整えるのを待とうと思いました。
すると、有希ちゃんは立ち上がりました。

「美世、似合ってるよそれ」

「え？」

「澄川に気に入ってもらえると良いね」

「……うん」

しばらく私たちは無言でした。

でも、それは心地よい沈黙でした。

その後私たちはご飯の用意を始めました。

「私と有希で野菜切るから美世と澄川は他の用意をして」

亜衣ちゃんは各人にテキパキと指示を出します。私もそれに従い、
澄川君と食器を用意していました。

しかし、私が近づくと澄川君は少し距離を置くように離れました。

「どうしたの、澄川君？」

「だって、まだ正宗君と交代したくないもん」

正宗君だと思っていたのは光彦君でした。

「最近、美世ちゃん正宗君と話してばっかだし……」

「そうかなあ……」

「そうだよ。それになんか怖い……」

「え？」

「前の方が良かったな」

光彦君は急に変わった私を怖がっているようでした。

「でも、綺麗にならないと皐月さんには勝てないから……」

「ふーん」

「臯月さんに勝たないと正宗君に好きになつてもらえないから……」

私の言葉を聞いた光彦君は酷く深刻そうな顔をしました。

「美世ちゃん、そんなに臯月ちゃんに勝ちたいの？」

「え？」

「ねえ？ 僕はどうでも良いの？」

「ちよつと、光彦君——」

「そんな美世ちゃん嫌いだな……」

「光彦君……」

それつきり光彦君は黙り込んでしまいました。表情も何だか正宗君と見分けがつきません。

でも、亜衣ちゃんと会話する感じでは光彦君なので、変わつてはいい事が分かります。

私の中で迷いが生じました。

今でも臯月ちゃんに勝たなければいけない気持ちは変わりません。でも……

「ねえ？ 僕はどうでも良いの？」

「……そんな……美世ちゃん嫌いだな……」

この言葉が頭から離れません。

私は間違っているのでしょうか？

第19話 「望む事」 （浅野美世編）

夜になると、ゲームをしたり、花火をしたり、お話をしたりしました。

行きの深刻さはどこかに消え楽しく過ごせました。

有希ちゃんも、ほぼ普段と変わらない態度で接してくれます。

ただ気になったのが光彦君の態度です。私を避けているようでした。

夜も更け、私たちは寝ることにしました。

亜衣ちゃんはニコニコしながら澄川君に話しかけます。

「はい、澄川。これ」

「何？」

「見たまんまの寝袋。アンタは外で寝て」

「ええ~~~~~~~~っ!! ヤダヤダヤダ!!」

光彦君は足踏みしながら大声で叫びます。

「亜衣ちゃん、いくらなんでもそれは……」

「そう、そう、亜衣。私なら構わないけど」

「ダメ。私がヤダ」

そういうと涙目の光彦君の背中を押してログハウスから追い出します。

最初は抵抗していましたが、やがて観念したのか寝袋を取り、外へ行きました。

「いいのかなあ……」

「大丈夫、大丈夫、夏だし。さっ、寝よ」

「う、うん」

部屋が暗くなり、しばらくすると2人の寝息が聞こえました。

私はといえば、光彦君が言った事が気になって眠る事が出来ません。今の私が嫌いだという事は……やはり臯月さんには勝てないのでしょうか？

そう思うといても立ってもいられず、私はログハウスの外へ行く事にしました。

ドアと開け外へ出るとヒンヤリした空気が私を取り巻きます。

夏といっても山の中は肌寒いです。虫の音もうるさいです。

澄川君はログハウスを出たすぐ横で寝ていました。私は近づき澄川君の前でしゃがみました。

「光彦君、起きてる？」

「……」

私が居る方向と反対を向いて寝ているので起きているかどうか分かりません。

返事が無いので寝ているのでしょうか？

それでも私は構わず話しかけることにしました。

「光彦君は今の私を嫌いって言ったけど正宗君はどうなの？」

「……」

「私を好きにならないと殺せないんでしょ？」

「……」

「出来れば私を臯月さんより好きになつたら殺してね……」

「——それは無理だ」

「……」

澄川君は起きていました。

私は少し驚いて彼と距離を置きました。

「誰？ 光彦君？ それとも正宗君？」

澄川君は相変わらず反対を向いたまま喋り続けます。

「そんな事はどうでも良いだろう。話を戻せば、君がどんな事をし

ても皐月には勝てる訳が無いよ。彼女は僕達が生きる上での存在意義だからね」

光彦君でも正宗君でも無い話し方です。

しかし、今の私にはそんなことよりさっきの言葉のほうに気がなります。

勝てない？ 私？

「そんな……」

「じゃあ、君が死ぬことによって彼女に勝ったと果たして言えるのか？ といえば、答えは否だ。正宗の中には好きの区別がないからね。つまり、君は……」

澄川君はココが聞き所だといわんばかりに間を十分空けた後、言いました。

「死に損だな」

「っ！？」

「まあ、せいぜい皐月の入院費の足しにでもなってくれ」

「ど、どうして……そんな……こと……」

上手く息が出来なくなりました。

それと同時にあれほどのさかった虫の音も聞こえなくなり、目の前が歪んで見えます。私は涙を流していました。

澄川君はゆっくり起き上がると寝袋を脱ぎ、こっちを見ました。

しかし、その顔は明るい光彦君の顔でもなければ、暗い表情の正宗君でもありません。

「あ、あなたが……刹那？」

「察しがいいな。だったら、これから起こる事も分かるだろう？」

そう言っただボンのポケットから出したのはナイフでした。

「……ウソ？」

「はあ？ ウソだと？ お前が望んだことじゃないか。まさか結末はハッピーエンドだとも言っのか？」

澄川君はどんどん私に近づいてきます。

私は怖くて動けません。ここで殺されるのでしょうか？

私は……私は……私は……

まだ――

私はとつさに地面の土をひと掴みすると投げつけました。

澄川君は一瞬怯みます。その瞬間を逃さず、反対方向に全速力で走りました。

何処に向かっているのかもわからず、とにかくがむしやりに走りました。

どれぐらい走ったのかよく分かりません。

気付くと山の奥に入っていました。私の息をする音しか聞こえません。

やがて落ち着いて立ち止まると虫の音が聞こえてきました。

「ここ……どこ？」

今、自分が何処にいるのか分からなくなりました。夜の山の中は暗いです。私は立ちすくみました。

じっとしていると、暗いはずなのに色々なものが見えてきます。

それは目に見えるものではありません。

不意に有希ちゃんの言葉を思い出しました。

『あれは失恋じゃないから。所謂、恋に恋してた感じ？』

私もそうだったのかもしれない。

大切な事が他にあったはずなのに、私は皐月さんと必要以上に張り合っていました。

皐月さんに勝つ前に大事だったのは気持ちだったのです。

自分の気持ち。

相手の気持ち。

皐月さんは元々関係なかったのです。

あの時、真田先生は言いました。

『お前、本末転倒って言葉知ってるか？』

真田先生が私の事をどれだけ理解していたかは知りませんが、その通りです。

結局は逃げたかったのかもしれませんが。生きる事、死ぬ事から。澄川君に恋する事で今の状態を忘れ、さらに殺されることで自分の人生の結果を彼に丸投げしていたのです。

でも、私はそれから逃げました。

決めたはずなのに。

死ぬって決めたはずなのに。

……死ぬ事も出来ない。

私はもう戻れません、どこにも……とにかく独りです。

空を見上げれば、私の手の届かない所で星々は輝いています。

私の周りは沢山の木に覆われ真っ暗です。

それは今の自分の状況を表しているようでした。

第20話 「パズル」 （澄川正宗・過去編）（前書き）

この辺りで簡単な登場人物紹介です。

上杉亜衣……創野高校2年生。わけあって家に帰らない女の子。普段は活発で明るい性格。だが、姉のことで悩みを抱えている。

澄川正宗……亜衣と同じクラスの男の子。病院で眠り続ける女の子のために殺し屋を続ける。無口で暗い、多重人格。

光彦……正宗の別人格。人懐っこくて、明るい性格。やたらキスをしたがっていた。

刹那……正宗の人殺しを担当する人格。人を好きになると発動する。短期で冷酷な性格。

浅野美世……亜衣の友人。大人しくて、優しい性格。重い病気を抱えている。それが元で澄川に自分を殺して欲しいと依頼。

吉田有希……亜衣の友人。変わったものが大好きで、勝気な性格。澄川を好きになったが、あっさり振られる。

真田信治……亜衣たちの高校で教師をしているかたわらで、殺しを請け負う会社『株式会社Thread winter』に勤める男。なぜか自分の高校の制服を着ている人間は殺せない。

美浦皐月……病院で眠り続ける女性。
みほあつき

第20話 「パズル」 （澄川正宗・過去編）

浅野美世が去った後、僕はナイフをポケットにしまい寝袋の中に入った。

『これでよかった』と思うことにして寝ようとした。

だが、なかなか眠る事が出来ない。オマケに虫の鳴き声がさらに僕を眠らせない。

そういう時は余計な事まで思い出してしまう。

僕は思い出に浸ることで今の状況を忘れようとした。

季節は今頃、僕は中3で、塾へ行かず夜の公園で時間を潰していた。

塾へ行かなかった理由はいくつかある。

その中でも一番大きい理由は家のゴタゴタだった。

僕は両親との3人暮らし。

すでに親父と母さんの仲は冷め切っていて、僕経由じゃないと会話は成立しなかった。

そして昨日、とうとう僕にどちらかの選択を迫った。

親父か母さんどちらに付いて行くか。家族がバラバラになる宣告だった。

恐らく僕が生きてきた短い人生の中でもっとも重大な究極の選択……簡単には決められない。

そんな状況でも2人は塾へはキチンと行けと言う。だから塾へは行かなかった。

夜の公園は静かで好きだ。たまにヤンキーがいるけど、そういうのは無視る方向で。

僕はヘッドフォンをつけ、音楽を聞くことにした。そうすれば誰も話しかけては来ないはずだ、そう思ってた。

そういう思い込みは一人の女の子が現れる事によって破られることになる。

音楽を聴いてる僕の前に立ちふさがる影。

下を向き気付かぬ振りをする僕。影だけがやたらに動く。

しかし、やがてその動きは止まった。

ようやく諦めたかと思ったその時、僕の目の前に突然顔が現れた。

「！！」

僕はビクリして思わず顔を上げる。

すると目の前にはしゃがんでいる女の子がいた。

見た目は僕より少し大人びていたので高校生ぐらい。

夏なのに長袖のセーラー服を着ていた。

髪は長く、先の方でまとめてある。目の大きい印象ある顔だった。

女の子は僕にヘッドフォンを取るようと言うようなジェスチャーをしたので僕は無視をした。

彼女はしばらく僕を見つめ………というか睨んでいた。

こうなった以上我慢比べだ。

この子が諦めるか、僕が諦めるか………なんて事は全く無かった。

女の子は僕に近づきヘッドフォンに手をかけると剥ぎ取り僕の耳元でどなった。

「『なあ』ってさつきから言つとるやんかつ！！」

耳鳴りがして耳が痛くなつて僕は女の子を睨んだ。

「何？ 私が悪いって言いたそうな顔やなあ。アンタが悪いんやんか。ずっと無視しとるから」

聞きなれないイントネーションと言葉に僕は戸惑った。

「アンタ……大阪人？」

「はあ!？」

とりあえず言ってみたただだったが、彼女には言ってはならなかった事らしく顔を真つ赤にして怒り出した。

「アホっ!! 大阪弁と一緒にせんといて!! もっつ、今まで行く先々でまず言われんのがそれやん。あゝあ……私の生まれたところは関西じゃないのに……」

彼女は腕組みをしてなにやら一人で憤慨してブツブツ言っていた。

僕はそんな独り言に付き合ってる気分じゃないので、用件を聞いてとつとあしらう事にした。

「で、僕に何か用？」

すると彼女は自分の用事を思い出したらしく、勢い良く立ち上がった。

「そつやん!! 忘れとつた。大事な用件があつたんやん!! えーつとなあ……」

と言いながらキョロキョロと周りを伺いだし、僕に手招きをして小声で話し始めた。

「あんなあ、あんなあ。アンタ、気持ちよくなる薬っていらへん？」

「はあ？」

いきなり意味の分からない言葉を聞いた僕は思わず声を出してしまった。

「もう、大声出さんといてよ。誰かに気付かれたらどうするんさ。

実は私、白い粉を売ってるんやんけど」

気持ちよくなる薬? 白い粉?

まさか……

「覚せい剤？」

「アホっ!!! そのまま言わんといてっ!!!」

彼女は再びしゃがむと横においてあったスポーツバッグのファスナーを少し開いて僕に見えるように傾けた。

その中には確かに白い粉があった。しかも、かなりの量だ。

「な？ ホントやる？」

「……」

僕はハッキリ言うと思われなかった。

まず、なんでセーラー服着た女の子がそんな物を売っているのか？
そして、バッグの中の大量の覚せい剤。

僕はその世界を知らないのも何ともいえないけど、おそらく何百、何千万という金が動きそうな量だ。

彼女も僕の不審そうな顔を見たからか、フォローを始めた。

「アンタ、ウソやと思っとるやる！！ まあ、無理もないけどなあ。私みたいなヤツが売ってたら私だって疑うもん。でも、これ本物なんだ。実は私の親父がヤクザと関わりあいがあるような仕事してるんやんかあ。そんでな、それを私がパクったん。だからこれ本物」
「いや、百歩譲ってそれが本当だとしても……そんなことしたら君の親父さんは危険なんじゃないのか？」

それを聞いた彼女は少し考えた後言った。

「ええの、ええの。あんな親父もう知らんから。ほつてきたもん」
彼女は自分の父親を見捨てたらしい。何となく分かる。

僕も自分の両親にウンザリしていた。たからつい口に出してしまっ

った。
「まあ、分からなくも無い。僕の場合は両親だけど……」

すると彼女は僕を凝視した。

「……それ本気なん？」

「まあね……」

それから僕たちはそのままの姿勢で時間を過ごした。

「……もうええわ、今日は店じまい」

突然、そう言ってしゃがみ込み、スポーツバッグのファスナーを

閉めながら彼女はため息をついた。

僕はそれをただ眺めていた。

イキナリ来て喋りまくって、おまけに覚せい剤まで見せられ、最後には店じまいと言う彼女は一体何なんだ？

そして彼女の動きが止まり、ゆっくり仰向き僕を見た。

僕は突然目があったので顔を逸らす。それを見て彼女はニヤツとした（様に見えた）。

「そうや。アンタさあ、この辺案内してくれへん？ 私昨日来たばかりで何にも分からへんのやかあ。なあ？ お願い」

「?! なんで僕が!」

「ええやんか!! どうせヒマなんやろ？」

「ぐっ……」

「それに……アンタと私って似てる感じがするし」

「なんだよそれ……」

たいして断る理由も見つからず、僕はなし崩しで彼女に付き合う事になった。

「私の名前、みほさつき美浦皐月みほさつきって言うやかあ。歳は17歳やけど、アン

タいくつ？」

「……15歳」

「じゃあ、私の方が年上やなあ。それやったら、皐月さんって呼んで」

別にそんな事はどうでも良かったのに、僕は家の事もあり少々反抗的になっていた。

「嫌だ。それに僕はアンタじゃない」

僕の言葉を聞いた彼女は一瞬怪訝な表情を見せたけど、すぐに笑った。

「そうやんな。別に歳なんてどうでもいいか。その答えハナマルやなあ」

ハナマルなどと今時テレビの番組のタイトルぐらいでしか聞いた事の無いような言葉だ。

「じゃあ聞くけど、あんたの名前は？」

「僕は……」

どうして僕はこのとき彼女のピースに巻き込まれたのだろう？

あの変な言葉のイントネーションのせいだろうか？

——いや違う。

彼女は恐らく、僕という「パズル」が家族という「ピース」を失う代わりに現れた「新しいピース」。

現れるべくして現れたのだ。

だから僕も名乗る気になったのだ。

「僕は藤原瑞樹^{ふじわらみずき}」

そう、これが澄川と名乗っている僕の本名だ。

第21話 「欲望」 （澄川正宗・過去編）

「で？何処案内してくれるん？」

皐月は僕の数歩前を後ろ歩きしながらそう言った。

なんだか良く分からないが、この街を彼女に案内する事になったのだ。

別に無視つてもよかったけどすることないし、付き合うことにした。

そして何処から案内するか考えていると彼女は僕を急かした。

「もうちよつと早く決めれへんの？ まったく、これやから日本は決定力不足やって言われるんやん」

「何の話してるんだよ」

「サッカーの話」

「はあ……」

「もうええわ、ここにしよ」

そう言つて指差したのは、カラオケボックスだった。

「……」

「なに？ ベタ過ぎる？ まあ、ええやん。入ろ、入ろ」

僕の意見を聞くことなく一人でさっさと入っていった。

そして、どんどん一人で受付も済ませ、僕を引きずるように部屋へ連れて行き、さんざん彼女一人で歌いまくった。（もつとも勧められても歌う気は無かったけど）

「あーっ、スッキリした。次何処行く？ 私、お腹が空いとるんやけど」

「あれだけ歌えば腹も空くだろ」

彼女は頬を膨らませた。

「アホっ！！ カラオケは戦争やに！！ 曲入れへんヤツが悪い！

！」

「別に入れる気も無かったし」
すると急に彼女は俯いた。

「……しょんぼり。アンタなんかノリ悪いなあ。もっとテンション上げてこー！」

そう言いながら仰向くと、両腕を目一杯広げ僕の肩を叩いた。
彼女は感情表現豊かな人間だ。僕とは違う人間なのだろう。

次に僕らが行ったのは焼肉屋だった。

しかし、僕はあまり食べる気がしなかった。

「なあ、食べへんのならその肉ちようだい」

「……どうぞ」

すると明らかに彼女は不満そうな顔をした。

「違つやろ！！」 『そこは誰がやるか！！』 って言つて急いで食べる
とこやん！！」

「やっぱりアンタ大阪じ……」

僕の言葉を遮るように彼女は席を立つた。

「違つ！！私は大阪人でも関西人でもないっ！！……これやから
言葉の違いがわからん人間は嫌やなあ。『やん』とか『ねん』を使
つたり、お笑いを強要すると関西人やと思つとるやろ？ 違つ、違
う！！」 私の言葉は関西弁の二セモノじゃないっちゅーねん！！」

「誰もそんな事まで言つてないだろ」

とりあえず僕は冷静に答えてみた。彼女も言いたい事を言えたの
か席に座った。

「そらそつやな。まあ遠慮せんと食べて。金なら私が出すから」

それでも箸を付けようとしないう僕を見た彼女は言った。

「どうせ汚いことから出来た金やし、そういう金は目一杯使つに限
るからな」

履き捨てるように言う仕草はさっきの勢いとは違い、どこか自嘲

的な印象を受けた。

薬を売るということには罪悪感を感じているのかもしれない。

「本当におごってくれるんだろうな」

「うん。こんなモンで良かったら」

そして僕は無理やり肉を食べた。

すると次第に彼女の機嫌も治ったらしく、最後は僕と肉の取り合
いをした。

焼肉屋から出ると、軽く飛び跳ねながら彼女は僕の前を進んだ。
かなり機嫌が良いみたいだ。

「あんな、あんな、次な、プリクラが撮りたいんやけど」

「えっ!？」

ハッキリ言えばプリクラは大っ嫌いだ。

しかし……

「一人で撮ってもシヨボイだけやん。なあゝええやろ？」

僕は彼女に押し切られた。

そして、近くのアミューズメント施設に入り、目的のモノへと急
ぐ。

画面を前に髪の毛を整えながら彼女は言った。

「あーっ、どんなポーズしようかなあゝ。久しぶりやもん」

「アンタぐらいならいつも誰かと撮ってるんじゃないのか？」

すると彼女の動きが少し止まった。

「どうした？」

「ココ3ヶ月ぐらい撮ってないもん……」

「え……」

「あのさあ、実は私な、ここからめっちゃ離れたところから家出
してきたんな」

「まあ、その喋り方じゃあこの人間だとは思えないからな」

僕は彼女が少し前に父親を置いてきたというようなことを言っ
ていた事を思い出した。

「そんであの薬売りながらここまで来たんな」

「何のために？」

その瞬間、彼女の表情が歪んだのを僕は見てしまった。

「別に言いたくなかったらいいけどさ」

写真を撮った後、僕らは特にどこへ行くわけでもなく並んで歩いていた。

「それにしてもよくこんなに表情が変わるもんだ」

撮れた写真を見て呟く。とたんに彼女は口を尖らせる。

「もつと気の効いた言い方できへんの？ …… まあ、ええか。」

と言うと覗き込むように僕を見てきた。

「で、これからどうする？ 人間の三大欲望の『食欲』『カラオケ欲』『プリクラ欲』を満たしたことやし」

「最初の欲以外は聞いたこと無いぞ」

「揚足取らんでええ。ほんでな、後満たしてない欲は『睡眠欲』を除いて1つしかないやんかあ。あれやん、あれ」

「は？」

彼女はそれが計算なのかよく分からないけど、僕の言葉の後、一呼吸置いた。

「——なあ、Hなことしよか？」

「嫌だ」

僕は即答する。

「じゃあ、艶めかしいこと」

「同じだろ」

僕の返事を聞くと彼女はため息をついた。

「はあ…… アンタはそれでも男か？」

「そういう問題じゃない」

僕の返答を聞か聞かないかで彼女は僕の腕を掴んだ。

「ど、どこへ行くんだよ」

「最初の公園」

引きずられるように僕は元いた公園まで戻ってきてベンチに座らされた。

「さっ、やるか」

そう言つと皐月は持っているスポーツバックをあさりだした。

「僕はしないぞ」

立ち上がるうとしたけど、しっかり腕を掴まれている。

……とはいえ本気で振りほどこうと思えば振りほどけるのだが、そうしないのはやっぱり僕も男だったわけで。

「はい、これ」

思っていたより大きいなあ……って、渡されたのはナイフだった。

第22話 「赤で繋がっている」 （澄川正宗・過去編）

「なにこれ？」

「ナイフやん、わからへんの？」

「そりゃ見れば分かる。で、どうしろと？」

皐月は服の袖を捲りだした。

「心中しよか。私の手首を切って。その後アンタの手首も切るから」

「は！？ バカかお前は！！ そんな事が出来るわけが……」

そう言っただけで彼女の顔は真剣だった。

瞳だって潤んでる。

僕はどうしていいか分からない。

こういう時、どうしようもなく子供だなんて思う。

「なんか不安で怖くて今まではそんな時、自分を傷つけて安心して…… もう、しゃへんって決めたのに…… でも、今日だけ、今日だけ頼むわ。自分でやったらどれだけやるか分からへん」

そこで初めて彼女の腕の異変に気が付くことになる。手首を中心に傷だらけだった。

僕の手は震えていた。

自分を傷つけた事もなければ、まして他人を傷つけた事もないからだ。

「このナイフ良く切れるからなぞるだけでええよ」

彼女の手がそつとナイフを握る僕の手に触れる。

そのまま彼女と僕の手が手首をなぞる。

一回なぞった後、少しして血流れ出す。僕は暫くそれを黙って見ていた。

「さつきさあ、なんで薬を売りながら来たか聞いたやんか？ あれな、お母さんに会ったためなんやけどな」

「ふっん……」

「さつきも言っただけで親父はやバイ仕事しとって、お母さんは私の

小さい頃に愛想つかして出ていったんな」

「別に言いたくなかったら言わなくても——」

さっきの事といい彼女とはこれ以上関わりあわない方が賢明だと僕の心は訴えていた。

しかし、彼女は話続けた。そして僕も話を聞いた。

「それからロクな生活できへんくて親父に暴力振るわれたりしてな。いつか逃げ出したろって思ってたんな。でも、一人になるのは怖かったん。そんな時に偶然見つけてしまったんな」

そう言っ僕に一枚のハガキを見せてくれた。

消印は2年前。住所は隣町だ。差出人は……僕に分かるわけがない。

「それ、お母さんからの手紙なんやんか」

「なるほど……」

裏を見ると綺麗な字で色々と書いてあり、内容は再婚するので子供を引き取りたいというものだった。

「遅いかもしれへんけど、母さんの所へ行きたいって思っ、親父のところから逃げるようにここまで来てみたはいいものの……いざ、住所にある家の前に来て外から覗いたら、お母さん、再婚相手と楽しくやってたわ。凄く幸せそうで私に入る余地なんてあらへん……」

「……」

「だからな……そこからも逃げてしまったん。もう、いくとこないんや……」

目の前に明らかに僕より不幸な女の子がいる。

でも、彼女を救うすべもなければ、家のことで精一杯な僕がいる。ただ、見過ごすだけ……なのか？

そこで思いついたことはひどくに馬鹿げた事だった。僕は自分の腕を彼女の前に出した。

「今度はオレの番だろ。オレも傷つけろよ、一人で浸るな」

この行為はくだらない馴れ合い、薄っぺらい偽善かもしれない。でも、そんなモノにでもすがり付いて生きていく力に変えていかなくちゃならないときがある。

今、僕が出来るのはこれだけだ。こんなものしか彼女に与えられないだから……

彼女は僕の腕を暫く見つめていた。

「やっぱりええわ。なんかアンタの腕、綺麗やもん……」

「遠慮すんな。僕だけ綺麗なままってわけにもいかないさ。僕達に似てるんだろ？ 最初そう言ったよな」

「それは……」

「早く」

「ええの？」

「うん」

彼女もさつきと同じく震えながら僕の腕にナイフを当てた。

僕は彼女の手に分の手を添えると一気に腕を引いた。

「痛っつー!!」

やっぱり激しい痛みが僕を襲う。自分の腕を掴み必死に痛みをこらえる。

なんだか頭がガンガンする。

「大丈夫？」

彼女は心配そうに僕を見ている。

僕は彼女はこの痛みに耐えてるのか？ と不思議に思う。

そんな僕を見越していたのか彼女は呟いた。

「私は慣れてるから」

「それもどうかと思うけど……」

それからどれくらい立っただろうか、心中なんて大層な事いったけど、そんな簡単に人が死ねるわけも無く、僕らは何も言わず公園

のベンチにいた。

むしろ僕はそれが心地よかった。痛みも引いてきたし。

しかし、彼女が沈黙を破った。

「なあ、キスせえへん？」

「えっ？」

「そんなに慌てやんでええやん。普通のキスやない。私らはそういう事はせんところ。それやると何か慰め合いみたいになるやん。だから……」

彼女は僕の傷のある腕を掴むと自分の腕のほうへ引き寄せ、自分の傷と僕の傷を重ねるように合わせ、僕を見て微笑んだ。

僕の行為が彼女の気持ちを晴らしたかどうかはわからない。でも、これは……確かにキスだった。

時間が経つと血も止まり、僕らはただ夜空を見上げてた。

「なあ、さっきから言おうと思ったんやけど、お互い『アンタ』って呼ぶの止めへん？」

「嫌だ」

僕の返答を聞いて彼女は僕を上目遣いで覗き込んでくる。

「何？ 照れとんの？」

「照れてない」

「ウソや。じゃあ、名前で呼んでもええやん。な、瑞樹」

「……僕は呼ばないぞ」

と言いながらそれ以来、僕も皐月と呼ぶようになった。

第23話 「真夏の雪」 （澄川正宗・過去編）

あの日以来、僕は毎日のように公園で会うようになった。

約束なんかしてない。でも、気付けばここに居る。彼女も同じだ。そしてまたお互いに新しい傷を作る。今日も腕には幾筋の血の跡が残っていた。

「でも、瑞樹。ナイフ使うの上手くなったなあ」

「これだけ毎日やっていれば、嫌でも上手くなる」

それだけじゃない。ヘタに切ればそれだけ治りも遅くなるから臍月をなるべく傷つけずに綺麗に切るかを僕は練習していた。

これは他人から見れば明らかにどこか狂っている行為なのだろう。でも、彼女はそれを認めてくれた。

「もう、瑞樹以外には任せられんわ。私の専属カッターな」

「アホだろお前」

「えへへ」

「……照れる所じゃないぞ」

臍月は夜空を見上げながら呟く。

「あーあ。雪降らんかなあ……」

「降るわけ無いだろ」

僕もいつものように突っ込んでみる。僕ら2人の関係はそんな感じだ。

「私、星空ってあんまり好きじゃないんやんか……」

「話が見えないぞ」

「だってなあ……星って上で輝いてるだけで私に何にもしてくれへんやんか。でもな、雪はなあ、私のところまで降りてきてくれるやんか。結晶って綺麗やで」

「……そうだな」

臍月がどういう意図があったのかは分からないが、その言

葉は今の僕らをあらわしていた。

彼女はあの日から母親の家を訪ねる訳でもなく、かといってこの街を離れる訳ではない。

僕もあの日から両親どちらについて行くか決めかね、結論を先送りしている。

僕らは結局自ら行動する事を避け、幸せが何処からか降ってくるのを待っているだけなんだ。

でも、夏には雪は降らないし、僕らにも幸せが降ってくるわけが無い。

だから僕らは今日も傷跡をすり合わせる。これ以上の関係ではないけれど、これ以上の関係もない気がした。

「最近な、常連になった客が日に日にやつれていくんやんか……私、そんな人からお金取って暮らしてる。今日も焼肉食べたし……最低やな」

彼女は薬を売る仕事があまり好きではない。よくこんな愚痴もこぼすようになった。

「皐月……生きていくには仕方ないだろ。ああいうのはお前だけじゃなくて買うやつも悪いんだよ。お前だけ責任感じる必要は無い」
僕は知ったような口をきいた。

情けないけど僕は今まで両親の仲は悪かったが、所謂“普通の生活”を送ってきた、ただの中学生だ。

分別の付いた大人のような気の利いた言葉は出てくるわけがない。だから今まで僕は精一杯大人のフリをする事でなんとか体裁を整えてきた。

皐月にはいつも元気でいて欲しい一心で。ただそれだけだ。

「ありがとな。少しだけ楽になったわ……」
「……よかった」

この言葉を真に受けていいのだろうか？

僕は少しうれしかった。

「でもな、アンタちよつとキザやで」

「うるさい。お前だつてもう結構ここに居るんだから、いい加減その大阪弁もどきをなんとかしろ」

「何言つとんねん！！ 大阪弁モドキ言うなや！！ そんな事言うのはこの口かつ」

「痛い！ 痛い！ 痛い！！ 頬を引つ張るな！！」

「うるさい！！ 誰が中学生ごときに慰められるかい！！」

こんな事を繰り返すこと一ヶ月。僕らは過ごしてきた。楽しかった時間。

現実から逃れられる時間。僕らはお互いのシェルターだった。

そんな時間も終わりが来る。判りきつた事だったけれど……

皐月は足を投げ出しバタバタさせながら僕に言った。

「あーあ、このまま夏が終わったらどうしようなあ」

「このままでいいじゃないか。別に困る事は無いだろ？」

皐月は足を動かすのを止め、力なく笑った。

「困る事だらけやん……」

僕らは黙り込んだ。

何を言うかは僕の中で既に決まっていた。

おそらく彼女も誰かが背中を押してくれるのを待っているのだろうと思う。

言うなれば僕は雪だった。

だから僕は雪を降らせることにした。

「この前は外から見ただけなんだろ？ だつたらもう一回、母親に会いに行つたらどうなんだ？ 手紙でもお前を引き取りたいって言うてきたことだし」

彼女は僕の顔を少し見る。

嬉しさ半分、悲しさ半分の複雑な彼女の顔。

そしてゆっくりと俯いた。

「でも、あの手紙2年前のやし……もう忘れちゃうと思う」

「行くだけ行ってみるよ。なんなら僕もついて行ってやるうか？」

彼女は首を振った。

「ええわ、自分で行く。……何だかんだ言っても結論は欲しいし……」

……

「だな」

「よし！ 思い立ったが吉日や！！ 今日のもう遅いし、明日早速行くー！」

そう言い放つと皐月はベンチから立ち上がりガッツポーズをとった。

「でも、これだけは約束してくれ。結果はどうあれ明日もここに来るって」

僕らは初めてここに集まる約束をした。

僕がそうしないと不安だったからだ。

それに僕の降らせた雪は彼女にとって綺麗な結晶だったのかどうか知りたいという気持ちもあった。

「え？ ……うん。ええよ」

彼女はすこし戸惑ったような表情を見せたが、すぐに頷いた。

「それじゃあ明日。また会おうな」

僕はベンチから立ち上がると足早に公園を去った。

『彼女はきつと来ない』 そう思ったから。

このまま公園にいたら『行くな』って止めてしまいそうだったから。

そして次の日、彼女は来なかった。

第24話 「扉の向こう側」 （澄川正宗・過去編）

皐月と最後に会って6日になる。

情けない話だが、今日も僕は公園へ来てベンチに座っていた。

今にも「ごめん、ごめん。忘れとったわ」とか言っただけでここへ来るように思えた。

既にここについてから5時間を過ぎていた。

僕はゆつくりとベンチから立ち上がると「今日で最後にしよう」と思い公園を後にする。

そして明日もここに来るのだ。独りだということを認めたくないから。

次の日は雨だった。諦めるのには丁度いい。僕は家に居ることにした。

しかし、それがいけなかった。僕は両親に呼ばれ、二人の前に立たされた。

「瑞樹、そろそろ決めてくれないか？」

「……………」

僕にはこういう現実しか待っていない。

「瑞樹、母さんに付いて来るんだしたら今のうちに決めなさい。二学期の初めから転校した方がいいでしょ？」

「おい、瑞樹はお前についていくなんて一言も言っていないじゃないか……！」

両親は口論を始めた。激しくののしりあう二人。

しばらく僕はそれをただ他人事のように見ているだけだった。でも、少しして何かが心にこみ上げてきた。

僕は堪らなくなって雨の中へ飛び出した。

普段、傘も差さずに走る人は傘を忘れた人だけだと思っていた。
でも今僕は雨にうたれるために走っている。

行き先なんてない。はずだった……

しかし、気が付けば公園にいた。そしていつものようにベンチに座る。

おそらく両親は別れた後、独りにならないために“慰安”と言う存在の僕を奪い合ってるだけなんだ。

だったら、僕はもうなんだ？

……どちらかについていく事でなくしたピースは埋まるのだろうか？

ふと皐月の言った事を思い出す。

『あーあ。雪降らんかなあ……』

夏には雪は降らない。夏に降るものそれはどしゃ降りの雨だった。雨は相変わらず降っている。僕には雨音しか聞こえない。

こんなにふらふらなのに……

そばには誰もいないなんて……

独りって厄介だな……

周りの流れに僕だけ取り残されベンチに座っている。

僕の頬を涙だか雨だか分からないモノが流れた。

……情けない。でも、どうにもならない……

俯いていた顔を上げ、雨を顔全体に浴びたその時……雨音とは違う音が僕の耳に入ってきた。

それは不規則だが確かに足音だった。

僕は音のする方向へ目を凝らす。

「なんや……自分に浸つとるのか？ ……アンタらしいな。この力ッコ付け」

忘れたくても忘れられない声。

僕は答える。

「お前こそ一週間も約束をすっぱかしやがって。覚悟はできて——」
彼女の姿が目に入った途端、僕は言葉を失った。

「どうしたん？　せつかく私が会いに来たったのになあ……」

「！！！！——お前！？」

やがて見えてくるシルエットに違和感を覚え、さらに近づくことに分かる実物に僕は驚愕した。

引きずる足。

切り裂かれた服。

そこから見え隠れする無数の痣。

数日前の姿が、そこにはなかった。

僕が自分の姿に驚いている事に気付いたのか皐月は立ち止まった。

「……ははは。やられてもーた……」

「誰に……」

「なあ、瑞樹も一緒に笑ってさ……」

「笑えるかよ……」

彼女はそのまま膝を折った。

だけど、僕は怖くて近づけない。

「お母さんの所に行ったらなあ。意外に暖かく迎えてくれてさあ……」

……お菓子とかお茶とか出してくれたんやんかあ」

髪の中から雫が落ちる。

彼女の口調には幸福感はない。

「でも、なんか“あの人”はよそよそしくて……まあ、何年ぶりかに再会したんやからしょうがないなあ、って思ってたんやんか……」

雨は相変わらず降り続き、雨音に混じりながら彼女の声は途切れ途切れに聞こえてくる。

「そしたら少しして家の前に車が止まってな、凄い人数の男が入ってきて、私を押さえつけるんやんか」

「なっ！？」

「“あの人”……ただ、私を見て『ごめんね、ごめんね』って……」

その時ようやく分かってなあ……『あつ、私、お母さんに売られたんや』って」

俯いた顔からは口元しか伺えない。

その口元とは薄笑いを浮かべていた。

「そんで車に押し込められて、どつか分からん所に連れて行かれたわ。なんでやる？　って思ってたたら、そいつら私の持ってた薬を追ってきた連中やった。自業自得やな」

「——止めるよ」

「それからボコボコにされて、薬打たれて……そんで、そんで……そいつらに……」

「もういい！！　それ以上言うな！！」

僕は彼女に駆け寄り抱きしめた。

こつする事で彼女を慰められたらと思ったから。

ドラマなんかでよくあるシーンだ。僕はそれに倣った。

それしか思いつかなかったから。

しかし——

「嫌っ！！」

彼女は僕を突き飛ばし、自分で両肩を抱き震えた。

「ゴメン。触れられるのが……怖くて……」

「えっ……」

その震え方は尋常ではなかった。

拉致したヤツラのした事の酷さが僕にも伝わった。

「監禁されるとな、時間の経過なんて分からんくなって……違うなあ。こんなこと言いたいんじゃない……それよりもお母さんに見捨てられて、私ホントに独りなんかなあ……もう死んでもええわって思った……」

「臆月……」

「でも……でもな。その時に瑞樹のこと思い出した。そんでアイツ

等の隙を見て、ここまで来たんやんか……」

僕達は辿った経過にこそ違いはあれ、同じだった。

彼女も僕も独りになってここを目指したのだ。

「なあ、瑞樹。私……私……汚れてるなあ。どんどん汚れて……真っ黒や」

「そんなこと——」

「……助けて」

「何言ってるんだ……お前らしくもない。がん——」

僕は『がんばれ』という言葉を読み込んだ。

恐らく言っても意味がない。

僕らはお互いを必要としてここに集まった。

だけど、言葉ではもうどうにもならないし、彼女に触れる事も出来ない。

こんなに間近に居るのに何も出来ない。

僕だって……助けて欲しいんだ……

その時、彼女から出た言葉はものすごく僕の心を揺さぶった。

「もう……私を……殺して」

僕はもう何も出来ないはずだった。

でも、これは彼女から言ってくれた“して欲しいこと”。

扉は少し開かれた。

扉の隙間から漏れる光は妖しく僕を照らす。

そつと近づき、ノブに手をかける。

扉の向こう側にはきつと救いがあるはずだ。

そして僕は扉を開いた。

扉から見えたもの……

それは決して見えないはずの……絆だった。

気付くと僕はナイフを握ってた。

しかし、刃の部分が見えない。

先へと辿っていくと誰かの体に行き着いた。

そのまま上へと目線を辿り見えてきたものは皐月の顔だった。

「それでええ。ありがとうな……」

彼女は目を潤ませ懸命に笑みを作ろうとした。

しかし、痛みからかその顔はすぐに歪んだ。

「はは…… やっぱり、ちよつと…… 痛いかなあ……」

彼女は手を伸ばし僕の頬を包んだ。

そして僕はナイフを抜き、もう一度刺した。

頬を包んでいた手は地面へと落ちる。

刺しては抜き刺しては抜く。その動作は何度も続いた。

何も考えていなかった。ただ繰り返すだけ。

自分でも分からないくらい繰り返し再び腕を振り上げた時、彼女が初めて会った日に言った言葉思い出した。

『心中しよか』

ずいぶん前のことだけど、僕は心の中で返事をした。

『うん』

最後の仕上げに自分のノドに向かってナイフを向け、一気に突き刺そうと振り上げた

しかし――

「――っ!？」

「そのぐらいしとけ。今病院へ連れて行くから」

誰かが腕を掴んで僕の腕は寸前で止められていた。

僕の腕をつかんだ主を見る。

背の高い大人の男だった。

そして、この人もまた傘をさしていなかった。

「まったく…… やつかいなことだ」

そう言いながらため息をついた男は彼女を抱き上げた。

雨は既にやんでいる。

これが真田先生との出会いだった。

第25話 「望む事」 （澄川正宗・過去編）

男は僕からナイフを奪うと話かけてきた。

「今から病院に運ぶ。近くにオレの車がある。そこまでお前が運ぶんだ」

「……あんたは？」

「そんなことよりも、速く!!」

僕を急かす男に戸惑ったが、これだけは言えた。

「皐月はそれを望んでない」

「はあ? ……ふう」

僕の言葉を聞いた男はため息をついた。

「だったら、お前はどうかんだ？」

「……皐月が望むようにしたい」

「残念ながら彼女は自分で意思表示できる状態じゃない。だから、お前はどうしたい？」

考えてもいなかった。

僕は皐月が望むようにしてあげただけだから。

どうしたいんだろう……何も考えられなかった。

「わからない」

「だったら運べ。お前がしなくてもオレがするぞ。オレが彼女に触れても良いのか？」

「……嫌だ」

僕はすぐに皐月を背負う事にした。

雨に濡れていたせいもあって彼女は予想以上に重かった。

病院に着くと皐月はすぐに運ばれた。

僕は手術中というランプをただ眺めていた。

「ほら、飲めよ」

気付くと男が缶コーヒーを差し出していた。

「……………え？」

「どうした？毒なんか入ってないぞ」

僕は缶コーヒーを受け取った。冷たいコーヒーがノドを通る。

そして僕は次第に落ち着きを取り戻してきた。

すると自分の姿が見えてきた、体中に皐月の返り血を浴びて真っ赤に染まっている！

襲ってくる恐怖、後悔、悲しみ……

持っている缶が震えだした。この震えは自分では止められない。

しばらく、どちらが喋るということなく時間が流れる。

どれぐらい経ったのか分からないけど、男は口を開いた。

「話してみるよ。自分ひとりで抱えるっていうのは結構辛いものだ」

「……………」

「幸いオレは赤の他人だ。話を聞いたところでどうってことない」

「くっ……………」

僕は何故だか話す気になった。

きつとこの人の言う通り、独りで抱えるのが辛かったのだろう。

ゆっくり、ゆっくり、僕は思い出を噛締めるように話した。

全てを聞き終っても男は暫く何も言わなかった。

「怖いかな？」

男はこつちを見ずに尋ねる。

僕はそれに答えられなかった。

「大抵、最初の殺しつてのはそんなもんだ……………まあ、例外もいるが」

僕は男を見た。その言葉はどういう意味なんだ？

視線を感じた男は僕とは反対の方角を向き、話続けた。

「オレに無いものをお前はもってる……………オレにはあれだけ直向きに人を殺せない。お前には素質がある。」

「素質？」

話が読めない。僕はどう答えて言い分から黙っていた。

「お前、殺しを仕事にするつもりはないか？」

「！！」

その時、手術室の扉が開き彼女が運ばれる。

僕は男に連れられ病院の8階までいく。

この病院には何度か来たことがあったが、8階へ行くのは初めてだった。

「あの階は特別な人間が入院する場所だ」

男は僕に説明してくれた。

8階に着くと、既に彼女はガラス張りの病室の中にいた。

どうやら皐月は一命を取り止めたみたいだった。

しばらく僕はガラス越しの彼女を眺めた。

そこで安心している僕がいる。

自分で刺したにもかかわらず……少し自分が嫌になった。

「良かったな、と言って良いのかな？ ……で？ これからどうするんだ？」

いつの間にか男は僕の隣にいた。

男の問いの答えはすでに出ている。

「警察に行きます」

それを聞いた男は腕組みをして、一呼吸置いた。

「ほう、いい心がけだ……だが、彼女はどうする？ 誰かに追われているんじゃないのか？ それに頼れる身寄りもないんだろ？」

「それは……」

「凶星か……まあ、心配するな。この階なら一般の人間は入れないから彼女を追ってるヤツ等からも逃げられる。オレが頼めばこの階で入院させてくれるはずだ。この病院には少し顔が利くんでは」

「本当ですか！？」

「ただし。ここは病院にもリスクがともなう階だから金がかかる。お前が真面目に働いたところで払いきれる額じゃない」

「あ……」

世の中はそんなに甘くはなかった。

「だから、さっきの話だ」

男の眼差しは鋭く僕を見据えた。

「お前、殺しを仕事にするつもりはないか？」

「あなたは一体何者なんですか？」

「……お前の先輩だと言っておこう」

目の前にいる人はただの人ではなかった。

もちろん、僕が彼女を刺した現場を見ても物怖じせずに病院へ連れてくる姿を見れば、普通の人なはずは無いのだが……

「でも僕は殺しなんて……」

「さっきも言っただろう、お前には素質がある。大丈夫だ」

男は僕の肩を掴んだ。

「お前だけじゃないのか？ 彼女を救ってやれるのは……！」

視界に入る皐月に目をやる。

人工呼吸器をつけた彼女は静かに眠っていた。

そうだ。皐月を救うのは僕しかない。

「……はい」

僕は静かに頷いた。

でも、なぜ僕は彼女を救いのだろう？

好きだから？

違う気がする……それが当てはまるのは彼女を刺した時だけな気がする。

好きだから彼女のあんな姿は見たくなかったから……

彼女もそれを望んだから……やっぱり、わからない。

だけど、後戻りできるはずも無い。

もう僕は人を刺してしまったのだから。

第26話 「動き始めた心」 （澄川正宗・過去編）

人を殺すことでお金を稼ぐ事になった僕は真田先生（当時は僕の担任ではなかったけど）の指示に従い、初めての仕事に着手することになった。

殺す相手。それは有名人でも政治家でも無い……普通の人。

依頼者の不倫相手。小口の殺し。だが、立派な殺人。

手にはナイフ。

臯月との思い出のナイフ。

これが僕の商売道具。

あらかじめ、個人データは会社によって用意されていた。

僕はそれに従って、殺すべき最適な時間を狙って殺すだけのこと。それだけの事だ……と思っていた。

夜。僕は息を潜めてしゃがんでいた。

指定された通りの待ち伏せ場所待つ。

しばらくすると足音が聞こえ、ターゲットが近づいたことを知った。

慎重に間合いを計り、ターゲットが真横に来た瞬間、僕は一気に飛び出し、相手に飛びつく。

勢いのまま相手を倒し、馬乗りになるとナイフを振り上げる。

後はそのままナイフを振り下ろせばいいだけだった。

しかし、僕は見てしまった。

怯えるターゲットの目。震える息遣い。

そして何よりも相手の体温が僕へと伝わった。

思わず動きが止まる。

生のやり取りがそこにはあった。

その一瞬を相手は見逃さない。

固まったままの僕を手で撥ね退け、僕は簡単に飛ばされ、逃げられてしまった。

逃げるターゲットを僕は追いかけてくても追いかけれなかった。足が竦んでいたのだ。

一人残された僕はしばらく、呼吸もマトモに出来ず、ただ震えていた。

「なぜ殺さなかった」

声の方向に振り返ると、真田先生が立っていた。

「あつ……」

「おかげでオレがやる羽目になった」

「……やっぱり、出来ません」

僕は真田先生の顔から視線を降ろした。

見えてきたものはさっきのターゲットだった。

すでに絶命している。その体をさも獲物のように服の襟首を掴む真田先生がいた。

「何故だ？ この前は懸命にナイフを使ってたじゃないか」

「この前は臍月だったから。あの子だからやったんです。臍月を傷つける事が出来るのは僕だけだから」

「なるほどね……で？ 好きなのか？」

「わかりません。でも、大切な人です」

「大切な人なら刺せる……というのか？」

「わかりません……」

それ以上僕が答えられないでいると、真田先生は服のポケットからタバコを取り出し、吸い始めた。

「なるほど、赤の他人は殺せない……か。だが、金はどうやって稼ぐ？ 前も言ったが中学生のお前が払える額じゃないぞ」

「それは……」

どうしようもない無力感が僕を襲う。何も出来ない自分が齒がゆかった。

そのうちに大型の車が僕らの目の前に横付けされ、ドアが開くと数人の男が出てきて、死んだターゲットを回収していく。

再び僕らは2人きりになった。

「実はな、お前が人を殺せるなんて思っていなかった」

真田先生はタバコを地面に捨て靴の踵でもみ消す。

「オレが気に入ったのは愛するものを殺すお前の姿なんだからな」

「そんな……」

「まあ、最後まで聞け。オレに1つ提案がある」

「提案？」

「ああ。……皐月って子をまた殺してみないか？」

「……」

「なあに簡単なことだ。お前に暗示を掛けるんだ。催眠術みたいなものだ。ターゲットが皆、皐月に見えるように暗示すれば……殺せるだろ？」

「……そんな事ができるんですか？」

僕は半信半疑だった。

「まあ、暗示をかける事に関しては人を殺すために役立つ可能性のあるものは何でも覚えたから問題は無い。問題なのは、ただターゲットが皐月に見えたところで殺すという行為は恐らく、単純な暗示では無理だということだ。本能が邪魔をするからな」

「……」

「だが、お前で無いもう1つのお前がやるとしたらどうだ？」

「さっきの話を考えれば……暗示でもう1つの僕を作るんですか？」

「簡単に言えばそうだ」

随分突飛な提案だった。

「人を殺すための人格を作る。その引き金はお前が相手に好意を持

つこと」

もう一度あの感覚を味わえるというのだろうか？

だとしたら僕は……

「どうだ？ 面白いだろ？」

僕はこれに乗るしかないようだ。

皐月を生かすために。

だから僕からも提案することにした。

「だったら、あと人格を二人に増やしてもらえませんか？」

「どういうことだ？」

「好きか嫌いの判断をするのは僕じゃないほうがいい。僕だと感情がコントロールできてしまう。だから……ただ機械的に好きか嫌いを判断する人格が欲しいんです。それと、ターゲットを好きになるためには彼らに接触しなくちゃならない。その為の人懐っこい性格を有する人格。この二つです」

「ほう、なかなか良い事言うじゃないか。気に入った。それで行く。それでお前は どうする？」

「僕は……居なくてもいいでしょう」

こうして刹那・正宗・光彦が誕生した。

刹那はあの時の僕が表れ、殺すことに特化した人格。

正宗は余計な感情が入らないよう無表情、無感動な人格。

光彦は楽しかった皐月との思い出をベースに人格が創られた。

暗示を受けてからは人を殺せるようになった。

人を殺すときはいつもあの時のまま。

雨の何も出来ない自分がいて、死ぬことを望んだ皐月がいる。

その後、僕は一人で暮らすことを選択した。

両親どちらからの束縛は受けない。

もう僕にとって両親はどうでも良い存在となっていた。

高校生になった僕は真田先生のいる「株式会社Threadw
inter」が経営す学校へ入学した。

いつしか僕は普通の生活も正宗に任せることが多くなり、最終的
には完全に僕は消えた。

僕はもう表には出たくない。

後は他の人格達に任せ、僕は僕の思い出の中で生きれば良い。

こうして昨日も今日も明日も皐月のために人を殺す日々が続くは
ずだった。

浅野美世と上杉亜衣があらわれるまでは。

第27話 「大切な人がいるから」 （澄川正宗・現在編）

うつすらと日の光りが僕を照らし始める。山中だからか木の香りが漂ってきた。

日の出というだけで辺りの香りが変わってくる不思議だ。

朝は無意味な希望を運んでくるものなのだ。

僕は解決しない問題と思い出に浸っているだけで朝になってしまった。

「はぁ……」

自然にため息が漏れてくる。

とうとう浅野は出て行ったきり帰ってこなかった。

探しに行ったほうが良いのだろうか？

いや、違うな。……大体、なぜ僕が探しにいかなくちゃならないんだ？

すると、ログハウスから誰かが外へ出てくる気配がした。

よく理由もわからず慌てて僕は寝た振りをする。

「ねえ、澄川」

背中越しに聞こえた声の主は上杉亜衣だった。

彼女は僕を澄川と呼ぶ。

そうだ。僕は今、澄川と呼ばれている存在なんだ。

「美世知らない？ 見たらないんだけど」

「うっうん……眠いよお……」

「その口調は光彦なの？」

その通り。明るいだけの存在、光彦のはずだ。

「僕わかなあゝい」

演じるだけ。それが僕に与えられた役目。

「やっぱり光彦か。まあ、アンタでも良いや。美世を探してきて」

光彦は浅野美世が大好きなんだ。
だから逆らうはずがない。

『うん、わかったよ』って言うだけだ。

——でも。

「……っ」

「ん？ どうしたの光彦？」

演じているだけなのだから逆らうはずも無い。

だけど……なぜ言葉が出てこないのだろう。

何の得も無いのに。

——皐月の事を思い出したからだろうか？

「……いやだ」

「はあ？」

「いやだよ！！」

「ちよつと、アンタ何言つて——」

「探したくないっ！！ 彼女が勝手に出て行ったんじゃないか！！」

気づけば僕は寝袋から飛び出して上杉の前で叫んだ。

少し、自分が判らなくなる。

——何故僕の意識がまだいるんだ！？

僕の頭は一気に混乱する。

なぜ！？

どうして！？

そんな馬鹿な！？

なぜ意識の底に逃げられない！？

こちらの状況とは関係なく、血相を変えた上杉亜衣は僕へ詰めよってきた。

「『勝手に出て行った』？ それってどういう事？ 説明してくれる？」

「知らない」

僕は藤原瑞樹であるべきではない。

今は澄川正宗の別人格、光彦のはずじゃないか！

「ウソつかないですよ。美世はどこへ行ったの！！」

「知らないよ！！勝手に山の中に入って行ったんだから！！」

僕は訳が分からなくなり、子供のようにイヤイヤと頭を左右に振る。

この混乱具合が幸いして、光彦であり続けることができた。

しばらく僕の様子を啞然としてみていた上杉は急に眉間にシワを寄せると僕の胸倉を掴んだ。

「つ・ま・り……アンタはそれをみすみす見逃したってわけだ！！」

「……知らない」

「探しに行くよ」

「行かない」

「今はふざけてる場合じゃないのは分かるでしょ？」

「嫌だ！嫌だ！嫌だ！」

「馬鹿野郎っ！！」

彼女の叫び声が聞こえた次の瞬間、頬にジンワリと広がるような痛みを感じた。

僕の動きは一瞬の内にして止まる。

上杉はしばらくこちらを睨みつけた。僕は頬をさすりながら視線を反らす。

する彼女はため息をつき、殴った手を振りながら僕に言った。

「……もついい。有希と一緒に探すから。アンタはそうやって勝手にしてれば」

彼女は捨て台詞を残し、ログハウスへ戻っていく。

数分して吉川有希を連れて出て行った。

吉田有希が何度も振り返って僕を見ていく。

それだけで非難されているかのような気分になった。

一人取り残された僕は少し不安になり足元がおぼつかない感覚を

味わう。

自分でも無意味な意地を張っているのは分かっていた。でも、僕は明らかに浅野美世を意識し始めている。

真田先生の暗示が効かないのその証拠だ。

これは良くない。好きではないにしろ、意識することは感情を揺さぶられているということだ。

僕は臯月を忘れるわけにはいかないんだ……

何をするでもなく時間は過ぎていった。

あっという間に日も沈みかけ、辺りの森はすでに薄暗くなっている。

今頃なら帰る時間だけど僕らはまだここにいた。

正確には今ここには僕しか居ないのだが。

二人は美世を探しに行つてまだもどらない。

僕はうずくまりながら、まだ悩んでいた。

なぜ彼女が僕に好意をよせ、殺してくれといったのか？

殺してくれといった割には刹那として（彼女が好きでもないのに

刹那は現れない）僕がナイフを見た途端、怯えていた。

じゃあ、あんな夜中に僕の元へ来て何をして欲しかったのだろう。

……もしかして。ある可能性に思い至ったからだ。

美世も僕に助けを求めていたのだろうか？

だとしたら僕は……それを振りほどいたことになる。

——仕方ないじゃないか。僕は臯月のことで精一杯なのだから……

…これでいい。

でも、これって臯月との再会の時と同じじゃないか？

「何処探してもいないし。ねえ、亜衣。警察に連絡したほうがいいみたい」

「まずいね。美世の体の事を考えたら時間が無い。もし、山の中で遭難でもしているなら体力の消耗も激しいし……」

不意に声が僕の耳に入ってきた。横を向くと既に二人は帰っていた。

僕が顔を上げると二人と目があう。

気まずい空気が流れ、お互いに視線を外すことができない。

すると、やはりと言うか上杉が僕に近づいてきた。

「澄川、本当のことを教えて。美世が何処に行ったか知らないの？」

僕は無言で首を振った。

光彦にも正宗にもなっていない以上、喋るのは得策ではない。

「美世の体の事は知ってるでしょ？ あの子は今じゃあ三日おきに薬の投与を行わないと大変なことになるの」

なんだよそれ、僕には関係ないことだろ？

「だから、この旅行にも最初は両親に反対されたの。でも、美世は澄川と一緒に行きたいからって……わかるでしょ？」

わかってるさ。だから重荷だったんだ。

「あの子は危険を承知でここへ来てるの……大袈裟って言うかもしれないけど」

いい加減やめてくれないか？

僕に罪悪感を与えたくても無駄だ！

「その美世がココからいなくなるって言う事は――」

「彼女は死ぬつもりなんだろ？」

僕は上杉の言葉に被せる様に答えてやる。

すると上杉は黙り込んでしまった。それは言わなくても分かる肯定だった。

木々の間から夕日が差込み、僕らは赤く染まっていた。

気づけば上杉の握った拳が震えている。

また殴ろうってことか？

だが、僕の予想に反して上杉は手ではなく、口を動かした。

「美世が澄川に好きになってもらおうと努力していたのは知っているでしょ？」

「だから？」

「え？」

「だから、お前も好きになれというのか？」

僕の言葉に上杉はたじろいだ。

彼女は視線を少し下げて、震わせていた拳を口元に持っていく。

「そうじゃないけど……少しぐらい心配してやってもいいじゃないってこと」

「心配か……ものは言い様だな」

「——っ!？」

僕と上杉は距離を置いてにらみ合った。

本当に無駄な時間だ。

前進も後退もない中途半端な意地の張り合い。

「もういい、時間の無駄だし。有希は私と一緒に警察に連絡をしに行く」

彼女はいつの間にか瞳に沢山涙をためていた。

僕はその涙に少したじろいだ。

こんな口喧嘩に勝って嬉しいのか？ 僕は。

「有希、行くよ」

「う、うん……」

上杉に手を引かれて連れて行かれる吉川と目があってしまう。

僕はバツが悪くなつてすぐに横を向いてしまった。

「ねえ、澄川君」

「有希、もう良いって」

「ちよつと待ってよ。私は何も話してないんだから」

吉川は上杉の腕を振り切ると、僕の前へと歩み寄った。

「澄川君、あの子と付き合ってるなんてウソでしょ？」

「えっ!？」

予想もしなかった質問に僕は啞然とする。

吉川は微笑みながら、『まっ、良いか別に』と言って、さらに僕へ近づいた。

「どうせ美世が何かワガママ言っただけで喧嘩でもしたんでしょ？」

「ちよつと、有希。今更何を……」

上杉も僕も彼女が何を言いたいのかいまいち分からなかった。

すると急に吉川は大声を出した。

「はっ、いい気味！ 自分だけ幸せになれると思ったら大間違い！」

「有希っ！！」

「亜衣、黙ってて。これ、私の偽らざる気持ちだから」

この期に及んで何を言っているんだ？

行方不明の友達をそこまでよく言えたもんだな。

僕はわずかに眉をひそめてしまった。

「あれ？ 澄川君。今、ちよつと嫌そうな顔しなかった？ 変だね。

美世を探しに行かなかったアナタならわかると思っただのに……」

僕は彼女の一言に何も言えなくなってしまった。

すると吉川は胸の前で一つ手を叩くと、微笑みながら僕を見上げる。

「はい。ここまでで私の妬んだ話は終わり」

相変らず笑みを絶やさず、僕に接する吉川。

たしか告白のときもこんな笑顔だったような気がする。

「じゃあ、ここからは未来の話ね」

「ふうっ」と一息つくと同時に吉川は僕の胸倉を掴み上げた。

「澄川君とケンカしちゃったことと、出て行って戻ってこないことは別だから」

ねじり上げながら彼女の拳が胸倉を掴み、僕の顎を突いてくる。

彼女は歯を食いしばりながら、唸るように言葉を吐き出した。

「てめえ、ふざけんなよ」

「ええっ！？ ちよつ、有希？」

上杉が急いで駆け寄り、僕と吉川を引き離した。

羽交い絞めにされた吉川は僕に向かってさらに叫ぶ。

「アンタが探さなくたって私はぶっ倒れるまで美世を探してやる！」

「有希……」

「だって、あの子は私の人生の大切な一部だから……」

さっきまでの激情がウソのように今度は下を向き、嗚咽を漏らし始めた。

きつと疲れて情緒不安定になっているのだろう。

「澄川君にはそんな人いる？ いたらわかるよね？ 喪失感や悲し

さが……」

「有希、分かったから。ちょっと休もう」

結局、吉川は上杉にログハウスまで連れて行かれた。

僕はその後ろ姿を見つめながら呟く。

「……わかるよ。大切な人がいるから」

しばらくして上杉が外へ出てくる。

僕を一瞥してどこかを行こうとしたが、立ち止まりつて戻ってきた。

「で？ アンタはどうするの？ やっぱりこのまま何もしない訳？」

上杉が僕に詰め寄る。

どうすればいいのだろうか？

いや。

そんなことは考えなくても分かっていた。

「どうせ今から警察に連絡しても搜索は明日からになるはず。だからそれまでは僕が探す。君たちは日中さんさん探して疲れているだろうから」

「……わかったよ。頼んだ」

上杉は僕の返事を聞くと頷いた。

「それにしても驚いたな。吉川さんがあんなに取り乱すなんて」

「私達はね。なんだかんだ言って最後には友情が勝つんだよ。もう少し大人になると違うんだろうけどね」

そう言った上杉はなんだか誇らしげな顔をしていた。

そして僕は深呼吸をする。

大丈夫だ。皐月との思い出はたくさんある。それを信じて行動しよう。

恐れる事は何も無い。想いは変わらない。

それに美世を殺すのは刹那の仕事だ。自殺なんかさせない。

僕が歩き出したその時、上杉が呼び止める。

「澄川、何かいつもと雰囲気違うね。今は光彦なの正宗なの？ それとも刹那？」

「それは……」

答えは決まっていた。

「僕は僕だ」

心の弾みを利用して僕は走り出した。

「ねえ、亜衣。夜なんかを探しに行ってホントに大丈夫なの？ 澄

川君が迷子になったらどうするの？」

「大丈夫、大丈夫。有希は心配性だね。」

「でも……」

「どんな心境の変化があったか知らないけどアイツから行くって言ったんだから気にしないの。さっ、私たちも迷子にならない程度に近くを探そ」

「……うん」

——とはいえ。

夜に探そうなんて無謀だったかもしれない。
こっちの方が迷子になりそうだ。なんとか草木を分けて進んでいく。

少し心配になるけど、浅野美世の体調は確実に削られている。じつとはしてられない。

懐中電灯を消し、声を出さずに静かに探す。

僕の声を聞けば彼女は逃げるかもしれない。

こんな効率の悪い探し方をしている自分がバカバカしかった。せめてもの救いは雨が降ってない事ぐらい。

しかし、こつも暗いと余計な事まで思い出してしまう。

それからどれぐらい時間が経ったのだろうか？

しばらく暗闇での搜索が続いた。

やっぱり明るい内に探しておけば良かったか……という後悔が頭を過ぎった瞬間、少し先で物音を聞いた。

「!？」

僕は慌てて身を潜める。

そしてゆっくり目標へと近づく。

「いるんだろ？ 出てきたらどうだ？」

僕はゆっくり歩み寄った。

と、同時に草むらが一気に揺れ、黒い塊が飛び出してくる。

「えっ!？」

僕はとっさに身構えたけど、出てきたのは動物だった。

「なんだ……紛らわしい」

僕はホッとして違う方向へ探しに行こうとしたその時、再び同じ方向から物音が。

今度はさつきと違い質量が伴った音だった。

誰がいる！！

すぐさま僕は音のする方向へ走り出した。

草木を跳ね飛ばし、少しひらけた場所へたどり着く。

「あっ……」

そこで見たのは……冷や汗を流しながら倒れている美世だった。

「まったく、やっかいなことだ」

僕は自然と安堵のため息が漏れた。

第28話 「人の感情を馬鹿にするな」 （澄川正宗・現在編）

浅野を見つけたことで少し安心したものの、彼女が倒れている事実に僕は慌てた。

「おい、大丈夫か？」

彼女の頬を軽く叩いてみる。

しかし、浅野は返事する余裕は無いように思えた。少し呻いて膝を抱くように身を縮める。

それを見た僕はゆっくり彼女を起こし背負った。

彼女は思ったよりも軽く驚く。

臍月を背負ったあの時とは大違いだった。

浅野にはまだ意識があるからだろう。

「嫌!!」

背負って少し歩くと彼女は手足を動かし暴れたした。

僕は手を離してしまい、浅野は地面に落ちる。

すると彼女は地面にへたり込んだ。

その後、よろよると立ち上がる。

「……近寄らないで」

僕を睨みつけるその瞳は空ろで力はなかった。

気まずい感情も手伝ったのだろっ、そんな彼女に僕はなぜか冷たく接してしまう。

「だったら、自分で歩けば良い。帰ろう」

すると浅野は僕を睨んだままで、少し俯く。

まるで拗ねてる子供のようだ。

「帰らない。私は……ここで死ぬ」

「戯言なら後でいくらでも聞いてやる。早く帰ろう、時間が無い」

僕は一つため息をつく浅野に近づく。

彼女の体を考えたら、力づくでもいいから連れて帰ることにした。

強引に腕を掴んで引つ張る。

「ちよっ、ちよっと！」

「上杉や吉川が心配してる」

「えっ……」

僕は彼女を無理やり立たせ、背を向けて乗れとジエスチャーする。しばらく躊躇したが、観念したのか彼女は僕の背中に身を預けた。

そして自分が辿った山道を淡々と進む。

急ぎながら、それでいて慎重に運ぶ。

ふと、運びながら思う。

“なんで僕は浅野を助けようとしているんだ？”

“殺してください” 浅野はそう僕に言っただじやないか？

このまま放置しておけば死ぬんじゃないか？

しかし、すぐに否定する。

……いや、それは彼女が望んだ事じゃない。

“私を……好きになってください”

それが彼女の条件だった。

さらに別の思いが過ぎる。

何で僕はいつものように好きになって浅野を殺せないのだろうか？

「うっ……うっ……」

背中越しに嗚咽が漏れる声が聞こえ、今まで僕に預けっぱなしだった体が少し強張った。

浅野は涙声で僕に話しかける。

「なぜ？……なんで私を助けようとするの？」

「……それは」

今でも答えが出ない問いを浅野の口から投げかけられ、僕は戸惑った。

——そして、一瞬の隙が出来た。

再び浅野は暴れ、僕を突き飛ばすように背中から飛びのく。

僕は前のめりに倒れ、地面に手をついてしまう。

すぐに後ろを向いたが、すでに彼女の姿はない。慌てて、周りを見渡す。

あの体ではそう遠くへはいけない。

僕は彼女の姿を見付けると急いで近づく。

しかし、ある程度近づくと僕は彼女と距離を取る事になった。

「それ以上来ないで。来たら……飛び降ります」

僕は焦点を彼女の奥へと合わせる。

浅野の向こう側に広がっていたもの……それは崖だった。

彼女は肩を揺らせて、荒い息を繰り返している。

かなり体がこたえているに違いなかった。

僕はなんだかため息がそうだった。

「んなこと言っても、浅野はこのままの状態でも死ぬじゃないか」

「それで良いんです。私は……ここで死にます」

浅野は震える足を少しずつ崖に近づける。

彼女の額にはうっすらと冷や汗が滲んでいた。

さらに唇はわずかに震えている。

「震えてるじゃないか。死ぬなんて嘘つくなよ」

「嘘じゃないです」

彼女の子供じみた態度に僕はなんだか腹が立ってきた。

「だったら何故、すぐにそこから飛び降りなかったんだ？」

「それは……」

「ほら、答えられないんだろ？ もついい加減に——」

「私なんか放っておいてください！ 私にはもう失う事しか出来ないんだから！」

彼女は感情が一気に高ぶったのか大声を上げた。

それに反応して僕も力ツとなってしまう。

特に“失う”その言葉に自然に僕は反応した。

「じゃあ聞くが、君は実際に何を失うんだ？」

「え？」

「夢か？ 家族？ 友達？ それとも命？」

「何を言って——」

「答えるよ」

「澄川君？」

自分でも何故こんなこと言っただかよく分からなかった。

本当、浅野に会ってから分からない事だらけだ。

自分のペースは乱されるし、かけてもらった暗示は解けるし、滅茶苦茶だ。

だからなのか僕は素直に疑問を吐き出してしまっ

「教えて欲しいんだ。僕は多くのモノを失った人を知ってる」

もちろん臯月を指しての言葉だった。

僕から見れば、浅野は体にハンデを抱えている以外満たされているじゃないか。

彼女を心配してくれている親や友達もいる。追って来る悪奴等もない。

なによりこうして自由に外を歩いている。

「その人に比べて君はどう考えても何も失っていない」

「私が甘えているとでも言いたいのですか？」

「別に……僕が言いたいのはそんな事じゃない」

なんだか論点がずれてきた気がしないでもない。

上杉だ吉川だとか、ひいては臯月のことを引っ張り出してはいるが、結局のところ僕が知りたいのはあくまでも自分自身のことだった。

今現在、浅野を殺さず助けようとしている。

その答えは行動してみることで判ると思っていた。

ついさっきまでは……

死ぬと言いいながら何かを僕に訴えかける浅野。

それを疎ましいと思いいながらも付き合っている僕。

——何となく判った気がする。

そうか。

そうなんだな。

僕も彼女はきつと……

もう何も聞く必要が無くなった。

今の浅野を見て分かった。

それは実に単純で馬鹿げた事だった

「浅野、もうこんなこと止めよう」

「……は？」

「だってさ、ホントは僕のことなんて好きじゃないだろ？」

「……は？」

「判ってるんだろ？」

「何がですか？」

まだ気づいていないのか？

それとも気づかない振りをしているのか？

もう判っているだろ、僕も君もきつと好きでたまらないんだよ。

「浅野は生きてるっていう現実が好きなんだよ」

「——っ!？」

分かった事。

それは皐月にしろ浅野にしろ……僕にしても……

ホントは自分を取り巻く世界全てを肯定したかったんだ。

でも、それが出来なくて。

否定して、拒絶して。

素直に“生き続けたい”って言えなくて……

だから浅野には言っただけ。

生きる事を肯定して欲しい。

眠り続けている皐月と人を傷つけすぎた僕には、もう出来ないから。

それが僕の望む事だった。

「私……私……どうして……ああ……」

浅野の瞳から涙がこぼれた。必死で両手で拭おうとするけど、涙は大粒となり頬を伝っていく。

僕はゆっくり浅野へ近づいた。

「さあ、帰ろう」

差し伸べた僕の手を浅野はしばらく見つめていた。

やがて、涙をぬぐうのを止め、両手で僕の手を掴んだ。

「うん……」

握り締めた手は力がこもってなかった。体はもう限界らしい。

僕は再び彼女を背負うと山のふもとへと急いだ。

背中へはさつきよりも重みを感じることが出来た。

しつかりと浅野が僕に身を預けてくれた証拠だった。

キャンプ場に戻ると多くの人が集まっていた。上杉たちが連絡したのだろう。

浅野を背負った僕を見つけると、あらかじめ呼ばれていた救急車へ促され、病院へ連れていかれた。

僕は行くつもりは無かったのだが、成り行き上僕も病院へ向かう事になった。

病院へ着くとすぐさま薬の投与が行われていた。

しばらくその様子を眺めていたが、浅野の両親が駆けつけたところで僕は交代するように病室から出た。

薄暗く誰もいない受付ロビーに行くと適当な椅子に腰掛けた。

「澄川!!」

呼ばれた声に振り向くと、そこには上杉が立っていた。

「美世は何とか大丈夫みたい。まあ、一日で見つかったのは運が良かったよ。ありがとう」

「別に僕はたいした事はしていない」

「そりゃ、そうだ——」

その直後、乾いた音がして、僕の頬に痛みが走った。

「ム力つく。全部、お前のせいでこうなったんだから」

「……否定はしない」

少しの沈黙の後、上杉はポツリと言った。

「何で好きでもないのに美世にキスなんかしたの？」

「知ってたのか!？」

この言葉を受けた瞬間、上杉は僕の胸倉を掴んだ。

「答えになつてねえんだよ! あの子がキスぐらいなんとも思わな
いような子だとも思ってたのか!！」

「いや……」

僕は答えることが出来なかった。

「人の感情を馬鹿にするんじゃないよ!!」

「してない!!」

「っ!？」

瞬間的な感情が僕を怒鳴らせ、自分で自分の声に驚いてしまった。
しかし、そのお陰で気付いてしまった。

僕はもう戻れないのだ。

「馬鹿にしてたら……僕は出てこない」

「何のこと？」

「もういい」

三つの人格に隠れ、心の奥にいたはずの僕。
もう表に出ることが無いと思っていた自分。

その僕を引っ張り出したのは浅野とのキスだった。

彼女は僕の「臆月との思い出で無かったもの」を補完したのだ。
確実に僕の心は動き始めていた。

第29話 「夏のウサギは考えない」 （上杉亜衣編）

私と姉は常に対角線上に居る。

姉の黒く長い艶のある髪を見て私は髪を染め、短くした。姉が女らしいと言われれば、私は男っぽく見えるようにした。

姉は私にとつての正解を示してくれる羅針盤だ。彼女の反対を行けばそれで大丈夫。

そんな姉と距離を取ってからかなりの時間が経った……

今から一週間ほど前、私は美世達とキャンプへ行くことになったので、着替え等の準備をするために家へ帰った。

3ヶ月ぶりの帰宅。なるべく誰もいない時間を選んだ。「用意をしたらすぐ帰ろう」そう心に決めていた。帰るって言っても澄川の家なんだけど……

何の変哲も無い木造二階建ての家。それが私にとってはとてつもなく大きく見えた。

玄関のドアノブを握ると鍵がかかっていた。私はホッとして合鍵を取り出し玄関を開ける。

あまり生活感が無い静かな家。私は他の部屋を覗くこともなく真っ先に2階の自分の部屋へ向かった。

自分の部屋に入る。

普通、3ヶ月も放置した部屋は埃っぽくて居心地は良くないのだけど、そういう感じは受けなかった。きっと姉が定期的に掃除や換気をしてきているのだろう。

私はその辺にあったスポーツバッグを手に取ると、色々とモノを詰め込んだ。

昔は自分で服の場所分からなかったので、姉に聞いて出してもらっていた。

でも、今は分からないなりにテキパキと自分でやっている。姉から離れて私も変わったということだろう。

喜ばしい事じゃない。

……本当に？

「亜衣！ 帰ってきたの！？」

「！？」

聞き覚えのある声に私はあからさまに嫌悪感を出す。

「何？ 帰ってきたら悪いわけ？」

「そういう訳じゃないけど……」

「じゃあどういう訳？」

「あ……」

「そうやって都合が悪いとすぐ黙る。変わってないね、お姉ちゃん」
私の言葉に姉は黙ったままだ。

そんな姉を私は無視してバッグに荷物を詰める。

姉はどうして良いか分からないのかただ私の姿を眺めていた。

やがて、痺れを切らしたのか姉は私に話しかけた。

「亜衣、ちゃんとご飯食べてる？」

「ご心配なく」

「学校へは行ってる？」

「当たり前でしょ」

「お友達にご迷惑を……」

「五月蠅い！！ 今ここ居るんだから大丈夫に決まってるだろう！！」

すると姉は凄く悲しそうな目をした。

「私は亜衣のことが心配で……」

「何？ 心配だったら何でも聞いていいわけ？ 保護者面するのもいい加減にしろよ！！」

「ごめんなさい……」

私はなるべく考えないようにした。
あらかた準備を終えた私はバッグのジッパーを閉めた。
後はそのままこの家を出れば完了する。

そう思った時、姉が話しかけてきた。
もちろん無視すればいいだけの話。

「良かったら、夕食食べていかない？ 今日^{もとき}は元樹さんも早く帰ってくるみたいだし。少し会っていけば……」

「——っ」

『少し会っていけば』その言葉に私は無視し続けることが出来なくなつた。

「よくそんな事が言えるね」

「え？」

「自分の夫を寝取つた相手に向かつて『少し会っていけば？』なかなか面白い冗談だね。一切笑えないけど」

「……」

すると姉は下唇を噛締め下を向いた。

「そうやって耐える自分に酔ってんじゃないの？ 悲劇のヒロイン？ 目出度いわね」

ここで初めて姉は睨むような目つきで私を見る。

その瞳にはハッキリと憎しみの色が付いていた。

私は少し……ほんの少し悲しくなつた。

ホントはこんな事言いたくない。だから、私は家を出たんだ。

なんで私はいつもこうなんだろう……嫌になる。

私はそれ以上何も言わずに家を出た。

ほんの少しの悲しい気持ちは私の中で拡大を遂げ、凄く泣きたい気分だつた。

きつと夜だつたら泣いてたと思う。

この悲しみは何処から来るんだろう……それはきつと嫉妬だ。
早足で澄川の家に戻る。

玄関を開けるとそこには美世と澄川が居た。

「あっ、お帰りー！……亜衣ちゃん、どうしたの？」

「……え？」

「目が真っ赤だよ。何かあった？」

美世の言葉に慌てて頬に手を当てると何かが流れた後があった。

私は気付かない間に涙を流していたのかもしれない。

「何でもない、何でもない。ただの充血だって。最近夜更かしして
ばっかだから」

「そうなんだ。でも気をつけて。せっかくキャンプに行くんだから
体調を整えようね」

「美世、それは私のセリフだよ」

私と美世のやり取りを見ていた澄川が急に立ち上がった。

「わーい、上杉の目はウサギだー！！　うっさぎー！！　うっさ
ぎー！！」

「五月蠅い！！」

私は澄川にスポーツバッグを投げつけた。

スポーツバッグは見事に命中し、澄川はその場に倒れた。

「うっん……グッジョブ……」

「澄川君ー！！」

ただ一言が言えずに今日も過ぎていく。

前なら簡単に言えたはずなのに。

言わなくても通じると思っていたあの頃。

私はただ……考えないようにしていた。考え出すと止まらなくな
る。

『好き』

次第に重みを増していく言葉。

第30話 「がんばらなくちゃね」 （上杉亜衣編）

「後どれぐらいで退院できるの？」

「うーん……一週間ぐらいだと思いますよ」

「一時はどうなるかと思ったけど良かった、元気になってキャンプの一件があつてから一週間経つ。

夏休みになつて特にする事もない私は今日も美世の病室にいる。

「今生きていられるのも澄川君のお陰だよ」

「んな大袈裟な。元はといえばアイツが——」
すると美世は首を振る。

「違うよ。むしろああなつて良かったと思つてるぐらいだからうーん。私には分かんない」

美世と澄川の間になんか起こつたか私は知らない。

ただ、美世の様子を見ると悪い思い出ではないみたいだ。

「ねえ、亜衣ちゃん」

「なに？」

「気のせいかもしれないけど澄川君って最近変わったよね」

澄川が変わつたと感じたのは私だけじゃなかった。

「気のせいじゃなとおもう。私も光彦か正宗か分らないというか、キャンプの前後ぐらいから、丁度中間ぐらいに性格になったと思う」

「多重人格つて治つたのかな？」

「そういうものなのかな？ 良くわかんないけど……人格が同化したつていうのに近い気がするけど」

「でも前より優しくなつたから良かった」

「あーあ、ノロケですか？」

それを聞いて美世はため息をついた。

「……人の気持ちって難しいよね。本当に人を好きなるって簡単じ

やない。私、気持ち之急ぎすぎたよ」

「え？　どういう意味？」

「私もう一回澄川君のこと仕切り直しするね」

美世はそう言うとき窓の方を向いた。

柔らかく微笑むその横顔が、大人っぽく見えた。

「美世、成長したんじゃない？」

「成長？」

「何となくそう思っただけ。それに美世は若いんだからもっと思い切って行動した方が良くともうよ」

「亜衣ちゃんこそ、がんばらなくちゃ。若いんだし」

「はい？」

「好きな人に気持ちぐらいいは伝えたんでしょ？」

美世の言葉に私は思わず何もいえなくなった。

彼女には好きな人がいるということは言った事あるのだけれど、相手は知らないからそんな事を言えるのだろう。

「まだっていつか、私のは認められない気持ちだから……」

焦った私は何とか話題を変えようとした。

「あの花瓶一杯バラ凄いな！！　一体何本あることやら。誰にもらったの？　まさか澄川？」

ホントに見事なバラだった。

ココへ来た時少し見とれていたぐらいだ。

「違うよ。昨日、真田先生の代理だって言う人が置いて行ったの」

「真田の仕業かぁ……キショー！」

「でも代理の男の子はカッコ良かったよ」

「マジで？」

「うん」

「真田……まさか男を囲っているとか？」

「亜衣ちゃん、そのオヤジ的発想を何とかした方が良いと思うよ……」

…」

その後も適当に談笑をして、私は病院を後にした。

何か嫌になっていた。

夏なので日はなかなか沈まないし、ガキは夏休みだからか、やたら楽しそうに自転車乗ってるし、それに以前に暑いし。

こんな風に高2の夏が過ぎてゆくのかなあ……

最近、病院帰りに思う愚痴。

病院と澄川の家を往復する毎日じゃあ愚痴りたくもなるよ。私はその辺にあった石を蹴飛ばしながら澄川の家近づく。

「——えっ!？」

……と、そこでとんでもないモノを見てしまった。

玄関口に姉がいて、澄川と話をしていたのだ。

「あいつ……」

私はダッシュで玄関まで急ぐ。

二人は私に気付いたらしく一斉にこっちを見てきた。近づく私に姉が話しかける。

「亜衣ちゃん。今帰ってきたの?」

「何でココに居るの!？」

「アナタがお世話になってるって学校の真田先生に聞いたから……」

「アイツ、内緒にするって言ったのに!!」

「アイツって真田先生はアナタの担任——」

「お姉ちゃんには関係ないでしょ! それに私は家に帰るつもりないから、とにかく帰ってよ!!」

この状況を見かねてか、澄川が口を挟む。

「心配するな。お姉さんはお前の着替えを持ってきただけだ」

「えっ……」

「真田先生に『責任は自分が持つから温かく見守ってやって欲しい』って言われてね、私も無理強いしないって決めたの」

せつかく、意気込んできたものの、少し拍子抜けの展開に私は「……そうなんだ」なんて気の抜けた返事をしてしまった。

そのまま本当に姉は帰って行き、夜になった。

私は澄川の部屋で大の字なって寝転んでいる。

「はあ、私何やってんだろ。夏休みにもなって、こんな部屋でゴロゴロ……バカみたい」

私はまだ澄川の家で厄介になっていた。

澄川は一人暮らしだし、出てけとも言わないのでそのままいる。

……そういうずうずうしい自分がかんまり嫌い。

「そういう事は独りの時か心の中で言ってくれ」

「うるさいなあ。これはアンタにも言ってるの!! ……そういえば最近仕事行ってないよね」

「この前仕事に失敗したから、なかなか仕事を回してもらえなかった」

この前と言うのは恐らく私が邪魔した予備校講師の殺しの事を言っているのだろう。

「アレに関しては悪かったとは思ってないから。そもそも人殺しに良いものなんてないし」

「別に僕だって良い事をしてるなんて思っていないさ」

何だかイライラする。

コイツ最近、人殺しのクセに偽善っぽい事を話すようになった。

それは良い事なのかも知れないけど腹が立つ。

それは何処から来るのか……それは……

「何？好きな人のためなら悪い事もしようがないって言いたいわけ？」

「別に僕は――」

「ねえ、『好き』ってそんなに偉いわけ？ 恋愛が絡めば何でも許されるわけ？ バカじゃないの!!」

「……」

「答えられないでしょ？ 自分が間違ってる事を認めたくないから答えたくないんでしょ!!」

「上杉」

「何!!」

「お前少し変だぞ」

「あー、うるさいなあ!! もう寝るから電気消してよ!!」

「えっ、だってまだ8時――」

「うるさい!! うるさい!! みんなうるさい!!」

布団をかぶり目の周りが真っ暗になると少し落ち着いた。

ああ、私が一番うるさい……

第31話 「謀」 （上杉亜衣・過去編）

次の日、「仕事が無い」なんて言っていた澄川は頻繁に外出するようになった。

どうやら次の仕事が決まったみたいだ。

でも、澄川を止める事はしなかった。どうせまだ相手を好きになる段階だろうし。

独りになった部屋は静かで、私はいつの間にか眠り込んでいた。

……泣いている。

声を上げて泣いている。

部屋の隅……小さい頃の私。

きつとまた怒られたに違いない。

昔からそうだった。褒められるのは姉で怒られるのは私。

でも、しょうがないと思っていた。

姉は綺麗で頭も良くて無欲で、そして……

「泣かないで亜衣ちゃん」

俯いている私の頭にそつと置かれる柔らかい手。仰向く私。

「……お姉ちゃん」

目の前には微笑む顔。

そして……姉は優しくった。

小さい頃、姉はそういう存在だった。

それがなんであんな事になってしまったのだろう……

3年前、たまたま早く起きた日曜日。

車に細工をしている姉を見た。

いや、まだこの時は細工しているなんて知らなくて黙って見ていた……はず。

両親は仲が良く、頻繁に二人でドライブへ出かけていた。そして今日もドライブへ行く。私と姉は笑顔で見送った。

夕方になり、家の電話が鳴った。

私があると、相手は警察だと名乗り、両親が交通事故で病院に運ばれたと告げた。

私と姉は病院へ急ぐ。移動中、お互いに一言も喋ることは無かった。

病院へ着くと連れて行かされたところは霊安所だった。

山道、カーブでブレーキと踏むことなくそのまま突っ込み崖へ転落。即死だったらしい。

横たわる姿を見る。母親の方はともかく、父親の方は原形をとどめていなかった。

それを見た私は吐き気がしてトイレに駆け込んだ。

泣いている。

嘔吐を繰り返しながら私は涙を流していた。

朝まではあんなに元気だった二人の変わり果てた姿。

二人を見て逃げ出す私。何もかもが悲しかった。

そんな時、誰かが……いや、いつものように姉の手が私の背中に置かれた。

「亜衣ちゃん、大丈夫？」

姉の声はいつものように優しくかった。仰向こうとする私、でも上手く行かない。

「……」

見てしまった。

俯いた前髪の間から覗いた姉は微笑と呼ぶには口元が歪みすぎている。

嘲笑、冷笑、ほくそ笑み……そんな言葉が当てはまるような表情だった。

この時ようやく姉が両親を殺したことに気付いた。

お葬式。

準備や進行は全て姉が仕切った。

両親をなくしても気丈に振舞う姉を集まった親戚は皆感心し、健気だと泣き出す人までいた。

だけど、私は見逃していなかった。

誰もいない一瞬について薄笑いを浮かべる姉の顔を。

葬式などの一連のやるべき事を終えると、姉はこの家は自分達姉妹が守ると宣言した。当時、姉は大学を卒業したばかりで、親戚達は最初、難色を示していたものの葬式での姿を見たこともあり、最後には折れた。

姉は我家の全権を握った。

ここから姉の暴走が始まる。

まず、手始めに姉は家中のカーテンを取り替えると言い出した。

その後、家具や壁の色など次々と姉の好みに変わっていく。

とうとう半年もしないうちに以前の家の痕跡はなくなった。

あまりに激しい変化に疑問を感じ、姉に尋ねる。

「お姉ちゃん、ここまで家を変えること無いんじゃない？」

私の問いに姉は微笑みながら言った。

「前のままだと“あの人達”の事思い出しちゃうでしょ？」

「えっ……」

「だから変えるの。今は私達の家なんだから」

「あの……“あの人達”ってお父さんとお母さんのこと？」

「そう、“あの人達”のこと」

「……」

姉はどうしたいのだろうか？

私には分からない。

この時もそして現在も……

中2も終わりの話。

第32話 「家族ゲーム」 （上杉亜衣・過去編）

いつの間にか部屋の窓が赤く染まっていた。

どうやら私は眠っていたらしい。時計を見る。すでに19時をまっていた。

しばらくして玄関のドアが開く音がして、澄川が帰ってきた。

家にかかるなり澄川は真剣な面持ちで床に座り込む。

「おかえり」

「……」

返事は返ってこない。黙り込んだままだ。

私もそれ以上は何も言わなかった。

何も言葉を交わさなくても分かり合えるような間柄ではないけど、沈黙が続くことを怖がるような間柄でもなかったから。

それになにより、思い詰めたような澄川の横顔があ那时的顔とダブるから……

中3になつてすぐ、姉は男の人を家に連れてきた。

「はじめまして。僕、松田元樹って言うんだ、よろしくね」

その男性はいかにも人のよさそうな笑みを浮かべて私を見た。

私もとりあえず挨拶をする。それを見届けた姉は嬉しそうに何度も頷いた。

「亜衣ちゃん。実はね私と元樹さん、結婚しようと思うの」「えっ？」

私もどう応えていいか分からない。

姉は両親が死んでからよく物事を突然決めるようになったのだけ
ど、今のが一番だと思った。

こうして、元樹さんが加わった生活が始まる。

男の人がこの家に入る事で初めはグクシヤクした。他人が入って
くるというのはそういうものだ。

それに加え私は高校進学という大切な学年をむかえた。

なにかと不安定な時期、二人は最大限の協力してくれた。

元樹さんは徹夜で勉強を教えてくれるし、姉は自分の仕事がある
のに夜食なんか作ってくれた。

この頃、姉に対しての違和感はあまり感じなかった。家の様子も
変わったし、両親の話もしなかったというのもあるけど、なにより
私が受験だった事が大きい。

受験という目標を3人で解決していく過程で、元樹さんとの仲も
良くなっていった。

今考えればこの3人が一番上手くいつていた時期だと思う。

こうして私は無事高校へ入学する事が出来た。

高校へ入り、それなりに友達ができ、高校生活も安定して私の心
にも余裕が出来てくる。

すると今まで気付かなかった事が見えてきた。

気のせいかもしれないけど、姉夫婦はあんまり仲が良くない感じ
なのだ。

上手くは言えないが、死んだ両親とは少し違いお互いに壁を作っ
ているように思えた。

二人の私に対する態度は変わることには無かったけど、夫婦で二人
きりになるとロクに会話が無い。

特に姉の態度にハッキリと表れていた。元樹さんが話しかけない
とお姉ちゃんは絶対に話をしなかった。そりゃ夫婦にも色々な形が

ある事は分かる。

でも……これじゃあ見知らぬ他人同士が生活しているみたいじゃない。

もしかしたら、私の受験に構っていたせいで2人の時間をもてなくなったせいかもしれない、なんて思ってしまった私は、なるべく2人でいられるような状況を作ることにした。

映画のチケットを買ってきて二人で行くように勧めたり、カラオケにみんなで行って、途中で私がいなくなる、なんて事もした。

お節介かもしれないけど、これが受験の恩返しだと思っていた。しかし、結果は良くなかった。

それでも何とかしようと色々考えていた夜、私はのどが渴いてキツチンへ行こうと一階へ降りた。

薄暗い廊下を歩いていると、リビングを過ぎたあたりで人の気配がした。

変に思った私は恐る恐るリビングを覗いた。

室内は月明かりしか光源は無く、ハッキリと見て取れなかったけど、時間が経つにつれて、ソファーに座る人影が見えた。

体格からして恐らく元樹さんだと思った。

月明かりに照らされた元樹さんの顔は陰影がくつきり表れ、酷く深刻そうな顔をしているようにみえる。

その表情に私は目を離す事が出来なかった。さらに良く見ようと私は見を乗り出す。

しかし、その拍子にバランスを崩し室内に入ってしまった。
「誰だ!？」

突然入ってきた私に元樹さんは驚いているようだ。

もちろん私も驚いているけど。

「ごめんなさい。脅かすつもりじゃなかったんだけど……」

「ん? ……ああ、亜衣ちゃんか。まだ起きてたの?」

「……うん」

近くで見た元樹さんの顔は何か疲れているみたいだった。

「元樹さん何かあったの？ 明かりもつけなくてソファーに座って」「えー？……うん、ちよつと考え事をね」

私はよくお節焼きだといわれる。

美世のことにしてもそうだけど、ついつい首を突っ込んでしまう。生来そういう性格なんだと思う事にしている。

だから、この時も元樹さんの表情が冴えない事に首を突っ込んでしまう。

「もしよければ、力になるよ……」って高校生の私に何が出来るとて訳じゃないけど。話を聞くぐらいはできるから」

「ははは。ありがとう」

元樹さんは力なく笑った。

私はその原因が何であるか何となく分かった。

「もしかしてお姉ちゃんとかあった？」

「……いや別に僕は……」

「元樹さん、余裕無さ過ぎ。バレバレだよ」

さらに焦りだす元樹さん。

「ち、違うんだこれは……」

「元樹さんには結構世話になってるし、何かお返したいの。幸い、お姉ちゃんのことなら大抵のことは答えられるし。それでも16年一緒に住んでるんだからね」

「……」

「私じゃあ力になれないかな？」

「そうじゃないよ。大丈夫、これは法^{のり}さんとの約束だから」

お姉ちゃんとの約束？ 何の約束だろうか？

気になるけど、そこまで問いつめる勇氣は無かった。

「わかった。でも話したくなったら——」

その瞬間だった。私の声を遮って背後から声がした。

「私たち本当は夫婦なんかじゃないの」

「……」

「法さん……」

振り返った先には姉がいた。暗くて表情までは伺えない。

「亜衣ちゃんも高校生になったことだし、いい機会だから言っておくね。お葬式から何ヶ月かして、私がこの家を相続するのに反対する人が出たの。まだ二十歳そこそこの私がこの家を持つことが気に食わない人達がいるってこと。だから、元樹さんに頼んで夫婦を装って世間体を良くしたの。全てはこの家を守るため」

「な、何言ってるの？ 冗談だよ、元樹さん」

私は信じられなくて元樹さんを見る。

元樹さんは苦々しい顔を浮かべながら、何も言わずに頷いた。

「僕も一人暮らしだったし、家賃や諸経費なんかを払わなくて済むから、その条件を飲むことにしたんだ」

「そんな……」

今まで騙されていたのか。私は急速に現実感を失っていった。

耳鳴りがして話しかけられた言葉がよく汲み取れない。

何も言えないでいると、姉は私の肩に手を置いた。

「落ち込む気持ちは分かるけど、これも全てこの家と亜衣ちゃんを守るためにやったことなの。解ってね」

「はあ！？」

姉の言葉は私の怒りを促す発火点になった。

「家を守る為って何なの！？ お父さんとお母さんがいればそんな事考えずに済んだじゃない！！」

この言葉に姉は動揺することなく、極めて抑揚の無い声で言った。

「しょうがないでしょ。あの人は死んだのだから」

「ふざけないで！！ 殺したのはアンタじゃない！！」

「えっ……」

このとき初めて私は姉に『アンタ』と言った。姉の方もここで初めて表情を崩した。

そのままの勢いで私は家を飛び出した。

思えばこれが初めての家出だった。

第33話 「望む世界」 （上杉亜衣・過去編）

澄川は特に何と言うわけでもなく、食事の準備を始めた。

私もそれを黙って見ていた。いつもだったら、仕事について問い詰めてたかもしれない。

でも、そんな気力は無かった。

用意された食事を黙って食べる。澄川も何も言わない。黙々と進む食事。

最近じゃあ美世もいないので、こんな感じだ。

澄川も誰なのか判らないけど全然人格の変化が無いから光彦のバカ騒ぎも今となっては懐かしくさえある。

何も無いまま時間も流れ、寝ることにした。

でも、昼間寝たせいもあってなかなか寝付けない。

暫くすると、隣で寝ている澄川がベットから起きた。

私は床で寝ているから歩く振動が伝わってくる。

トイレにでも行くのかと思い、無視しているとガサガサ物音が聞こえた。

気付かれないように寝ながら様子を伺うと、どうやら澄川は何処かへ出かけようとしている。

瞬間的に人殺しという言葉が浮かんだ。

それにしても早過ぎる。ターゲットに会ったその日に殺すなんて出来るはずが無いのだ。

好きになるまでの時間が必要だから。

私は澄川に尋ねようとした……が、すぐ思いとどまる。

行動を起こさなければ結局私には何も起きないのだ。

だったら、何もしないほうがいい。何も知らなくていい。何も考えなくていい。

あの時だつてそうだ何もしなければ思い出さなかったのだ。

家を飛び出した私は有希の家へ行つた。

幸い、有希はまだ起きていて、夜も遅くに突然私が来たことに驚いていた。

「亜衣!？」

「ごめん、こんな夜遅くに。いきなりで悪いけど2、3日泊めてくれない？」

「え!？ どうしたの？」

「ちよつとね」

「……まあ、とにかく入つて」

有希に促され家に入る事になった。

彼女の部屋に入ると、あれこれ聞かれる前に詳細は隠して、姉とケンカして家出した事を告げた。

「ふーん、なるほどね。まあ、2、3日家にいればいいよ。よくあることだし」

「よくあることなの？」

「うん、私なんて中学の時、よく家出したよ」

あつさり有希は納得してくれた。

よくある姉妹ゲンカだと思つてくれたみたい。

今日が金曜日よかった。土日の間とりあえずはここにしよう。

そう思つたのもつかの間、次の朝には姉が有希の家まで私を迎えに来た。

玄関に姉を待たせ、家の奥で有希が私に尋ねた。

「亜衣、どうする？ 帰る？」

「嫌」

「そう言つと思つたよ。でも、いい機会だから話し合つてみたら？」

「でも……」

「アンタの場合ケンカして家出したんだから、話す時間が足りなくてすれ違つただけだと思うよ」

「……わかつた」

有希の説得に応じ彼女の部屋で姉と二人きりになる。

「……」

「……」

お互いに話す機会を伺っている。時間が経てば経つほど気持ちが急いてくる。こういう状態が何分か続いた後、まずは姉の方から切り出した。

「……黙つててゴメン」

ホントは落ち着いて話したいのに……私はついついムキになつてしまう。

「何が？ 元樹さんの事？ それとも両親の事？」

「……」

「私はどっちしても、許さない」

「……許してなんて都合のいい事は言わない。けど、分かつて欲しいの。全ては守るた——」

「家を守るためって昨日も同じこといったよね？ そんなに大事？ ウソの夫婦を装つてまで、しなきゃいけないことなの！？」

私の問いに姉は黙つて答えない。

ただ、今までと違い傍目から見ても分かるくらい悲しそうな顔をしていた。

「そうじゃない……」

姉がようやく搾り出した答えがそれだった。

「は？」

「守りたいのは……亜衣ちゃん、アナタのことだよ。家を守るなん

ていうのは二の次……」

言われた意味が分からず、少し面食らう。

「……何言ってるの！？ そんな事誰が信じ——」

「覚えてないの！？」

突然、姉は声を荒げた。

私はどうして言いか分からずただ姉をじっと見つめた。
すると、姉は我に帰ったのか俯いた。

「私は亜衣の望む世界を作りたかっただけなのに……」

「どういう事！？」

「あなたが言ったのよ。お母さん達なんか死んでしまえって……」
「！？」

その瞬間、頭の中で何かが湧き出てくるような感覚に襲われる。
次第に記憶の傷が開く。

塞がっていたものが一気に流れ込んできた。

「ああ……私……」

私の反応を見て、姉は微笑んだ。

……分からない。

何故そこまでしなきゃいけないの？

皆、みんな、ミンナ……好キダカラ……デキル……

あの時、お姉ちゃんが言った言葉。

泣いている。

声を出して泣いてるよ。

部屋の隅……あの頃のお姉ちゃん。それを見ている小さい頃の私。
優しいお姉ちゃんが人を傷付けたんだって。お父さんとお母さん
が怒ってた。

なんか変だよ。だって、いつもほめられるのはお姉ちゃんて怒ら

れるのは私なんだから。

泣いてるお姉ちゃんを見るのはかなりショックで近寄りにくい。でも、そんな事言つてらんない。

お姉ちゃんに何かしてあげたい気持ちがあるから。

考えた、すぐく、すぐく考えた。それで、出た結論は……

そつとお姉ちゃんの頭にふれる私。

お姉ちゃんの動きが止まった。

頭をなでるつて、怒るかなあ？

「お姉ちゃん、泣かないで」

「……」

ゆつくりお姉ちゃんは仰向いた。

大切な人が泣き顔を見るのは凄く悲しいけど、私はいつもお姉ちゃんがしてくれたみたいに精一杯、微笑んで言う。

「何があつても、私はお姉ちゃんの味方だからね」

「……」

その瞬間、お姉ちゃんの目からいっぱい涙が溢れだした。

「お姉ちゃん泣かないで私まで悲しくなっちゃう……」

よく分からないけど私まで悲しくなつてきて、泣き出してしまつ。しばらく二人で泣いた。

時間が経つとお姉ちゃんは泣き止んで、私はまだしゃくり上げた。た。

そつと私の頭をお姉ちゃんの腕が包みんで、抱きしめられる。

「ありがとう、亜衣ちゃん。ありがとう……」

「お姉ちゃん、ちょっと苦しい」

お姉ちゃんは抱きしめていた腕を少し緩め、私の顔をじつと見てきた。

私は少し照れくさくて下を向く。

「私も亜衣ちゃんにどんな事があつてもずつと味方にいるから……」

「お姉ちゃん？ ……ん！？」

嬉しくて上を向いた瞬間、お姉ちゃんの唇が私の唇と重なった。突然のことで私は何が何やら分からなくてパニックに陥りそうになる。

でも、お姉ちゃんに髪をなでられて少しずつ落ち着く。

「お姉ちゃんどうして……」

「好きだから。……亜衣ちゃんは嫌？」

私は首を振った。

「お姉ちゃんが望むんだったら」

それからお姉ちゃんとよくキスするようになった。

長く、深く、時間をかける……お姉ちゃんの唇が優しく私の唇を噛む。

拒んだり、受け入れたり……駆け引きは私の気分を高ぶらせる。

唇同士が触れ合う感覚に私は悦に浸ってた。

次第に私は体の力が抜けていく……

この時間だけ……私とお姉ちゃんは繋がっていられる……嬉しい

……

私とお姉ちゃんだけの世界……もう、これしか要らない。

倫理的な善悪というよりも感情が先にほとばしり、抑えられない。それほどまでに私は幼かったのだと思う。

でも、こんな関係がいつまでも続くはずが無い。

いつものように唇を重ねた。

次第に頭が真っ白になって目の焦点も合わなくなってきた。

ああ……

ぼやけた視界の中で何かが動く。

「……ん？」

私はそれを見ようと懸命に目のピントを合わせる。

お姉ちゃんの肩越しに見えてきたものそれは――

「あなた達……何を……」

「え……?」

「何をしてるのっ!!!!!!!!!!!!!!」

「!」

悲鳴のような声をあげ、大きな足音を立てて部屋に入ってきたのはお母さんだった。

肩を掴んで私達を引き裂くと、お姉ちゃんの顔を何度も何度も殴打する。

そのままお母さんはお姉ちゃんを引きずって一階へ連れて行った。私は部屋に独りきりになり、恐怖で震えてた。

お母さん怖いよお……どうしてお姉ちゃんを叩くの？

私達はただ……好きだからしてただけなのに……

それ以来、二人でいることを極端に制限され、いつも両親の監視がついた。

いつも周りに気を使い、ほとんど会話を交わすことはなかった。

私は両親に不満を言った。

「どうしてお姉ちゃんと話しちゃあいけないの?」

次の日、両親は私を病院へカウンセリングに連れて行った。

病院の先生は優しく私の言う事を黙って聞いてくれ、その後私にも分かるように少しずつ噛み砕いて話してくれた。

それは恋じゃないと。愛じゃないと。

愛情ではなく、情愛だと。

次第に、私は好きだとか嫌いだとか、愛してる、愛してないなどの境界線が非常に曖昧だったと気付き始めた。

姉妹愛と恋愛感情とが混沌としている状態。

しかし、同時に私の中で姉に対する気持ちが変わっていくことに畏怖していた。

あれだけ満たされた時間をもう何も感じなくなってしまう恐怖。

不安定な気持ち。

とはいえ、当時お姉ちゃんと連絡を取っていないわけではなかった。

内緒でお互いの部屋のドアから差し入れる交わす手紙があった。だから、私は書いてしまった。

『お姉ちゃん。私はもうすぐ変わってしまうかもしれませんが。病院へ連れて行けなかったらこんな事にはならなかったです。怖い……』

お母さん達なんか死んでしまえばいいのに』

私の手紙にお姉ちゃんはすぐ返事を書いてくれました。

『もう少し……あと5年待って。私が自立したとき、その時は誰にも邪魔されずに二人の時間を過ごそう。約束だよ』

この手紙から少しして私は手紙を書くのを止めた。

カウンセリングの成果として、気持ちの整理がついたのと、作爲的にお姉ちゃんとの記憶を消されていったからだ。

私に残ったのは姉妹愛とぼやけた記憶だけだった。

第34話 「償い」 （上杉亜衣・過去編）

「思い出した？ うれしい。催眠治療を受けているっていう話を聞いてたから不安だったけど……」

気がつけば有希の部屋だった。

そうだ、元樹さんのの事を知って私は家出したんだ。

さらに今、欠落した記憶が戻ってきた。

目の前に姉がいる。

私のせいで皆こうなったんだ……

お父さんとお母さんは死んで、お姉ちゃんは両親を殺し、見知らぬ人と結婚生活を装って……

私は。

私は……

お姉ちゃんが注ぐ私への気持ちと、起こった事態の深刻さに押しつぶされそうになる

そんな私に構わず、お姉ちゃんは嬉しそうに話す。

「これで約束が果たせるよね！！ 二人だけ時間を過ごせるんだよね！！」

「ああ……」

私は全身の血の気が引くのを感じ、震えだした。

お姉ちゃんはその異変に気付き怪訝そうな表情をする。

「亜衣ちゃん……どうしたの？」

姉は近づき触れようとした。

しかし、私はとっさに体を逸らす。

「なぜ逃げるの？」

「っ……」

さらに姉の手が伸びる。

私は必死に飛びのく。

「……どういづつもり？」

「なんで殺したりなんかしたの？」

姉は事も無げに答える。

「決まってるでしょ。好きだから。好きだから出来たの」

「……ごめん、お姉ちゃん。私、どうして良いのか分からない……」

そのままドアを開け、私は部屋を駆け出た。

この場で私とった行動……それは逃げ出すこと。

有希の家から逃げ出した私は宛もなく歩いた。

不甲斐ない自分が情けなかった。辺りがぼやけてくる……涙が出た。

お姉ちゃんとの日々を思い出してさらに混沌とする心。

夜になったところで私の行く場所もない。

だから、ここへ来てみた……学校。

音楽室にある窓の鍵が1つだけ壊れているのを知っていたので、

そこから校舎内へ入る事にした。

夜の学校なのでもちろん誰もいない。

それが今の私にとっては重要だった。

自分の教室へ行き、自分の席に座る。肘をつき俯く。

涙はすでに止まっていた。私の心とは対照的に静かな時間が流れる。

あんな事をするお姉ちゃんが許せないのに、私の言葉を信じて、あそこましてくれたお姉ちゃんを……受け止められない。

お姉ちゃんの気持ちを受け止めたら……お父さんとお母さんの死を私が容認してしまう事になる。

「何?! 今の音」

気のせいだろうか？

足音が聞こえた気がする。

宿直してる先生の見回りかもしれない。

私はとっさに机の下へ隠れ、様子を伺う。

「確か、3階って聞いたんだけどなあ……」

この声、廊下にいるのは……元樹さん！？

なんでココへ？

そう考える暇もなく教室のドアが開けられた。

「……」

私は必死に息を潜めた。初めは見当違いの方向をさがしていた元樹さんは次第に近づいてきた。

そして一定の距離を取ったところで立ち止まる。

「そこにいるんだろ？ 出てきなよ」

「……」

「黙ってたって分かるよ。だって、この辺床に土が落ちてるからね。今度学校へ来るときは靴を脱いだほうがいいよ」

自分の足元を見て軽く舌打ちをして、ゆっくりと立ち上がる。

「……なんで学校だと思ったの？」

「僕も昔、家出したとき学校に泊まった事があってね。それでもしかしたらと思って有希さんに学校の場所を聞いて来てみたんだ」

元樹さんは相変わらす人のよさそうな笑顔を浮かべて私を見てる。

「さあ、帰ろ。お姉さんも心配してる」

「嫌」

「亜衣ちゃんの気持ちは分かるけど……」

「いい加減な事言わないでよ！！……分かるわけじゃない」

「でも、このままって訳にもいかないだろ」

「……」

「帰ろつよ」

私は元樹さんに促され、家に帰ることにした。

家に帰ると姉はいなかった。

どうやら、まだ探しているようだ。

「法さん携帯持っていないから連絡つかないけど、もう少し待てば帰ってくると思うよ」

「……」

「お腹空いてるだろ？ 今なにか作るよ」

元樹さんはキッチンで何やら料理を始める。

その後姿を眺めながら私は疑問に思っていた。

お姉ちゃんはともかく、どうして元樹さんまで私を探してくれたのだろう？

ただの同居人として暮らしているなら、別に夜になるまで私を探す必要はないと思う。

だから尋ねることにした。

「どうして、こんな生活を始めようと思ったのですか？」

「だから、お金が掛からないし……」

「それだけとは思えません」

「ふう……」

元樹さんは頭に手を置きながらため息を一つついた後、口を開いた。

「一言で言えば、法さんが好きだからかな。彼女が僕のことなんて何とも思っていないことは知ってるけど、彼女の役に立てばそれで良いと思ったんだ」

結局、元樹さんの口から出てきたのも「好きだから」。

「何も見返りがなくても？」

「見返りならあるさ。法さんのそばにいられる」

につこりと微笑みながら言う姿に私は痛々しさを感じた。

この人をこんなにしたのも元を辿れば私が原因だ。

「あの……」

おそらく償いにはならないと思う。

でも、私に出来ることといえば……

私は自分の服に手をかける。

「……亜衣ちゃん、どうした？ 服なんか脱ぎだして!？」

「お姉ちゃんじゃなくてゴメン。でも、こんなことしか思いつかなくて……」

私は元樹さんの胸にもたれかかる。

「何言ってるんだよ、こんな事出来るわけないじゃないか! 離れなさい!」

「お願いします……このままじゃ不安で……」

「……亜衣ちゃん？」

結局、償いだとか言いつつ私は誰でいいから、しがみ付きたかっただけだった。

自分じゃ抱えきれない気持ちを少しでも楽にしたいから……

私の気持ちを察してくれた元樹さんは抱きしめてくれた。

温かい私以外の温もりを私の中で感じる……それは初めての事だったけど、安らぎだった。

事が終り私は身なりを整えようとして立ち上がった時、偶然リビングのドアの隙間が開いていることに気付いた。

その隙間から垣間見えたものは……睨みつけるような眼。

間違はなくそれは……お姉ちゃんだった。

暗い隙間からしつかりと見開かれた眼だけが浮かび上がっている。私は背筋が凍るのを感じた。

幸い、元樹さんは何も気付いていなかった。

私もお姉ちゃんが入ってこない限り、気付かないフリをして身なりを整える。

その後、お姉ちゃんは何食わぬ顔して部屋へ入って来て、私の帰宅を喜んだ。

しかし、私はあの時の眼が忘れられずにいた。

もしかしたら私の考えすぎかもしれないけど……元樹さんが殺さ

れるかもしれない。

両親を殺したお姉ちゃんなら考えられる。

そこで私は再び家出をすることにした。

私が家に帰らない限り、お姉ちゃんは元樹さんにへたな事はしないだろうと踏んだから。

そして、私がお姉ちゃんに好きと言わないように。

お姉ちゃんと一生分かり合えないこと。

それが私の出した結論、償い。

第35話 「考え始めたウサギ」 （上杉亜衣編）

昔のことを考えていたら、すっかり眠れなくなっていた。

今、私は高校二年生で家に帰らず、クラスメイトの家に居候中。なんだかやりきれなくてため息が出た。

そう言えば、澄川が外出してからどれぐらい時間が経ったのだろうか？

私は相変わらず寝られなくて、寝返りをうつてばかりいた。行き場の無い想いだけが頭の中を行き交う。

その想いは次第に混沌として私の中で膨れ上がり、膨張が最高潮に達した時、玄関のドアが開いた。

ドアは開くと、大きな物音を立てて何かが倒れる音をたてる。

私は驚いたが、それでも動かない。どうせ、澄川が転んだのだらう。

その後、引きずる様な音がして、水音が聞こえてきた。懸命に何かを洗っている音が聞こえた。

水音は20分以上続いている。さすがに私は不安になり、洗面所のほうを覗き込んだ。

そこではやはり、澄川がいた。

後姿しか見えないけど、手を洗っているみたいだ。

20分も手を洗うなんて明らかにおかしい。私はようやく立ち上がり、澄川に近づいた。

「澄川、なにやってるの」

私の呼びかけにも聞こえないのか懸命に手を洗っている。

さらに近づいて背後から覗きこむ。やはりというか澄川は手を洗っていた。

今度は澄川に分かるように肩を掴んで話しかける。

「アンタ、いつまで洗ってるの？ もう十分に洗え——」

「まだだ」

「え？」

「キレイにとれないんだ」

振り向かずに応える澄川。

何かに取り憑かれているかのような。

「十分キレイだって……」

私の声に反応して澄川の動きが少し止まった。

直後、澄川は振り返ってどなる。

「とれないんだよ！！」

「！！」

振り返った澄川の服にはおびただしい血がついていた。

「……血……とれないんだ。何度手洗いしても……」

言い終わると再び澄川は手を洗い出した。

あの夜、教室で見た殺人者澄川の面影はもう何処にもなかった。

「どうしたって言うの？ 澄川……」

「……うつっ」

澄川は答えない。

いや、答えることが出来なかった。

今度は嘔吐し始めたのだ。

すでに何回も戻したのか、口からは何も出ず、空嘔を繰り返すだけ。

私はその姿を直視する事が出来ずに顔を背ける。

背けた先には血染めのナイフが床に転がっていた。

人殺しまではもう少し時間が掛かると思った私は驚きを隠せなかった。

「今日、殺したの？ ……なんで？」

「……」

澄川は相変らず肩で息をして苦しそうに洗面器へ向かったまま。しばらく、この状態が続くと私はだんだんイライラしてきた。

「アンタ、人殺しをするには時間が掛かるんじゃないの!? ちよつと、こっち向きなさい!!」

私は澄川の肩を掴んで強引にこっちを向かせる。

「!!」

振り返らせて見えた澄川の表情には生気がなかった。

顔面蒼白で口はだらしなく開かれ、気のせいか少し痩せたように見える。

それなのに眼だけが鋭く血走っていた。

「あの時、教室で人殺しをした元気はどうしたの? 今も刹那なんでしょ、答えなさい!!」

私の問いかけに答えられる状態では無い事は十分に分かっている。でも、コイツは人を一人殺してきたのだ。

「もう、刹那はいない……」

ようやく息も絶え絶えに澄川は答えた。

「どういう意味?」

「もう僕は……僕しかない。澄川正宗も光彦も……刹那も存在しない」

「……」

確かに澄川の様子が変わったのは感じていたがまさか、そこまで進んでいたとは思ひもなかった。

そう思ったときあることに気付いた。

「じゃあ、人殺しをしたのはアンタ本人……」

そうだ。今さっき光彦でも正宗でも刹那でも無いとコイツは言った。

つまり、殺しを専門にしてた刹那がいなくなり、自分で人殺しをして……苦しんでるって事?

だったら、話は早い。

「いい気味。今まで犯してしまった殺人の重みをとくと感じなさい
……」

私はそのままにしておくことにした。

下手に側にいれば澄川に孤独感を与える事が出来ないから……独
りで後悔すればいい。

そのまま私は家を出た。

今夜一日ぐらいなら時間を潰せるだろう。

暗い夜道を独りで歩くのも慣れたし。

良く考えてみれば、好きな人のために殺すといいながら、実際は
刹那という人格に殺人という面倒な事を押し付けていたのだ。

澄川の覚悟の程が知れてる。

「でも、今回は自分でやったんだよね……」

『人を殺す』ってあそこまで苦しむものなのだろうか……お姉ち
ゃんや刹那は平然としていた気がする。

「くっ……」

考えるのは止めよう。

考えたら多分、澄川に同情してしまうかもしれない。

そうだ私は考えない事にしたんだった。

お姉ちゃんのことにしても何にしても……その方が楽でいい。
その後、マンガ喫茶で適当にマンガを読んで朝まですごした。

次の日。

八月も半ばにさしかかって、暑さもひと段落……するわけもなく、
今日も強烈な太陽は私の体力を少しずつ削っていく。

堪らず、美世がいる病院へ行く。

病院は空調が効いてて涼しい。美世には澄川の事は黙っておいた。

澄川に遠慮したわけじゃなくて、入院している美世が心配すると嫌だからである。

たいした話をするわけでもなく、時間一杯まで私は美世と無駄話をする。

美世はもうすぐ退院すると言って、嬉しがっていた。

病院を出た後、澄川の家に戻るのが躊躇われたので今日は有希の家で泊まることにした。

突然来ても彼女は歓迎してくれる。有希は一人っ子なので来てくれて嬉しいという。

しかし、やたら澄川の事を聞いてくるので少し鬱陶しい。

次の日、有希が買い物に行きたいというのでついて行く。

久しぶりに遊んだ。そのまま流れでその日も泊まってしまふ。

その次の日は有希が夏休みの宿題を手伝ってというので、二人で分担してやる。

後で答えを見せ合えば労力が二分の一で済むから。

ある程度できたときには夜中になっていた。ということで泊まる。

一日だけ泊まろうと思っていたにもかかわらず、勢いで三日泊まってしまった。

有希はもう一日だけ泊まれと言ったが、さすがに四日目には帰ることにした。

四日泊まるのは申し訳ないという気持ちと、澄川がどうなったか気になったという気持ちがあったからだ。

あっという間に玄関の前に来る。

悩みすぎて自殺してるなんて事はないよね。

少し……いや、かなり入りにくかったけど、意を決してドアを開ける。

ドアを開けると目の前に澄川がしゃがんでいた。

「あっ……」

「……」

どうやら、澄川は何処かへ出かけるみたいで、靴を履いている途中だった。

澄川をざっと見る。顔色はあんまり良くないけど、五体満足でいるようだ。

「何処に行くの？」

「……上杉こそ今までどこへ行ってたんだ？」

「アンタには関係ないでしょ」

「だったら、僕も言う必要が無い」

「そうね、アンタが何処行こうが勝手だよ」

そこで会話を打ち切ると私は家に上がりこんだ。

澄川も靴を履くと出て行った。

静かになった部屋で私はため息をつく。

……これじゃあ、お姉ちゃんに対する態度と同じじゃない……

しかし、お姉ちゃんと澄川は好きな人のために人を殺すという一点で似ている。

元樹さんにしたってそうだ。お姉ちゃんを好きだからあんなウソの結婚生活を送る事が出来る。

美世も有希もきつと好きな人のためならある程度のことはするのだろう……

そんな取り止めの無い事を思いながら時間は過ぎていった。

夜、澄川はなかなか帰ってこない。

今度は澄川が家出？

……ああ、もうどうでもいい。今日は寝よ。

私は澄川を無視してとっとと寝ることにした。

次に目が覚めたのは、水の音が聞こえたから。私は起き上がると洗面所のほうへ行く。

そこでは澄川が手を必死に洗っていた……もしかして今日も……殺してきたの？

懸命に洗う姿はこの前と同じだ。しばらくして、またしても嘔吐し始めた。

正直、信じられなかった。

この前あんなに酷い状態だったのに、今日も同じ事を繰り返している。

すると私は自然に歩き出していた。

そのまま澄川の肩を掴み、強引に振り返らせる。

「なんで！？　なんで！？　そんなにまでなっても人殺しをするの？」

「……」

澄川は答えない。そんな余裕は無いみたいだ。

この前とは違い虚ろな視線で私を見る。

「もういいじゃない。好きだからってここまでする必要無いよ……」

「駄目だ」

「……」

「僕がしなきゃ……　皐月は……」

「止めて……」

これ以上何も言わせたくない。咄嗟に私は澄川の口を塞ぎたくてキスをした。

しばらく私達はそのまま……とても長い時間を感じられた。

そして私は唇を離す。

澄川は驚いた表情を見せていた……私だって自分のした事に驚いていた。

でも、次の言う事は決まっていた。

「今は考えなくていいよ。私に集中して……」

もう、好きな人のために傷ついていく人を見るのは嫌だった。

何も出来ない私が惨めになる……考えたくない……感じるだけで

いいじゃない。

私は澄川に体を重ねた。

澄川は力ずくで私を引き離そうとしたが、体力を著しく消耗して
いてそれが出来ない。

「……止めてくれ」

微かに聞こえる澄川の声、私はそれに構わず続ける。

それでも、澄川は力を出し、私をなんとか引き離した。

「……」

私は突き飛ばされ床に倒れこむ。

澄川は最後の力を振り絞ったのか、肩で息をして動かない。

「……」

「どうして？ ……どうして、アンタはそんなに強いのか？」

「別に強くない。自分の気持ちがゆれる事に臆病なだけだ……」

「……」

「僕は皐月が目覚めたら好きだと伝えたいだけ。たとえそれが人を
傷つけるとしても」

「……わからない」

「僕の我が儘に上杉が僕に巻き込まれることは無い。同情したのな
ら、それは一緒に暮らしたから情がうつっただけのこと……錯覚だ」
「くっ……」

何も答えることが出来なかった。

私に澄川をとにかく言う権利はない。

あの時私は逃げ出してしまったのだから。

でも、もしかして……私も覚悟1つで変われるのかもしれない。

少しずつ私は考え始めていた。

第36話 「evolike」 （上杉亜衣編）

「……」

「……はあ」

気まずい朝食。

昨日あんな事があつたからいつもより50%増しの重い雰囲気。
私はめっちゃめっちゃ後悔していた。

なんであんな事したんだろう？ ……鬱。

「ごちそうさま」

小さい声で澄川は一言言つと食器を片付け始める。

食器の中はほとんど残っていた。

「食べないの？」

「……うん」

「勿体無い。食べないんだつたら私が――」

『食べる』と言おうとして途中で止めた。

下らない事かもしれないけど、間接。。。なんて意識してしまったのだ。

「ああ、そうだな。勿体無いし……食べてくれるか？」

「嫌」

「は？ さっき『食べないんだつたら私が』って言ったじゃな――」

澄川も言いかけて途中で止めた。どうやら理由が分かったみたい。
無言で食器を片付け始めた。何やってんだろ私達。

このまま家にいても気まずいだけなので、いつも通り病院へ行く
事にした。

しかし、行つて後悔する。

美世の顔見たら余計に澄川の事を考えてしまった。

「それでね……ん？ 亜衣ちゃん？」

「はあ……」

「亜衣ちゃん、聞いている？」

「え！？ あっ、うん！！ 大丈夫、大丈夫！！ 未遂だったから！」

私は焦って変な事を口走る。

美世は怪訝な表情を浮かべた。

「何の話をしてるの？」

「いつ！？ ……ごめん、話聞いてなかった」

「亜衣ちゃん、何か変だよ」

「そ、そう？ まあ、それは置いておいて……何の話だっけ？」

「もう、誤魔化さないでよ。あのね、私、明後日で退院できることになったの」

「マジで？」

「うん！！」

「おめでとう！！ 良かった、良かった！！」

「それでね。私、退院したら、もう一回澄川君に告白し直そうと思うの」

「は？」

「それでね……ふられようと思うの」

「何言ってるの？」

「仕切りなおし。この前は正攻法じゃなかったから。スタート地点の確認」

「そんなことしなくてもいいじゃない。今のままで十分……」
美世は首を振る。

「このままじゃあ、また自分の気持ちだけ伝えるだけの空回りだよ。この前のことで分かった。もう少しハッキリと人を好きになりたいの。自分の事だけじゃなくて相手のことまで考えて好きならなきゃ」

って気付いた……ただ『好き』って伝えるだけじゃ駄目なんだよね
そう言う美世の目は、ふられようとしてる人の目じゃない。
これから起こることが楽しいことのように輝いている。

「ふーん、じゃあきつと美世の中で『好き』が進化したんだね」

「えっ？ 進化？ うん、そうかも……」

何気なく言った私の言葉に美世は自分に言い聞かせるように呟く。
素直に彼女が羨ましく思える。

そういうことだね、相手の事も考えて……昨日の自分を思い出した。

私が辛いからって澄川に無理やりその気持ちをぶつけようとしたんだ。

私……謝らなきゃ。

「亜衣ちゃん!!」

「えっ!？」

「もう、また話を聞いてない」

「……ごめん」

しばらくして私は夕食を作る当番だということもあり、家に帰ることにした。

家に帰ると澄川が夕食の準備をしていた。

「おかえり」

「あれ？ 今日、私の当番じゃなかった？」

「そうだけどさ、なんか落ち着かなくて……それにまた上杉が家に帰ってこないかもしれないし……」

「……」

いつもの私ならここで食って掛かるところだけど、今日はそんな気分になれなかった。

「ごめん、私がいると迷惑だね」

「ええっ！？　なんだよいきなり」

私の言葉を聞いた澄川は大げさに驚いた。

「頭でも打ったか？」

「んなわけないでしょ！！　あの……その……あれよ。結局何も無かったけど、あんなことになったし……」

「ああ……」

「だからこのまま一緒に暮らすっていうのは……」

昨日の事は澄川も意識せざるおえない出来事だったのだと思う。

私は俯き、二人とも黙り込んでしまった。

「やっぱりよくないよ……『この家を出る』とハッキリ言おうと思っ
った。」

決心して私が仰向いた時、澄川から声をかけてきた。

「馬鹿馬鹿しい」

「っ！？」

「ホントにバカバカしい」

「何？　私は本気で言ってる……」

「まあ、ちよつと待て」

澄川は私の言葉を遮った。

「あのさ僕達はそんなに意識しあうような関係でもないだろ？　も

っと、こう……なんていうか友達？　なんか違うなあ……兄弟？

ありえない。うーんと、平たく言っと……漫才の相方みたいな……」

「全然、平たく言ってるだけ……」

「うーんと、居たら居たでウザいけど、居なかった居なかったで何か物足りないような……そんなつかみ所の無い関係って言うか……」
腕を組みながら本気で考え込んでる澄川が何だか可笑しかった。

「いい。もう、考えなくていいよ。そうだね、私勘違いしてた。うん、そうだ。私はアンタに毒づいてこそ私なんだ！！」

「いや、それは困るが……」

何だか気持ち少し楽になった。思い込んでいた私がバカみたい。

「それにさ、僕、悪くないなって思えてきたし……」

「何が？」

「『おかえり』って言う事」

「！？ そんな恥ずかしいことをズケズケと……」

お姉ちゃんとあんな事があって以来、私の帰る家は無いと思って、独りで気を張って頑張ってきたつもりだった。

でも、いつの間にかここでの暮らしが無くてはならないものになってしまう自分に気付く。

帰る場所…… そう言っているのかな？

そう考えたら…… 何だか涙がこぼれてきた。

止めようと思っても自分ではどうにもならない。澄川は私を見て焦ってる。

うれし泣きなんていままでしたことが無かった。すごく心がくすぐったい。

その後、久しぶりに楽しい夕食をした気がした。

テレビを見ながら冗談を言ったり、残り1つのおかずを取り合ったり、ワイワイ騒いだ。

他の人から見たら、空騒ぎに見えるかもしれない。

いや、空騒ぎでもいい。だって、私は心から笑ったから。

「はあ。なんか疲れた、もう寝るか」

「私、今日はベッドで寝たい」

「なんだよ、いつもは遠慮して床で寝るくせに」

「もう、そういう遠慮は止めたの！！ さあ、どいて、どいて」

「はいはい」

電気が消され、部屋の中は暗くなる。

「……ねえ、澄川」

「何だ？」

「そっちにいつていい？」

「はあ？」

「何もしないから今日だけ」

「上杉、なんか今日は妙に甘えるなあ。……って入って良いなんて言ってないぞ！！」

「いいじゃん、もう入ったし」

「ベッドの意味ないじゃないか」

こういう関係もあるのだなと思った。

なんだか一緒にいたい気持ち。

隣に誰かいるってやっぱり嬉しいんだと思う。

美世には悪いけど今日だけ、今日だけで良いからこうしていたい

……

しかし、現実を私を自由にはさせてくれないようだ。

そしてアレは突然やってきた。

「上杉、お前の携帯が鳴ってるぞ」

「ううん。せつかく、寝られそうだったのに……はい、もしもし——！？」

……意味が分からなかった。

分かったのは有希がやたら泣き声だった事。

ウソでしょ？

そんなはず無いじゃん。

だって今日あんなに楽しく話してたし。

——美世が飛び降り自殺？

第37話 「厄介事」 （真田信治編）

厄介なことになる。

会社の前に止まっていた一台の車を見て直感した。

一時間ほど前、俺は澄川に呼び出され、いつもの喫茶店で待ち合
わせていた。

奴より早く到着した事を後悔しながら、俺はタバコを燻らせる。
すると、少して澄川が姿を現した。

「真田さん、お待たせしました」

「よう、2、3日前までキャンプに行っていたそうだな」

「……うん」

「まあ、いい。わざわざオレを呼び出して用事とは一体どういうこ
とだ？」

コイツがキャンプへ行つて一騒動起こした事はすでに知っていた。
おそらく呼び出したのもそれに関連する事だと思う。

「単刀直入に言うよ。浅野美世さんのオプション契約を解約して欲
しい」

「はあ？」

「簡単にできない事もわかってるよ。でも——」

「それが失敗した事への言い訳か？」

「違う！！ もう、彼女は死ぬことを望んでないから……」

「ふう……」

こうなる事は薄々分かっていた。

所詮、思春期にありがちな厭世感による死にたい願望だ。

男が出来たりすれば変わるもの。ましてや、浅野美世は澄川に恋愛感情を抱いている。

ある程度、コイツと仲良くなれば死にたい気持ちなど解消されるものだ。

馬鹿馬鹿しい気持ちで一杯だし、面倒なことにならずに安心した。わかった。だが、家具代金の返金には応じられないぞ」

「はい、もし彼女が返金を望むなら僕が代わりに立て替えます」

「……なんだと？」

「どうしたんですか？」

「……いや、何故そこまで浅野美世の肩を持つのかなと思ってな」

「別に他意はありません。彼女は死ぬ気なんて元々無かったですから」

「ほう……」

「僕も望まれない人殺しは嫌なだけです」

「……ふん」

『望まれない人殺しは嫌』だと？

澄川、言うようになったじゃないか。

コイツが変化していくことにオレは少し腹立たしい気持ちが湧き上がる。

「それを皐月が聞いたらどう思うかな」

「彼女は関係ない」

完全に調子に乗ってやがる。

ここは1つ言っておかないとマズイな。

「……お前は相手が望む望まざるに関わらず仕事をこなせばいい。いつから仕事を選び好みできる立場になったんだ？調子に乗るな」

皐月を……愛する人を刺した。

オレはそういうお前が気になるんだ。

他の事柄に気を取られては困る。

知りたいのだ。なぜ愛した人間を刺す事が出来る？

「だが、浅野美世の事に関しては考えておく」

「……あ、ありがとう!!」

今まで光彦以外は大きく感情を見せなかったコイツが喜ぶ姿になり違和感を覚えた。

おそらくこれは浅野美世から影響を受けたモノではない。

浅野は感情表現がここまで露骨には出ない。

……一体誰だ？

「それともう1つ。上杉亜衣についてなんだけど……僕としてはもう少し監視がしたいと思ってる」

「なに？」

「特に何も指示が出ていないからこのまま継続で……」

そうか、人殺しの現場を見ても臆せずにはオレに突っ掛かって来た

……上杉亜衣。

アイツの影響か……

「監視はもういい」

「え！？ でも——」

「これは上司命令だ」

「……はい」

「もう少ししたらお前にも仕事を回す、今度は失敗するなよ」

「……」

久しぶりに仕事の話を持ちかけたのに澄川の反応は良くない。

「どうした？ 嬉しくないのか？」

「嬉しいなんて一度も思った事は無い。でも、仕事だから……」

そうだ、こうやって殺人を悩むこいつの姿を見るのも興味深かい。

あの時のオレと同じだからな……

「連絡は後日する」

オレは喫茶店を出た。

そのまま、『Thread winter』へ向かう。

夏休み中はここへ毎日勤めなければならない。
今現在オレはエージェント業をしていて、基本的には殺しはしない。

澄川の取りこぼしを始末するぐらいだ。

そうせざるを得ない理由……情けない事にオレは殺せない種類の人間が出てきたからだ。

それは――

「……っ!？」

貸しビルの前に一台の車が目に入った。

外国製の高級車。

かなり頑丈に出来ていて、少々の火器では傷つけることすら難しいという話だ。

こんな車に乗ってくるのは一人しかいない。

こうして現在に至るわけだ。

俺はため息を一つつくと、エレベーターで3階へ。

会社のドアを開けると事務所全体から緊張感が漂ってきた。

受付の有田がオレに小声で話しかける。

「さ、冴木社長がお見えになっています。お、奥の応接室で真田さんをお待ちです」

「フン、そんなのこの雰囲気見れば分かるさ」

急ぐでもなくゆっくり歩いて応接室へ向かう。

途中、他の社員の視線がオレに集まる。

「厄介な事をしでかした」という非難と「可哀相に」という同情の視線だった。

つまり、社長とはうちの会社ではそういう存在なのだ。
俺はノックをし、応接室に入る。

「真田です」

「やあ」

二人の屈強な男に挟まれて、奥には華奢な男が座っていた。

「真田、久しぶりだね。元気だった？」

「はい、お陰さまで。社長もお元気そうでなによりです」

社長とは言い難い、服装もカジュアルな服装。

幼さは残るものの日本人離れした整った顔。表情はいつも笑顔を絶やさない。

コイツの本質を知らなければ、きっと憧れの対象にもなるだろう。

「社長だなんて止めてよ。昔みたいにもっと偉そうにさ……真田？
何だか表情硬いよ。警戒してるの？」

「いえ、そう言うわけではありません」

「ふーん、まだあのこと根に持ってるのか？」

「……何のことでしょうか？」

「まあ、どうでもいい事だよね」

「くっ……」

「いいねえ。その反応」

“どうでもいい事”か……

コイツはオレの表情を見て楽しんでいた。

「今日来たのはね、真田が凄く楽しい事をしてるって話を聞いたからなんだ」

「楽しい事ですか？」

「わざわざ殺してくれって依頼してきた人がいるらしいじゃない」

「まずい、浅野の事か！？」

「真田さーん、駄目だよー、こんな楽しいオモチャを僕に内緒で遊ばうだなんて」

「……」

「しかも、高校生なんだって？」

「……」

「今日ね、会ってきちゃった」

「なっ!？」

わずかにオレは表情を崩してしまった。
それをコイツは見逃さない。

「心配しないでよお、お見舞いに花束を渡したただけだつて」

「……それで、私にどうして欲しいと？」

「残念だなあ。もう会話を楽しむ余裕もないの？ まあ、いいや。
その子たしか美世とか言ってたっけ？ 彼女が殺されるところが見た
いなあ、殺してよ」

「そ、それは……」

「あつ、そう言えば真田は女の子を殺せないんだつたね。忘れてた
よ」

わずかに口元を歪めながらオレをじっくり観察している。

「はい。ですからこの依頼は断る——」

だが、冴木はオレの言葉を遮るように話し始めた。

「でも、大丈夫だよ。自分の代わりに人殺しをする手駒を二人も
飼ってるんだから」

「はい？」

「僕が知らないとも思った？」

「いえ……」

「これってウチの会社の性格上イケナイ事なんだよね。部外者を
勝手に入れちゃあヒミツ保持も無いでしょ？」

「……はい」

「このままだとココの事務所もたたまなきゃいけないよあ」
「いや、それだけは……」

「知ってるよね？ 先月潰した事務所のこと」

『Thread winter』はいくつも事務所を持っているが、先月別の事務所での不正事件が発覚し、その事務所は社長命令によつて一日で潰された。

そこに勤めていた社員全員の行方は誰も知らない。

「見せてくれるよね。殺すところ」

「はい……」

「あつ、そうそう、僕の知り合いが今度依頼をしたいんだって。それも真田に頼むよ」

「……わかりました」

「やっぱり真田はいいよなあ。あの時からずっと聞きわけが良いから好きだよ」

「っ……」

どうしようも無い事は存在するものだ。

……自分に言い聞かせてみる。

あの時だってそうだった。

第38話 「はにかんで軽蔑」 （真田信治・過去編）

二年前の三月。

冴木社長が死去し、オレは『Thread winter』の上
司と共に告別式に参列していた。

といつても、オレ達のような下の人間は末席に連ねるだけだった
りする。

「真田君。ホントに惜しい人を亡くしたよ……これでも昔は社長に
はお世話になつてね……『Thread winter』がまだ小
さい企業だったころの話だ」

遠くに見える社長の遺影に目を凝らしながら、白井課長は話す。

「オレは会社が大きくなつてからの入社なんで分かりかねますが」

「殺しにもポリシーがあつた。氣に入らなかつたり、理にかなわな
い殺しは頑として受け付けなかつた……つと、こんなところする
話ではなかつたな」

冴木社長の話は有名だ。

昔は一流のスナイパーだったという話。

各界の大物とも関係があり、内外問わず色々な暗殺に関わってい
るという話。

引退後はそのコネクションを生かして、人殺しの会社を創業する
に至つた。

今では生業が人殺しでなければ、ビジネス書やテレビの特集にな
つてもおかしくないぐらいの成功は収めている。

まあ、オレはそのしがない社員なわけだが。

『Thread winter』入社の経緯は他人に話してもし
ようがないから、誰にも話すことは無いだろう。

白井課長の社長話が佳境に差し掛かつたところで、中断せざる終

えない出来事が起きた。

「お父さん!!」

最初は気付かなかったが、何度か「お父さん」と呼ぶ声にオレ達は振り返る。

呼んでいるのは高校生ぐらいの女の子だった。

ふと隣にいる白井課長を見ると傍目にも顔色が明らかに変わっているのが分かった。

「優、何故ここに」

「白井課長、お知り合いですか？」

「ああ娘だ。……とにかく真田君手伝ってくれ」

「え？ 何を――」

オレが課長に尋ねようとしたが、わざわざ訊なくても理由はすくに分かった。

白井課長の娘は父親を確認するや否や大声で叫びだした。

「ココが冴木謙二郎の葬式ってわけ？ たかが人殺し社長の葬式1つでご大層なものねッ!! こっちは死んでくれて清々し――ウグッ、ソーッ……」

慌てて口を押さえ上半身を抱える課長。

オレは素早く足を持ち、迅速に外へ運んだ。

「――ソーッ!! ウー……ッ!!」

抱えられながらまだ何か吼えている。威勢のいいガキだ。

そして告別式場からかなり離れた川岸でようやく、白井課長の娘を解放した。

解放した途端、白井課長の娘は父親へ怒鳴りだす。

「人を抱えて連れ出すなんてどういっつもり!!」

「優……」

「それにアンタ!!」

課長の娘はオレを指差した。

「いきなり女子高生の足を持つなんてどういう了見なわけ？ 信じられない！！」

「……うるさいガキだ」

「はぁ！？」

課長がいるにかかわらず、オレは思わず呟いてしまった。

それを聞いた課長の娘は顔を真っ赤にして何やら怒鳴っていた。課長が苦笑いしながらなだめる。

なんとか課長のお陰でしばらくして、落ち着いた。

「真田君、紹介するよ。娘の優だ」

課長に促され渋々挨拶する課長の娘。

「優です……」

「ああ、オレは真田信治。君のお父さんの部下です」

すると課長の娘は瞳を大きくしてオレを見つめた。

なんだ？ 何か気になる事でもあったのか？

「……と言う事はアナタも『Thread winter』の社員なんですか？」

「まあ、そう言うことになる」

「だったら……」

「？」

「アナタを軽蔑します」

課長の娘……優はハッキリと言い放った。

「ゆ、優！！ なんて事を！ す、すまん真田君」

「構いませんよ」

「フンッ、私、謝らないから！」

「娘は……私が言うのもアレなのだが……私の仕事が気に食わないのだよ」

「そうでしょうね、見れば分かります」

「ちなみに……4月から創野高校への入学が決まっていますなあ……」

「は？」

「真田君、よろしく頼む」

「……わ、わかりました」

オレは『Thread winter』の仕事以外に会社が経営する私立創野高校の教師もやっている。殺害場所の確保ということが主な目的だ。

教師なら学校にいても不思議ではないし、なにより普段は『Thread winter』の業務から外れる事が出来るというのが魅力でもある。

オレがため息交じりで目をやると、彼女はオレに敵意むき出しで睨みつける。

「はあ……」

優の初対面はこんな感じだった。

なんだかんだで四月。優は本当に入学してきた。

しかも、狙ったかのようにオレは優がいるクラスの現国担当になった。

授業中、ずっと睨まれる……少しシンドイ。

今まではこんなことはなかった。

それまでは生徒自体がオレを見下していて授業などマトモに聞いていない。

だが、全然ショックではない。オレは元々生徒の事などどうでもいいからだ。

独りで授業を始め、独りで授業を終える。

さらに優は初め睨み付けていただけだったが、次第に授業に参加するようになった。

「真田先生、質問があります」

「はい、白井さんどうぞ」

「この友人は自分の知らないところで主人公に好きな人を奪われたことが原因で自殺したのですよね？」

「……そうですね」

「そして主人公は自責の念にさいなまれている」

「はあ……」

「先生ならどうですか？ 仮に！！ あくまでも仮にですよ！！」

先生が『人殺し』をしたたとして、やはり自責の念は抱きますか？

お答えくださいっ！！」

「いや……先生は……人を殺したことが無いから分かりません」

いつもこんな感じで優はオレにケンカを売ってきた。

いつ間にか学校にいる出来る限りの時間、彼女はオレの監視（？）を続けていた。

「白井さん」

「……」

「そんなにオレの背後でウロチョロされても迷惑なんだけど……」
すると観念したのか物陰から優が顔を覗かせる。

「う~~~~~」

「んな睨むなよ」

「先生はいつ人殺しをするんですか？」

唐突に何を言い出すんだコイツは。

「君には教えられないな」

すると優は俯き呟く。

「ウチは決まっています……というか分かります」

「……」

「父の目つきが違います。ああいうのを血走ってるっていうのでしょうか……そんな姿は見たくないんです……なぜ、人殺しなんてするんですか？」

彼女の話聞いて思わず舌打ちが漏れそうになる。

……だから子供は嫌いなんだ。物事の良し悪しを何でも割り切れると思っただけやがる。

オレ自体は人を殺すことについて何も考えていない。

動なるモノが静に変わる瞬間が堪らず好きなだけだ…… ホントどうしようも無い人間だという事も自覚している。

だが、それが何だと言うのだ。
殺して欲しい人間がいて、ただ殺しがやりたい人間がいる、ただそれだけだ。

生きてる意味を探しているガキには人の生死自体には意味がないと説いても徒勞に終わることがわかりきっている。

だが、なにか答えないといけないんだよな。

白井課長の部下として、彼女の教師として。

「あのさ……」

「はい」

何故だか急に畏まる優になんだか少し緊張してしまう。

「父の仕事を尊敬しろなんていわない。でも、君のお父さんはオレなんかと違って、仕事を慎重に選んでいる」

「……」

確かに白井課長は違った。単なる怨恨のみの殺人は決して受けない。

だからウチの事務所は殺人よりも家具単体の売り上げが全体の売上のほとんどを占めている。

「人は誰だって少なからず迷いながら行動する。それがどんな行為であっても。『今からする事は間違いかもしれない』って思う。でも、それは一側面でしか見ていないからなんだ。完全なる良い事なんて存在しない。その逆もまた然り」

「じゃあ、人殺しにも良い面があるのですか？」

「分からない」

「そ、即答ですか……」

「分からないから、『自分にとっては正しい』と思って人は行動していくしかないんだ……人を殺すことによって救われる人も少なからずいることを忘れないで欲しい」

人を殺して救われる？

そんな事例はほとんどないがな。

自分で言って自分に毒づいた。

「……分かりました……いえ、ホントはまだ分からないですけど……

……少なからず、もう少し考えてみようとは思いますが」

そう言つと優は考え込むように歩いていった。

いつか、実はそんな事には答えなんて無い事に気付くだろう。

それ以来、優はオレを睨みつけることは無くなった。

しかし……

「白井さん」

「はい」

「いつまでオレの周りをつけているんですか？」

オレの周りをウロチヨロすることは止めなかった。

物陰から少し顔を出し、はにかみながらこつちを見た。

「……知りたいんです」

「何を？」

「先生のこと」

「……はあ？」

なんだか妙な方向へ話が流れ出した。

第39話 「思っただけ」 （真田信治・過去編）

「真田先生、お弁当美味しい？」

「いや……」

「特にね、この里芋。美味しいでしょ？頑張って作ったんだから」

「あの……」

「あれ？先生、里芋が嫌い？」

「……白井さん」

「優って呼んでいいですよ」

「そうじゃなくて。なんでオレが君の弁当を食べなくちゃいけないんだ？」

昼休み。何故か白井課長の娘、白井優と一緒に弁当を食べてる。

「大事な話がある」とか言われて来てみれば、この状況だ。

「だって先生、職員室で寂しそうに座ってるから、助けてあげたの」

「別に寂しいなんて思った事は無いけど。それに君こそクラスの友達と食べた方が楽しいんじゃないのか？」

「いいの、いいの」

優は持っている箸を左右に振ってオレの話に取り合わない。行儀が悪いし。

「よくないだろ（オレが良くない）」

「私、クラスで浮いてるから……ほら、真田先生の授業で発言しまくりでしょ？誰も聞いてない授業に首突っ込んでちゃあ、皆も相手にしてくれないよ」

「ああ、そうなんだ……」

オレ自身にはまったく非が無いとと思っているのだが、少しでも責任を感じたほうがいいのだろうか？

別に今までと違う授業をしてるわけでもないし、コイツが一方的

に質問してくるから、勝手にそういう状況になっただけだ。

でも、優の自嘲気味の発言を聞くと何だか悪い気がする。

オレが悪い？　これが良心の呵責？

人殺しのオレに良心？

……バカバカしい。

「でも、先生の授業は楽しいし、こうして今もお昼過してるし……」

「だが、こんな状況見つかったら学校でも問題になると思うが」

「大丈夫、大丈夫。だからココで食べてるんだから」

「……あんまり気分のいい場所ではないな」

オレ達が食べている場所。

それは……『Thread winter』の仕事をする場所。

つまりは人殺しの場所……開かずの教室。

優が一方的に話しながら昼休みは過ぎていく。

しかし、話が一段落すると彼女は急に黙り込んだ。

「どうした？　ネタ切れか」

「そうじゃないけど……」

彼女はオレの顔を伺いながらおずおずと話し出す。

「あの真田先生。聞きたい事があるんだけど……」

「何だ？」

「最近、お父さんの様子が変なの。人殺しをするときのような様子の变化じゃなくて……もっと、こう疲れてるような……上手くはいえないんですけど……」

「白井課長のこと良く見てるんだな」

「えっ！？　そりゃあ親子二人暮しだから……」

「……心配は要らないよ。仕事が今、少し忙しいだけだから。もちろん、人殺しの方じゃなくて家具を売る方だけ」

「そうですか……」

優は釈然としない様子で一応頷いて見せた。

実際、白井課長だけじゃなくてウチの事務所自体が大変な時期だった。

その原因は冴木社長が死んで就任した2代目社長にあった。

冴木謙二郎の息子、冴木恭介。まだ大学に通う弱冠21歳。

社長就任には賛否両論あったが、反対を唱えたものはその日のうちに全員始末された。

すべて冴木恭介の指示によるものだと言われている。

就任早々、冴木恭介は会社内の改革に着手した。

まず、各事務所に一任されていた経営を本社のコントロール下に置き、売上の内容を厳しくチェックし、各事務所に本社の方針を押し付けた。

もちろんウチは決められていた金額を満たしていたのでこの場合は問題なかったように見えた。

しかし、家具売上がほとんどを占めたことが気に入らなかったらしく、殺人の仕事を増やすようにと指示をだし、売上に占める割合まで指定してきた。

そして、次に手を出したのが殺人依頼の審査基準と料金だった。

もつと一般人が気軽に殺しの依頼が出来るようにと審査基準を甘くし、料金もかなりの値下げをするようにと指示。何十万という金で殺しをする事務所も出てきた。

皮肉にもその改革が功を奏し各事務所の売上は上がっていき、ウチの事務所だけが取り残されていった。

所長の指示にも関わらず白井課長が頑として受け付けなかったからである。

家具売上だけでなんとかしようと白井課長は必死に働いた。

しかし、家具だけの売上と、家具と殺人料金の売上では差が開く

一方だった。

そんな姿を見かねてオレは白井課長に言った。

「白井課長、オレが学校辞めて殺し専門にやりますよ。そうすれば事務所の人間も迷惑掛からないし」

「……ありがとう、真田君。だが、もう少し頑張ってみたいのだ。殺しなんてしなくても私達はやっていける。今でだってそうだったんだ……きつと上手く行く」

白井課長も先代の社長と一緒にやってきただけに人を殺す仕事については毛嫌いしてるわけでもないはずだった。

実際、何度か大きな仕事をしたときの事を興奮しながら話している姿を何度も見ている。

「娘さんの事を気にかけているのですか？」

「……ああ、そうかもな。やはり、娘に負い目を感じて仕事はしたくないものだ」

オレには子供はいないが、子を思う親の気持ちは理解できなくも無い。

「だったら、オレも平日営業に――」

「駄目だ。君は教師を続けたまえ」

「でも――」

「真田君、最近娘と話す機会は減ったが、それでも娘と会つと……優は君の話しかせんのだよ」

「はあ……」

「親バカと言われてもいい……優を頼む」

「……はい」

最初は子守のつもり……白井課長の代わり。

課長との話しがあって以来、なるべく彼女に関わる事にした。

授業も彼女向けて行つ。どうせ誰も聞いてないのだから構わない。オレのそういつた行為に彼女も答えてくれた。

優の反応は楽しかった。感情表現が豊かで表情がころころ変わる。何でもないことに泣いて、笑って、怒って、また笑って……雨が降るだけで不機嫌になり、弁当が美味しいといえば、これでもかというほどの笑顔を見せるし、テレビドラマについて熱く語りだしたと思うと、感動したシーンの話では泣き出したりする。

そういう何でもないことに包まれる事が、オレは居心地の良いモノだと知った。

優といると……もし、オレの中に心というものが有るとすれば……心の底からジワジワと染み渡る幸福感に満たされるのだった。それは人殺しをする時、一気に押し寄せる開放感や達成感に酔いしれる事よりも充実していた。

だから、事態がここまで深刻だったとは全く気付かなかった。

学校の帰り、特に用事も無かったのだが白井課長の顔が見たくて『Thread winter』へ行く事にした。貸しビルの前に着くと駐車されている一台の外車が目に入った。

見覚えの無い車だった。不思議に思いながら会社のドアを開ける。すると、いつもは活気がある事務所内が静まり返っていた。

とりあえず、受付の有田に尋ねる。

「あれ？今日は静かだなあ。何かあった？それと白井課長は？」

「白井課長は……応接室で所長と一緒に冴木社長と面会中です」

「！？社長が？どうしてここへ？」

オレの言葉に有田の顔がさらに厳しいものになる。

「真田さんは普段は事務所にいらっしやらないから分からないと思いますが……とうとう3ヶ月連続で決められたノルマを達成できなくて……」

「まさか白井課長、あんなに頑張ったのに……」

「いえ、金額的には達成しています。でも、内訳が……」

「人を殺し足りない？」

有田は頷く。

「……オレ行つて来る」

「えっ！？　ちよと、真田さん！！」

オレはノックをしようと応接室の前で立ち止まる。

室内から白井課長の声が聞こえた。

「何故ですか？　金額的には何の問題も無いでしょう？」

「まあね……」

「会社を大きくするには殺人だけじゃないでしょう？」

「白井君、社長に対して何ということをし！」

白井課長が社長を説得していて、所長はおろおろしてるって感じだな。

とか考えてたら中に入るタイミングを失った……もう少し聞いてみるか。

「あんた……白井課長だっけ？」

「はい」

「僕は会社を大きくするつもりなんて無いよ」

「えっ？」

「君達在必死で人を殺すことが重要なんだよ。」

「本気ですか？」

「うん、もちろん。だからねえ、この事務所潰しちゃおうかなって思うんだ」

「——っ！？」

「もちろんクビにはしないよ。会社の事が他に知れても嫌だし。会社は僕のおもちや箱なんだから……だから皆には少しずつ死んでもらおうかな」

「……！！」

なんなんだコイツは……本当に人なのか？

オレはますますドアを開けるのが躊躇われた。

「まつ、待つてください。来月こそは必ずノルマを達成しますからっ！！」

所長が必死に社長を説得し始めたみたいだ。

「でも、3ヶ月駄目だったし。来月頑張るからって、ペナルティーも無しじゃねえ……」

「分かりました、ペナルティーは受けますっ！！ですから来月にもう一度チャンスを……」

「いいよ」

「えっ！？ ありがとうございますっ！！ ほら、白井君もお礼を言いなさい」

「……ありがとうございます」

「実は僕、ペナルティーを与えたくてココへ来たんだから。もう、所長さん言うの遅い」

「はぁ……」

「あのね僕の父親の告別式ときに、『死んでくれて清々した』と大声でどなった人がいるって小耳に挟んだんだ」

「！！」

しまった、優のことだ。

「もう誰かは分かっているんだけどね。白井課長も知ってるよね」

「……はい」

「それってヤッパリ拙いよねえ。僕も気分良くないし。だから……」

「っ」

「その子を殺してくれる？」

「なっ！！」

冴木社長は最初からこれが目的だったんだ。

オレは目の前が真っ暗になるような感覚に襲われた。

優が殺される……

「それは……」

「事務所にいる人達の命と娘一人の命、どっちが重いんだろうね」
「くう……」

「あはは、もつと悩んでよ白井さん、僕それを見たいんだ」
狂ってる。コイツは他の人間と何かが違う。
そう感じずにはいられなかった。

「……では2、3日考える時間を……」
「駄目。今答えて」

声だけしか分からないが社長は確実に白井課長を追い詰めていた。
オレはただ白井課長が上手く切り抜けることを期待していた。

そして、長い沈黙の後、白井課長の搾り出すような声が聞こえた。
「……承知しました」
「ホント？ 嬉しいなあ。もちろん殺すのは白井課長がやってね」
「……」

オレはドアの前で舌打ちした。
この仕事をやっている身分で殺しは駄目だなんて言えた義理ではないことは百も承知だ。

でも、優だけは……だが……
オレは自然にドアのノブに手をかけた。

ドアを開くと三人の姿が見えた。
言う言葉は決まっていた。

「オレにやらせてください」
「君誰？」

「優が通う学校の教師です」
「真田君！？」

「へえ……教師が生徒を殺すかあ。……いいねえ。それでもいいよ」
「ありがとうございます」

どうしようもない事なら自分の手で幕を引きたい……そう思った
だけだ。

第40話 「失うという事」 （真田信治・過去編）

ずっと取り巻いていた緊張感を解き放つときが来た。
慎重にではなく迅速に相手の背後に回りこみ、最初の一撃を背中に与える。

大抵の人間ならまだ何が起こったか判らない。
相手の振り返りざまに首筋めがけてナイフを一振りする。一連の動き。

首から勢い良く飛び散る血飛沫を必死に抑えながら崩れ落ちる体。
不規則な呼吸音とオレを見つめる目。

黙ってその目を見つめる……と言うより目が離せなくなる。
コイツが今までどんな人生を送ってきたかなんでどうでもいい。
白井課長なんかはそういうものに敬意を払ったりすると言っていたが、死に逝くこの塊に何を思えばいいのか。

やがて人と呼ばれた塊は動かなくなった。
死亡した事を確認し、死体回収班が来るのを待つことにする。
しかし、オレの耳に不規則な呼吸音が聞こえた。
振り向いて死体を見る。さっきのまま動いてはいない。
そこでようやく気付く……ああ、これはオレの呼吸だ……
すると、オレの中で開放感や達成感が一気に押し寄せる。
初めての殺人……父親を殺したときからこんな感じだった。
今までの殺人。仕事のすべて。
これからもきつとそうに違いない。

「先生から休みの日に映画を見に行こうって私を誘うなんて変だよ

ね」

「そうか？」

「なんか企んでない？」

「別に」

優は真っ直ぐにオレを見つめる。

もちろん目的は冴木社長との約束……優を殺すこと。

すぐに殺すことも出来たが、事務所スタッフの代わりに死ぬ彼女へ何もせずに殺すのは悪い気がした。

なぜだか優といると自分に責任を感じて甘くなってしまう。

これはオレがコイツの教師だからなのか？

それとも……

「ふーん。まっ、いいか。で、先生何を見るの？」

「何が良い？」

今日だけは彼女の好きにさせたくて気を使ったつもりだったが……

「呆れた。先生、決めてなかったの？」

「いや、お前に決めてもらおうと思って……」

「そういうの駄目なんだよ、先生！！ ころいうときはビシッと男の子が決めなきゃ」

「男の子って……」

「でも、今日のところは私が決めるね。それとも一つ
「何だ？」

「今日は先生って呼ぶの止めていい？」

「は？」

「ほら、街中で先生なんて……何か怪しいでしょ？」

「ああ、なるほどな」

「ね？ 良いでしょ、良いでしょ？」

まるで散歩をねだる犬のように期待に満ちた目でオレを見る。

「……分かった」

「やった〜、じゃあヨロシクね、信治♪」

「下の名前で呼ぶな」

「ケチ!!! だったら先生って大声で言ってるっ!!! みんなに誤解させるんだ〜!!!」

「……チツ…… 今日だけ許す」

「マジっすか?!」

「……マジ」

「やったー!!! じゃあ、私の事も優って呼んでいいよ」

「遠慮しておく」

「ええ〜っ!!!」

映画館に着くと、優が選んだ作品を観る。

青春恋愛ファンタジーと銘打っている訳の分からないものだった。内容は高校生の魔法使いが自殺する女の子を助ける話…… だったような気がする。

優は真剣に映画を見ていたが、途中でオレは退屈になり耐えられなくなって寝てしまう。

やがて、館内が明るくなりオレは目が覚めた。

寝てしまったので優はきつと怒っているに違いない。

……しかし、その心配は無用だと分かる。

右腕に重みを感じて見てみると、優がオレに寄りかかって寝ていたのだ。

あれだけ真剣に見てたのに寝るなんて、よっぽどつまらなかったのだろうか？

優に確かめようと話す。

すると、オレには考えも付かない答えが返ってきた。

「二人で見る映画って、後で内容について話するのが楽しいでしょ？ でも、信治は寝ちゃったし…… だから、後で二人して寝てしま

った話が出来るように私も寝たの」

「スマン寝てしまって……映画に來た意味なかったな」

「そんなことない、楽しかったよ。信治に腕に寄りかかることできたしね」

「あつ……」

「何？」

「いや、別に……」

オレは一瞬、考えてはいけな事を考えてしまった。
慌てて打ち消す。

この後も優の行きたいところへ行く。

それは、若い奴がたくさんいる服屋（↑ものすごく居づらい）だったり、ボーリング場だったり、カラオケだったり……

今日という日が続く限り彼女のリクエストに答えた。

しかし、終わりというものはやって来る。

オレ達が最後に向かう場所は決まっていた。

「なあ、優。最後に学校へ行かないか」

「え、なんで？」

「……大事な話があるんだ」

「うん……」

優はオレと地面を交互に見ながら考えていた。

「……駄目か？」

「うん。いいよ、行こ」

どうせ終らせるならあの教室が良いだろう。

オレにとっても優にとっても……

学校へ行く途中会話はほとんどなく、ただ歩く。

しばらくすると優はオレの腕にしがみつくようにくっついてきた。

「おい、どうした？」

「少しだけこのままで……」

徐々に緊張感が取り巻く。
オレの中で人殺しの準備は着々と進んでいた。

ついに学校へ着くと、オレ達は開かずの教室へと向かう。

「休みの日の教室ってやっぱり静かだね……ってこの教室はいつも静かか……」

「そうだな」

慎重になってはいけない。そんなことは分かっていた。

ここは思い切りとスピードが要求される。

だが、オレはタイミングを失った。

「大事な話って何？」

「それはな……」

「どうしたの？」

「いや……」

考えるな、消えろ、ためらうな。

一瞬だ。一瞬。

一瞬で全てが終わる。

「——くっ」

「先生、あのさ……」

「ど、どうした？」

「今日はありがとう」

「え？ ああ……」

「それでさ、やっぱりこの教室に来るって事は……」

わずかだが優の声が震えていた。

「私を殺すの？」

「……」

その言葉に突き動かされるようにオレは動く。

足を掛け、押し倒し馬乗りになる。

「えっ、先せ——」

しかし、そこでオレの動きは止まってしまつ。
今一番してはいけないこと……
躊躇をしてしまった。

「……くっ……うっ……」

「ねえ、先生？」

「……」

「いいよ」

「っ！！」

「先生に殺されるんだつたら……いいよ……」

「ああっ……」

「先生、前に言つたよね……『人殺しをして救われる人もいる』つて」

「……」

優は笑顔を必死にみせようとしている。

オレはどうする事も出来ない。

「先生が私を殺すつて事は……お父さんも知っているんでしょ？」

——もういい、何も言うな。

「だからきつと、私が死ぬことにも意味があつて……それは、誰かを救いたいからなんでしょ？」

——止めてくれ。

「何となく先生から映画に誘われたときから覚悟してた」

「……」

「先生、だから——」

「いい加減にしろ……」

「えっ！？」

「さつきから、先生、先生つてうるさいんだよ……」

「先生……？」

「オレはお前の先生なんかじゃねえ！……ただの人殺しだ！」
「でも……」

「お前を殺すことに意味なんてねえよ……意味なんてあつてたまるか!!」

オレの目から何かがこぼれた。

それは久しく見ていなかったもの……涙だった。

「……先生」

何故？

何故なんだよ!!

こんなにも目の前にいる人間がいなくなることを怖がるなんて!!

「早く、私の気が変わらないうちに」

やっぱり、できない!! 失いたくない!

だから、だから……

オレが出した結論は……

「……逃げるぞ」

「え？」

「オレが別の人間殺して誤魔化すから、お前は逃げるんだ」

「でも……」

「映画見た後……お前を見て考えてしまったんだ。これが明日も続けば良いなって……」

「先生。ああ……」

「だから……逃げるぞ」

「……うん」

優の手を握って体を起こす。

照れながら起きようとする優。

オレもつられて少し笑った。

心の繋がりを感じた瞬間――

銃声がした。

「!？」

反射的に振り向くとそこには……

「し……白井課長」

すぐに右手が引つ張られる感覚。

握っていたはずの手が離れる。

優は崩れ落ちるように倒れた。

「優……！」

「あゝヤッパリ、君じゃあ駄目だったね。白井課長に頼んで正解、正解」

聞きたくない声の方向に目を向けると、白井課長の後ろには冴木の姿が見えた。

「せ……先生……痛いよ……痛い……よ……」
「……！」

すでにオレの足元まで血溜まりは広がって、優の顔面はすでに蒼白で軽い痙攣も起こしていた。

「ゆ……優」

「そこをどけ！」

背後に感じた気配に振りむくと、いつの間にか白井課長が近づいていた。

課長はそのまま躊躇せずに数発発砲し、オレの真横を弾丸は通過していく。

何度か衝撃で優の体は跳ね上がった後、まったく動かなくなった。

「良くやったね、白井課長。イイものを見せてもらったよ」

「……はい」

「それにしても、真田は駄目だなあ」

嘲笑う冴木を見て……ジワジワと殺意が芽生える。

「真田には後で殺せなかった責任を取ってもらっよ」

「くっ……」

オレはポケットのナイフを握り締め、少しだけ踵を浮かせる。

殺す準備は揃った。

しかし、横からの風圧を感じた瞬間、オレは殴り飛ばされた。

「この馬鹿者がっ!!」

殴ったのは白井課長だった。

オレは何が何だか分からなかったが、そのまま課長はオレの胸倉を掴み殴りかかる。

「貴様の勝手な行動で事務所の人間全員の命が無くなるところだったんだぞ!!」

何度も何度も殴り続ける。

オレはどうする事も出来なかった。

……それは課長の涙を見たからだった。

しばらく殴った後、白井課長は冴木に向かって土下座をした。

「真田は優秀な社員です。優を殺さなかったのも上司の私を想っての事。生かしておけば必ず社長の役に立つ男です。どうか、どうかこの白井に免じて許してやっては貰えませんか？」

「うーん、どうしようかなあ。僕、結構、腹立ってるしい。そうだ!! 白井課長は真田の上司でしょ？ だったら白井課長に責任を取って欲しいな」

「……」

「できないの？」

「……わかりました」

課長はこつちを向き、オレにだけ聞こえるように呟いた。

「優を守ろうとしてくれて……ありがとう」

「っ!!」

殴られ続けたオレは動く事が出来ない。

ただ、流れる涙。

そのまま課長は立ち上がり、自らのこめかみへ拳銃をあてがう。

笑う冴木。

響く銃声。

飛び散る血液。

崩れる体。

オレは自分の甘さから一度にたくさんのものを失った。

第41話 「出来なかった人間がなすべき事」 （真田信治・過去編）

優と白井課長のことがあって以来、オレは自宅に閉じこもる。

幸い、学校の方はすぐに夏休みになったため特に混乱は無かった。自分の甘さを責め、同時にもう殺しは出来ないと感じる。

好きだとか嫌いだとかいう感情がココまで自分を支配するとは思わなかった。

あれから二週間経ってもオレは何もする気が起きない。

……それなのに腹が減れば何か探して食っている。

オレだけ生きてる事に対する嫌悪感で一杯だった。

だから、家に入り込んできた男達に気付かなかったというのは言い訳だろうか？

男達は土足で上がりこみ、オレを囲むように立っていた。

「真田信治だな」

「……」

「答える。お前が真田信治なんだな」

「……だったらどうなんだ」

「冴木社長が呼びだ」

「……！……こんな役立たずに何の用なんだ？ もう気は済んだのだろ？」

「お前が詮索することではない。我々も連れてくるようにと言われているだけだ」

「……冴木の犬が」

次の瞬間オレは蹴りを腹部に喰らい、うずくまった。

「言葉に気をつける。我々は“生きて連れてくるように”とは言われていないのだ」

「うう……」

オレはそのまま男達の暴行によって気を失った。

再び目が覚めるとすでに冴木の前にいた。

「目が覚めたのかい？ 心配したよお。死んだのかと思っちゃった」

「……」

「良い目をしているね。今にも僕に襲い掛かりそうだ。好きだよ、そういうの」

「……優と白井課長を殺したんだ。オレの事なんてもうどうでもいいだろ」

「そんなことないよお。僕、真田のことが心配だったんだ。シヨックで自殺するんじゃないかってね。」

「くっ……」

「だから二週間も時間を置いたのに……でも死ななかったね。偉い、偉い」

「……」

「そんな君に御褒美だよ。仕事をあげる。もちろん殺しの仕事」

「……もう殺しは出来ない」

「はあ？ たった女子高校生一人殺せなかっただけで引退かい？

よっぽどだったんだねあの優って子は」

「くっ……」

オレはありったけの力で奥歯を嚙締めていた。口の中が血の味がある。

飛びつけないのは冴木のボディガード達がオレを押さえつけているからだ。

「今丁度、やくざに面倒を起こした人間の始末を頼まれていてね」

「……」

「ねっ、ねっ？ 会社に面倒を起こした君の復帰戦にはぴったりだと思わない？ クソ人間達の尻拭いなんて」

「……断る」

「駄目、君に拒否はできない。君が拒否すると周りの人にどんどん迷

惑が掛かるだけだよ」

「なっ……」

「僕にとつては事務所も学校もどうでもいいんだ。ただ、君達が悩んで人殺しをする姿だけ見ていたいんだ。そして今は君が僕のオモチャってわけ」

「……」

「ハッキリ言っておくけど君は殺さない。君が独りになるまでね」
結局、首を縦に振るしかないって事かよ。
俺はゆっくりうなずいた。

車を走らせて依頼者の場所まで行く。

着いた先は郊外の山中にある依頼者の別荘だった。

玄関先には依頼者の代理人がいた。

つまりは、チンピラ出迎えた。

「アンタか？ 始末してくれるってヤツは」

「そうだ」

「最近は便利になったもんだ。ワザワザこつちが殺してリスクを背負うよりも格安でゴミを片付けてくれるんだからな」

オレは自然に依頼者の首に手が伸びる。

「そのゴミを片付ける事も出来ないクズ野郎は貴様らだろう」

「……苦しい……悪かった。機嫌を損ねたなら謝る……」

「ふん……」

首を絞めていた手を離す、しゃがみ込み咳き込むチンピラ。
その姿を見ながらふと思う。

……じゃあ、そのゴミを片付けるオレは一体なんなんだ？

案内された別荘の地下にある一室にゴミはいた。
ボロボロになった冬服のセーラー服を着た少女。
倒れて動かないが、生きてはいるみたいだ。

周りには注射器やいかがわしい器具が散乱している。

この少女が受けた仕打ちの酷さがうかがえた。

「コイツ、系列の組が持ってた薬を盗んで逃げやがった」

チンピラが蹴り上げると少女は呻きながら目を覚まし、睨むようにこちらを見る。

さぞかし怯えきつた目を向けるだろうと思っていたオレは少し驚いた。

「どうだ？ どうせ殺すんならアンタも楽しんでから……」

「そうだな。じゃあ悪いが出て行ってくれないか。二人きりになりたい」

「じゃあ、終ったら呼んでくれ」

と言い残し、卑屈な笑みを浮かべてチンピラは出て行った。

少女と二人きりになる。

しばらく、無言で向かい合ったが、最初に喋ったのは少女の方だった。

「……どうせまたやるんやろ、早くしたらええやん」

少女は関西訛りのある話し方だった。

高校生ぐらいだったので少しだけ優と重ねてみたが、どうやら全然違うタイプみたいだ。

「別にしたくない」

「は！？ じゃあ、何で二人きりにしてくれなんて言ったん？」

「オレはお前を殺すためにココに呼ばれた」

「……」

初めて少女は怯えた表情を見せた。

地面に座りながら後ずさを始める。

とりあえず、そこら辺にある物を手当たり次第に投げてきた。

次々とオレの体に当たるが、前進するオレにはそれが何の障害にもならない。

何の事はない、二人きりにしてくれと言ったのは殺しに集中した

いからだ。

「嫌や！！　まだ、死なへん！！」

「悪いがオレはこんな仕事さっさと終らせたい」

オレはポケットからナイフを取り出した。

「お願い、見逃して……」

「無駄だ」

無駄。

どんなにあがいたって無駄。

オレだって……そうなんだ。

投げるものが無くなった少女は素早く立ち上がり、壁伝いに逃げる。

「絶対に死なへん、アイツに会うまでは死ねへん」

「それは残念だったな。そいつにはもう会えない」

「っ！！」

部屋の隅に追い詰める。

少女は自分を守るように自分で自分を抱いている。

「……どうせ殺されるんやったら、アイツに殺されたい」

「……」

「今でもきつと公園で待つとる。アイツはそういうヤツや」

オレは不覚にもその言葉に耳を傾けてしまう。

「……そいつはお前の何なんだ？」

「えっ？」

質問された事が意外だったのか、呆然とした顔をオレに向ける。

「どうなんだ？」

「……私を傷つけられるただ一人の男……」

「好きなのか？」

矢継ぎ早に質問をするオレに少女は戸惑っているようだ。自分でもわからない。なぜそんなことを聞く？

……優だったらそうしたからだろうか？

「こつちがそうでもアイツはどうか分からへんけどな……」
「ほっ……」

もう一人のオレが今浮かんだ考えを『無駄だ。コイツは逃げたいだけだ』否定する。だが、すでにコイツの答えを否定するすべを失っていた。

制服姿が優とだぶってしまう。

「……本当か？」

「え？」

「お前が好きな男に殺されたいというのは本当か？」

俺の質問に一瞬、表情が固まった。

やがて真剣な顔つきになり、うなづいた。

「どうせ死ぬんやったら……」

「そして、その男もお前を殺してくれるのか？」

「……うん」

「お前、名前は？」

「……美浦皐月」

「見せてもらおうじゃないか」

「え？」

「お前が死ぬ所」

オレは冴木の事をとやかく言えないのかもしれない。

少なくとも今、オレはコイツが好意を持っている人間に殺される姿を見たいと思ったからだ。

もしかしたらコイツにオレは優との結末を託しているのかもしれない。
ない。

どうせ殺されるにしても、幸せに死ぬるものなのか……

『せ……先生……痛いよ……痛い……よ……』

苦痛で顔を歪めながらオレに助けを求めた優を忘れられない。

『優を守ろうとしてくれて……ありがとう』

礼を言われる事は何もしないじゃないか。
どうせ死ぬんだっただけ…… オレが殺してやりたかった……
全部オレが甘かったせいだ。

「少し傷つけるだけだ」

とりあえずナイフに血をつけるため臯月に傷をつける。

「痛っ!!」

「我慢しろ。ヤツ等を誤魔化すためだ」

そのまま臯月を担いでドアを開ける。

チンピラはオレの姿を見て驚いたようだ。

「殺したのか……」

「まあな。あんまり暴れるから、さっさと殺っちまった……これから死体を処理してくる」

「あつ、オレもついていく」

「……オレが信用できないと？」

「そ、そういうわけじゃあねえけどさあ……上のモノに言われてるから……」

「だったら上のヤツラに言っておけ、オレはプロだと」

「……わかった」

我ながら良くこんなウソを並べられるものだと思心の中で苦笑した。

そのまま臯月を車に乗せオレは別荘を後にした。

臯月は未だにこの状況が信じられずにきょとんとしている。

「……ありがとう」

ようやく喋った言葉がそれだった。

「勘違いするな。お前が死ぬことには何の変更も無いんだ」

「……」

「公園で待ってるそいつが殺せない時は、オレが二人とも殺す」
「……うん」

オレは何を考えているんだ……

こんなガキ一人殺すのにココまで世話を焼くなんて。

一時間ぐらいしてようやく街へ戻ってきた。

「おい、その公園つてのはどの辺りなんだ」

「もうちょい先……」

「いいか、時間を稼いで逃げようなんて思うなよ。逃げたらヤクザどもに連絡する。そして次は確実にお前を殺す」

「……分かつとるよ」

その瞬間、皐月はオレの隙をついて助手席のドアを開け、走行中の車から飛び降りた。

「なっ!?!」

オレは必死に手を伸ばすが捕まえる事が出来ず、まんまと逃げられてしまった。

慌てて車を端に止め、飛び降りた地点に向かう。

しかし、すでに皐月の姿は無かった。

「あのガキ……」

ただ、車のスピードを60キロは出していたから、飛び降りてただで済むわけは無い。おそらくそう遠くへは言っていないだろう。

オレはこの辺りを歩いて探す事にした。

あんなウソに騙されるなんてオレはどうかしてる。

一瞬でも優の事を考えたオレがバカだった。

後悔してもしょうがないとりあえず、あのガキを殺すしかない。

間の悪い事に雨まで降ってきた。今は舌打ちしか出なかった。

すぐ止むと思っていた雨は本降りとなり、傘を差さずに捜していたオレはずぶ濡れになっていた。

あたりは暗く、すでに夜。

考えてみたら、あのガキを殺す必要はもうなくなっている。

今の原動力は優との思い出を利用して逃げられた悔しさからだ

った。

色々探してみたが一向に見つからなかった。金も持っていないはずなので、電車やバスに乗れるはずはない。

見当がつかないオレは焦るばかりだった……が、ふと思う。

もし、あのガキが言っている事が本当だったら……

信じてはいけないと分かつてはいたが、心の何処かでそうあって欲しいと思う気持ちがオレにあった。

急いでこの辺りにある公園を探す。

しかし、幾つか回ってみたが誰もいなかった。

無理もない。こんな雨の日に『好きな人が待っているかもしれない』というだけで公園に行く必要は無いのだ……

なのにオレはまた次の公園を目指し走っているのだ。

オレは優によって変わってしまったのかもしれない。

くだらないと思っていた事にこんなにも一生懸命になってる……人を好きだと言う気持ちを信じて……

この辺りの公園をあらかた探し終えたオレは信じた自分を責めた。やはり繁華街の方を探した方が懸命だったなと思い直して向かうとした途中、その公園はあった。

小さな公園だったから見逃していたのかもしれない。

外灯が一つだけ灯っていたその下には一人の少年が雨の中ベンチに座っていた。

「……あれか？」

オレは思わず息を呑んだ。コイツなのかどうか分らない。

だが、待ってみる価値はありそうだ。近くにあった建物の影に隠れて待つ事にする。

それから2時間近くが経過したが、一向に臯月は姿を現さなかった。

公園にいる少年も動く気配は無い。

どうやら根競べになりそうだ。

そんなことを考えた矢先、公園沿いの歩道に人影が見えた。人影はゆっくりゆっくりこちらへ向かってくる。

ゆっくりなのは足を引きずっているからみたいだった。

——皐月だ。

言っていた事は本当だったのだ……

だが、まだ信じていない部分があった。

それはホントにこの少年が皐月を殺すのかである。

皐月はたどたどしい足取りではあったが、公園に到着すると少年の方へ真っ直ぐ歩いていった。そして向かい合う二人。

出来るはずが無い……

オレだって出来なかったんだ……

ましてやただの少年じゃないか。

しかし、オレの予想は大きく外れる。

皐月との間で幾つかやり取りがあった後、少年は彼女を刺した。

何度も何度も刺す。

その光景は驚愕でもあり羨望でもあった。

オレが超えられなかった壁をあの子は越えているように思える。そこには優とオレのあるべきだった結末を見た気がした。

しかし……だからこそ……このまま二人とも殺すわけには行かない。

優との結末はあなってしまったが、あの二人はまだなんとかなるかもしれない……

いや、出来なかったオレが何とかするんだ。

オレは二人に駆け寄り、少年の腕を掴んだ。

「そのぐらいしておけ。今病院へ連れて行くから」

第42話 「蠢動」 （真田信治編）

俺が思い出に浸っているいると、それを割くように冴木は告げた。
「それじゃあ、美世って子を殺せる準備が出来たら連絡してね」
思い出に浸っていたオレは冴木の言葉で現実に戻される。

「……」

「逃がしちゃあ駄目だよ。まあ、分かっているとは思うけど。それと、僕の知り合いの依頼も忘れずにね」

要件だけ告げると冴木はボディガードを引き連れて帰っていった。

一人になった応接室でオレは近くにあった灰皿を床に叩きつける。
大きな音を立ててガラスの灰皿は粉々になる。

「真田さん、どうしました!？」

「……いや、何でもない」

慌てて有田が応接室に入ってきた。

ガラスが飛び散った室内を見ると彼女は口に手を当て驚く。

「今、ホウキとチリトリもってきますから!!」

「……スマン」

二日後、冴木の紹介で依頼人に会う事になった。

応接に向かい合って座るオレと依頼人。

「タバコ吸っていい？」

「別にオレは構いませんが」

「ありがとう。家ではなかなか吸えないもので」

依頼人はタバコを取り出すと慣れた手つきで火をつける。

「では、この契約書についてのご説明を」

「しなくて結構です」

「ですが……」

「冴木とは高校時代からの知り合いなの。だから、ここのシステムについても大体知ってるし」

「……そうですか」

冴木とこの依頼人がどんな関係だったのかは知らないが、あまり好感は持てなかった。

「そして真田先生……アナタの事も」

「……」

オレの驚く顔を十分堪能した後、依頼人はゆっくり話し出す。

「別に驚く事ありませんよ。私の身内がアナタのお世話になっているものですから」

「……そうでしたか」

「申し遅れました。私は上杉法うえすぎのり……妹の上杉亜衣がお世話になります」

「っ!？」

「殺して欲しい相手というのが、この妹と関係あって……お恥ずかしい話なのですが妹は長い間、家に帰ってこなくて……今も何処で何をしているのか……」

さつきから依頼人には驚かされてばかりだが、今度はオレが依頼人を驚かす番だ。

「承知しています」

「えっ!？」

「私は妹さんと面識がありますから。ウチの職員、といっても正規の者ではないですが、その者と少しトラブルがありまして……監視のために一緒に住まわせています」

その言葉を聞くと依頼人の顔色は一気に変わり、机を飛び越してオレに掴みかかった。

「妹に、亜衣に何があったのっ!! 言いなさいっ!!」

「……ご心配なく。彼女は凄く元気です。あんまり元気なので、当

社の仕事にまで首を突っ込まれて大変です」

「あの子に何かしたら、ただじゃ済まさないっ!!」

しばらく、依頼人はオレの胸倉を掴んだまま動かなかった。

「でしたら御自分の目で確かめるのが一番でしょう。地図書きますから」

オレの一言でようやく我に帰ったのか、慌てて掴んでいた手を離す。

「あの、すいません。私、妹の事になるとつい……ありがとうございます」

「私が言うのも何ですが、もう少し温かく見守ってやってはどうですか？ あの子の頃の時期は何かと不安定な時期ですし」

「ですが……」

「責任は私が持ちますから」

自分でも良く分からないが、いつの間にか物分りのいい教師みたいなセリフを吐いていた。

気を取り直して仕事の話を進める。

「それで、どなたの始末を」

「妹が家を出て行く原因を作った男がしまして……その男を殺して欲しいのです」

「それではご依頼は一緒に暮らしている松田元樹という男性を始末して欲しいと……これに関して妹さんはどうお考えなのでしょう？」

かなりお節介かもしれない。

それにしてもオレがアイツのことを気にするとは……

そして、依頼人はこの質問に対して露骨に嫌な表情を見せた。

「妹は関係ありません。私が必要ないと感じたから殺すのです」

「他にも方法が——」

「アナタはただ黙って殺してくれればいいのです」

「……分かりました」

詮索しても始まらない。
仕事をこなすだけだ……そう思ってた。

それから、オレは澄川に連絡を取り、仕事の話をした。
しかし……

「それは出来ない」

「出来ない？ ……松田という男を殺せば上杉亜衣は家に帰ることが出来るとアイツの姉は言っているぞ」

「そういう問題じゃなくて……自分の事で死人が出るなんて上杉が納得するはずが無い」

「上杉亜衣はお前に関係ないだろ」

「それだけじゃない」

「なに？」

「僕の中にはもう刹那がないんだ」

「なんだと！！ ……いつからだ」

「3、4ヶ月前から少しずつ上手いかない時があって……顕著になったのはここ1ヶ月ぐらい。この前のキャンプで完全に……」

3、4ヶ月前に何が起きたかは分からない。

しかし、一ヶ月前、そしてこの前のキャンプで共通する人物なら分かる……

「浅野美世……だな」

「……」

浅野の名前を出した途端、澄川の表情が変わる。

1ヶ月前、浅野はオレに自分を殺してくれと依頼してきた。

そして、キャンプが終ったあと浅野は入院、澄川が契約の解約を言い出した。

間違いないだろう。

「だとしても答えは簡単だ。もう一回暗示を――」

「嫌だ」

「……」

「僕は……僕でいたい……」

澄川の言葉がオレの心にわだかまりを作り出す。

「じゃあ、お前はどつするつもりだ？ 金はどつする？」

「わかつてる。だから、このままで仕事を……」

「無茶を言つな」

「無茶でもやらなきゃ……」

「はあ……」

くだらん自我に目覚めたか……正直、浅野を甘く見すぎていた。

オレの中で上杉亜衣は『危険な存在』だが、浅野美世はもう『危険な存在』ではなく『排除すべき存在』になった。

もはや澄川には浅野美世も松田元樹の始末も無理だろう。

どうする？ オレがやるか……いや、違う。

「お前の気持ちは良く分かった。この仕事はもう少し後に延期しよう。断るにしても依頼人を説得しなければならぬからな」

「ありがとう、真田さん」

「礼には及ばないさ……」

コイツには思い知らせなくてはならない。

……オレと優ができなかった幸せを紡ぐ事が……愛するものを刺せたお前の責務なのだ……だからあの時、助けたのだ。

だとすれば……

澄川と別れた後、薄暗い部屋にオレは立っていた。

「お前も知っているだろう」

「……」

「コイツを殺せ」

「!？」

「いつまでもココに居るわけにも行かないだろ？」

「……」

「前から言い聞かせていたはずだ。アイツが駄目になったときは……」

……

目の前に居る影が静かに頷く。

これでいい……

誰もが何もせずして、何かを得る事は出来ないのだから。

第43話 「弔いの呼び水」(前書き)

今回から完結編に突入ということで、簡単な前回までのあらすじと登場人物紹介を書いてみました。
よろしければ、お読みください。

<登場人物紹介>

●上杉亜衣うえすぎあゐ

創野高校2年生。姉との確執から家に帰らない女の子。
普段は活発で明るい性格。

●澄川正宗すみかわまさむね

亜衣と同じクラスの男の子。
病院で眠り続ける皐月ために殺し屋を続ける。無口で暗い、多重人格。

光彦みつひこ……正宗の別人格。人懐っこくて、明るい性格。やたらキスをしたがつていた。

刹那せつな……正宗の人殺しを担当する人格。人を好きになると発動する。短期で冷酷な性格。

澄川正宗は偽名で本名は藤原瑞樹ふじわらみずきという。

●浅野美世あさのみよ

亜衣の友人。大人しくて、優しい性格。重い病気を抱えている。
それが元で澄川に自分を殺して欲しいと依頼。

● 吉田有希 よしだ ゆき

亜衣の友人。変わったものが大好きで、勝気な性格。澄川を好きになったが、あっさり振られる。

● 真田信治 さなだ しんじ

亜衣たちの高校で教師をしているかたわらで、殺しを請け負う会社『株式会社Thread winter』に勤める男。

数年前教え子を殺されて以来、自分の高校の制服を着ている人間は殺せない。

● 冴木恭介 さえき けいすけ

『株式会社Thread winter』の社長を務める。冷酷で人が苦しむ姿を好む性格。過去に真田との因縁を持つ。

● 上杉法 うえすぎ のり

亜衣の姉。亜衣を溺愛していて、妹のためなら両親を殺すことも厭わない。

● 松田元樹 まつだ もとき

上杉法と偽装結婚をして、一緒に暮らしている男性。法の事を愛していて、偽装だとわかりつつ生活が続けている。

● 美浦皐月 みほ ざつき

病院で眠り続ける女性。

< あらすじ >

家庭事情で家出している上杉亜衣は友人である浅野美世・吉川有希に断られ、学校で一夜を過ごすことに。

自分の教室で時間を過ごしていると、開かずの教室から物音が。気になって教室へ向かうと、そこには同じクラスの澄川が人殺しをしている現場に出会う。

大人しく目立たないイメージだった澄川の本性に衝撃を受ける。しかも、澄川は多重人格だという。

加えて、さえない教師だと思っていた真田まで殺人に関わっていることを知る。

彼らは学生・教師をするかたわら、殺人で報酬を得る殺し屋だった。

次の日、吉川有希が澄川に告白すると宣言。反対する亜衣。

つつい澄川の素性をばらしてしまう。

信じない有希に澄川をつけて事実を確かめることに。

澄川の後をつけ自宅を突き止める２人。しかし、有希は飽きてかえってしまう。

仕方なく一人で追跡を続ける亜衣。

そこでまたしても澄川の殺人現場に立ち会ってしまう。

一時は殺しをとめることが出来たものの、真田が代わりに仕事を果たしてしまう。

さらに真田の命令で澄川の家で泊まる羽目に。

彼の家で亜衣は澄川が殺しを続ける理由、皐月の存在を知る。

翌日、渋谷有希の告白を手伝うことになった亜衣。

澄川を呼び出し、有希に告白させるも『浅野美世と付き合ってる』と断られてしまう。

驚く亜衣、何とか澄川と別れさせようと美世を説得するも彼女の意志は固い。

最初、説得するはずだった亜衣も彼女の気持ちを汲み、応援することにした。

病弱でいつも一緒にいられない美世の願いから、しばらく澄川と暮らすことになった。

自分の病状を悲観した美世は『好きになった相手を殺す』という澄川の特徴から自分を殺して欲しいと彼に依頼していた。

そのことを亜衣は知らない……

夏休みなり、亜衣は美世を応援するために澄川・有希ら四人で山へキャンプを計画した。

澄川やまだ仲直りしていない有希らとちぐはぐなキャンプを過ごす。

その夜、本当は死ぬ気などなかったことを澄川に見透かされた美世。

ショックのあまり、そのまま山中へ飛び出してしまう。

同じ頃、澄川も亜衣と美世に刺激されてか、自分のあり方に悩んでいた。

皐月との思い出に浸る澄川。そこで大切なことに気づく。

『本当に大切なのは生きることを肯定して認めることだ』と。

改めて自分にとっての大切な人を守ろうと、決意した澄川は美世を探しにでかけた。

やっとの思い出彼女を見つけた澄川。だが、彼女は帰ることを拒否した。

そこで澄川は自分が至った結論を彼女へぶつける。

彼の説得により、もう一度生きるために頑張ろうという思いに至った美世は帰ることを承諾する。

と、同時に倒れてしまい、病院へ運ばれることに。

こうして美世は再出発を誓い、澄川は自分の仕事に疑問を持ち始

める。

一方、自分を異常なまでに溺愛する姉との確執に悩む亜衣。
冷酷な社長の出現で再び教え子の殺しを迫られる真田。
問題が山積する中、亜衣に一本の電話が入る。

『美世が自殺した』と。

……と、いうことで本編始まりです。

第43話 「弔いの呼び水」

美世が自殺なんて……そんなわけない！

病院に駆けつけた私と澄川はロビーで目を赤く腫らし椅子に座っている有希を見つけた。

「有希！！ 美世は……何処に居るの？ 案内して！！」

「……」

私の問いかけに有希は振り向きもせずに答えない。

「有希？」

「行かない方がいい……」

「どうして！？」

「即死だって……」

「！！」

即死。その言葉で十分だった。

体の力が一気に抜けていく気がした。

「屋上から落ちたから、遺体の損傷が激しくて、肉親以外の面会は無理だって……」

「……」

「今、美世のお父さんとお母さんが行ってる……」

何も言えない私に有希が呟くように話し出す。

「結構あることなんだって……退院寸前の患者さんの自殺って……」

この言葉を聞いて私は過剰に反応した。

「美世はそんな事しない！！」

「私だってそう思いたいよ！！ でも実際、美世は……」

有希はそこまで言って話すのを止める……

こんな所で言い争ってもしょうがない。そんな事は分かっていた。涙がどんどん溢れてくる。何度も指でぬぐったけれど、止めることは出来ない。

「もつと美世に優しくすればよかった。澄川君のことで冷たくあたったし、死んでしまったのは私のせいかも……あの子の悩みをもつと聞いてあげれば……」

有希は泣きながら何度も後悔していた。

それに対して私はただ「そんなことないよ」という事しか出来ない。

今はただ、黙って泣くだけだった。

そんな二人に澄川が有希に尋ねる。

「あのさ……遺書は無いんだよね」

「え？ 無いみたいだけど……」

「澄川、こんな時に何をいつてるの?!」

「……」

澄川は結局それ以上何も言わなかった。

こうして私達は何もしないまま病院で朝を迎えた。

もう病院にいてもどうしようもない。

美世には会えないし、美世の両親にあったところで、ただイタズラに悲しみを増幅させるだけ。

だから、私達は家に帰る事にした。

アパートに着いた私は一気に疲れが襲ってきたのか、床にへたり込んでしまった。

「上杉、とりあえず今は寝ろよ。浅野さんの葬儀の手伝いに行くんだろ?」

私に言葉を掛けながら澄川は出かける準備をしていた。

「アンタはどうするの?」

「僕は少し出かけてくる」

「こんな時によく出かけられるね」

「こんな時だから出かけるんだ」

澄川のそっけない態度に……というより、ここに居る事すべてが

嫌悪感となった。

張り詰めていたものが少しずつ口から漏れる。

「……ねえ」

「何だよ」

「私達が仲良くしたから……罰が当たったのかな」
「はあ?!」

「確かに美世の頼みでココに居たけど途中からどうでも良くなってたし……美世はそういう所は敏感に分かる子だから……」
私のせいだ……何となくそう思う。

美世には澄川とのことを言っていないけど、ココに来て確実に澄川と仲良くなったのは事実だから。

「何が言いたい?」

「……やっぱりこの家を出るね」

「そんな事をしてても意味が無いな。それで浅野に遠慮したつもりか?」

「でも……」

「さつき、浅野の頼みでココに居るって言ったよな」

「……うん」

顔を向ける私に澄川は近づいてきて真正面に向かい合う。

「だったら、今度は僕の頼みだ。ココに居ろよ」

「……こんな時によくそんな事が言えるよね」

「こんな時だから言うんだろ? 今、ココを出て行ったらお前はど
うするんだ?」

「それは……」

「街をフラフラ歩きながら、『可哀相な私』でも気取るつもりか?」
「そんな私は……」

「だったら、今は休め。堂々と浅野を送ってやろうじゃないか」

澄川は私の両肩に手を置いて、にっこり微笑んだ。

「強いね」

「前も言ったが僕は強くない。自分に腹が立っているだけだ。浅野がこうなったのも全て僕の責任だから……」

「えっ？」

私は澄川が最後に呟いた言葉の意味が良く分からなかった。

「……浅野の葬儀には戻ってくる。じゃあな」

それだけ言い残すと澄川は家を出た。

一人になった部屋で考える

有希は『……澄川君のことで冷たくあたったし……死んでしまったのは私のせいかも……』と言って自分を責めた。

澄川も『……浅野がこうなったのも全て僕の責任だから……』と呟いた。

そして私も自分のせいだと自分を責めた。

……もしかしたら生きている人間は死んだ人間に対して少しずつ死んだことへの責任を負うのかも知れない。

独りでは背負いきれない悲しみをちよつとずつ分かち合うんだ。

そして世界は今日も続いていく。

私は寝る事にした。起きたら美世の家に行つて何か手伝える事があれば手伝おう。

有希や澄川に少し感謝をしてベッドに横たわった。

二日後。美世のお葬式が行われた。

沈痛な面持ちで担任の先生やクラスメイトも参列している。

もちろんその中に私や有希もいた。

『美世は死んだ』その事を認めなければいけない儀式。

改めて死んだ人間には多くの人が関わっている事が分かる。

一人だと思つていても実はこれだけの人が周りに居る。

これを生きていたら美世に見せてあげたかった。

美世……何故、自殺なんかしたの？

その時、誰かが私の腕を掴む。慌てて振り向くと隣には澄川がいた。

澄川は私の腕を引っ張ると、家の外まで連れ出した。

「一体なんなの?! 今は葬儀の――」

私の抗議を澄川は遮った。

「良く聞け。浅野はお前に隠していた事がある」

「え? 何が言いたいのか?」

「それは……」

なかなか結論を言おうとしない澄川に私は苛立った。

しばらくして澄川が声のトーンを1つ落とし話す。

「実は浅野は『Thread winter』に殺しの依頼をしていた……」

「殺し?!」

「……自分自身の殺害の依頼だ」

「はあ?!」

「だが、最近になって僕が依頼を取り消すように真田に頼んで、アイツも了承してくれた」

「……」

でも、美世は死んだ。

「……浅野美世は殺された可能性がある」

「まさか、真田が殺したのか?」

「分からない。今、真田の行方が分からないんだ」

「……! だったら、やっぱり……」

「分からない。この事は僕が調べる」

「嫌!! 私も手伝う!!」

こうなったら何としても真田を探し出してホントの事を聞きだしてやる。

しかし、澄川の答えは私の考えとは違っていた。

「駄目だ。上杉は自宅へ帰るんだ」

「何で？ この前は澄川の家に住いていいって……それに、私だって……」

言われた意味が分からず戸惑う。

「お前は松田元樹という人物を知っているだろ？」

「！！ 何でアンタがその名前を……」

「二週間ぐらい前に彼を殺す依頼の話が出た」

「えっ！？」

「その時も僕は無理だと伝え、真田も『この仕事はもう少し後に延期しよう。断るにしても依頼人を説得しなければならない』と言ってくれていた」

「うん……」

「だけど、浅野の依頼が取り消されなかった以上、松田元樹って人も殺される可能性がある……浅野の事が気に掛かるのは分かる。だが、今は生きている人間を優先して欲しい」

元樹さんが殺される？

誰がそんなことを？

いや、考えなくても見当はついた。

「わかった。家に帰る」

美世の死が夏の終わりを告げる呼び水だったのかも知れない。

第44話 「……良かった」

私は姉と戦わなくてはならない。元樹さんと守るために。

何の変哲も無い木造二階建ての家。その前に立つ私。

玄関のドアノブを握る。開きたくないドアがアツサリ開いた。

「あっ……」

すると玄関には丁度、一番会いたくない相手、お姉ちゃんがいた。私を見ると途端に表情が曇る。

「亜衣ちゃん。どうしてここに……」

「帰ってきたの。ここ、私の家だよね？」

私の言葉を聞くと姉の表情が一変した。

「お帰りなさいっ！！そうだよね、ここは亜衣ちゃんの帰る場所だものね！！」

満面の笑みを浮かべて姉は私の背中を軽く押して中へ招き入れる。廊下を歩きながら姉は呟くように言った。

「……きつと帰ってくると思ってた」

その口ぶりはまるで私が帰ってくるのを確信しているかのようだった。

姉に促されてリビングに入る。中には元樹さんがソファーに座っていた。

「あっ、おかえり」

「あ、あの……ただいま。ああ、良かった」

「何が？」

「何でも……ないです」

「ん？」

「はあ……」

会話が続かない。何だか必要以上に私が意識しているみたいだ。この私達のぎこちないやり取りを姉は黙って観察している。

……とにかく元樹さんが生きていて良かった。

姉はある程度、間を置いてから話しはじめた。

「じゃあ今日はお料理頑張るから、亜衣ちゃんも手伝ってね」

本当に楽しそうな姉を見ると『こんなことなら、何回か帰ってやれば良かった』という考えが、一瞬頭を過ぎる。

でも、その思いを慌てて打ち消す。

恐らくこの人が元樹さん殺害を依頼したんだ。

とりあえず依頼したという証拠を掴む為に、それと元樹さんに余計なプレッシャーを与えないためにも、暫くは黙って様子を見る事にした。

私は今まで、自分がこの家に居ると最終的に元樹さんが邪魔になって彼が追い出されたり、殺されるのではないかと思っていた。

だから家出したのだけれど、関係なかった。

結局、姉は自分の気持ち次第でどうにかしてしまう。

この家も両親も元樹さんもそして……私も。

夜、少し豪華な夕食を食べた。久しぶりにとる3人での食事。両親が死んで以後の楽しかったときが戻ったような気がする。昔はこうやって食べていたんだっけ……

夕食後、リビングで少し話した後、自室に戻りこれからの事を考える。

元樹さんは平日仕事をしていて会社にずっといるので昼間は大丈夫だと思う。

問題は会社の行き帰りと寝ている間という事になる。
だとしたら、やる事は……

次の日、私は元樹さんに付いて行き会社への行き帰りを徹底的に見張る事にした。

「どうして付いてくるの？」

「えっ？ その……なんて言うか……社会見学？」

「ウソをついてた僕が言うのも悪いけど、ウソは良くないな」

「……実は姉と二人きりになるのが苦手で……」

私はウソをついた……いや、少しホントかも……これも見張る為だ、しかたない。

「まあ。今までの事もあるし、気まづいかもしれないけど……」

「だから、お願いします、会社への行き帰りだけでも家を出るきつかけを与えてくれませんか？」

「うーん、分かった。でも、僕が家に居るときは三人だから、法さんと一緒にいる時間も作る事。これ約束だよ」

「はい！！」

夜は部屋の前を監視。

昼間は元樹さんが会社へ行っている間に睡眠。昼夜逆転の生活が続いた。

こうして一週間、特に怪しい気配もなく時間が流れた。

何も起きない事から来る緊張の緩みと、慣れない昼夜逆転の生活に私は疲れて元樹さんの退勤時間に寝過ごしてしまった。

目を覚まし携帯を見ると、駅へ着く時間を一時間オーバーしていた。

慌てた私は自室を出てリビングに向かう。

一時間も過ぎているのだからもう帰ってきててもいいはず。

しかし、リビングにはソファアに座った姉がいなかった。

「亜衣ちゃん、どうしたの？ そんなに慌てて」

「元樹さんは？」

「まだ帰ってきてないけど……残業じゃないの？」

「そんなはずない。残業ならメールが届くはずだから」

「……」

私の言葉を聞いた姉の眉間にはわずかにシワが出来た。

「ねえ、亜衣ちゃん。……あの人の事が気になる？」

「別に私は……」

「だったら、いいじゃない。それとも……私と一緒にいるのが嫌？」

「そうじゃないけど……」

いつになく強気な態度の姉に私は戸惑った。

「私ね、いつもアナタとアノ人との間に起こったことを気にしてた。もしかしたら、亜衣ちゃんは普通に人を好きになれる人間なんじゃないかって……」

「何を言ってるの？」

私の問いを無視して姉は話し続ける。

「でも、私分かったの。あの人の事は関係ない」

「……」

「私と亜衣ちゃんが二人だけになれば済む問題だった」

そこまで言い終わると口元がわずかに歪む。

「だから、そんな事を気にするのも今日で最後だと思っよ」

「！？……今なんて言っ——」

「これからはこの家に二人っきりで住めるかもね」

「っ！！」

やはり、姉は元樹さん殺害を依頼したんだ。

私が帰ってきた目的もある程度分かった上で、この人は私に隙が出来るのを注意深く待っていたのだ。

私は何も言わずに家を飛び出した。

今は姉に関わっている暇はない、探す事に専念しよう。

幸い、この一週間で通勤退勤時に襲われそうなポイントはだいたいいチェックしてある。

その一つ一つ探す。しかし、一向に見つからない。

「もう何処かへ連れて行かれたのかも……」

諦めかけた時、遠くで這うようにこちらへ向かってくる何が見え

た。

紛れもなく元樹さんだった。私を見つけると動きが止まった。走って近寄ると、服のわき腹から血が滲んでいた。

「元樹さん!!」

「はは……やられたよ」

「今、救急車を呼びます!!」

顔はすで真っ青というより白に近く、冷や汗もかいていた。

元樹さんの向こう側には辿った後を示すかのように血の跡が出来ていた。

「……相手は女性だったから……何とか……振りほどいて……逃げてきた……」

「じつとしてください!!」

「……亜衣ちゃん……」

「もう喋らないで!!」

「……お姉さんを……許してやって欲しい……」

「え?!」

元樹さんの口から出てきたのは意外な言葉だった。

「いつかは……法さんに捨てられるんじゃないかって覚悟はしてた」

「……」

「まさか……殺されそうになるとは……思わなかったけど……」

「止めて、元樹さん。もっと怒っていいんだよ……」

しかし、元樹さんは首を振る。

「なんで? 好きだからなの?」

「……」

何も言わずに元樹さんは微笑んだ後、気絶した。

しばらくすると救急車が到着し、元樹さんは運ばれる。私は救急

車へ乗り込み付き添う。

幸運にも治療を受けた元樹さんは幸い命を取り留めた。私は一晩中病室で看病した。

次の日。家に帰った私は早速、本格的に荷物をまとめ、準備が終ると一階へ降りた。

その先には姉がいて。私と姉は対峙する形になった。

昨日は姉に先手を取られたが、今回は私がハッキリ言う。

「良かった」

「何が？」

「これでホントにアンタを見限る事が出来る……」

「亜衣ちゃん!？」

「もう二度とこの家には帰らないから」

私の最後通告を受けて、姉の顔色は真っ青になっていた。

「……行かないで」

もうこれ以上この人と話しをする気はなかった。

姉を無視して私は歩き出す。

「行かないで!! 亜衣ちゃん……行かないで……」

すがり付こうとする姉を振りほどいて私は家を出た。

第45話 「ご利用は計画的に」

決心したものは変わらない。

もうあの家には帰らない。

今まで帰る場所がなくなるのが怖くて、考えないようにしてきた選択肢を私は選んだ。

それは、暑さのピークもすでに過ぎた8月の終わりにした決心。夏休みも終わりに近づき、全てに答えが出始めた季節の終わり。

澄川の家に戻った私は元樹さんの事件の事を話す。

「殺しを失敗したって……そんな幸運があるのか？」

澄川は信じられないといった口調で私に言った。

「実際、元樹さんは確かに女に襲われたって……それに、澄川だって、失敗してるでしょ？」

「それはお前のせいだろ。オレは正式な社員でもないし、そのための訓練を受けたわけでもない。もしかしたら襲った相手はプロじゃないかもな」

「え？」

「逃げられるなんて……殺人に慣れていない者の犯行としか思えない」

「そんなことありえるの？」

「さあ……」

澄川は考え込んだきり、それ以上は何も答えなかった。なにか心当たりでもあるのだろうか？

しかし、それよりも、私には気になることがあった。

「それより澄川、真田は見つかったの？」

真田という言葉を聞くと途端に澄川の表情が変わった。

「……ああ」

「で？」

「うん……」

「『うん……』だけじゃ分からない」

澄川は言い淀んでいたけど、やがてゆっくり話し出した。

「真田は殺していないと言った。浅野さんは自殺だったらいい。目撃者がいた」

「そう……」

やっぱり美世は自殺だったのか……少しやりきれない気分になる。

「話はここからだ。良く聞けその目撃者は……真田だ」

「はあ！？　じゃあやっぱり——」

「恐らく証拠はないが、自殺に追い込んだのはアイツだ」

私達はどうしようもなくてただ、黙る。

今すぐにでも真田の所へ行つて殴つてやりたい気持ちだけど、そんな事をして意味がない事は分かっていた。

何もせず、ただ時間だけが過ぎる。

やがて澄川は私に顔を向け、ハッキリとした口調で言い始めた。

「浅野さんのことで決心をした」

「決心？」

「『Thread winter』の仕事を辞める」

「……」

その言葉に私はどう反応したら良いか分からない。

人殺しを止めるというのだから良い事なんだろうけど……後先を考えない澄川の発言に私は釈然としなかった。

「で、でも皐月さんの入院費……お金はどうするの？」

「別の仕事を見つけて一日中働けば何とかなるだろう」

澄川は事も無げに答えた。

「一日中働くって……学校だってあるのに何言ってるの？」

「学校は辞める」

「はあ？ そんなの無茶だよ」

「無茶でも真田の世話になるよりはましだ」

「……せめて高校ぐらいは出ておきなさいよ」

「時間の無駄だ」

「でも……」

澄川が仕事を辞めるといふのは嬉しいけど、学校も辞めるといふのは納得が行かない。

かといって、皐月さんの事もあるからどうする訳にもいかないし。……でも……だけど……

その時、私の中である考えが浮かんだ。

「だったら、私と契約しない？」

「？」

「私は両親の遺産の半分を自由に出来るの」

訳が判らないといった様子で澄川は怪訝な表情を浮かべていた。

「私、雇い主、高校へ行く事が澄川の仕事」

「何言ってるんだお前……」

「アンタにはココに居候させてもらってるし、恩返ししたいじゃない？」

「……断る、お前には関係ない。オレは誰にも迷惑を掛けたくないし、オレが上杉にココへいてくれと頼んだんだ」

「だけど——」

「お断り」

多分、こんな発想は断られるだろうなとは思ってたけど……

今、私が澄川に出来る事をしてあげたい。

だから……私は……

「アンタだけが戦ってると思わないでよ!!」

「何が？」

深く考えないで言った一言に次の言葉が続かない。それでも私は

無理やり続けた。

「……真田のせいで美世があんな事になったんだから私も無関係じゃない。真田の手を借りずに皐月さんを助るっていうアンタの手助けをしたい!!」

「……」

「それと、もうすぐ新学期なのに教室に行ったら、親しい人が二人もいないなんて……嫌だ……」

多分、後で言った方が私の本音だと思う。

一気に喋り少し息切れをしまった私を見て、澄川は軽くため息をつく。

「……で？ 時給はどれだけでももらえるんだ？」

「え？ それじゃあ……」

「ただし、高校卒業したら少しずつでも返済するからな」

「あつ……当たり前でしょ!! ……ご利用は計画的に方式なんだから」

「意味が分からん。第一お前、さっきはオレを雇って……」

「あーもう、アンタは一々細かい!! 人の拳げ足ばっか取らないで!!」

「趣味なんだ拳げ足取るの。……って、物を投げるのは止める!! 片付けるのはどうせオレなんだから!!」

こんなやり取りがなんだか凄く落ち着いた。

何事にも変え難い時間や関係がそこにはあつたように見えた……

二日後、澄川は真田へ会いに行くと言って家を出た。辞めることを告げに行くのだろう。

そして、私は元樹さんのお見舞いに病院へ行つた。

彼は美世と同じ病院へ入院している。病室で見る限り元樹さんは元気そうだった。

私はホントの事（姉が殺人依頼をしたこと）を言おうか迷ったけ

ど、言うのは止めた。

……というかもう気付いてるし、これ以上ハッキリした証拠を突きつける必要は無いと思う。元樹さん自身も、退院したらあの家を出ると言っていた。

元樹さんにお別れを言つて、病院から帰ろうとしたけど、帰つてもする事が無い私はある行動を取る事にした。

それは単なる気まぐれ……一目見ようを思っただけ。

美浦皐月。

話には聞いていたけど見る必要も無いと思つたし、普段は立ち入り禁止の場所だつて聞いてたから、私は一度も彼女の顔を見たことが無かつたのだ。

エレベーターで7階までいくと、関係者以外立ち入り禁止の看板をくぐり、階段で8階へ行く。

美世の話だと大きいガラス窓が壁代わりになっているのが皐月さんの病室らしい。

階段を上りきると、少し歩いた場所に話の病室は存在していた。

そつと中を覗き込む

……しかし、病室はベッドが1つあるだけで誰も寝てはいなかった。

不思議に思い、隅々まで良くみようとガラス窓に張り付く。

だからだろう、近づく人影に気付かなかった。

「アナタは誰ですか？ ココは関係者以外立ち入り禁止です！！」

その声に私は驚いて後ろを振り返ると看護師さんが立っていた。

「あの……私は美浦皐月さんの知り合いで……」

「美浦さんなら今、集中治療室で治療中です。面会謝絶なので会う事は出来ません」

「容体は良くないのでしょうか？」

「良くないから集中治療室にいるんです。こちらとしても最善を尽くしますからご安心を」

突然の事だったのと、事の重大さに私は急いで病院を出て携帯を取り出す。

この事を澄川は知っているのだろうか？

念のため私は澄川へ連絡を入れる。

しかし、電源を切っているらしく、いつまで経っても繋がることは無かった。

第46話 「二人の幸せ」

とりあえず私は澄川の家に戻った。

玄関でドアを開けようとしたけど、鍵が掛かっている。

ポストの裏に置いてある鍵を取り出して鍵を開け、部屋に入った。部屋の中には誰もいない。私はとりあえず澄川を待つ事にした。

二時間ほどして玄関のドアが開く。

入ってきた澄川はとても疲れた表情を浮かべていた。

「おかえり」

「……」

私を無視しているのか、気付かないのか、部屋に上がるとコップに水を入れ一気に飲み干した。

私は澄川へ近寄る。

「何で電話に出なかったの？」

「えっ！？……なんだ、帰ってたのか」

澄川はホントに驚いているようだった。

「失礼な。帰ってきたちゃあ駄目なわけ？」

「違うけど……ああ、電話の事だったな。携帯なら真田に返してきた。もともとあれは仕事用だったから」

「そうだったの。それじゃあ、仕事は辞められたわけ？」

「まあな」

「良かったじゃない！！　って、そんなことより皐月さんが大変なの……」

「は？」

皐月さんが集中治療室に運ばれている事を告げた。

澄川の表情が厳しいモノに変わる。

「それは本当か……」

「うん。さあ、早く行きなよ」

「分かった」

澄川は再び玄関のドアを開けた。

出て行く後姿を見て私は思わず声をかける。

「あつ、澄川」

「何？」

いざ澄川を呼び止めたものの、何を言って良いのか分からない。

そんな私を見て澄川は少し微笑んで一言言った。

「行ってきます」

「い……行つてらっしゃい」

ドアが閉まる。澄川は行ってしまった。

でも、こんなやり取りで何故か安心できる自分がいる。

何か二人だけの言葉、送り迎えの言葉……が欲しくて思わず呼び止めたに違いない。

そして、私は澄川が皐月さんの元に行ってしまう寂しさを感じている事に気がついた。

——あれ？

これじゃあ私がアイツを必要としてるみたいじゃない……

そして澄川は2、3日経っても帰ってこなかった。

私も元樹さんのお見舞いに病院へ行つたが、8階へ行くのを躊躇してしまつた。

皐月さんの心配をしている澄川を見ていられない気がしたのだ。

独りの家に帰り、念のために二人分の食事を作る。

しかし、澄川は帰って来ず、私は二食連続同じメニューを食べる日々が続いた。

時間は過ぎ、8月31日になった。夏休みもあと一日で終わってしまう。

結構、色々な事が起きた夏休み。

そのほとんどが悲しい事だった。
でも、私はココで生きている。

何もすることが無いこの部屋で唯一出来る事……澄川の帰りを待つて……

明日から学校だというのが、せめてもの救いだった。これで昼間はやる事がある。

そんな取り留めないこと事を考えていた夕暮れ。

オレジン色に染まった部屋に突然、携帯が鳴り響く。

着信音からしてメールだという事が分かる。

画面を見ると、澄川からのメールだった。

『今日、浅野美世について大事な話がある。開かずの教室に22時』

私の背筋に冷たいものが走る。

確か、澄川は携帯を真田に返したと言っていた。

だとすると、明らかに真田からのメールに違いない。

私の直感は罠だと告げた。

どうする？ 澄川に言う？

……しかし、その考えはすぐに却下された。

皐月さんの事で手一杯の澄川に負担を掛けたくない。

しばらく、私は自問自答を繰り返した。

でも、最終的に出る答えは1つだった。

——私がやるしかない。

このまま無視することもできるけど、美世の事が絡んでくると話は別。

いつかは真田と直接対決しなくてはならないと感じていた。

夏休みの最後には丁度いいイベントだと思う。

一度決心を決めると今度は体が震えてきた。

武者震いなのか、恐怖なのかそれは良く分からない。

だから私はベッドの下に手を入れ、目的の物が見つかりと取り出

した。

それは澄川が仕事用に使っていたナイフ。これがあれば澄川がそばにいる気がする。

外はすでに暗くなり時刻は21時を過ぎる。

私は自分なりの正装として学校の制服を着る。

出かけ際、次の日の朝食の用意をして冷蔵庫に入れた。

今回は一人分。もちろん澄川の分だ。

夜道を歩きながら逡巡した。

自分の命がかかっている事を意識すると堪らなく恐怖に陥る。

でも、美世の事を思うとじっとしてられない。

そんな時、胸ポケットの中に入っているナイフがすごく心強かった。

そして、とうとう学校の前に着いてしまう。

ここに入ってしまったらもう後戻りはできない。

胸に手を当て一歩を踏み出す。それは覚悟を決めた一歩だった。

夜の学校について考えてみれば、よくココで寝泊りしたし、あの時は夜の学校は私の味方だったような気がする。

少なくとも今は違うけど。何も受け入れない冷たさがあった。昔はその冷たさが好きだったのに……

階段を上り自分のクラスの前を通り過ぎる。

このまま2つ教室をやり過ぐすと『開かずの教室』だ。

澄川と係わり合いを持った教室。

「タラレバ」は言わない方がいいけど、あの時私が自分の教室でじっとしていれば、澄川の事も嫌ったままで、美世も死ななかつたかもしれない。

だから……今からの行動がほんの少しかもしれないけど罪滅ぼしになればいい。

『開かずの教室』の扉を目の間にして深呼吸をした。

ある程度落ち着いたところでドアに手をかける。

すると、ドアはアツサリ開いた。

きつと、あらかじめ誰かが開けたのだろう。

そして、その誰かと命を懸けた争いをする事になる。

私は教室へと足を踏み入れた。

僕は今日も家に帰らなかった。面会謝絶は相変わらずだし、出来る事と言ったら集中治療室の前で待つ事だけ。何度も帰ろうとしたけど、家に帰ると待っている人がいるという事が皐月の裏切りになるような気がした。

だから今日もただココに座っている。すでに外は暗くいつの間にか夜になっていた。病院もすでに消灯時間を過ぎて廊下には誰もいない。椅子に座りながら下を向く。こんな姿勢のままでも今日も何時間か過ごす。

何も考えずに下を向いていると、自分の足に影が重なるのが見えた。

ゆっくり仰向くと目の間には真田がいた。

「よお、愛しい人の容体はどうだ？」

「あんたに関係ない」

「つれない事を言うな。オレがこの病院まで運んでやったんだぞ」

「それについては感謝してる。だが、その恩返しも十分したはずだ」

「オレはいつでもお前の味方だったつもりだろ？」

「……だったら浅野の事はどうなんだ！！」

僕の言葉を聞くと真田は横を向いてため息をついた。

「少し前、オレはお前に美世の自殺現場を見たと言ったな」

⌈
⋮
⌋

「その場には美世を含めて4人の人間がいた。まずは美世。もう一人はオレ。そして三人目は……」

「黙れ！！
くだらん話は聞きたくない！！」

「最後まで聞けよ、聞いて損は無いぜ……三人目は『Thread Winter』の社長、そして四人目は……」

僕は最後まで聞かずに立ち上がり、真田の胸倉を掴む。

「その場に誰がいたってどうでもいい！！
殺しにしたって事だ！！」

問題は前が美世を見

しかし、真田は話すのを止めない。

「……美世は『お前と皋月のために死ぬ』と言って死んだ」
「なっ!？」

「俺もそれを望んでる。だから、だからこそ、お前達は幸せにならなくてはいらない。そう思わないか？」

「……そんな事は分かっている!!」

「いや、分かってないな」

「どういう意味だ？」

「言葉通りの意味だが……お前が殺しを辞めるならそれでも良い。今までは皐月のためにお前が頑張ってきたんだ」

┐
?
└

真田の口元が一気に歪む。

「だったら次はお前が樂をする番だろ？ 二人で幸せを掴むために」

「！！ まさか……」

僕は真田を押しつけ急いで集中治療室のドアを開ける。

仕切られたカーテンを次々と開ける。

しかし、そこには……誰もいなかった。

教室内は廊下に比べて少し暗く、人の気配がしない。

私は周りの安全をある程度確認すると奥へと進む事にした。慎重に歩く。

教室の中ごろまで進んだ時、突然にドアの閉まる音がした。

慌てて振り返ると、ドアの前には人影が見えた。

相手も私を観察しているのか動こうとしない。

かなりの重圧が私を襲う。一歩たりとも見逃せない展開が続く。

……でも……この人は誰？

しばらくして、向こうが話しかける。

「なあ、アンタが上杉亜衣やる？」

聞きなれない言葉遣いに私は戸惑った。

第47話 「眠り姫」

私はどんな時だって眠っていなければいけなかった。たとえ好きな人が違う誰かを見ていたとしても……

二年前。

目が覚めたのは、瑞樹に刺されてから一週間経った後だと聞いた。真っ先に白が私の目に映る。それが天井だと知るのに数秒かった。

まだ、体が痛くて動けない。

そこへ看護師が私を覗き込んでくる。目が合うと、驚いてすぐに何処かへ行った。

私は自分が何故ここにいいのか理解できずに私は茫然とする。その後、暫くして様子を見に来たのは病院の先生ではなく、殺し屋だった。

「よお、気分はどうだ？」

覗き込むように殺し屋は私を眺めてきた。思わず体が仰け反る。

「気分はあんまり良くないなあ……あれ？ 私、たしか刺されて……」

「だが、お前は生きている」

ようやく記憶の前後関係を思い出した。生きていることが少し嬉しかったが、すぐにその感情には意味がない事に気付く。

「結局、私はアンタに殺されるんやろ……」

「オレはお前を殺す気は毛頭ないがな」

「？」

殺し屋の気分がどうして変わったのかは良く分からないけど、助かったみたい。

「今、瑞樹を呼んできてやるから」

「！！ 待つて…… まだ呼ばなくてええわ……」

私はマトモに呼吸が出来なくなつて、息を切らしながら話す。
「どうした？」

「…… 悪いけど…… もう少し離れてくれへん？」

「分かった」

殺し屋は私から2、3メートル離れた位置から話しかける。

「この前はオレと話しても平気だったのにな」

「我慢してた。どうせ死ぬんやから必死やったし……」

「なるほどな」

「見た通りや。まだ人が近づいたり触られるのが…… 怖い……」

「……」

「だから、アイツが来ても何もしてやれへん……」

情けない話だけど、離れて話をしても凄く緊張して気分が悪くなつてきた。

「わかった。だったらお前はそのまま寝たフリしてろ」

「え?!」

突拍子もない事を言い出す殺し屋に私は戸惑った。

「何の話かサッパリわからへん」

「わかった、説明しよう…… 今現在、瑞樹はお前の入院費を稼ぐ為にある仕事をしている」

「そんなことせんで良いのに……」

「だったらお前が金を払うのか？」

「…… 治つて、退院したら必ず働いて返すから……」

「退院? 病院を出てどうするつもりだ? 人に触れられるのが怖

いと言っている人間がどうやって働く？ まして頼る人もいない、
たった独りのお前に何が出来る？」

「……」
今の現状を突きつけられた私は黙ることしか出来ない。

「瑞樹はお前が目覚めるまで仕事を続けると言っていた。このまま
でいい。寝てさえいればお前は幸せになれる」

「……でも」

「不安な日々に戻りたいのか？」

「……わかった」

結局、私は負けてしまった。瑞樹がいる時は寝たフリをした。
この病室は私にとって世間と隔ててくれるシェルタ-だった。
この中にいる限り最小限の人と接するだけで済むし、お金は瑞樹
が払ってくれる。

今まで生きてきた中でもっとも平穏な日々が続く。

人には会えないが、それでも良かった。

一日に一回は必ず瑞樹が様子を見に来てくれたし、薄目を開いて
垣間見ることが出来る彼の顔だけで十分だった。

苦痛の渦から抜け出して手に入れた平穏は私にとってなによりの
宝物。

そんな関係が一年ほど続き、私の精神も少しずつ回復した。

今では看護師さんやお医者さんに触れられても緊張しなくなつた
し、真田さんとも長い間話が出来るようになった。

後、もう少し。もう少ししたら目を覚ましたフリをして瑞樹に会
おう。

そして、この病院を二人で出るんだ。私のささやかだけど叶えた
い夢。

しかし、神様はそう簡単には幸せにしてくれなかった。

いつものように瑞樹が病室を覗き込んで暴れだすと、鎮静剤を打つために連れて行かれる。

私は瑞樹がいない事を確認して起き上がろうとすると、視界の端に人影が入ってきた。

慌てて寝たフリをして薄目を開け、外を伺うと眼鏡をかけた女の子が私を覗き込んでいた。

眼鏡の奥の目は真剣に私を見ている。

よく分らないけど、私は寝たフリを続けた。

少しして、落ち着きを取りもどした瑞樹が戻って来ると、女の子と親しそくに話かける。

気になったけど、すぐに女の子はいなくなっただので、私の中で女の子は「すぐに忘れる人」になるはずだった。

でも、この日以来、私は気が抜けない日々が続く。

瑞樹だけじゃなく女の子まで来るようになったのがその理由だ。

女の子は当初、私をいくらか眺めると（何故眺めていくかは分からないけど）帰って行くだけだったが、次第に瑞樹が居る時間に合わせて病室前に来るようになる。

少しずつ仲良くなるのが傍目からも分かった。

それでも、私はガラス一枚隔てた病室で二人の経過を見守るしか術はない。

焦る心に『瑞樹を信じるしかない』……そう自分に言い聞かす。

しかし、瑞樹はその女の子とキスをした。

私はその光景を薄目を開けて見ていた。

まるで、テレビのキスシーンを見るように。

……これは他人事だ……私には関係ない……必死で自分に対しての弁解を繰り返した。

二人がいなくなってから私はベッドの中で丸くなり膝を抱える。何か凄く大切なものを失った気がして……涙が流れた。

好きな人が奪われようとしているのに見て見ぬフリをしました。
自分の平穏な生活を維持するために。

……本当に私は汚い人間です。

それでも……好きな人に好きであって欲しいと願い……泣きました。

私は好きな人を利用して今日も生きています。

「私が上杉亜也だけど……アナタがメールしたの？」

「まあ、そういう事になるなあ……まさか来るとは思わへんかったけど……」

教室がうす暗くて顔までは確認できないけど、この人が上杉亜也である以上、殺すしかない。

それが契約だから。

「真田はどうしたの……」

「ここにはおらへんよ。病院にでも行ってるんとちがう？」

こんな状況になっても相手は強気な態度を見せていた。

「こつちも名乗ったんだから、そつちも名乗りなさい……」

「……名乗ったってアンタ知らんと思うし、そんな意味無いことせえへんよ」

「……」

正直言つてこんな事、早く終らせたかった。私は殺すための武器を取り出す。

それは確実に殺せるように真田から渡された拳銃だった。

拳銃を見て一瞬、相手の表情が驚きに変わる。

しかし、すぐに表情を元に戻し私を睨みつけてきた。

「もしかして美世を殺したのは……」

「……アンタ、浅野美世の何なん？」

「友達」

友達にここまでしてもらえる浅野美世が少し羨ましくなった。

きつと浅野美世は友達も多かったのだろう……私には瑞樹しかないけど……

「そう。あの子は私が殺した」

「！！——それ本当？」

「本当やで」

「そう……」

上杉亜衣は私の返答を聞くと胸ポケットに手を入れ、ナイフを取り出した。

「そんなもんで私を殺せると思つとるの？ こっちは拳銃やで」

「……だから？」

「え？」

「私はここに来る前から死ぬ事なんて覚悟してきた！！」

そう叫ぶと同時に近くにあった椅子を投げつけてきた。

私めがけて飛んできた椅子を腕で防ぐ。

椅子が落ちると同時に私は発砲する。

しかし、正面にはすでに姿はなく彼女は教卓奥に移動していた。

「無駄な抵抗って奴やな」

「……」

私は少しずつ教卓に近づいていった。

第48話 「夜空を駆ける」

誰もいない病室を目の当たりにして、僕は後ろをゆっくり振り向く。

そこには勝ち誇ったように笑う真田がいた。

「これはどういうことだ。教えるよ」

「……さあな、オレにも分かん」

「ふざけるなっ!!」

勢いに任せて僕は真田に掴みかかった。

「『ふざけるな』だと? いい気なものだ。全てお前のせいだとは思わないのか?」

「何?」

「お前が仕事を辞めるといわなかったら……浅野に関わらなかったら……皐月を刺さなかったら……何も起こらなかった」

確かに僕の行動が色々な人へ影響を与え、身近な人も死んでしまった。

暗示にかかっている間は誰とも仲良くならず、上手くいっていたような気がする。

こうなったのも僕が自分を取りもどしたからだ……

「……でも、真田先生」

「ん?」

「僕は後悔していない。自分の選んだことだ」

「っ!? ……本当だな」

「ああ」

「これを聞いてもそういえるのか?」

「……何が言いたい」

「皐月はお前の代わりに仕事へ行った」

「なっ?! ……待てよ。皐月はずっと眠ってたはずだろ」

「はははっ、ずっと前から目が覚めてたさ。お前が知らなかっただけだ」

「……！」

意味が分からなかった……

皐月が今まで僕を騙していたなんて……

「何故、それを知っててアンタは今まで黙ってた……！」

「それが彼女の希望だったからだ」

「ウソをつくな……！」

「だからお前は甘いんだよ。彼女が目覚めたらすぐにでも幸せになれるとも思っただのか？」

「うるさい…… 皐月は何処にいる……！ 場所はどこだ……！」

「…… 学校だ。もう遅いと思うがな」

その瞬間、僕は走り出していた。

今は真実がどうのこうのじゃない。

彼女を止めよう。話を聞くのはその後だ。

私がまだ、眠っているフリをしていた頃の話。

季節は初夏。

キスの場面を目の当たりにして以来、瑞樹が来る頻度が減った気がする。

ここ最近、顕著になった。

一日一回が二日に一回になり、ついには3日経っても私の前には現れない。

きつと罰が当たったんだ。

自分からは何もしないで幸せになろうとした罰。

真田の話によれば友達と遊びに行ってみたみたい。

あの子と行ったのだろうか？

そんな私を見て真田は問う。

「瑞樹が来なくて寂しいか？」

「別に。たまには遊びに行くのもええんちゃう？」

「余裕だな」

「あはは、そう見える？」

「全然」

瑞樹がいなくなったら私は独り。

初めは独りになってもしょうがないと思っていた。

でも、時間が経つにつれて独りになるのが怖くなる。

……この病院から出なくなつてどれ位経つだろう。

もし、この病院を退院したら世の中は受け入れてくれるのだろうか？

私をおいて世界はどんどん進んでいく。

「ホントはなあ……めっちゃ怖い」

「だろうな」

表情を変えずに事実確認かのような真田の口振り。

「我が儘かも知れへんけど、瑞樹がおらへんようになったら……私

……」

「確かにそれは我が儘だな」

「うん……」

真田は天井に向かってゆっくりタバコの煙をはくと、私と向き合う。

「瑞樹は今までお前のために頑張った。それはオレが保障する」

「分かるよ……瑞樹の顔が日を追うことに険しくなっていたから

……」

私は少し前から瑞樹がどんな仕事をしているか知っている。

こんな病室に入院できるんだからお金は相当掛かっているのだから。

だから、仕事内容を知った時に“驚き”と同時に“やっぱりな”という気持ちを持った。

「だったら、今度はお前が変わりにやってやる番じゃないのか？」

「……」

「好きなんだろう？」

この一言には逆らえない。

「……うん」

「だったら……わかるよな」

「……分かった……やる……」

それから一週間以上経った暑い日。真田は突然やってきた。

病室のドアを乱暴に閉めると一言言った。

「瑞樹はもう殺しはしないといっている」

「……」

「お前を見捨てる気かもな」

——来るときが来た。

「しょうがないやん。私じゃあ何にもしてやれへんし……自業自得や」

「……違うだろ」

「え？」

「自分の力で取りもどすんだ」

「……どうやって？」

真田は私に一枚の写真を私に向けた。

写真には見覚えのある顔が写っている。

瑞樹とキスをした女の子だった。

「お前も知っているだろう」

「……」

「コイツを殺せ」

「!？」

「いつまでもココに居るわけにも行かないだろ？」

「……」

「前から言い聞かせていたはずだ。アイツが駄目になったときは……」

私は静かに頷いた。

深夜、ある病室の前にいた。

病室前の名札には「浅野美世」と書いてある。

ここで始めて私はキスの相手の名前を知った。ドアを静に開ける。病室内は暗いのかと思えばベッドのスタンドライトが点いていて、眠れないのか読書をしていた。

彼女はドアが開いた事に気付いてこっちを向く。

「見回りの方ですか？ すいません。もうすぐ退院だと思ったら眠れなくて……」

私は素早く室内に入る。

「えっ!？」

彼女は私を見ると悲鳴を上げるでもなく、大きく目を開いて動かなくなった。

「はじめまして……や、無いよなあ」

「……アナタは皐月さん？」

「名前まで知っててくれたんや……だったら話は早いな。ちょっとついて来てくれへん？」

「……」

「手荒なマネはしたくないんや」

「……わかりました」

屋上へ階段を上る途中、彼女が口を開いた。

「いつ目が覚めたんですか？」

「知りたい？」

「……はい」

「2年前」

「えっ！？……どうして……澄川君はあなたの事を待っていましたよ」

「そんな事、知ってるわ。私だって会えるもんならとつくに会ってる。アンタなんかキスなんかさせへん……」

「……全部知ってたんですね」

「知ってたけど……どうしようもなかったんや……」

「……ごめんなさい」

「……」

屋上に着くと、すでに真田と冴木社長が待っていた。

「ようこそ。浅野美世さん」

「……」

「ウチの会社はね、一度契約したサービスはキチンとこなさなきゃいけないんだよ」

彼女はこの状況を見て、すべて察したようだ。

「……ここで私が逃げても無駄なんですね」

「そつだよ無駄」

冴木社長は淡々と答える。

「……」

「でも、逃がしてあげてもいいな」

「え？」

社長は醜悪な薄笑いを浮かべた。

「目の前にいるその女の子と殺し合いをして、勝てばOK」

「……」

目の前にいる女の子。

それは私のことだ。

「社長、それでは話が違います!!」

「駄目だよ真田。無駄、無理」

すぐに真田が社長に訴える。

でも、社長と呼ばれる人は聞く耳を持たなかった。

私と浅野美世は向き合う。まさかの展開に私は戸惑った。

彼女は私を凝視する。

「今まで私は皐月さんに勝ちたいと思っていました……澄川君の気持ちは私には向いていなかったから。だからここでアナタを殺せば彼は私のモノになる」

「あんた……」

浅野美世の言葉を聞いて私は戦う準備をする。

生き延びなければ……瑞樹に会わなければいけない。

その気持ちは私だって同じだ。

しかし、私の気持ちとは反対に彼女は険しい顔から一変、優しい顔になる。

「でも、そんな事はどうでもいいんです。皐月さん……目が覚めて良かったですね」

「……あんた、なにゆってんの?」

「澄川君とお幸せに」

浅野美世はフェンスを上りだした。

あつという間に向こう側へ移る。

「なあ、どういづつもり!」

「私が死なないと澄川君が困るんでしょ?」

「そんな事、簡単に決められるもんなん?」

「……簡単じゃないですよ。でも……だからこそ簡単に決めようと思つて……」

この場で思ふことじゃないけど、微笑む彼女はとても綺麗だった。

そして彼女は社長の方向へ体を向けた。

「殺し合わなくたって最初から勝敗は付いてますから……私の負けです」

「……」

社長は黙って彼女を見つめている。

「私は好きになった人を守るために死にます」

「……ふーん、つまんねー」

「笑わせるつもりもないですから、人を好きなるってそんな事じゃない」

「はあ？ ……この偽善者が」

私と真田は何も出来ずに立ち尽くした。

薄笑いを浮かべていた社長は初めて難しい顔をする。

誰も動けない。

一人の少女に私達はこの場を完全に支配されていた。

冴木社長と浅田美世の会話は続く。

「喋りすぎだね……君、うざいよ。誰かアイツを撃ち殺してよ」

「寂しい人……アナタには自分のために死んでくれる人はいますか？」

「はあ？ ……真田！！早く撃ち殺すんだ！！」

「……拳銃なんて持ってませんよ」

「使えない奴だ！ だったら、僕がやってあげるよ」

社長は背広の懷に手を入れると拳銃を取り出し、浅野美世へ向ける。

しかし、それより少し早く彼女は屋上から足を踏み出す。

飛び降りる瞬間、彼女の口が微かに動いた。

「みんな、ごめんね……」

視界から消えるまでの動作がすぐゆっくりに感じられ、私の手が自然に彼女に向かって伸びる。

しかし、私の手はフェンスにぶつかった。

「なんで？ なんてや！！」

私はどうしようもない後悔と敗北感に襲われる。

数秒後、鈍い音が屋上に届いた。

無言で社長は立ち去り、屋上には私と真田が残る。

「死んで好きな人を守るだって？ …… ふざけるな！！」

「……真田？」

「臆月、ホントに愛しい人を守りたいなら死ぬな。たとえそれが人として間違ったことだとしても……」

何度も屋上のフェンスを殴りながら真田は呟いた。

思い出に浸るのはやめよう。

今、私は仕事をこなさなきゃいけないんだから。

少しずつ慎重に私は教卓へ近づいていった。

「どうする気が知らへんけど、もう終わりやで」

「……」

次の瞬間、教卓ごと突っ込んできた。

何発か発砲するけど、教卓の勢いは止まらずに私へ近づく。

駄目だと思った寸前、教卓は横に逸れ上杉亜衣は倒れこむ。

肩をおさえている姿を見ると弾は彼女に命中したようだ。

「これで終わりやな」

ゆっくり銃口を上杉亜衣に向ける。

後は引鉄を……

「？」

彼女が持っていたナイフがたまたま目に入る。

そのナイフには見覚えがあった。

見間違うはずがない……これは私のナイフだ。

何でこの子が持つてるの？

「このナイフ、アナタのもん？」

「……アンタには関係ないでしょ」

「答えて！！ 答えへんと撃つで！！」

「答えても撃つくせに…… このナイフは知り合いのものだけど……」

「そいつの事好きなん？」

「……かもね」

「……」

その瞬間彼女は私の足首を掴んで、引つ張った。

私はバランスを崩して倒れ、弾みで拳銃を手放してしまう。

拳銃は遠くへ滑っていく。気が付くと上杉亜衣は私へ馬乗りになつていた。

「形勢逆転…… だよね……」

「……」

「さっきの言葉はウソ。私はそいつの事は何とも思つてないよ。だって、澄川はこのナイフの元持ち主が好きだから…… ってこんな事あんたに言つても無駄か……」

「……」

彼女の振り上げたナイフは瑞樹が私を刺したあの時のまま。

殺される寸前でも『瑞樹は大切にしててくれてたんや』なんて考えていた。

ナイフから瑞樹の愛情が伝わってくる。

最初から瑞樹を疑う必要なんて無かった。

迫るナイフに私は涙が溢れ、自然に口から言葉が漏れる。

「……瑞樹…… ごめん」

第49話 「赤色の街」

走り行く澄川を見送って、オレはタバコを取り出す。

これを吸ったら動くでしょう。

「何故、場所を教えたんですか？」

「……有田」

声の方向へ振り向くと、『Thread winter』の受付嬢、有田が立っていた。

「依頼を阻止されるかもしれませんよ」

「構わないさ」

「……そうですね」

こんな事を彼女に言う義理はないが、オレは自分への確認のためにも話す事にした。

「少し前、オレは自分の教え子を見殺しにしてしまった」

「自分を殺して欲しいと言っていた女の子ですか？」

「ああ。アイツ、死ぬ間際に『アナタには自分のために死んでくれる人はいますか？』と言った……」

「……」

「オレは教師でアイツ等を導いているつもりだったが……どうやら反対だったらしい。オレにも昔、自分のために死んでくれた人達があった……」

「白井課長親子のことですか？」

「知ってるのか」

有田は頷いた。

「オレは……優を助けられなかったことをいつも後悔し続け……澄川に自分を重ね合わせて誤魔化してた」

「……」

「だからココへ確かめにきたんだ。そして澄川は自分のした事を後悔していないと言った。オレとアイツの違いってなんだろう……分らないんだ」

オレの問いにもならない問いかけに有田は率直に答える。

「私は真田さんと彼に違いは無いと思います」

「……そうか」

「そうですよ」

「……ありがとう。嘘でも嬉しいよ。……もう、後悔するのは止めた」

「真田さん、聞いてください」

「なんだ？」

「真田さんのその言葉を待っていました。……だから私達ココに来たんですよ」

「私”達”？」

「行く気なんですよ？」

「……何の事だ？」

「誤魔化さないでください」

有田はオレを見据えたと思うと、突然頭を下げた。

「ごめんなさ。私達も知っていたのに何も出来なかった……でも、真田さんが動くなら一緒に行かせてください！」

有田の言葉を合図に周りから数人の影が姿を現す。

どいつも見覚えのある顔ばかりだった。

「お前達、何を考えている」

「真田さん、言ったでしょ？『もし困った事があったら言ってくださいね……私達もここの社員ですから覚悟は出来てます』って」

オレを囲んでいるのは事務所の人間全員だった。

「明日から事務所はどうするつもりだ？ これじゃあ、誰もいなくなるじゃないか」

「社長がいなくなれば、営業してる場合じゃないでしょ？」

「お前たち……もうちよつと要領良く生きろよ」

「疲れました……要領良く生きるの」

「……そうだな。オレもだ」

「……瑞希……ごめん」

「えっ!？」

私は聞き覚えのある名前に反応してナイフを軌道修正し、彼女の真横を通過させて床に突き刺す。

どうして澄川の本名をこの人はしってるの？

彼女は何が起こったか分からずに茫然としていたが、しばらくして口を開いた。

「……どういう事？」

「今なんて言った？ 瑞希？ ……アナタ、澄川の事を知ってるの？」

私の問いかけに彼女は横を向いて呟くように言う。

「それは私が瑞希に渡したナイフや……」

「っ!! ——じゃあ、アナタは美浦皐月!!」

すると、彼女——美浦皐月はゆっくり頷く。

この時点で私は彼女を殺さなくてはいけない理由の半分以上を失った。

私は皐月さんから離れる。彼女はゆっくり起き上がり、私を見つめた。

「話してくれる？ 何故、皐月さんがココにいるか」

「……うん」

少しずつ彼女は自分の事を話し始めた。

刺され入院したが、少しして意識を取戻けど人と接するのが怖くて罪悪感を抱きながら澄川を騙し続けた事や、美世の最後まで。彼女の知っている範囲の話を聞く。

直接、美世を殺したわけではないけど、皐月さんは間接的に関与していた。

「私は……見殺しにしたんや。こんな酷いことしてもな、彼女は瑞希のために死んでくれたんや。私には出来へん。勝負は私の負けやっただ……」

皐月さんは酷く落ち込んでいる。

彼女も自分なりに思うところがあるのだろう。

深刻そうな横顔を見ると私は彼女を励ましたいと思えてくる。

「……美世が死んだのは澄川の為だけじゃないよ」

「え？」

「だって、死ぬ間に『みんな……ごめんね』って言ったわけ……」

「何だかんだ言って……皐月さんや真田の為にやったことだと思う」

「でも、でもな——」

「あの子結構、周りに気を使うから」

「ああ、ごめんな。ごめんな……」

「落ち込むことないって」

こんな事を言いながら「慰めて欲しいのは私だよ」なんて思ってしまう。

「それにしても私が皐月さんに殺されそうになるなんて……」

「初めは……松田元樹っていう人を殺すように言われてたんやけど、依頼人が途中でターゲットを上杉さんに変更してきたんや……」

「それってもしかして……」

静まった教室に遠くからの足音が聞こえる。

私は少し身構えた。皐月さんも黙ってドアを凝視する。

足音はこの教室の前で止まり、私達に緊張が走る。

勢いよく開けられたドアが開くと、そこには見覚えのある人物が入ってきた。

「皐月!!」

「えっ? 澄川?!」

澄川は私の姿に驚く。

「上杉? 何でここに?」

「それはこっちのセリフ。よくここが分かったね」

「真田に聞いたんだ」

「み、瑞希……」

澄川の視線はすでに私にはなく、隣にいる皐月さんを見ていた。

「どうということなんだ? 説明してくれ」

「あっ……」

問い詰められた皐月さんは怯えて何も答えられない。

二人のやり取りに私は口を挟む。

「あのね、これには事情が——」

「上杉は黙っててくれ。これは二人の問題なんだ」

『二人の問題』という言葉に私は何か言う術を失った。

「なあ、皐月。教えてくれよ。なんでこんな事をしたんだ?」

「……ごめん」

「謝られてもわからない」

「……」

澄川に責められて皐月さんは今にも泣き出しそうだった。

彼女だって本当はもっと感動的な再会を夢見てたに違いない。

そんな皐月さんを見ていられなくなった。

駄目だと思いながらも口を挟んでしまう。

「澄川」

「黙っていてくれ」

「嫌。黙らない!!」

「……上杉さん？」

澄川と皐月さんは私を見つめる。

「澄川、アンタはどうだったの？」

「何が？」

「人殺しをした気分」

澄川は眉をひそめる。

皐月さんもキョトンとして、私の言ってる事が良く分からないみたいだ。

「どういう意味だ」

「アンタは真夜中、洗面所で吐き気に襲われてでも人殺しをしていたんだから分かるでしょ？ 皐月さんだって……アンタの為にこんな事をしたんじゃないの？」

「……確かにそうだが……僕は、皐月だけにはこんな事させたくなかった！」

私達は何を話すでもなく黙り込む。

皐月さんが話し出すのを待っているのだ。

彼女が再び話し出すまでの時間が私達には長く感じられた。

「ごめんな……私が悪かったと思う。ずっと黙ってたし……でも、でもな、私……」

「……」

皐月さんが必死に言葉を探している。

……にも関わらず、澄川は私達ではなくその先を見つめていた。

「どうしたの？ 澄川……」

澄川は突然、こっちに向かって走り出す。

そして、私の肩を掴んで押しのけるように駆け抜けた。

私はただ真横に飛ばされ、壁に体を打ちつける。

次の瞬間、銃声が響き渡った。

「……」

スローに時間は流れ出し、澄川はゆっくりその場に崩れ落ちる。

澄川の向こう側に見えたのは……………姉だった。

「結局、自分でやるしかないみたいね。ホントに役立たずな人達」
「あつ……………」

「こつちを向きなさい、亜衣！」

姉はさっきの格闘で弾き飛ばした拳銃を持っていて、私に銃口を向けた。

「す……………澄川！！」

私は澄川に駆け寄り傷の具合を見る。

近くにいる皐月さんはその場で動けないでいた。

「大丈夫か澄川！！　今、救急車を呼んでやるから！！」
すると私の声に澄川は反応した。

「……………お前は……………大丈夫か？」

「バカッ！！　今は自分の心配をしなさい！！」

私達のやり取りとは別に後ろで声がする。

「言う事を聞いてこつちを向きなさい！！　それとも死にたいの？」
「上杉さん、あの人が何か言うてるよ……………」

私は澄川の服を脱がせた。

腹部からは血液はどんどん溢れんかの勢いで流れている。

「澄川っ！！　血が止まらない……………」

「亜衣、無視しないで！！」

「皐月さんも傷口を押さえて！！　早く！！　なんで止まらないの……………」

「でも、拳銃を持ったあの人……………」

「そんな事よりこつちが先！！」

「でも……………」

「もうあの人は関係ない人だから……………澄川しっかりしろ！！」

「亜衣、無視するな！！」

その言葉と同時に姉は私達に向かって発砲した。

しかし、弾は逸れ床やガラスを割る。

「そんなにその男が大事？ アナタにとって何なの！！」

「……関係ないでしょ」

「答えなさい！！」

「うるさい！！」

姉は再び発砲し、弾は皐月さんの肩を掠める。

「痛っ！！」

「ちっ、外れた！……もう一回」

「止めて！！ その人は関係ない！！」

「だったら答えなさい！！」

「っ……」

「早く！！」

「澄川は私にとって……」

「……」

「アンタなんかよりよっぽど大切で！！ 掛替えの無くて！！」

「なっ……」

「今、一番失いたくない人だよ！！」

「亜衣、まさかその男が——」

「好きだよ……悪い？」

誤魔化そうと思えばいくらでも誤魔化せたとと思う。

でもこの状況で自分の気持ちを偽る事は出来ない。

そして何よりも……姉にハッキリとした意思表示が必要だと感じた。

「なんで？ 私じゃ駄目なの？ アナタのためなら何でもしてきたのに……」

それは重々承知している。

私に非がないなんて思わない。

でも、全てを明白にしないと……

お姉ちゃんと私は『永遠に交われない』ってことを。

「アンタなんか……絶対、好きにならない……一生独りでいれば良い」

「ああ、亜衣……私を嫌わないで……お願い」

姉はその場に崩れ落ちるようにして座り込む。

私は無視して澄川を介抱していた。

「……上杉さん！！ お姉さんが……」

「え？」

振り向くと姉は自分の頭に拳銃を当てていた。

とつさに姉へと駆け寄る。

しかし、姉は引き金を引いた。

「……」

ガチッ。

拳銃は予想を反した音を上げ、辺りは静まる。

姉はまだ生きていた。

姉はその後、狂ったように何度も引き金を引くが、一向に弾は出ない。

事の結末を待っていたかのように救急車のサイレンが聞こえてきた。

第50話 「幸せの行方」

「なあ……瑞希。朝やで」

「……うん」

「はよ起きな遅刻するで!!」

「ええ? ああ……」

呼ばれるままに目を覚ます。

見慣れた天井。ここは僕の部屋だ。

視界の端では覗き込む皐月の姿が見える。

「あつ、やっと起きたな。いつも言っとなるやん、早く寝やなあかん
つて」

「うーん……」

「ん? どうしたん? ……もしかして、まだ寝ぼけとる? しよ
うがないなあ。顔洗ってシャキッとせなあかん」

「あ、ああ……」

洗面所へ行き顔を洗う。

大して冷たくもない水に一向に眠気は覚めない。

鏡越しに見える皐月は手際よく朝食の準備をしていた。

タオルで顔を拭くとキッチンへ行き椅子に座る。

炊き立てのご飯に味噌汁、それに焼き魚、日本の朝食。

「我ながらメツチャ上手くできたやん!! いっただきま〜す!!」

僕もつられて食べ始める……確かに美味しい。

「どう? 美味しい?」

「……うん」

すると皐月はこれでもかというほどの笑みを浮かべた。

「今日から学校行くんやから、しっかり食べなあんで」

「ああ……」

朝食を食べ終え、学校へ行く準備して靴を履く。

後ろには見送ろうと皐月が立っていた。

僕は振り向き彼女に尋ねる。

「あのさ、僕達……これでよかったんだよな」

「はあ？ 何言ってるの？ ええに決まってるやん」

「良かった」

安心して下を向いた瞬間、皐月は僕の額にキスをした。

「わわっ！！」

「……こんな事しか出来やんけど、頑張って勉強してな！！ 私も仕事頑張るから！！」

「……うん！ いつてきますー！！」

季節は秋。ずいぶん周りの景色も変わった。

僕は久しぶりの学校という事もあって、登校している人たちに混ざって歩くのが少し気恥ずかしい。

クラスに僕の居場所はあるのだろうか……って良く考えたら元々そんなものは無かった。

いつも誰とも関わらずに過ごしていたから……

「おはよー！！ 澄川君！！」

「えっ？」

後ろを振りかえると、上杉亜衣と吉田有希が僕に向かって手を振っていた。

「ねー、ねー、澄川君、久しぶりの登校はどう？ 嬉しい？ 緊張する？ それとも気持ち悪い？」

「有希、そんな矢継ぎ早に質問しても澄川が困るだけだよ」

「あつ、そっか」

「まあ、それは置いておいて……澄川、聞いてくれる？ さっき有希がね……」

「ちよつと！！ それは言わないでって頼んだでしょー！！」

「そっだっけ？」

「もう！！ 澄川君からもなんか言ってやってよ！！ ホント、口が軽いつ！！」

いつの間にか僕をはさんで上杉と吉田と一緒に歩いている。

二人が争うように話しかけてきた…… なんだか嬉しい。

臯月だけじゃなくて僕を受け入れてくれる人がいる事に感謝したい気分だ。

「そうだ、今日のお昼は屋上で皆そろってお弁当食べようか？」

「いいねえ。私は有希に賛成！！ 澄川は？」

「……わかったよ」

「じゃあ決まりだね！！」

上機嫌の吉田はそのままスキップして僕らの数歩前を進む。

二人並んで歩く格好になった上杉に確かめたい事があった。

「なあ、上杉」

「ん？ 何？」

「こんなに幸せでいいのかな」

「何言ってるの？ いいに決まってるじゃん。今までの分取り戻そ」

「そ……そうだな」

『今まで分』か……

——あれ？

今までって……僕は何してたんだっけ？

いつの間にか教室の前に立っていた。

僕は緊張してドアを開けるのをためらう。

そんな姿を見て上杉は教室のドアを開けた。

「怖がらないで。ここではみんな澄川を受け入れてくれるから」

「……ありがとう」

一步、教室へ踏み出す。

久しぶり教室。なんだか他人の部屋にお邪魔するような感覚。だけど、自分の席は何となく覚えていてすぐに辿りつく。

席に座って周りを見渡す。
見慣れない見慣れた風景。

……その中に見えた一人の女の子。

「あつ……」

「澄川君、おはよう」

恥ずかしがりながら挨拶した女の子は……浅野美世だった。

そして僕は理解する。

——これは夢。

都合よすぎると思ったよ。

……でも、いいじゃないか。

覚めなければ……それも現実。

僕は返事をする。

「浅野、おはよう」

心拍が表示されたモニターには定期的な波があらわれ、命がそこにある事を示している。

私の目の前には眠っている瑞希が静かな寝息を立てていた。

あの事件からすでにかなりの時間が経っている。

あの後、私の指示で自分が入院していた病院へ救急車は向かった。
緊急手術により一命をとりとめた瑞希は、8階特別病棟で入院する事になる。

丁度、私と入れ違いになった形だ。

幸い、手術は成功し、後は麻酔がきれて目を覚ますだけだった。

だけど3日経っても目を覚まさず、一週間、二週間たっても状況は変わらなかった。

そして、一ヶ月。今も眠り続けている。
傷口は順調に治り、外見も正常なはずなのに目を覚ますことは無い。

私は瑞希の隣にいる。

毎日、毎日何をするでもなく眺めるだけ。

きっと瑞希は私の事を怒っているのだろっと思う。

だから、目を覚まさないんだ。

償う術も見つからず今日も彼のそばにいる。

ふと気付くと私の後ろには上杉さんが立っていた。

窓から見える景色もいつの間にかオレンジ色にそまってる。

「なんや、来てたんか……」

「うん……」

「……」

「今日も起きない？」

「見た通りや……」

会話が続かない

彼女は私に気を遣ったのか他の話題を振る。

「新聞見た？」

「……うん。読んだで」

「真田……凶悪犯扱いだね……」

「……しょうがないやん。アレだけ人を殺したんやから……」

一ヶ月前、私達の病院でのいざこざの最中に真田さんは『Threat winter』の社長、冴木の自宅を襲撃。

社長やボディーガードを含め7人が殺された。

警察が駆けつけ、現場で一人佇む真田さんを逮捕する。

高校教師が起こした大量殺人事件だけに、マスコミはこぞって取り上げ、社会問題にもなった。

世間は教師のモラルだとか犯罪心理がどうだとか騒ぐ。

でも、『Thread winter』のもうひとつの仕事については取り上げられる事は無かった。

どこからか圧力が掛かったのかもしれない。

「何であんな事したんだろ……」

「さあ、私がかつとるのは、殺された社長が相当悪い奴やったって事ぐらいやなあ」

「そう……」

「うん……」

静まった病室に彼女の力なく言った言葉が響く。

「『Thread winter』に関わった人は……皆、不幸になつていくね……」

目の前にいる上杉さんや真田さん、浅野美世、そして瑞希。不幸の連鎖は止まらない。

きつとこれからも不幸が続くのかもしれない。

そう思うと自然に言葉が溢れる。

「瑞希はそつとしてやるのがええのかもしれない……」

「……」

「実際、瑞希が起きへんのは起きたって何もええことあらへんって分かつてるからかもしれへんし……このままが正解かもな……それにこうやって寝とる瑞希を眺めるのも悪くあらへん。言い争う事も無いしな……」

半分冗談、半分本気。これが私の本音なのかもしれない。

しかし、私の言葉を聞いた上杉さんは体を強張らせる。

「どうしたん？」

「……さない」

黙ったまま小刻みに震えていて、何かに耐えているかのようだった。

やがて、搾り出すかのように呟く。

「許さない……」

「え？」

突然、彼女は足を振り上げたと思うと、ベッドを勢いよく蹴っ飛ばした。

「澄川、起きなさい!!」

「ええっ!? ちょっと、上杉さん？」

「起きなさいよ!!」

「どうしたの!? 止めて!!」

いきなりの上杉さんの行動に私は慌てた。

彼女は瑞希の胸倉を掴んで揺さぶる。

「起きろって言うてんだろ!!」

「上杉さん、落ち着いて!!」

「澄川、アンタはもう目を覚まさず気がないのかもしれない。だけど、だけど……そんなの絶対、私が許さない!!」

「もうええやん!! 瑞希を眠らせてやって!!」

上杉さんの腕を掴んで顔を覗き込む。

……すると彼女は涙を流していた。

「確かに起きたって良い事なんか無いかもしれないけど……私はアンタを引きずってでもこの世界に……どんなに辛い事があっても……続きがある事を教えてやるんだ!!」

数人の看護師が病室に入り、上杉さんを取り押さえる。

病室から出て行くまで言葉にならない、わめき声を上げていた。

一人病室に残され瑞希の衣服を整え布団をかける。

それが終り、椅子に腰掛けると私は考えてみた。

瑞希が撃たれた時、上杉さんは自分が殺されるかもしれないというのに臆せず彼の介抱をした。

私はといえは拳銃を持った依頼人に怯えて動く事すら出来なかった。

そして今、私は瑞希にこれ以上辛い思いをしたくないから起きて欲しくないと思い、彼女は辛くても起きると言った。

どちらが正しいのか……

「はぁ……」

いや、多分正解は無い。

でも、「瑞希には上杉さんのほうが相応しいんじゃないか」と頭を過ぎる。

『アンタなんかよりよっぽど大切で！！……掛替えの無くて！！……今、一番失いたくない人だよ！！』

上杉さんの言葉が引つかかっている私がいた。

まだ彼女に真意は確かめてない。怖くて聞けないのだ。

彼女がもし瑞希のことが好きだといえば……私は独りになる……そこまで考えると私はため息が出た。

なんだ……結局、私は自分の事しか考えてない。凄くいやな奴だ。でも……もう私には瑞希しかいないから。

彼は目覚めたときに私を選んでくれるのだろうか……

第51話 「元気を出して」

僕は他の人格に人生をまかせながら生きていた時、ずっと思ってた。

『今度送る人生はずっと笑っていられるものになりたい』
でも、そんな人生ありえない。

諦めていた……

「さすが皐月さんね、この玉子焼き美味しい」

「上杉、勝手に食べるの止めるよ」

「良いじゃん。私のあげるからさ」

「上杉の料理は食べ飽きた」

「アンタねえ……」

僕らのやり取りを見て浅野が止めに入る。

「まあまあ、二人ともケンカしないで」

「そうだよ亜衣、自分の食べなさい。さあ、澄川君、私のお弁当食べよう」

壮大なポリウムのお弁当が僕の前に出された。

これを食べるのか……

「有希のおかず貰いつ……」

上杉の箸が吉田の弁当へ向かう。

「あーっ！！ 亜衣！！ てめー、自分の食べるって言ってる……」

「有希ちゃん……澄川の前だよ」

「あつ……」

「有希、そんな隠なくたってもうバレてるって」

「誰のせいでこうなったと思ってんだよ……」

「ほらほら、また地が出たよ」

「あわわわ……」

慌てて取り繕う吉田。

それをジト目で見つめる上杉。

目が点になつてゐる浅野。

クスクス、アハハハ、フッフ、自然に笑い声が出てくる。

僕らは今日もこうやって昼休み屋上で弁当を食べていた。

天気はいつも快晴で、季節はいつまでも秋。殺しの仕事も無ければ、悲しい事もない。

全てが満たされた世界。とうとう手に入れた。

居心地は最高で僕等はいつも笑つてゐる。

病室を前にして少し躊躇する。

私はあんまり歓迎されていないからだ。

ドアをノックする。すると奥から「どうぞ」と聞こえたのでドアを少し開け、顔を出す。

「入っていい？」

「なんだ、亜衣ちゃんか。入って、入って」

付き添いの元樹さんは笑顔で迎えてくれた。

その奥で動く影。

後ろに隠れて震えている。

「法ちゃん。怖がらなくていいよ。あのお姉ちゃんはもう怒らないから」

「……でも……あのお姉ちゃん……怖い……」

私を「お姉ちゃん」と呼んで、元樹さんの肩越しから伺っているのは……姉だ。

姉はあの後、警察にも捕まる事はなかった。

警察を呼ぶと澄川の素性がばれるという配慮からだったが、この事が裏目に出る。

家に帰った姉は独りになると自殺未遂を繰り返し心身喪失状態に陥り、自らの精神状態を守るために幼児後退をしてしまったのだ。

元樹さんの言葉にも関わらず、姉は私を怖がって彼のそばから離れようとしなない。

私は少し離れた所に椅子を置き腰掛ける。

元樹さんは震える姉を安心させようと何度も頭を撫でていた。

こうなったのも私のせいだ。

しかし、元樹さんはこう言ってくれる。

「法さんには悪いけど……亜衣ちゃんには感謝してる」

「え？」

「だって、こうやってこの子は僕を頼りにしてくれるんだ。幸せだよ……」

「そう……なんだ……」

確かに姉は元樹さんを信用しきっている。

昔から姉はいい子で通してきた。

それは同時に誰の手も煩わせることなく一人で頑張ってきたという事……心の底では頼ることが出来る人を探していたのかもしれない。

「どうした？　なんか悩み事でもあるの？」

「えっ？　別にない……です……」

「最近、毎日のように来るじゃないか……澄川君のところへは行かないのかい？」

「私は行かない方がいいんです……」

「どういうこと？　よかったら話してみない？」

元樹さんは私にまで優しく微笑んでくれる。

情けないかもしれないけど、元樹さんに今の真情を吐露した。

この前、私は寝ている澄川に起きろと言った。

もちろん、「澄川に起きて欲しい」という気持ちもあったが、それよりも「私を独りにしないで欲しい」という気持ちのほうが遥かに大きかった。

……それは私の我が儘だ。

傷ついた澄川をさらに鞭打とうとしているような気がして自己嫌悪に陥った。

——やっぱり皐月さんの方が澄川には相応しい。

私は眠ったままの澄川をいつまでも見守るなんて度量はない。

だから、姉を見守る事にした元樹さんを見ていたら、皐月さんの気持ちが少しでも分かるかなと思ってここに來たのだ。

元樹さんは私の話を何度も頷きながら聞いてくれた。

「私、もうあの病室には行かない方が良いのかなって思えて……」

「……」

「でも、病室行っても行かなくても……気持ちだけがどんどん大きくなるし……」

膝の上に乗せた手がいつの間にか震えて、目に涙がたまる。

踏ん切りがつかない自分、溢れる想いをどうしようも出来ない気持ち。

惨めに思えてきた……悲しい……

私の気持ちが頂点に達した時、何かが私の頭に触れた。

目線だけ上に遣ると姉の手が私の頭を撫でていた。

「？」

「……元氣を出して……お姉ちゃん……」

「！？」

頭を撫でる手はぎこちなく、声は震えている。

私をまだ怖がっているのだ……でも、姉は懸命に励まそうとして

いた。

私に元樹さんが声を掛ける。

「これが答えじゃないかな。元気だそうよ。くよくよ考えて何もしないなんて亜衣ちゃんらしくない」

私はもう涙を止められない。

場所もわきまえず声を上げて泣いてしまった。

再び澄川のいる病室の前にいた。

ノックをすると奥から返事が返ってくる。

私はドアを開けた。

すると室内にはやはり今日も皐月さんが看病をしていた。

「なんや、久しぶりやな」

「……ええ」

「まあ、私の横でよかったら座ってな」

「……うん」

「……」

「……」

私が来たのは暴れた時以来だったので、緊張した。

そう思ってるのは自分だけかもしれないけど……会話が続かないのが余計に焦る。

澄川の顔を見る。相変わらず安らかな顔をして眠っていた。

目は覚めていないものの澄川の顔を見ると心が落ち着く自分がいた。

「あのさあ……」

「……何？」

「今度来たら言おうと思ってたんやけど、夕方からさあ……私の代わりにな……瑞希を頼めへんかなあ」

「ええっ！？ どういう事？」

皐月さんの突然の申し出に私は戸惑った。

私は澄川の顔を見られれば良いと思っていたから。

「私ばかり瑞希を独占してたらアンフェアかなと思ってな。それに仕事も見つけへんとお金がヤバイし……」

「えっ？ えっ？」

「……好きなんやろ？ 瑞希の事」

「いや、それは……どうかな？」

私にだって良く分らないんだからなんとも言えない。

「遠慮せんでええよ」

「えっと……その……」

「うんうん」

ふと頭を過ぎる『よくよ考えて何もしいなんて亜衣ちゃんらしくない』という言葉。 私は偽るのは止めた。

「……好き、かな？」

「やっぱりなあ」

「……ごめんなさい」

「何で謝るの？ …… ホンマ言うとな、この前のアンタ見てたらな…… 何か自分のやつとる事が間違つとる様に思えてな…… 身を引こうと思つたんや……」

「なんでそう思うわけ！？」

「あはは、変かな？」

「えっ…… いや、変じゃないかもしれないけど……」

かなり驚いた…… っていうか安心した。

皐月さんは私と同じ事に悩んでたんだ。

「でも、やっぱり無理やわ。 瑞希の事やっぱり好きやもん」

「うん。 私もそうだよ」

結論まで同じだった。

私の言葉を聞くと皐月さんの表情は明るくなる。

「それやったら、瑞希が起きるまでこのままでええやん。起きてから瑞希に決めてもらおうって思ってた……あかん？」

私は首を振った。

「それ、大賛成！！ このまま私達が考えても仕方ないし。澄川は寝てばっかなんだからそれぐらい決めてもらいたい！！」

「じゃあ、決まりやな」

「うん」

「後腐れ無しでよろしくな！！」

「こちらこそ！！」

何故か私達は意気投合してしまう。

ここでも私は戦友と呼べる仲間を見つけた。

結果はどうであれ後悔をしないことが私にとっての重要事項だと思う。

第52話 「やっと言えた……」

それから私達は昼夜を交代で看病する事にした。

朝から夕方までは私が、消灯までは学校帰りの上杉さんが担当する。

多少不平等なのはしょうがない。

彼女は高校へ行かなくちゃいけないから。

夕方、上杉さんと交代して病院を後にする。

向かう先は瑞希が住んでいたアパート。私はドアを開けた。

部屋の中で、瑞希が今までどんな風に暮らしていたかを拾い集める。

私が病院にいて知る事の出来なかったものがたくさんあった。

テレビの上においてある写真を見る。

そこには私の写真の上に浅野美世の写真が貼ってあった。

初めてこの写真を見た時、一緒にいた上杉さんは慌てた。

「こ、これはね……私がやりました」

「ふーん」

「怒ってる？」

「……少し」

実は全然怒っていなかった。

逆に上杉さんの写真じゃなくて良かったと思っていたぐらい。

「ごめん」

「謝るぐらいだったら、この時の事を話してくれへん？」

「え？」

その時は少しでも自分の知らない瑞希を知りたかった。

瑞希や上杉さんに追いつくために。

上杉さんは色々な事を話してくれた。

瑞希が別の子に告白されたけど、浅野美世を選んだ事とか、その流れで上杉さんが瑞希の家に押しかけた事。

何気ない二人暮らしの生活。

話してくれたこと一つ一つが、彼女は何か決定的な理由で好きになったんじゃない、少しずつ日々を重ねることで瑞希に好意を持ったという証明になった。

「それやったら写真はそのままにしておこか」

「いいの？」

彼女は驚いたように私を見る。

「ええもなにもないよ。これは瑞希の思い出やろ？ 私には関係あらへん」

「私だったら破り捨てるけど……」

「でも、まだ残ってるやん」

「それは……美世の写真だから……」

上杉さんにとって浅野美世は大切な友達だったのだろう。

「ホントはな……今すぐにでも私の好みに変えてやりたいけど、こういう事は瑞希と二人でやりたいからな」

「……そうだね」

でも、一ヶ月経った今でも私はこの部屋で独りだ。

写真に向かつて話しかける。

『今まで守ってくれてありがとう。でも、これからは私も瑞希を守るから……一緒に生きよ……』

「それじゃあ明日……」

「うん!!」

「バイバイ」

「さようなら」

各々自分の家路につく。

僕も例外じゃない。

「……っていうかなんで上杉までついて来るんだよ」

「いいじゃん。久しぶりに皐月さんの手料理をご馳走になりたいの」

「昼、弁当食べただろ」

「あー、もう!! うるさいなあ。皐月さんもこんな男の何処が良
いんだか」

「……」

「なに赤くなってるのよ……変なこと考えているんじゃないか……」

「考えてないっ!!」

「ふーん」

上杉はジト目で僕を見てきた。

明らかに僕を信じてない。

「なんだよ、その『ふーん』ってのは……信用してないな」

「別に」

「やっぱり信用してない!!」

僕の言葉に上杉は笑いながら少し前を振り返りながら歩く。

彼女の顔が西日に染まってすごくキレイだった。

こうというのが普通の幸せなんだろうな……

「おい、上杉。後ろ歩きなんかしていると人にぶつかるぞ」

「平気、平気!! それに、こうしてないとアンタの顔が見れない
でしょ?」

「……今さっき結構凄いいこと言わなかったか?」

「そう? —— あっ!!」

ドンッ。

案の定、上杉は人とぶつかってしまった。

「あつ……ごめんなさい」

「だから言つたろ？ 人とぶつかって……！！」

「幸せそうだな。この世界は楽しいか？」

「真田先生……」

「……」

僕らを見つめる真田の眼差しは厳しいものだった。

僕らは真田を避けるように歩く。

しかし、真田は行く手を遮るように立つ。

「すみません。どいてくれませんか？」

「……」

「用があるなら言ってください」

「いつまでココにいるつもりだ？」

「……アンタには関係ないだろ」

僕の服の裾を引っ張られる感覚がして隣を見ると上杉が僕を心配そうに見つめている。

彼女は僕らの雰囲気を怖がっているようだ。

「澄川、行こ」

「……悪い、上杉。先に行ってくれないか？」

「でも……」

「心配しなくても大丈夫。僕は何処にも行かないから」

「わかった……信じてる」

上杉は真田を睨みながら走り去った。

「……ここでの想い出は楽しい事ばかりだ。帰るつもりはない」
僕は真田に向かって宣言した。

それを受けて真田は腕組みをして考え事をする。

「……そうだな。確かにここは楽しい事しかないからな」
「！？」

「……どうした？ オレが肯定した事が意外だったか？」

「そついうわけじゃあ……そうだよ。いいじゃないかここにいたって……」

「別に構わないさ。……だがな、人を殺してまでも求めた答えがこれか？」

真田の問いに僕は答える術がなかった。

「放っておいてくれ」

「……」

「もう、辛い思いは嫌なんだよ!!」

すると……真田の姿にノイズが走り、視界が悪くなる。

ノイズは徐々に広がり僕の周りを取り囲んだ。

激しい光が身を包み僕の視界は0になる。

「なんだ!？」

……気付くと僕は夜の山中にいた。

「これは一体……」

「今度は私の質問に応えてください」

声の方向に振り向くと、そこには浅野がいた。

「さつき、『辛い思いは嫌だ』と言いましたね」

「……」

「じゃあ聞いても良いですか？ 澄川君は実際に何が辛いんですか？ 親しい人の死？ 好きな人に騙されていた事？」

「それは……」

「教えて欲しいんです……私は親友を失い、悲しくても頑張って生きてる人を知ってるし、好きな人を騙して後悔しながら生きている人も知ってる……でも、その人達に比べてアナタはどう考えても……」

……」

「僕が甘えてるとも言いたいのか？」

「別に……私が言いたいのはそんな事じゃないです」

この会話どこかでした覚えがある……何処だっただろう……

「ホントは好きなんですよ？」

「っ！？」

「生きてる事」

「……そのセリフは……僕が美世に言った……」

「気付きました？ まったく……自分が自分を励ますのに何故こんな苦労をしなきゃいけないんですか？」

「いや、でも……」

「澄川君にも出来るよ。世界を肯定すること」

「……もう遅い」

「まだ遅くないです」

「僕に出来るのかな？」

「簡単です。澄川君を取り巻く世界に落ちている想いを拾い集めればいいんですよ」

「……想い？」

皐月が再び公園へ来てくれたときに言ってくれた事……

『監禁されるとな……時間の経過なんて分からなくなって……違うなあ……こんなこと言いたいんじゃない……それよりも母さんに見捨てられて……私ホントに独りなんかなあ……もう死んでもええわって思った……』

『……』

『でも……でもな……その時に……瑞希のこと思い出して……アイツ等の隙を見て……ここまで来たんやんか……』

危険を顧みずに僕を信じて会いに来てくれた人がいる……

上杉だつて僕に言ってくれた。

『それにさ……僕……悪くないなって思えてきたし……』

『は？ 何が？』

『「おかえり」って言う事』

『……バカ……』

そつだよ……

向こうでも僕は「おかえり」や「行つてきます」つて言える人がいるんだ。

「帰らなきゃ……」

「それやったら……こんなとこで何やつとんの？」

「早く帰らなくちゃ駄目じゃない！！」

「え？」

気がつくと僕は自分の部屋にいた。目の前には上杉と皐月がいる。これは夢だ。何だつてできるさ。

でも、次にする事は分かっていた。

それは……ドアを開けて出て行く事だ！

窓の外が暗くなり、病室内も明かりが点く。

面会時間は過ぎてるけど消灯時間までいられるように頼んである。

「あゝあ。時間的に不利だね。こんな事なら学校サボつて朝から来ようかな。ねえそう思わない？」

なんてついつい愚痴ってしまう。

皐月さんと二人で病室にいた時はそうでもなかったのだけど、一人で看病していると自然に澄川に話しかけてしまう。

この事を皐月さんに話すと「私もやで」言っていた。

「……それでね。順番で言えば廊下側の席の子達が当たる予定なのにさ『今日は天気が良いから窓側の列にします』だつて。ホントム

「力つく!!」

「……」

「今日も澄川に学校であった事を話す。

楽しかった事。

腹が立った事。

悲しかった事。

「つまらない事……でも、何を話しても最後に言う言葉は決まっていた。」

『世の中は澄川が思ってるほど悪くないよ……だから。目を開けて

……』

「だけど反応はない。」

「そんな事は分かっていた。」

「……」

「……」

「ねえ、聞いているの? ……って聞いているわけ無いか」

「そして私は席を立ち病室をでる。」

「今日も澄川は起きなかった。」

「……ふっ」

「……」

「……聞いているよ」

「——っ!？」

「慌てて振り向く。」

「確かに……ここの寝心地も悪くない。目を開けて良かった」

「あっ……」

「感情が一気に流れ出し言葉が詰まって何も言えない。」

「あれほど話す事を考えてたのに……」

「どうした?」

「えっと……」

「ん?」

私が今言えるのは――

「お……おかえり！」

「……ただいま」

やっと言えた……これが一番最初に言いたかったこと。

澄川は笑顔で返事をしてくれた。

第53話 「PM4:00」

「なあ……瑞希。朝やで」

「……うん」

「はよ起きな遅刻するで!!」

「ええ? ああ……」

呼ばれるままに目を覚ます。

見慣れた天井。ここは僕の部屋だ。

視界の端では覗き込む皐月の姿が見える。

「あつ、やっと起きたな。いつも言つとるやん、早く寝やなあかん
つて」

「うーん……」

「ん? どうしたん? ……もしかして、まだ寝ぼけとる? しょう
がないなあ。顔洗ってシャキッとせなあかん」

「あ、ああ……」

洗面所へ行き顔を洗う。

かなり冷たい水に眠気は一気に覚める。

鏡越しに見える皐月は手際よく朝食の準備をしていた。

その姿をじつと眺めていると彼女と鏡越しに目が合う。

慌ててタオルで顔を拭くとキッチンへ行き椅子に座る。

炊き立てのご飯に味噌汁、それに焼き魚、日本の朝食。

「我ながらメツチャ上手くできたやん!! いっただきまゝす!!」

僕もつられて食べ始める……確かに美味しい。

「どう? 美味しい?」

「うん。皐月ってこんなに料理上手かったんだ」

すると皐月はこれでもかというほどの笑みを浮かべた。

「今日から学校行くんやから、しっかり食べなあんで!!」

「ああ!!」

朝食を食べ終え、学校へ行く準備して靴を履く。

後ろには見送ろうと皐月が立っていた。

僕は振り向き彼女に尋ねる。

「あのさ……毎日……ありがとう」

「はあ？ 何言ってるの？ ええに決まってるやん」

「良かった」

安心して下を向いた瞬間、皐月の顔が僕に近づく。

僕は前に見た夢を思い出して緊張した。

夢どおりなら皐月は僕に……

ゴンッ！！

「痛てっ！！」

皐月は僕の額に頭突きをした。

「気合入った？ じゃあ、頑張って勉強してな！！ 私も仕事頑張るから！！」

「……ああ、いってきます」

やっぱり、ここは現実だ。

季節は秋。ずいぶん周りの景色も変わった。

服も冬服だし。僕は久しぶりの学校という事もあって、登校している人たちに混ざって歩くのが少し気恥ずかしい。

クラスに僕の居場所はあるのだろうか……って良く考えたら元々そんなものは無かった。

いつも誰とも関わらずに過ごしていたから……

でも、これが夢の続きなら、もうすぐ彼女達が来るはず……

「おはよー！！ 澄川君！！」

やっぱり。

後ろを振りかえると、上杉亜衣と吉田有希が僕に向かって手を振っていた。

「ねー、ねー、澄川君、久しぶりの登校はどう？　嬉しい？　緊張する？　それとも気持ち悪い？」

「有希、そんな矢継ぎ早に質問しても澄川が困るだけだよ」

「あつ、そっか」

「まあ、それは置いておいて……澄川、聞いてくれる？　さつき有希がね……」

「ちよつと……それは言わないでって頼んだでしょ……」

「そうだったけ？」

「もう……澄川君からもなんか言ってやってよ……！　ホント、口が軽いつ……」

いつの間にか僕をはさんで上杉と吉田と一緒に歩いている。
二人が争うように話しかけてきた。

「そうだ、今日のお昼は屋上で皆そろってお弁当食べようか？」

「いいねえ。私は有希に賛成……！　澄川は？」

「……わかったよ」

「じゃあ決まりだね……」

上機嫌の吉田はそのままスキップして僕らの数歩前を進む。
二人並んで歩く格好になった上杉に確かめたい事があった。

「なあ、上杉」

「ん？　何？」

「こんなに幸せでいいのかな」

そして、上杉は『いいに決まってるじゃん』って答えるはず……

「全然よくない……」

「え？」

「こんな程度で幸せなんて言ったら駄目だからね。もっと幸せになりなさい！」

「おおっ……」

「返事は？」

「……うん、そうだな」

『もつと幸せになる』……僕にはない発想だ。
これじゃあ、夢の中の上杉が言うわけないよな。

いつの間にか教室の前に立っていた。

僕は緊張してドアを開けるのをためらう。

そんな姿を見て上杉は教室のドアを開けた。

「心配しなくてもアンタの席はまだあるよ。片付けようとしたヤツ
がいたけど、殴っておいたから」

「あ、ああ……」

一歩、教室へ踏み出す。

久しぶり教室。なんだか他人の部屋にお邪魔するような感覚。
だけど、自分の席は何となく覚えていてすぐに辿りつく。

席に座って周りを見渡す。見慣れない見慣れた風景。

……その中に見えた一人の女の子……

「ああ……そうだよな」

「澄川君、おはよう」

恥ずかしがりながら挨拶した女の子は……もっ、いなかった。

そして僕は完全に理解する。

これは夢じゃない。

そして退屈な授業が始まる。

一ヶ月のブランクはさすがに厳しく、授業の内容が理解できない。
授業開始10分で白旗を揚げた僕は周りを見渡した。

外に目をやると体育で気だるそうに校庭を走っている生徒。

教室内を見るとメールやってるヤツ、マンガ読んでるヤツ、手紙
のやり取りをしてるヤツ、真面目にノートとってるヤツ、寝てるヤ
ツ。

やっぱり現実だった。

真田の授業はもうないし、浅野美世もない。

クラスのヤツラは僕のことなんてまるで無視だし。

でも、それが嬉しい。

夢ではなんとも思わなかったけど、気付く事があった。
皆が僕を気にしないから、僕を気にしてくれる人の大切さを感じる。

居なくなつた人がいるから、居る人が掛け替えの無いものだと理解できた。

喜びしか無い世界で本当の喜びなんて見つかるはずが無い。

……ここが僕の居場所。

「勉強でもするか」

僕は黒板の板書をノートに書き込んだ。

それからは本当に楽しかった。

「今日の朝は中華やに、麻婆豆腐に青椒牛肉に……」

「朝から中華って……」

「何言つてんの、中国の人は毎日朝から中華やに!!」

「いや、朝は朝の中華があると思うぞ」

「ちっ……」

ガチャッ

「わ、わ、わ!! 待て、待て!! 捨てなくても良いだろ!!」

「じゃあ、食べて」

「……はい」

皐月は上杉の家に居候していて、わざわざ朝ごはんをつくりに来てくれる。

夕方からは一ヶ月の遅れを取り戻そうと上杉に勉強を教わる。

「ここさあ、間違つてるだろ？」

「えっ? どこ? ……あっホントだ」

「こっちに代入するべきだろ」

「……確かに」

「おい……」

「はい？」

「上杉。お前、1ヶ月の遅れを取り戻そうと、僕に勉強を教えようとしているんだよな」

「……うん」

「ありがとう。良い勉強になる」

「くっ……」

バシッ

「痛っ!!」

しかし、何より嬉しいのは人殺しをしなくてもいい事だった。そういえば、ナイフを何処へしまったのか覚えていない。

……まあ、いい。もう必要ないものだから。

時間は過ぎ……一ヶ月経ったある日。

今日も上杉が僕の部屋に来て勉強をしている。

この頃になると勉強も完全に追いつき、僕が彼女に教える事が多くなった。

余裕が出来た事で、少しずつ昔の事を頭の中整理している。

……が……ふと、気付くと上杉が僕に話しかけていた。

「ちよつと聞いてる？」

「え？何だっけ？」

つと回想している場合ではない。

「明日さあ、学校終わったら……ヒマ？」

上杉らしくない逡巡した言い回し。

「まあ、ヒマと言えばヒマだが……」

「だったらさあ、あの教室に来てくれない？」

「あの教室？」

「……開かずの教室」

『開かずの教室』。

しばらく聞いていなかった言葉に僕は耳を疑う。

「何で？」

「渡したいものがあるから」

「今くれればいい」

正直言っ て行きたくなかった。

あの場所にはあまり良い思い出が無いから。

「……今は駄目。持っ てないから」

「面倒くさいなあ。しかも何であそこなんだよ」

「うーん……」

たいした質問ではないと思うのだが、上杉は黙っ てしまった。

「どうした？」

「あそこじゃないと意味が無いの」

「……はいはい。分かつ たよ」

「じゃあ、明日PM4：00に開かずの教室で。時間厳守だからね」

上杉があんまり真剣に見つめるから僕は押し切られた。

夕方、僕は言われたとおりPM4：00に開かずの教室へ来た。
ゆつくりドアのノブに手をかけ開ける。

上杉はすでに教室にいた。

教室の窓側にたたずむ彼女の表情は夕日で良く読み取れない。

僕等は一定の距離を置いて向かい合う。

「上杉、要求どおり来たけど……」

「来たね……」

それから上杉は僕を見つめたまま何も言わない。
仕方ないので自分から切り出す事にした。

「……で？ 渡したいものつてなんだ？」

「……やっぱり来たんだ」

「何だよ、上杉が呼んだんじゃないか」

「そうだけど……」

彼女はスカートのポケットに手を入れると何かを取り出した。それが何なのか最初は分からなかったけど、夕日に照らされてようやく理解する。

ナイフ……それも、僕のナイフだった。

「……」

「この場所が一番だと思ったから」

そう言い、彼女は刃の部分の部分を僕に向けながら歩み寄る。僕は身構えた。

「そのナイフでどうするつもりだ」

「ん？ ……どうして欲しいの？」

「お前まさか……」

「まさか？」

「……僕を刺すつもりか？」

「そうして欲しい？」

一気に彼女は近づき、僕はとつさに後ろへ飛びのいた。

彼女は遅れてナイフを横一閃振りぬく。

すぐ、後ろに飛びのいていたので、風の切る音と共に空を斬った。

僕は全然意味が分から無いまま、次の攻撃に備えてさらに身構える。

しかし、彼女はそれ以上は何もせず、一言言った。

「ウン」

「え？」

「んな事するわけないでしょ？ はい。これ今まで借りてたから返す」

今度は刃の部分の部分を自分の方へ向け手渡す。

結局、さっきの何だったんだ？

良く分からないまま僕は黙って受け取った。

その際に彼女の表情が少し寂しそうだったのは気のせいだろうか？

それ以上は何も用事がなさそうだったので、僕は帰る事にした。

「じゃあ、僕は帰るから」

「あつ、まって!!」

「なんだ？」

「ここからが本題だから」

僕は少しウンザリしていた。

その表情が彼女に伝わったのか「笑顔、笑顔」とか言って僕の肩を叩く。叩く力がやたら痛い。

笑顔と言っている肝心の上杉が硬い表情をしているのだから説得力が無いし。

「澄川……ここはアンタにしてみたら仕事場だったかも知れないけど、この教室には別の意味があるの知ってる？」

「別の意味？ それがどうかしたのか？ この教室にはもう……」

「最後まで聞いて!!」

「……」

「柄にも無く、アンタに対して緊張してるんだから……」

なるほど。だから、表情が硬いのか……って上杉が緊張？

僕にとって謎は深まるばかりだった。彼女が僕に対して緊張する事があるのだろうか？

「わかった。言ってみろよ。この教室が持つ、もう1つの意味を」

「……言っね」

「ああ」

上杉は胸に手を当て1つ深呼吸をした後、切り出した。

「有希に聞いた話だけど……この教室は『学校の女の子が伝統的に男の子への告白場所』なの」

「えっ!？」

「……だから……分かるでしょ？」

今度は僕が緊張する番だった。

「いや、その……」

「澄川。アンタが……」

最終話 「good vibration」

皐月さんとは決め事があった。

それは退院して一ヶ月はお互いに澄川の様子を見るという事。

私達はお互いの気持ちに歯止めをかけながら過ごした。

わかっていても、皐月さんが澄川の家に行っている時は落ち着かないし、それは彼女にしても同じだと思う。

それと同時に一ヶ月暮らしてみても私の心に『このままで良いかも』という気持ちが浮かんできた。

三人このままずっと……でも、このままでは誰もひとつにはなれない。

誰もが幸せなようで、誰も幸せにはなり切れない状態。

だから……私は澄川自身に決めてもらおうと、開かずの教室に呼んだのだ。

「有希に聞いた話だけど……この教室は『学校の女の子が伝統的に男の子への告白場所』なの」

「えっ!？」

「……だから……分かるでしょ？」

澄川は言っている意味が分かったらしく、緊張した面持ちで私を見た。

「いや、その……」

「澄川。アンタが……」

「……」

私の中で何かが変わる。

「……アンタが好きだって言う人がいるの」

「は？」

「もう少し待って。すぐに来ると思うから」

この時……もう決める必要は無いと思った。

結局、私はいつでも誰かと澄川との仲を取り持つ役。

有希の時も美世の時も……

そして……教室のドアが開く。

「上杉さん、緊急の用事って何なん？ ……って瑞希。何でここにおるの？」

「皐月？」

「4時15分丁度。時間に正確だね」

「どういうこと？ 説明して」

皐月さんは怪訝そうな顔を私に向ける。

私はあくまでも仲を取り持つ役に徹する。

「説明も何も無いよ。一ヶ月経ったんだから澄川に言う事あるでしょ？」

「ええっ！？ ……でも、上杉さんはどうするん？」

「私？ 何が？」

「何がって、アナタも瑞希が……」

私は皐月さんの言葉を強引に遮った。

「澄川！！ アンタだってそうでしょ？」

「何が?!」

急に話題を振られた澄川は焦ってる。

「アンタ、人殺しをして苦しんでいる時、私に言っただよね『たとえ人を傷つけるとしても皐月が目覚めたら好きだと伝えたい』って」

「言っただけ……」

「せっかくこんな機会を作っちゃったんだからビシッと決めさい」

「……上杉、お前、それで……」

「あゝそう、そう。あの時アンタは私にもう1つ言っただよね『一緒に暮らしたから情がうつっただけのこと……錯覚だ』って。私もそう思う」

「……上杉さん」

「だから……ここでケジメつけてよ。私の情が覚めるぐらいの告白」
澄川は私を真っ直ぐに見つめている。

多分、やせ我慢だっけ見抜かれてると思う。

……でも、これが私の出した結論だから。

「……言うよ」

「えっ」

「……」

澄川は皐月さんの前へ歩み寄ると目の前で止まる。

「皐月……僕は人殺しもしたし……君を刺した……」

「……」

「だからこんな事を言う資格はないけど……」

「……そんな事無い……私だって……」

皐月さんは潤んだ瞳を澄川に向け、少し震えていた。

これから起こる事に目を背けたい気分。

だけど……そういうわけにはいかない。私は二人を見つめる。

澄川は皐月さんにハッキリとした口調で言った。

「君が好きだ」

「瑞希……」

「だから、僕のそばにいてくれないか？」

皐月さんは俯き、涙をこらえていた。

それでも止められず頬から幾筋もの涙が流れる。

「……『そばにいてくれ』やなんて、まるで……プロポーズみたいやな……」

「そのつもりだけど……って、まだ高校生だから嘘っぽく聞こえるかもしれないね」

彼女は懸命に首を横に振る。

「……瑞希……ありがとう」

皐月さんは言い終わると澄川に寄り添い、二人は抱き合う。

そして、私は教室を出た。

不思議と涙は出ない。
逆に気持ちはスッキリしていた。
だけど……誰にも会いたくない。

意味も無く歩く。

止まらないように歩く。

考えないように歩く。

誰かに会いたい。

でも誰にも会いたくない。

……泣きたい。

でも、泣けない。

だから歩く。辺りはすっかり暗くなっていた。

結局、私の向かった先は自分の家ではなく、病院の屋上だった。
フェンス沿いに花が置かれてある場所へと歩く。
花の前で私はしゃがむ。

「……これで良かったんだよね？」

ここは美世が最後に生きていた場所。

あの時はまだ暑かった。

でも、今は夜風がかなり冷たい。

もう、そんな季節なんだ。

「美世でも同じ事したでしょ？ 違うかなあ……」

もう……我慢する必要は無いよね。

私は少しでも気持ちを開放した。

涙が少しだけ出る。

「あれ？ もっと泣けるかなあって思ったけど……意外に泣けないね」

「……ここにいたのか」

「えっ!？」

「探したぞ」

「……なんで？」

目の前に立っていたのは澄川だった。

私の潤んだ目を見て彼は気まずそうに横を向く。

「皐月が家に帰ってもお前が居ないから……探してくれってさ」

「……そう」

「帰るぞ」

澄川は私に手を差しのべた。

でも、私はそれを払いのける。

澄川の行為は今の私に一番して欲しくない行為だった。

「嫌、帰らない」

「はぁ……」

「私の居場所が分かったんだからもう良いでしょ？」

「駄目だ。連れて帰る……皐月と約束したから」

澄川は私の肩に触れる。

「触らないで!!」

彼の手が私の目の前で止まる。

「どうした？」

「……ゴメン。もう少ししたら帰る。だから先に帰って……」

「ふうん……」

私の言葉を見無視して澄川は私の隣にしゃがむ。

「お前が帰るって言うまで帰らない」

「はぁ？」

「それに……情けない話だけど、ここに来るのは初めてだ。僕も浅野に挨拶したい」

「……勝手にすれば」

すると澄川は花の方を向き、美世に話すように喋りだした。

「臈月から事情は聞いたよ。礼を言わなきゃな……ありがとう」
「……」

「今まで来ることができなかった。正直、浅野に会うのが怖かったから……」

「……」

「ゴメン……」

「……駄目、許さない」

「っ！？」

驚いた澄川が私を見る。

「勘違いしないで。美世の代弁」

「……そう」

すると澄川は何も言わずに花を見る。

私は美世の代弁を続けた。

「アンタなんかに会わなかったら、もっと幸せだったのに」

「……」

「アンタなんかに優しくされなかったら、こんなに苦しまなかったのに」

「……」

「アンタなんか、アンタなんか……好きにならなかったら……」

「……上杉」

「ああ、もう、何でこんなに悔しいんだろ……化けて出てやろうかな」

「ごめん……」

「謝って済む問題か。責任取りなさい！」

「責任？」

「……私達がもっと悔しがるくらい……幸せになりなさい」

「えっと……」

「どうなの？」

「……うん。上杉の気持ち無駄にしないよ。幸せになる」

「だったら……許す」

私達はそれから少しの間、黙っていた。
お互いに考えることがあったのだと思う。
そして私は澄川に訊きたい事があった。

「ねえ、これだけ訊いていい？」

「何？」

「もし……夕方、ナイフを持って刺そうとしたのが私じゃなくて
月さんだったら飛びのいた？」

「……僕を試したのか？」

「別に……ただ、臯月さんなら澄川は黙って刺されたような気が
してね」

直前で臯月さんに譲った理由はここにある。

澄川は何も答えず、ただ黙っていた。

でも、その沈黙が私には十分な答え。

最初から勝ち目が無かったのかもしれない。

私の中で締め付けていた気持ちは解けていった。

「帰ろうか？」

「……うん。あつ、でも少し待って……」

「？」

「……あのさ」

「何？」

私はこれ以上溢れてくる涙を拭いきれなくなっていた。

「ここで……もう少しだけ……泣いていい？」

「いいよ……肩ぐらい貸そうか？」

「馬鹿、胸を貸しなさいよ」

私は澄川の胸の中で泣く。

かすかに聞こえる澄川の心音が私を慰めてくれた。

…… 1週間後。

澄川と皐月さんは二人でこの街を出て行く事にした。
もともと澄川は偽名で学校に入学していたので、本名でやり直す為。

皐月さんは裏切られた母親が近くに住んでるので辛いという理由で、ここからいなくなる。

私はというと……いつものように学校へ行くだけ。

鞆の中身を確認して玄関を出ると、そこには荷物をまとめた皐月さんが立っていた。

彼女は私に近づくと話しかけてくる。

「私、ここから出て行くこと謝らへんからな」

「うん」

「……やっぱり、上杉さんが澄川の近くに居ると……何かと不安やから」

「わかってる。私が皐月さんでもそう思うと思う」

私の返事を聞くと皐月さんはガツカリしたような表情を見せた。

「あーあ……上杉さんがもうちょっと嫌なヤツやったら良かったのになあ……そしたら、もっと簡単に嫌いになれるのに……」

「ふーん……」

「でも、言っとくわ。私、アンタの事……大嫌いや!!」

「ご心配なく。私も大嫌い!!」

「良かった」

「私も」

そして、私達は微笑んだ。

「ホンマに見送りに来やへんの？」

「うん。学校あるし」

「瑞希がその角まで来てるんやけど……会ってく？」

遠慮がちに言った皐月さんの提案に私はハッキリと答える。

「遠慮しておく」

「……そう」

「じゃあ、私いくから」

「あつ、待って!!」

「駄目、待たない。もう、絶対に止まらないって決めたから」

私は学校に向けて、振り向かずに進んだ。

いつもの授業。

新任の有田先生が現国の授業をしている。

なかなか分かりやすい。真田とは大違いだ。皆、食い入るように授業を受けている。

まあ、男子の場合は先生が若い女性だからだろうと思うけど、女子までキチンと受けている……めずらしい。

ふと、「今頃、澄川達は何やってるのかなあ」なんて思う。

二人には本当に幸せになってもらいたい。

もちろん『澄川と幸せになりたい気持ち』は私にもあった。

でも、澄川の隣にいらなくても良い。

主役にならなくてもいい。

結果だけでは気持ちの深さは分らない。

『あのさ……僕達はそんなに意識しあうような関係でもないだろう?』

澄川が昔、私に言った言葉……それで、いいと思う。

サヨナラが強い繋がりを創ることだってある事を信じたい。

それでも思い出すと、まだ心が揺れる……

だけど、いつしかその揺れが心地良い思い出に変わる日が来るはず。

そんな事を考えていると、有希から携帯にメールが届く。

『今日の放課後、2組の谷口君に告るから「開かずの教室」に呼び

出してくれる?」

私は苦笑いした。

『good vibration』

完

最終話 「good vibration」(後書き)

この度はgood vibrationをお読みいただきありがとうございました。

「good vibration」どうでしたか？

喜んでいただけましたでしょうか？

つまんなかった、面白かった、色々感想はあります。

ですが、ひとまずこの時間は作者の独り言にお付き合ってください。

お読みいただいてすぐだと思うので、まずは終盤の展開について書きたいと思います。

終盤の展開は、なるようになったようで、一筋縄ではいきませんでした。

特に悩んだのは

- ・第49話以降の展開

- ・エンディングをどうするか

の二つです。

第49話以降の展開については、今載せてあるような話を書きたいと思っていましたが、少し不安がありました。

それは、第46話から第48話までで、それなりに盛り上げたのに、第47話以降を書くことで間延びしないか？(なんというか動きがない話だったので……)という不安でした。

結局は作者が書きたかったシーンでもあり、開き直すことにしてそのまま書く事にしました。

エンディングですが、これも候補がいくつかありました。

まずは三人で仲良く暮らすエンド。

次に亜衣または皐月が振られて終るエンド。

最後にバラバラになるエンド。

最終的には皆様がお読みいただいた結末となりました。

私が目指したのは「『完全に』三人とも幸せ」ではなく、

「『なんとなく』三人が幸せ」という選択肢でした。

ハッキリしない選択肢のようですが、人生そんなもんです。

次に色々な設定について少しかけ書きます。

まず、タイトルから。

「good vibration」っていうのは「いい感じ」だとか「好印象」って意味がありますが、作者としては「恋する気持ち」心地よい気持ち（心の揺れ）”という思いを込めてつけたタイトルです。

また、主人公が多重人格という設定だったはずですが、いつの間にかどうでも良くなってます。

まあ、最初っから「実は多重人格ではない」っていうのは決めましたし、多重人格という設定にはこだわりがありません。

前作の『suicide magic』での魔法のように、必要だったから入れただけです。

これがメインの話でもないですから、精神医学とかは考えないようにしています。

話を盛り上げるためのダシに過ぎません。（逃げてるのか？）

次に私の力量不足で上手く説明できないことが沢山あります。まずは季節。一応7月です。それがわかる記述が少ないです。

あと個々人の容姿もあまり分かりません。

いや、わかってますが、でも書いてると忘れるんです。（駄目だろ）

それにこいつら高2です。

17歳だとか高校生だとかにこだわりはまったく無いのですが、世間的なポジションが宙ぶらりんな感じで書きやすいんです。

あと未成年だから。（いいのかそれで？）

続いて没にしたアイデアたちです。

・主人公達以外全員死ぬ。（皐月も含め。というか最初から死んでいる設定。でも、澄川は死んでないと聞かされていて人殺しを続ける）

しかも、主人公達（亜衣と澄川）はそれぞれの道を行き結ばれない。

（却下理由）

キャラそれぞれに愛着が出てきて止める。

・皐月には血の繋がらない警察官のお姉さん（母の再婚相手の連れ子）がいて、尋ねてきた皐月を追っ払う。（犯罪者の妹は要らないという理由）

しかし、後に後悔し、妹を搜索するうちに「Thread w i n t e r」の事に気付いて、澄川たちに近づく。

（却下理由）

話がややこしくなるので却下。

・とにかく3話に一回ぐらいの頻度で人が死ぬ。

（却下理由）

第1話書いた時点で無理だと気付く。というか酷すぎる。

・澄川の最後の仕事は亜衣を殺すこと。

（却下理由）

これが一番の失敗。真田編で好きな人を殺すネタをやってしまったので中止になった。

最後に……

一素人のしょぼい妄想に付き合ってくださいって感謝してます！！
情けない話ですが、いくら感謝しても陳腐な言葉しか思いつきません……ごめんなさい。

とにかく感謝してます！！

ということで「evolution」これにて終了です。

以上、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3142d/>

good vibration

2010年10月8日14時09分発行